お稲荷様奇行文

アメフラシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お稲荷様奇行文

【Ｎコード】
Ｎ２６５７Ｑ

【作者名】
アメフラシ

【あらすじ】
リリカルな世界で頑張る狐っぽいのになった人の話。
自業自得だが俺は厨二じゃねー。

ぷろろーぐ（前書き）

オッサンと青年のファンタスティック奇行文

ぷろろーぐ

地元の商店街を歩きながら俺は今、猛烈に悩んでいる。
これは恐らく、全国に住む主婦のほとんどが経験する悩みではなかろうか。
だが、悩みすぎていてはこの問題は解決しないまま、良くない方向へと走りだす。
それ故に、至急事態を収拾させるしかない。
そう、今俺は……！！

「あー……今日の飯、何食べようかね」

夕飯の献立に悩んでいた。
いっそ給食のように誰か1ヶ月の献立を考えてくれと言いたくなる。
近くのスーパーを眺める。
しかし今日は料理をする気分ではない。すぐにその場を後にする。
コンビニにも場所にも立ち寄るが、結局冷やかしで終わってしまう。
あれは面倒、これは気分じゃない。
そんなことを考えていたら、商店街の外れまで来てしまった。

「はぁ……もう1往復するのも面倒だ。最寄りの店で適当に買っていってしまおう。
あれば食べるだろ、多分」

止めていた足を再び動かそうとしたが、何故だか踏み出す気になれなかった。
不審に思い、ふと辺りを見回す。少し動かした視線の先には、路地裏がある。
商店街の表通りから外れた路地裏なだけあって、人の気配が全くし

ない。
漆黒の闇が、広がっている。
だが何故だろう、俺の中に眠る何かがこの裏路地に呼ばれている気がするのは……
しかしこの先へ行ったら、二度と戻って来ることが出来ないような気がするのは……

「馬鹿な……！！　そんな馬鹿な……！！」

そこまで感じたところで、俺は愕然とした。
今まで心の奥底に沈めてきた思いが再び浮かび上がってくるような感覚。
だがそれは、俺にとっては既に忘れ去りたい感覚。

「俺……今……厨二病チックな事を考えていた……？」

漆黒の闇（笑）？
俺の中の何かが路地裏に呼ばれている？
二度と戻れない？
ハイハイワロス。
路地裏に行って戻れないのならば今や世界は失踪者で溢れかえってるよＪＫ。
だが、あえて叫ぼう。

「俺は……断じて違う！！
ここからも、無事帰ってみせる！！
うおおおおぉぉぉぉぉぉおおお！！！」

そう、俺はつい最近、厨二病を抜けだしたんだ。
真っ当な人間になれたんだ。

こんなところで、患者に戻ってたまるものか！！
渾身の力を持って裏路地に向かい走り出す。
誰も俺を止めることは出来ない！
ふはははははっ！！！

……何故だろう、何かとてつもない馬鹿な事をしている気がする。

○●○●○●

どうしてこうなった。

「兄ちゃん、夢、あるかい？」

今、俺の目の前にはロープに身を包んだ推定５０代後半のオッサンがいる。
路地裏を爆走していた俺に突然話しかけてきたのだ。
さっきからしきりに、夢はあるか？と聞いてくる。
意味不明。
いや、路地裏爆走してた俺も意味不明だけどさ。

「というかどちら様ですか？」

「兄ちゃん、夢、あるかい？」

「どっかでお会いしましたっけ？」

「兄ちゃん、夢、あるかい？」

聞いてよ、俺の話……

こいつはあれだ、ＤＱとかで街の入り口にいる、「ここは○○の村です」を連呼するキ印か。

あ、違うな。

あいつは何を言っても結局は○○の村ですとしか言わないから、これはゲームでよくある無限ループという罠に違いない。

無限ループのキ印だ。

リアルにいるんだなそんなやつ。

つまり、夢を語れと。語らないと進展はないと。

無視したり暴言吐いたら暴れられるだろうなぁ……それは面倒だ。

仕方ない、語ってやろうかかっての俺の夢。

そしてさっさとこの場を去る！

「そーだね、じゃあまずツヨーイ肉体が欲しいね。

後は色々魔法とか、気とか、何かそういうのが使えるようになりたい。触媒とか発動体とか無しにね。何も持ってないのによく分からない力が使えるとか憧れるよね。

後は、どっかの八雲さん家の色の名前がついた狐さんのような九尾になってみたい。

もち男で。あのモフモフ、自分についてたら幸せそう」

……あれ？

そもそも俺って厨二病じゃねーってここに来たんじゃなかったっけ？

何でこんな封印していた記憶を紐解いて、初めて会った見知らぬキ印に語ってるんだ。

妄想に溺れて溺死しろ、俺。

てかむしろ進行形で溺死してるよ、俺。
という訳で訂正。

「あ、やっぱ今の無しで、綺麗な嫁さん貰って退廃的に暮らしたいです」

うん、やはりパンピーな夢はこれだろう。
退魔師見習い煩悩あふれる高校生もたまにはいいこと言うよね。
告げると、にやっと笑うオッサン。

「夢、叶えてやるよ」

マジでか！！
やったねたえちゃん！
これで俺にも嫁ができる！！
……なわきゃないだろ。

「はいはい、ありがとうね。
じゃあもういい？
俺もう帰りたいんだけど」

「あぁ、なかなかに面白い奴だな。まぁ楽しんでこい」

楽しんでこい？
なんぞ？
てか初めて「夢はあるか？」以外の言葉を喋ったなオッサン。
だがもう会うこともないだろう。
会いたくもない。
そしてこの記憶は、見知らぬ誰かに俺の厨二満載な夢を一瞬でも語ってしまったという黒歴史の１ページに新たに書き加えられる事だ

ろう。
最近やっと抜け出せたのに。
……欝だ。
暗いオーラを纏ってオッサンのもとを去る。走ってきた方へ。
冷静になったし、早く戻ろう。
そして夕飯買って帰ろう。
飯食って風呂入ってさっさと寝よう。
今日の事は忘れよう。
……ここはどこだろう。

今後の事に思いを馳せていたらいつの間にやら森の中。
今俺、来た道を戻ってきただけだよね？
どうやったらあの商店街から四方数キロは植物しか無さそうな森の中に居れるのでしょうか。
まぁここで取り乱さないのは俺クォリティー。
商店街がないなら、路地裏に戻ればいいじゃない。

後ろを振り向く。
……何も無い。
いや、森がある。
なんでさ。

そして今、振り向いたとき何かが視界の端に写った。
何かいる！？
やめてよ、俺そういうの苦手だから。
とか思いつつキョロキョロする。
その度に視界に何か入る。
これは……

「……尻尾？」

そう、フカフカした、綺麗な黄色の尻尾が９本。
俺の尻に繋がっている。
……なんだって？

「なっ……じゃ、じゃぁまさか頭には……」

そう、そこにはあの八雲さん家の九尾さんのような狐の耳が……！！
かどうかは分からないが、頭の上に耳があるのは間違いにぃ。
だって頭の上とか見えないもん。
でも何かそれっぽい感触のモノがある。
何がどうしてこうなった。

……あのオッサンか？
俺は、嫁さん貰って退廃的に暮らしたいと、それが夢だと言っただろダラズ。
何故黒歴史な夢を叶えたし。
てか何故叶えられる。訳が分からん。
一般の人なら見知らぬ土地、見知らぬ尻尾、ここで発狂してもおかしくはないだろう。
だが俺は過去に訓練された変態の称号を得た者。
冷静に状況を分析する。
とりあえずあれだ。

「飯、どうしよ」

○●○●○●

森を彷徨うこと多分１時間。
歩き始めた時間が分からないから携帯あっても経過がわからない。
だから多分。
てか圏外とか鬼畜にも程がある。
にしても、森の中を１時間歩き続けていても全く疲れないとは何という体力。
まさにツヨーイ肉体。
でもいくら肉体が強くても景色が木ばかりで暇なので、歩きながら尻尾をモフモフしてみることに。
だが、自分の尻に尻尾がついているとモフモフすることが出来ないことが判明。
腰を１８０度捻れるなら話は別だが。
リアルに我が骨子を捻れ狂わせたくはない。
意気消沈せざるを得ない。

更に３０分は歩いたかな。
歩けど歩けど木・木・木・木・木。
木が３本あれば森になるとかよく言ったものだ。
今は５本だから森林か。
携帯によると既に時間は夕飯時。
マイ腹時計も早くスイッチを切ってくれとスヌーズ機能まで搭載して鳴り響く。
よしよし、泣くな。俺も辛いから。

「そこの人、止まってください！！」

突然、後ろからここしばらく聞かなかった人の声。

人がいるということは森から抜け出せるかもという事で。
あまりの嬉しさに体が跳ねた。
決して突然過ぎてビビった訳ではない。
ゆっくり後ろを振り返る。
……誰もいない。

「ちょ、ま、え、マジで？
誰もいない……だと？」

ふ……
誰か助けて！？
ダメダメマジでだめなんだってそういうホラー系誰か一緒にいるなら多少大丈夫だけど1人とかマジダメうひはーって涙ながして鼻水垂らして逃げ惑うしか……

「あの、上です」

キョロキョロして軽く混乱していると空から声が聞こえてきた。
訓練された俺を驚かせるとは大した奴だ。
鼻水の部分までやってしまったじゃないか。
ふと見上げる。
白い服を纏い、赤い珠を先端につけた棒を持った、茶髪でサイドポニーの女の人が少し困った顔をして浮いていた。
浮いていた。
浮いて……？

「やっぱり出た――――――！！」

再び鼻水から先の事を実行しようとするが踏みとどまる。
そう、今の俺は強い体を得ているではないか……！！

怖がる物などない。
サイドポニーをしっかりと見据え、叫ぶ。

「ふ、ふはははは！！
俺に取り憑く気だないい度胸だ！！
いつもならムー大陸の入り口を探しに押入れに入るが今日はそうもいかねー！
きっと俺は今オッサンの力で最強になっているはずだ。
イコール今の俺に敵はいねぇ。幽霊なんて目じゃない。
いくら服の下がスカートで、中の白い何某が丸見えだとしても俺に勝てるはずg……」

あれ……視界が……ピン……ク……

〇月〇日
微弱な次元震を観測した場所の調査の為出動。
目的地には黄色い何かを背中一面に広げた男が、何かをブツブツつぶやきながら歩きまわっていた。
呼び止め、事情聴取を行おうとしたところ調査員を挑発。
攻撃性有りと判断したので、抵抗される前に無力化。
機動六課に連行することにする。

備考
黄色い何かは9本のフカフカな尻尾だった。
耳も頭の上についていた。
デバイスかもしれないので、しばらく動けないように尻尾の上に乗

って調べてみた。
……すごくイイの。

報告書より一部抜粋

機動六課部隊長への

ぷろろーぐ（後書き）

ぷろろーぐって難しいですね。
というか一人称を続けるのも難しいです。
こんなのに反響アルノカナー

あ、初めまして。

改：色々本文以外のところを訂正。

1話（前書き）

ハートフル死刑宣告ネギストーリー

1話

目を開ける。
視界に広がる見たことのない天井。
ではなくベッドのシーツ。
あの言葉を言いたかったのに。
いやいや、言ったら黒歴史に戻るじゃないか。何言ってるんだ俺は、
ははは。
しかし何故うつ伏せで寝ている？

「あぁ、尻尾か」

把握。
仰向けだとお尻らめぇな状態になるんですね分かります。
いやはや、俺をベッドに運んでくれた人はなかなか優しい方みたい。
それはともかくここはどこ？　パートツー。
商店街から森に出て何か恐怖を味わった所までしか覚えてない。
てか何に恐怖したんだろう。
思い出せない。

まぁいいや。
状況把握のため周りを見渡す。
部屋には俺が寝ているものと同じベッドが他に数台。
壁には大きめの鏡。
そして漂ってくる薬品臭。
あぁ、分かった。ここはあそこだ。

「保健室だ」

何か他に難しい言い方あった気がしたが忘れた。
懐かしい、よくお世話になったものだ。
主にサボリで。
さて、状況が分かったところで鏡を見せてもらおうかね。
俺は一体どんな格好をしているんだ。
ベッドから起き上がり鏡の前まで移動。
鏡に写るのは銀髪オッドアイのイケメンオリ主!!
ではなく普段どおり、黒髪で普遍的な顔立ちの男。
近くのコンビニに行けばいるんじゃね?というフェイス。
ただひとつ以前と違うのは、頭からピョンと飛び出た黄色い狐耳。
わぉ。
てか黒髪に黄色の狐耳に黄色の尻尾って……シュールじゃね?
せめて髪も金髪にしてよ。
これじゃ俺の体にオプション付けただけのコスプレ野郎じゃないか。

「あ、起きたんだ」

鏡に写る自分を彩るコントラストに軽く絶望していた俺に話しかけるのは何奴。
振り返る。
長い金髪を後ろで一括りにした女性がいた。
金髪が欲しいと思っていた所に金髪が現れるとは貴様、見ていたな!!

「なのはに砲撃されたって聞いたんだけど……元気そうだね」

「なのはって誰……砲撃？」

何だろう、このドキドキ感。
こう、胸の中をえぐられるような。
体中の血液が一瞬にして沸騰するような。
そんな俺の気持ちなど露知らず、金髪さんは真面目な顔で話してきた。

「とりあえず初めまして。
私は時空管理局、古代遺物管理部機動六課、執務官のフェイト・Ｔ・ハラオウンといいます。
第８３管理外世界において小規模の次元震が観測された為調査を行っていたところ、次元震が発生したと思われる場所であなたを発見しました。
まぁ……ちょっとした手違いで気を失われたようですが……
一応重要参考人として事情聴取を行いたいので、ここ、機動六課へと運ばせていただきました」

「なるほどなるほど……さっぱりわからん」

そんな適当に辞書引いて目についた言葉を並べたような事を言われ

ても。
時空管理局？
古代遺物管理部機動六課？
次元震？
う～む。

「まぁ、ニュアンス的に次元震の発生でみんなのストレスがマッハ。現場に俺が居たからみっくみくにしてやんよって感じか」

フェイトさん……だっけ。
彼女は少し首をかしげていたが、そんな感じですね、と肯定した。
全国のネギを根絶やしにしようと決意した瞬間である。

「聞きたいこともあるでしょうが、ひとまず私たちの部隊長に会っていただけますか？
そこで詳しく事情をお聞きしたいので。
自己紹介もその時まとめてしていただければ結構です」

いくらネギで狙われようと、この状況下で拒否なんて出来るはずもない。
連れられるまま、保健室を後にした。

「ところで、その尻尾……」

「はい？」

「本物ですか？」

「……多分。触る？」

「いいんですか？
……あ、アルフのより気持ちいい……」

恍惚とした表情で俺の尻尾を触りまくるフェイトさん。
うむ、手入れは欠かさないようにしよう。
ところでアルフって誰さ？

とある一室の前に到着。
フェイトさんがコンコンと扉を叩く。
はやてー入るよー、と言うと中から、ええでーの返答。
はやてさんは関西人という事が分かった所で、入室。
中にはサイドポニーの茶髪な人と、同じような色の髪を肩ぐらいまで伸ばした女性がいた。
あれ、また動悸が激しく……

「あんたが現場に居たって人やな？
私はこの機動六課の部隊長、八神はやてや。
そっちにいるのは高町なのは。
そして医務室からここまで案内してきたんがフェイト・Ｔ・ハラオウンや」

「初めまして、高町なのはです。
六課の戦技教導官をやっています。
よろしくね？」

「さっき自己紹介したかな、フェイトです」

八神さんに、高町さんに、フェイトさんね。
で、誰がネギ持ってんのよ。

「で、や。
あんたの事、聞かせてもらおか？
何者なんか、何であないな場所におったんか
そして……その尻尾は何や」

何でって……オッサンのせいとしか言えないのだが。
そしてここで嘘はつかない。
あるがままを語れば信じてもらえるものさ。

「名前は篠崎　龍也。
夕飯を調達しに商店街をふらついていたら路地裏にいた変なオッサンに絡まれた。
夢はあるかってしつこく聞かれたから、色々と力が使えて姿も藍様みたいな九尾になりたいって言って……
ごめん、間違えた。
綺麗な嫁さん貰って、退廃的な生活を送りたいって言った。
気がついたら森にいた。
更に気がついたら保健室にいた。あ、医務室か。
何故こんな姿になっているか分からない」

「なるほど……分かったわ。
とりあえずやな……一発ぶん殴る」

信じてもらえなかった。
素敵な笑顔でなんていうこと言うんですかこの子は。
せっかく頑張って初めて本名名乗ったのに。
俺の横では、必死に止めてくれるフェイトさん
あぁ、貴女が女神か。

「厨二患者やないか――――！！」

「ま、待ってはやて！！
あの尻尾は本物だよ！！

あのモフモフは否定しちゃいけないよ！！」

「俺は厨二じゃない」

「仮に本当やとしても、そんな簡単に力を手に入れてええもんかい！！

てかオッサンて何やオッサンて！？

路地裏にいたオッサンに叶えてもらった！？

関西人なめんのもたいがいにせーや！！」

「は、はやてちゃん落ち着いて！！

気持ちは分かるけどあの尻尾は本当だって！！」

「俺は厨二じゃない」

高町さんも加わり、八神さんを落ち着かせる。

説得の内容が俺の体の一部分の事でしかなかったのは気のせい。

ひとしきり騒いた後には、大分おとなしくなっていた。

まだコメカミが少しヒクヒクしているが。

「まぁ、えぇわ。

つまり、そのオッサンに話しかけられた後に突然森の中におったんやな？

多分次元震はそん時にでも発生したんやろ」

「は、はやて……考えるの放棄したね……
えと、じゃあ龍也は次元漂流者になるのかな？」

「そうだね、保護扱いになるのかな。
最初はどうかと思ったけど、危ない人じゃなさそうだしね」

うんうん。
なかなか分かっているね高町さん。
でも最初はって何？
疑問が尽きない俺を置いて話はどんどん進んでいく。
完全蚊帳の外。
てかみんなの話に加わる為にはウィキが必要不可欠。
時折出てくる単語が分からない。

「はぁ……えぇわ。後はこっちで何とかしとく。
最後に、何や力を貰った言ってたね？」

「えぇ、多分。
あ、いや、嫁さんが……」

「ならフェイトちゃんか、なのはちゃんと模擬戦でもしてその力をちょっと見せてや。
あんたをどうするかはその結果見て判断するわ」

聞いてよ。
嫁さんがね……

「ぼっこぼこにされて私の溜飲を下げてな～」

絶望した。
拒否したいが、それでは話が進まないご様子。
でも誰が相手になるの？
高町さんは何か本能的に遠慮したいなーと……

「じゃあ私がやるよ！！」

フェイトさん……ぼっこぼこにされろ発言の後のそれは死刑宣告にしか聞こえません。
助けて高町さん。

「にゃはは……フェイトちゃんはその……バトルジャンキーだからね。
龍也くんの力っていうのが気になるんだと思うよ？
だから……えっと……ファイト？」

「大丈夫、手加減するから！！」

拝啓、故郷のお父さん、お母さん。
今、目の前に女神に変装したラスボスが居ます。
フェイトさんがネギの所持者だったようです。
ガチャポンの景品のスライムしか倒したことのない俺が、素手でどう乗り切ればいいのでしょうか。
三途の川のサボり常習犯水先案内人に会う日も、そう遠くなさそうです。
敬具

1話（後書き）

少し慣れてきた所の文章。
書きためてあったのを修正して投下。

主人公はリリカルを知りません。
だって筆者自身見たことないから。

はやての一人称の修正
知識の無さが露見

2話（前書き）

アットホーム殺人現場

2話

不時着した宇宙船から連行されたグレイのように、両脇を抱えられて3人に訓練室へ連れてこられました。
というか道中すれ違った機動六課の方々は俺の耳と尻尾を見ても驚かない様子。
疑問に思ったがその答えは簡単だった。
なんとここに着くまでにお仲間に出会ったのだ。
聞けば、ザフィーラとアルフって名前らしい。
犬耳と尻尾を付けたイケメンさんと美人さんだった。
犬耳と尻尾を付けたイケメンさんと美人さんだった。
大事なことなので2回言いました。
何でも八神さんとフェイトさんの使い魔ってやつらしい。
あ、ザフィーラさんは違ったかな……？　まぁいいや。
彼らみたいなのがいるから、あからさまに人外でも別に気にならないんだそうだ。

「ん？
てことは俺ってもしかして人間に見られていないのか？」

「私の周りには九本尻尾が生えてて、耳が頭にある状態で人間だぞって主張してる人はいなかったなぁ」

「だ、大丈夫！！
龍也は人間だよ！！」

遠回しに人外発言な高町さん。
何か必死に否定するフェイトさん。
ただ単に、今の自分が人間にカテゴライズされるのか、妖怪なのか

を知りたかっただけなので反応に関しては実際どうでもいい。
そして八神。
貴様にはさん付けすらもったいない。
妖怪厨二患者と1人で呟いて1人で笑いを堪えるのはやめてもらおうか。

○●○●○●

「じゃあ始めようか」

目の前には目を輝かせたフェイトさん。
八神と高町さんは監視室があるらしく、そこに向かった。

「やる気ですねフェイトさん」

「相手が怪しかったら斬れば分かるってシグナムが言ってたからね！」

オーケー、まだ見ぬシグナムさんは泣くまで説教だな。
斬られたらどう考えてもその後は無いだろうが。

「大丈夫、非殺傷設定だから。
死ぬことはないよ。死ぬほど痛いかもだけど」

おいこら待て、今なんて言った。
そうこうしている内に周りはなんたらシミュレーターで市街地みた

いになっている。
フェイトさんがセットアップって言うと服が変わった。
そして準備万端って感じに空に飛んで待機した。
さてっと……

「何故浮いてるし」

魔導師なんだから飛んで当たり前じゃない。
そんな事をのたまうフェイトさん。
あなた魔法が使えるんですか。
初耳なんですが。
ということはここは魔法使いの巣窟ですか。
何か周りが突然市街地になりだした時からやな予感はしてたんだよ。
そんな技術、第三東京でしか観たことないもん。
しかも画面越しに。
しかし、魔導師か……リアル魔法少女を見れても嬉しくないのは何故。

ん？　まて。
そういや俺はそもそも力の使い方なんて知らないぞ。
多分、きっと、恐らくオッサンを信じるなら魔法とか気も使えるんだろうが。
信じる対象を大きく間違っている訳で。
仮に使えるとしても未知の力。
自転車も乗り方を知らないと倒れる訳で。

「飛ばないの？」

飛べないの。

「なら、やろうか！」

そんなワクワクしながら言わないでください。
こうなったら、俺がやることはただ１つ。

「タイムを要求すｒ……」

「それじゃ、はじめ！！」

オワタ。
どこからともなく聞こえてきた高町さんの澄んだ声で詰みが確定した。
歩兵を相手にＢ２９から爆撃とか無敵すぎる。
腹を括る。
もうフェイトさんの攻撃を避けるしか手はない。
何か攻撃の予兆があるはずだ。
そこから回避ルートを導きだす。
無かったらフルボッコ祭りの幕開けだ。

「シュート！！」

きた、予兆きた！！
まさか魔法名を叫んでくれるとは。
実際は何を言っていたのか遠すぎて分からなかったが、何かをシュートしてきた。
何あれ、弾？
ともかく黄色い光の弾が前方上空から降り注ぐ。
前から来るのなら回避は容易い。
少し体を屈めて……全力で右に跳ぶ！！

ズウゥゥゥゥゥン

重低音が鳴り響いた。
恐らく彼女の放った弾が地面に炸裂したのだろう。
だが見事に回避した俺はその光景を見ることが出来ない。
何故なら俺は、先ほどいた場所から右に５０ｍ程先にあったビルの壁にめり込んでいるからだ。
頭から腰まで埋まって、外には下半身だけが出ている状態。
どうしてこうなった。

「……！！　……！？」

外で何かを言っている声は聞こえるがいかんせん壁の中。
全く聞き取れない。
だが、なんか焦ってるから俺の姿を見失ったのだろう。
今のうちに壁から抜けだして状況を把握する。
というか実際は考えるまでもない。
『全力で』跳ぶ事により５０ｍをほぼ一瞬で移動した。
この体は、正しく最強だったのだ……！！

頭さえ追いつけば。
さっきまで一般人をやっていた俺に、５０ｍを一瞬で移動するような動きをしても見えるはずがにぃ。
つまり、最強のボディー＋俺の脳味噌で、あたいったらさいきょーね！！になった訳だ。
謎が解けたところで、壁から這い出る。
攻撃避けてるのにケガするとかどういうことよ。

「あ、いた！！」

あ、見つかった。
フェイトさんが何か杖に力を溜めているご様子。
光景としては、波動砲・発射・5秒前みたいな感じ。
俺消滅フラグ。
まずいまずいまずい。
くそっ、生きたバグキャラの称号を得たあの筋肉ダルマだって言ってたじゃないか。
全ては気合でなんとでもなるって。
気合を入れろ俺！
何か出ろ俺の中の何か！
筋肉ダルマよ、俺に力を！
全力でいくぞ！！

「適当に右パンチ」

全力なのに適当とか、というツッコミは聞きません。
必死なんだよ、俺も。
しかも右手からちゃんと俺の中の何かがでた。
俺呆然。
気合って凄いね、本当に何でもできる。
太いビームみたいなのがフェイトさんに迫った。
おかげで大魔法チックな何かを中断させることに成功。
フェイトさん、余裕で俺の渾身の適当に右パンチを回避してるけど。
でも結構驚いている様子。
けどすぐこちらに向き返った。
さて、ここからどうしたものか……

「お？」

フェイトさんの立ち位置を見る。

空中に浮いてはいるものの、彼女の後ろには丁度いい高さのビルがある。
これを見て俺はティンときた。
おもむろにフェイトさんを見上げ、指差し、叫ぶ。

「フェイトさん！！
今のを避けるとはなかなかやるね！！
じゃあこれは避けれるかな！？」

案の定、俺の言葉に警戒している。
さっきの適当に右パンチみたいなのが来ると思っているのだろう。
だがそれこそが俺の思惑よ。
完全にフェイトさんの注意がこっちに向いたところで、全身に力を込める。
イメージするのは、以前友人から聞いたとらハっていうゲームの主人公が使うっていう技。
さっきのやつもノリでいけたんだし、魔法じゃないし、ならばこれも出来るはず……！！

流石最強、本当にできた。
視界がモノクロになる。
世界が止まって見える。
実際は俺が速く動きすぎているだけ。
でも今回は壁にめり込む愚は犯さない。
何故なら、思考スピードも速くなっているから。

俺は今、神の速さで走りだす……！
目指すはフェイトさんの後ろのビル。
何をしているかって？
目の前にいた敵がいきなり後ろに現れてビックリ作戦だ。
なんて脳内解説をしている間にビルに到着。
見上げる。

「……」

中に入って階段を全力疾走した。

屋上に到達。
フェイトさんの後ろ姿が見える。
もらった……！
フルボッコしかないと思ってた俺にも未来があったよ！！
この距離で右パンチなら当たるはず。
俺はフェイトさんに向かって駆け出し、モノクロの世界から脱出した。

「消えた……？　……っ！？　後ろ！？」

「うおおおぉぉぉぉぉおおお！！！」

今頃気づいても遅いぜフェイトさん。
もう既に俺はあなたの後ろで頭を抱えてゴロゴロと転がりながら悶

え苦しんでいるのだから。
いや、忘れてたんだよね、あの技ってば脳にあり得ない負担をかけるって。
しかもさっき自分で言ってたよね。
体に頭がついていかないって。
因みに俺の叫び声は気合を入れて攻撃するためのモノではなく。
突如襲ってきた頭痛に苦しむ悲鳴だったりする。
頭が、割れるように、痛い。

「……」

無言でこちらを見つめてくるフェイトさん。
いつの間に取り出したのか黄金の刀身の剣を振り上げながらゆっくりと近づいてくる。
そして俺の目の前に立った。
えっと……死ぬことは無いんですよね？
そうなんですよね？

アッ――――――――――――――――――――!!

2話（後書き）

二次創作って言う事で細かい描写は妄想に任せてみるテスト。
戦闘シーンなのにほとんど戦闘していない。
何故なら魔法名とか分からないから。
そして主人公ハッスルは厨二病への片道切符だから。

3話（前書き）

稲荷飼育物語

3話

模擬戦が終了し今は訓練室の外。
八神と高町さん、そしてラスボスが目の前にいる。
俺はというと、3人の前で蹲っている。
てかフェイトさん、斬れば分かるって言ってたじゃないか。
あれは斬りじゃない、突きだ。
例え非殺傷とかいうやつでも、尻の穴が増えるかと思ったんだから。
因みに高町さん曰く、本当は寸止めで模擬戦を終了させるつもりだったらしい。
しかしちょっとした手違いで終了の合図をかけられなかったんだそうだ。
先程から八神が俺の顔を見る度に吹き出しているので原因はなんとなく分かるが。

「そういえば、あの最後にフェイトちゃんの後ろに移動したのはどうやったの？
最初の回避はこっちでモニターしてたから分かるんだけど……」

「うん、突然消えたように見えたら後ろで悶えてるんだもん。
驚いた」

と、言われましても。

「あれは神速っていう、バカみたいなスピードで移動するチート技。
ただ、頭にかける負担が大きすぎるので使うとああなる」

「えっ、じゃあ何で使ったの？
頭がついていかないの分かってたんだよね？」

「痛いのは嫌いです」

「忘れてたんだね……」

と、ここで俺の解説から暫く黙って何かを考える素振りをしていた高町さん。

ようやく顔を上げて話しかけてきた。

「龍也くん、私のお兄ちゃんかお父さんって知ってる？」

「初対面の人の家族を知ってたら変態じゃないか。どうして？」

「いや、何かお兄ちゃんとお父さんが試合してる時に同じような動きを見たことがあったから……えっ、変態じゃないの？」

高町さんも可愛い顔してガスガス心を抉ってくるね。

ともかく、俺は高町さんの家族は知らない。

この技も、恭也って人が使ってるって話を又聞きしてノリで使ったモノだ。

「私のお兄ちゃんも恭也って言うんだけど……」

「えっ」

「えっ？」

なにそれこわい。

「それはともかくや。
模擬戦してどんな感じやった？
見てればだいたい想像つくけど。
ブフッ」

せめて笑いを堪えろ。
そうだねぇ……
気は気合で使えそう。
魔法は魔力が何なのか分からない。
体力はやべぇ。
でも全てにおいて頭がついていかないのでやるせなし。

「強くなろうとは思わんの？」

熱血、根性は苦手なんです。

「ふぅん……まぁえぇわ。
なら、あんたの処遇やな。
正直、あの右ストレートの一撃だけ見るなら威力がかなりあるんや。
あれだけを見るならやけど。
でもあれを簡単に放てるあんたを野放しにするんは惜しい。
加えてその姿でふらつかれるとちょっと面倒になるっていうんもあって、誰かの使い魔的な立場になって欲しいんや」

ふむふむ。
で、本音は？

「一度ウチで保護したヤツが変態行動を起こして他所で捕まらんように首輪をつけとく。
ただでさえウチは目をつけられてるんや、摘める芽は摘んでおく」

さいですか。
というか俺が出歩いたら捕まることは確定ですか。
まぁここから逃げても根無し草になるので拒否権はないですが。
で、誰の使い魔になるの？

「それなんやけど……なのはちゃん、お願いできんか？
フェイトちゃんはアルフがおるし、私にもリイン達がおるから」

「え、別にいいけど……私でいいの？」

「一応、首輪をつけるんは私ら隊長陣の立場なほうがええからな。
届出を出すだけやし、とりあえず表向きだけお願いや」

なんか高町さんになりそうな予感。
彼女の近くにいると胸のドキドキがマッハなんだが。
だがストロベリーな展開じゃないのはなんか本能で分かる。
てか隊長陣って何？
部隊長は八神じゃね？

「因みに、名前なんやけどあんたその姿で本名で出していいん？
妖怪に戸籍なんてないんやし、別の名前にしたかったら変えるけど。
厨　二病なんてどうや？
素晴らしいネーミングセンスに全私が感動した」

「誰が厨二だ誰が
俺も少しヤバい領域に足を踏み入れたと思ってきてるんだ。
黙っててくれ」

しかし、自分で名前を決めろと？
それなんて羞恥プレイ。
カッコイイ名前つけても名前負けするのが目にみえている。
けど確かに、本名晒すのは何だかはばかられる。
故郷のお父さんお母さんも息子の名前の狐が現れたら驚くだろうし。
う～ん……
でも考えるの面倒だし、見た目妖狐だから『稲荷』でいいよ。
何故笑うし。

「じゃあ今度から龍也くんは、私のお稲荷さんだね！」

なん……だと……

「じゃあ使い魔になるって事で、私のことはなのはって呼んでね。
フェイトちゃんはもう名前で呼んでるし。
あ、後敬語はいいよ。
フェイトちゃんとアルフさんの関係って少し憧れてたんだぁ！」

「そや、なのはちゃんの使い魔になるんや。

友達である私らも名前で呼んでくれてええで」

「ん、元々あんまし敬語なんて使っていなかった気がするが。
なのはさんね、了解。
フェイトって名前だったの？
じゃあ苗字はTだったのか……
そして八神、てめぇはダメだ」

「なんでや」

「T！？」

さて、なのはさん。
俺の待遇も決まったところで1つ聞いてもいい？

「どうしたの？」

飯が食べたいです。
信じられるか？
今までずっと夕方から夜にかけての話だったんだぜ。
体感時間は3日くらいに感じたが。

「あ……ごめんね、そういえば夕飯を買いに行ってここに来たんだったよね。
お稲荷さんが何者なのかを早急に調べる必要があったから……」

呼ばれているのは新しく決めた自分の名前な筈なのに笑いがこみ上げるのは何故。

「よーし、じゃあご飯食べにいこっか！

私も今日はまだなんだ～。
お稲荷さんは何が食べたい？」

「稲荷寿司を所望致す」

こうして俺の異世界１日目は幕を閉じるのであった。
めでたしめでたし。

「あ、それだけ力があるのに努力しないとかダメだよ！
私が時間ある時に鍛えてあげるね。
拒否したらスターライトブレイカー」

全俺が泣いた。

3話（後書き）

やる気がないのは筆者の性格がそうだから。
熱血……2秒で飽きる。
勝手気ままに好き放題が、座右の銘。

そしてやはりはやての一人称修正

4話（前書き）

世界の車博覧会

4話

昨日は別れ際にいくつか念を押された。
夜で突然の事だから部屋が今は用意できないので、六課の待合室で寝て欲しいとか。
フェイトさんのTはテスタロッサだから忘れるなとか。
なのはさんに迷惑かけたら、八神とフェイトさんでダブルブレイカーとか。
むしろ私がスターライトブレイカーだとか。
自業自得だとしても、もう自分の境遇に泣いてもいいと思うんだ。
そんなこんなで待合室のソファーで寝ていた俺。
ガチガチになった体を伸ばして、起き上がる。
笑顔の魔王が、そこにいた。

「おはよう、お稲荷さん！」

「えと……おはよう」

「今日は私の使い魔になったって事をみんなに知らせるから！
ついでに今から私が教導してるみんなもトレーニングに入るから、お稲荷さんも参加だよ！」

「はい……ん？　何だって？」

「スターズ隊っていうんだけどね、みんな熱心に私の教導を受けてくれるんだ。
だからお稲荷さんも一緒に頑張ろう？」

あ、お腹が痛いのでトイレ行ってきます。

その後には狐と油揚げの関連性について脳内会議を開かないといけないので、どうぞ俺は気にしないでやってくださ……
なのはさん、アイアンクローは痛いです。

「黙って来なさい」

「はい」

○●○●○●

あぁ懐かしの訓練室。
もう二度と来るものかと思っていたのに。
ここが俺の墓場になるんですね分かります。
骨が残ればいいが。

「みんなー！　集合！」

現実逃避をしていたらなのはさんがなにやら集合をかけていた。
今、彼女の前には４人のチビッ子。
男女比が１：３か……
少年よ、強く生きろ。

「注目。
彼は昨日付で私の使い魔になりました、稲荷です。
今日は顔合わせと軽い訓練をしてもらうために連れてきました。
お稲荷さん、この子達が私達の隊のメンバーです。

オレンジ色の髪の子がティアナ・ランスター。
青色の子がスバル・ナカジマ。
2人が、私が隊長をしてるスターズ分隊だよ！」

「なのはさんの使い魔、ね。よろしく」

「お願いしまーす！！」

「で、こっちの2人がフェイトちゃんが隊長をしてるライトニング分隊のメンバー。
赤髪の子がエリオ・モンディアル。
ピンクの髪の子が、キャロ・ル・ルシエ。
みんな、仲良くやってね！」

「よろしくお願いしまーす！！」

「あ、えと、お願いしまーす」

うん。覚えらんね。

「よろしくカラフルチビッ子達。
よく分からない内に使い魔になりました。
迷惑が掛かったらダブルブレイカーかスターライトブレイカーってやつが飛んで来るらしいので、骨が残ってたら拾ってやってください。
後、名前が覚えられんのだけど。
ティアナさん、だっけ？」

「さんはいらないけどね」

「ふむ。なんか兄妹にティーダとかいそうだな」

「っ！？　あんた、知ってるの！？」

「え、日産だろ？」

「えぇ、自慢の兄さんよ」

なんか発音は同じ感じなのに会話が噛み合ってない気がする。
まぁ深くは突付くまい。

「で……スバルだっけ、ギンガだっけ」

「ギンガは私の姉さんですよ！？
私はスバルです！！
てかなんで知ってるんですか！？」

「そうなんか？
どっちも宇宙的な名前だから別にいいだろ
中島繋がりでみゆきも引き入れて地上のスターズ分隊に改名しとけ」

なのはさん、だからアイアンクロー痛いです。
というか意味が分かるあなたに驚きです。
さて、最後二人が微妙なのだが。

「キャロ・ヲ・モンデヤルだっけ？」

「合体してる上に僕変態になってるんですが……キャロはこっちです。
後、もみません」

「もまないの？」

「もまないよ！？」

ふむ、ライトニングの2人は仲がよろしいようで。
そっちがキャロね。
で、君がマリオ？

「エリオです！！」

だよな、ヤツはもっと鼻がでかい。
まぁ名前は、生きていたら覚えておこう。
もうすぐ俺の処刑が始まるから。
あれ、昨日もなかったっけ。

「じゃあ朝は、いつものメニューをやろうか！
お稲荷さんは向こうで私と訓練しましょう」

みんな、俺はこれから死地に赴く。
最期にこの尻尾に触りたい者は居ないか？
……5人に馬乗りにされた。
なのはさん、あなたもですか。

○●○●○●

「お稲荷さんはあの子達の訓練が一息つくまで、私の攻撃から逃げきってね」

いきなり要求がルナティック過ぎる。
まずは身体能力の把握からが基本じゃないのだろうか。
ん？　なに？
お稲荷さんは私が見てないとサボる？
何故ばれたし。

「じゃあ行くよ～！！　セットアップ！！」

白い服、白いスカートに身を包んで空に舞うなのはさん。
スカートで空を飛ぶなよ、丸見えじゃないか。
けどそれを言うほど俺は愚かではない。
しっかりとなのはさんの攻撃に構える。

「できるだけ長く避けてね！」

そう言って自身の周りにピンク色の弾幕を展開。
少しずつタイミングをズラして、それぞれの弾が俺に迫る、迫る。
非殺傷設定ってやつと言えど怖い。
全力で避ける。
ビルに埋まる。
すぐ抜けだすがそこまで次の弾が迫っている。
避ける。
埋まる。
出る。
避ける。
埋まる。
泣く。

「何で全身真っ白なのに弾だけピンクなんだよ!?
中身真っ黒じゃないか!!
詐欺だ詐欺、中も白じゃなく黒にしとけよ!!」

ピンクの光の奔流にのまれました。
何か……デジャ……ヴ……

「という夢を見たんだ」

「現実なの」

俺はさっき魔法……魔砲?を受けたところで寝転んでいた。
周りが爆撃の後かと言えるほど悲惨なことになっている。
でも、一番重要なのは。

「俺、生きてる……!!」

「非殺傷設定だから当然だよ?」

それでもこの喜びを感じずにはいられない。
俺は今日も生き延びることができたんだ……!

感動のあまり涙がこぼれそうになるが、頑張ってこらえる。
さて、じゃあ子供たちの所にでも行きましょうや。
立ち上がる俺。
肩をガッと掴まれる。
なんでせう？

「まだ始まってから時間は全然経ってないよ？
少しやっただけで攻撃受けてのびちゃったんだもん。
立てるくらい元気があるみたいだし、まだまだ時間はあるからどんどんいくよー！！」

地獄の宴が、始まった。

「私、こんなに他人に同情したの初めてかも。
あ、また爆撃音」

「稲荷さん……私のご飯、分けてあげようかなぁ……」

「でも動きは凄く速い……僕もあのくらい動けたら……
あ、埋まった」

「フリードが怖がって動かない……」

―訓練を眺めていた隊員たちのセリフより一部抜粋―

4話（後書き）

ＰＶ数を知る方法が初めて分かったとです。
三日で４０００ＰＶと７００ユニークは普通なのか。
基準が分からない。

１回の戦闘を数分で終わらせる程度の能力

改：行間・シーン転換を後の話と統一化。
　漢数字を訂正。

5話（前書き）

お空の上の奇行文。

5話

やぁみんな、元気かい？
最近尻尾のツヤが無くなりつつある稲荷です。
目も死んだ狐のような目になりました。

そして聞いてください。
遂に、緊急回避の横跳びで壁にめり込むこともなくなりました。
加えて空も飛べるようになりました。
ひとえにナノハサンのパーフェクト砲撃教室を連日受けたおかげです。
避けたらその先にも弾が先回りしてたり。
左右を囲んで、前方から魔砲撃ってきたり。
誤字にあらず。

もうね、少しでも力を使えるようにならないと、次の日の朝は拝めない感じだったから。
後なのはさん曰く、俺にリンカーコアとかいう魔法を使うのに必要な器官は無いとの事。
故に、多分妖力的なモノを使って飛んでいると考えられる。
気とは違うものに思えるから勝手に妖力とか言ってるが。
使えるの俺しか居ないし、フィーリングチックなため無問題。

と、ここまで来たら、ようやくナノハサン教室が一旦終了になった。
因みにずっと疑問だった、何でそこまで俺に固執するのかを聞いてみたところ。
私の使い魔がヘタレだと、私の躾が下手に思われそうだから、だそうだ。
躾にはキョウドウとルビが振られているのはご愛嬌。

日に日に俺の扱いがひどくなっていきます。

そしてしばらくはカラフルチビッ子達を見ないといけないらしく、自主練と相成った。

自主練いいよ自主練。

死ぬような思いをすることもないし、自分のペースでできるし。

1人で黙々と集中していたおかげで、いくつか技を作ることができた。

名前はまだ無いけど。

技名って重要だよね。

技名一つで厨二にもなるから、お披露目をする時の事を考えて慎重に名付けねば。

そんな1人の時間が素晴らしすぎた為に、もう俺をじっくり見ることは出来ないんだ……ごめんね。と言われたときは素直にもう二度と見てくれなくていいと思った。

アイアンクローされた。

やつは新種のサトリか？

○●○●○●

なにはともあれ今は自由。

なのはさんは仕事に行っているので、俺をアレするサディスティッククリーチャーは居ない。

緊急用の通信機みたいなのは渡されたが、まぁ使うことはないだろう。

しかも実はお金もなのはさんからお小遣いでいくらか貰っているのだ！
だから少しは買い物も出来るんだぜ。
完全なニートだが。
微妙な立場で正式に働けないからいいんだよ。

そんなこんなで今日も今日とて、平和を謳歌しつつ六課の中を散歩中。
戦場から帰った戦士ってこんな気分なのかね。
感傷に浸っていると突如鳴り響く警報。
目覚まし時計のアラームでもビビる俺を驚かせるには十分なものだった。
気がつくと近くにあったゴミ箱の中にいた。
いや、何かここに油揚げ王国の入り口がある気がしてな？

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。
こちらはやて』

いきなり画面が目の前に現れたのでもう一度油揚げ王国の入り口を探してしまった。
これはなのはさんから貰った通信機……かね？
画面にはそれぞれ、八神・なのはさんとチビッ子隊・眼鏡のイケメン・フェイトさんがいる。
八神が焦った表情で状況を語りだした。

『レリックらしきものが見つかった。
対象は山岳丘陵地帯を山岳リニアレールで移動中。
内部に侵入したガジェットのせいで、車両の制御が奪われているらしい』

まただよ（笑）
レリックとガジェットって何さ。
あれか、とりあえずはリニアレールが敵に奪われてやばいって事か。
頑張ってこい。
俺はまったりしてるから。

『フェイトちゃん、なのはちゃん、いけるか！？』

『いつでも！』

『私も！』

『ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、稲荷。
みんなもいいか！？』

『はい！！』

「なんだって？」

何故俺が含まれてるし。

『えぇお返事や。
ほんなら、機動六課、フォワード部隊……出動！！』

『はい！！』

「なんだって？」

○●○●○●

無視するとピンクの光に焼かれる事は眼に見えていたので指定の場所であるヘリポートへと急いだ。
そこには既に、なのはさんとチビッ子隊。
時間がない、とよく分からない内に連れ込まれる。

「新デバイスでいきなりになっちゃったけど、いつも通りにやれば大丈夫だから！
おっかなびっくりじゃなく、思いっきりやってみよう！
空は私とフェイト隊長で制圧するから、みんなはスターズ・ライトニングに分かれてリニアレール内のガジェットを破壊しつつレリックを安全に確保。
何か聞いておきたい事はある？」

「レリックとガジェットと俺がここにいる理由がサッパリング」

「無いようだね
じゃあ、頑張っていこうね！」

分かってはいたが目から溢れでた汗で視界がセルフエコノミー。
そしてチビッ子隊は、緊張しているのが目に見えて分かる。
俺はと言えば、無視されて切ない気持ちを紛らわせる為に操縦士と話していた。
ヴァイスっていうらしい。

「旦那、言っちゃ悪いですが大丈夫ですか？
色々噂は聞いていますが、あんまし強くはないんでしょ？」

「チビッ子達と戦ったら1対1でも5分で負ける自信がある。
戦闘経験皆無なパンピーなめんなよ。
耐久力的な意味合いでなら……訓練時ではなのはさん相手でも6分は持つんだが」

「そ……それは。
なんとも壮絶な訓練だったみたいだね」

「分かってくれるか。
なのはさんは白い服着て天使に見えるがありゃ魔王だ。
DQの第三形態なやつらだってあそこまで酷くはない」

「ちょ、なのはさんに聞こえたらどうするんっすか!?
しかも何気に意味が分からないし……
てかそれなら何故来たんで?」

「さっきのやりとり見てたお前がそれを言うか。
俺が知りたいよその理由を……
まぁ……でも戦場には出ないでしょ。
チビッ子達の任務みたいだし、俺関係ナッシン。
ヘリの中でまったりしてるよ」

「え?　お稲荷さんには今回ライトニングについていってもらうよ?」

横から俺とヴァイスの会話に入ってくるなのはさん。
てか何故その情報が今まで入ってこなかったし。
もう目的地周辺じゃね?

「まぁ、子どもに任せてる俺が言うのもなんだがな。
あいつらの事、よろしく頼むわ」

ヴァイスの言葉にしばらく固まる俺だったが、これは腹を括るしかない。
彼に一つ頷くと、俺はエリオとキャロのもとへ向かった。
やはり緊張しているのか、ガチガチな2人。
特にキャロがヤバイみたいで少し気持ちが沈み気味のようだ。
だが、そんな事俺には関係ない。

「エリオ、キャロ」

初めて見る俺の真剣な表情に、2人はどうしたのかと聞いてくる。

「今回、俺はお前らライトニングについていくことになった。
そこ、えっ……て顔するんじゃない。
俺も30秒程前に聞いたばかりで絶賛絶望中だ。
……それはさておき、任務遂行に全力を尽くして欲しいが、ひとつだけ言っておく」

俺の言葉に二人だけじゃなく、ヘリの中全員が耳を傾けているのが分かる。

「ガジェットの破壊？
レリックの確保？
意味はあまり分からんが、それらを成し遂げることは重要なのだろう。
だが、それよりも大切な事がある。
それはな……俺を生きて家に帰す事だ。
俺のこと、よろしく頼むわ」

チビッ子共より弱い俺が生きて帰るにはこいつらの助けは必要不可欠。
最悪、ガジェットの破壊もレリックの確保も失敗していいから俺だけは守ってほしいです。

「お～い～な～り～さ～ん～？」

振り返ると、額に怒りの四角を貼りつけた夜叉がいた。

「エ、エリオ！
任務前の準備運動だ、俺を守ってくれ！」

「無理です。
というかどんな準備運動ですか」

「くっ、キャロ！」

何イイ笑顔でサムズアップしてますか！？
あなたさっきまでもっと沈んでなかったっけ！？

「いや待ってくれなのはさん。
そもそも『最強』ではなく『さいきょー』キャラが固定化されつつある俺が誰かを守るなんてそんな事できるはずがアッ――――！！」

○●○●○●

「じゃあ、ちょっと出てくるけど……みんなも頑張って、ズバッとやっつけちゃおう！」

「はい！！」

「……はい」

「キャロ？」

「え？」

「そんなに緊張しなくて大丈夫。
離れていても、通信で繋がってるから。
ピンチになったら、助け合える。
キャロの魔法は、みんなを守れる優しくて強い力なんだから」

「通信かよ、そこは心で繋がってるとか言ってやれよ。
てかなのはさん、いいセリフなんだから俺を踏みながら言うのはやめってイタイイタイ踏み込む力を強めないで背中がぁぁあああ」

「ね？」

「は……はい！！」

ひとしきりキャロを励ましたら、なのはさんは開いていたハッチから飛び降りたようだ。
キャロは喜んでいたようだが、俺は踏まれていた背中がギシギシ言ってるよ。
だが、神は俺を見捨てなかった！！

なのはさんが先に行ってくれるとは！！

「フ、フハッハハハハハ！！！
なのはさんという恐怖が去った今、俺を脅かす者はいない！！
という訳でヘリで待機して、いい感じに終わりそうになったら何食わぬ顔で合流するからみんな頑張……って僕もみんなを守ろうかなぁハハハ」

「ヴァイスくんにも一声かけていこうと思って奥にいただけなんだけどなぁ……
お稲荷さん、任務が終わったら、お話なの……」

……神は俺を見放した。

「そういや、リイン曹長知らないか？」

「誰だそれは」

「いや、銀髪を腰くらいまで伸ばして、髪を片方だけ軽く結んである……」

「あぁ、似たような人形なら出発するとき椅子の上にあったぞ？

揺れてあっちこっち行くと危ないからそこの鍵付きの箱に入れておいたが」

「え」

「え？」

5話（後書き）

行間を変えてみた。
シーン転換時に○●○●○●を入れてみた。
連日午前3時の帰宅に全俺が泣いた。

セリフ見ておわかりだろう、初めて原作見ました。
書いてて分かった。
見ないと情景が、全く分からん。

あ、ＰＶ５０００いってました。
こんな変態を見てくれて感謝感激です。

改：漢数字を違和感がない程度に数字に変えた。
　でも一部既に数字だった。
　６話は全部漢数字だったのに、イミフ

6話（前書き）

屋根の上での奇行文。

6話

リインを箱から救出したら、今度こそなのはさんが飛び降りた。
あれって人形じゃなかったんだね。
リインが何か色々騒いでいるが気にしない。
窓から外の光景を眺めてみる。
ピンクの光を纏ったなのはさんと、別の所から飛んできた黄色い光を纏った……あれはフェイトさんか？　が高速で飛行している。
2人して敵を殲滅しているが……戦闘機を生身で撃墜するとかどこの生きたバグキャラだよ。
あの2人だけで自衛隊くらいなら壊滅に追い込めるんじゃなかろうか。

「さぁて新人共。
隊長さん達が空を抑えてくれている間に、安全無事に降下ポイントに到着だ。
準備はいいか！！」

「はい！！」

おっと、呆けてたらいつの間にやらこちらの出撃時間がやってきたようだ。
スバルとティアナが、スターズスリー・スターズフォーって叫びながら落ちていった。
ＯＬが着てる感じのミニスカスーツでスカイダイビングがシュールでならないが、それより気になるのは……
何故、真っ裸？

「次、ライトニング！！

チビ共、気ぃつけてな！！」

「はい！！」

「稲荷、お前もいいか？」

「よくない」

「行かないと、なのはさん怒るぞ……？」

「フォックスワン、稲荷、いっきまーす！！」

狐だからフォックス。

今、命名。

同時に飛び降りているエリオとキャロ。

あ、エリオは真っ裸にならないんだね。

まぁ男の裸見ても……ってヤツか。

でもキャロは裸になった。

今度訓練の時にでもデジカメ持って行こっと。

○●○●○●

リニアレールの屋根に乗ると、リインがみんなの衣服について語っていた。

それぞれの隊長のを参考に作ったらしい。

みんなカッコイイね。

主人公みたい。
俺？
大きめのTシャツと、飛び職の人が履いてるようなダボダボのズボン。
いやぁ、大きい服って楽でいいんだわ。
九尾だから和服もいいなぁって思ったんだけど、ここ和服ないみたいだし。

「っ！？　スバル、感激は後！！」

ティアナが叫んだかと思ったら、リニアレールの屋根からレーザーが出てきて俺の尻尾を掠っていった。
何するし。
ビビってたらスバルが全部倒してくれた。
最近のインラインローラーは凄いと感じた瞬間である。
敵を殲滅したら、ティアナとスバルは前方車両に向かって走っていった。

「稲荷さん、僕たちはこっちから行きますよ！！」

「行ってらっしゃい」

分かった分かったからその槍みたいなの突きつけないで。
渋々ながら、エリオとキャロについていくことになった。
段々エリオも俺に対する扱いが酷くなってきたね。
俺に安息の地はないのか。
てか速いよエリオもキャロも、移動するの。
俺パンピーなんだから。
1人で居るとか死亡フラグだから。
置いて行かないでよ。

「あぁ、願わくば、俺の前には敵が出てきませんよーに！！」

そう思っていたのに。

突如後ろから、さっき屋根の上で見たのと同じレーザーが飛んできた。

振り返る。

「……なんぞこれ」

目の前には、楕円のフォルムの横から触手……コード？　を生やした物体が浮いていた。

うねうね動いていたコードをこちらに向けてくる。

気持ち悪いので右パンチで破壊する。

同じ物体が２体現れた。

右パンチで破壊する。

今度は４体現れた。

何とか右パンチで破壊する。

更に８体現れた。

助けて。

「エリオ――――――！！

キャロ――――――！！

へるぷみ――――――――――！！！」

後ろに向けて全力前進。

因みにここであの瞬間移動チックなスピードを出したら間違いなくリニアレールから落ちて谷底コースなので、常人の全力レベル。

俺も成長したものだ、うむ。

自己満足しているとレーザーが頬を掠めた。

うん、死ぬ。

２両先にキャロがいた。
目の前の大穴を覗き込んでいる。
エリオは？
まぁいいや。

「よかった！！
キャロ、追われている。
助けてくれ」

「考えたこともなかった……
私の前には、いつも、私がいちゃいけない場所があって……」

「絶賛回想中！？」

俺、詰んだ。
そう思っていたら、どこからかエリオの雄叫びが聞こえた。
来た、救世主来た！！
さっき遠目から見てたが、エリオはこいつらをボコボコにしていたはず。
ならば俺の後ろにいる２０体くらい、余裕で捌けるだろう。
てかいつの間に増えたし。
エリオの声が聞こえてきた部分の屋根が盛り上がる。
勝利を確信した俺は、振り返って高らかに宣言する。

「ハッハッハ！
かかったな、ダンゴムシもどき共！！
これが我が『逃走経路』だ……貴様らはこの稲荷との知恵比べに負けたのだッ！！」

そして屋根を突き破り、出現する。
太い何かに捕まったエリオが。
そのまま谷底へと放り投げられる。
同時に出てくるダンゴムシもどきの親玉らしき……例えるならボムキングみたいなヤツ。
あるぇ？

「エ、エリオく――――――――――ん！！！」

キャロも谷底に身投げした。
辺りに聞こえるのは風の音だけ。
その場にいるのは、２０体のダンゴムシと１体のボムキング。
そして俺。

「あるぇ？」

○●○●○●

「フハハハハハハッ！！」

こういう時、どうすればいいか分からないって脳内に問いかけたら、笑えばいいと思うよって言われたんだ。
キャロが身投げしてから3分は敵の足止めをしている。
だがそろそろ俺も限界やもしれん。

どうやって足止めしてるかって？
さっきキャロが覗いていた大穴に落ちないように、列車の縦を使って反復横跳び。
しかもなりふり構っていられないので、瞬間移動の変態チックな反復横跳び。
移動中は速くて見えない。
けど左・中・右では一度足を止めている。
故に3人に見える。
そして移動しながら笑っているため声はサラウンドに聞こえる。
これがリアルに質量を持った残像だよ。
ヤツらは俺が恐ろしいのか、攻撃するのを躊躇っているようだ。
なんか『お前行けよ……』『やだよ、お前いけよ……』的な行動をしているのは気のせい。

「グオォォォォォオオオオ！！」

突如、辺りに凄まじい咆哮が響く。
なんぞ？　と声のした方を見ると、ドラゴンに乗ったキャロとエリオがいた。
無事だったかチビッ子共！！
これで勝つる！！
……で、そのドラゴンはどちら様？

「優しい人を……私に笑いかけてくれる人達を……
自分の力で……守りたいから……！！」

何かキャロが語りだした。
それと同時に、ドラゴンの口に巨大な火の玉が形成される。
お、俺はキャロに笑いかけた事あるよね……？

「フリード！
ブラストレイ！！」

ねぇ、聞いてよ、俺って優しいでしょ？
それにキャロに笑いかけた事もあるよね？
笑いかけたら守ってくれるんだよね！？
ちょ、おま、まっ……

「ファイア！！！」

「アッ――――――――――――！！」

火の玉に吹っ飛ばされる。
俺の叫び声は、周りにいたダンゴムシ共の爆発音にかき消された。
こんな役回りばっかりだね、俺。
だが、今の一撃でダンゴムシ共は壊滅したようだ。
あのボムキングの姿も見当たらない。
だからと言って、これはないでしょう？
滝のような涙を流していると、地面が動いた。
なんぞ？

「一閃必中！！」

エリオがこちらに向かってくる。
そこで気づいたのだが、どうやら俺は何かに乗っているようだ。
やな予感がして、下を見てみると。
案の定、ボムキング様に乗っていたようで。

「あ、ちょっと待ってね、今降りるから」

「うぁぁあああ！！」

エリオが俺の言葉を無視して槍でボムキングを貫く。
貫通した槍の先は、降りようとしていた俺の股の位置から生えてきた。
何をとち狂ったのか、そのまま上に斬り上げてくる。
まてまてまてそれはまずい！！
慌てて対なのはさん砲撃用気合防御を試みる。
なのはさんの砲撃を6分間耐え切った時に身につけた技だ。
腹に力を入れて我慢するとも言う。

「うぉぉぉぉおおおお！！」

「ノォォォォォォオオオ！！」

ボムキングを切り裂いた。
エリオは離れた位置で、勝利のポーズをとっている。
俺はと言えば、ボムキングの上で悲鳴を上げることもなく切なくなっている。
まぁ……息子を両断されるのを防いだだけでもよしとするか。
なんてポジティブに考えていたら、乗っていたボムキングが爆発した。
またもや俺の悲鳴は、爆発音にかき消された。
もうやめて俺のライフは0よ！！

「レリックも無事回収できたし、帰還しよっか！」

「はい！！」

「あの、なのはさん……」

「エリオ？
どうしたの？」

「稲荷さんは、どうしたんでしょう？
途中ではぐれてしまって……」

「ねぇ、もしかして……」

「ティア、知ってるの？」

「あそこで股間抑えながら炭化してるのって……」

「あ……」

6話（後書き）

珍しく奮闘。
しかし報われない。

ユニークが7日で１３００いっていた。
でも週間アクセスは７００だった。
何故騙したし。

あ、閲覧ありがとうございました。

漢数字を違和感がない程度に数字に訂正。
読み返してて、見辛い罠。

7話（前書き）

秘境撮影奇行文。

7話

「今回、はやてちゃんから報告されていたガジェットの数は３０体だったのに実際はそれ以上のガジェットが確認されました。
でも、イレギュラーのガジェットのほとんどをお稲荷さんが引き連れてくれたおかげでティアナとスバルには被害がいかず、エリオとキャロも新型の対応に専念することが出来ました。
ありがとうね、お稲荷さん」

炭化から回復して今は帰りのヘリの中。
とりあえずエリオのお稲荷さんを仕返しに握っておいた。
ざまぁ。
そしてその後、なのはさんからの評価を受けることに。
初めて褒められた。
何もしてなかったのに。
けど何故正座？

「これが今回の部隊長としての評価。
そしてこれからが私個人の評価なんだけど……
私の使い魔をやってるのに、撃墜数が７機。
ちょーっと少ないんじゃないかな？」

頭に手を置かれる。
なるほどナデポですね分かります。
でも指に力をいれるのはやめてください。
てかあの、笑顔なのに目が笑ってませんが。

「自主練、ちゃんとしてねって言ったよね？
見せてもらってはいないけど、いくつか技もできたって言ってたよ

ね？」

「いや……1つはあの反復横跳びって言いますか……
今命名するなら『幻視「質量を持った残像」』と言いますか……
妖力を使った技は集中しないと出来ないからとっさに使えないと言いますか……
てかチビッ子達、たしけて」

ギシギシ言いつつある俺の頭。
自慢の耳も尻尾も力なく垂れ下がっていく。
救援を出すも、4人は揃って首を横に振る。
四面楚歌って言葉の意味を体験できた瞬間だった。

「せめて私の3分の2くらいは撃墜できるくらいにならないと」

「生きたバグキャラに追いつくとか馬鹿なの？　死ぬの？　頭が痛いのォォォオ！？」

なのはさん、あなた握力いくつよ。
りんご握りつぶせるんじゃね？

「これからはフォワード陣を集中的に見る予定だったけど、変更ね。
お稲荷さんもみんなの訓練に参加。
拒否は認めないの」

真っ白に燃え尽きた。

○●○●○●

地獄の日々が、再開された。
嘘だと言ってよバーニィ。
しかも初任務の翌日から訓練開始とか鬼畜過ぎる。
現実を受け止められず、スネーク並のスニーキングにて脱出を図っていたのにあっさりとバレて訓練室へ連行された。
ダンボールではステルスに限界があったようである。

「何故バレたし」

「尻尾の生えたダンボールなんて聞いたこと無いよ」

けど尻尾に罪はない。

「て訳で、今日からまたビシバシやるから覚悟しとけよ！」

今日の訓練室は無人島風味。
木々が多くて心が癒されます。
そして先程からチビッ子達に喝を入れているこの新キャラ。
誰よあんた。

「お稲荷さん、この子はヴィータちゃん。
スターズの副隊長をやってます。

こう見えても、夜天の書っていう魔道書を長い間守ってきた歴戦の騎士なんだよ」

「……長い間？」

どう見ても年齢が二桁に達するかどうかに見えるんだが。

「こんななりでも、あんたよりは年上だよ。魔道書と一緒に、長い年月を過ごしてきたからな」

「エターナル……ロリータ……だと……？」

「よし、お前アイゼンの頑固な汚れにするわ」

稲荷　は　逃げ出した。

しかしまわりこまれてしまった。

捕まってボコボコにされた後になのはさんとティアナと一緒に訓練することになった。

始まる前から既に瀕死とかなんてムリゲー。

「じゃあ今回の訓練だけど。

ティアナは、私が撃つ魔法をその場を動かず撃ち落とす。

私やティアナの役割であるセンターガードは、誰よりも速く中長距離を制する事。

そのためには動きまわらず、じっと堪えて周りをよく観察する。
丁度、今ティアナと話しているのをいいことに逃げ出そうとするお稲荷さんを見逃さないようにする感じに、ね？」

「イ〝ェアアアアア」

「そしてティアナのスキルは射撃だから、下手に動いて狙いを外すよりも動かないほうが精密な射撃ができる。
だから、出来る限りその場に留まって私の魔法を撃ち落としてみて」

「はい！！」

「お稲荷さんは、私に編み出したっていう技を使ってみて。
一撃でも私に当てれたら、今日は見逃してあげる」

「合格じゃなく見逃すって所で不穏な感じがするのですが」

「じゃあ、始めようか」

○●○●○●

ティアナは上手に、なのはさんの魔法弾を撃ち落としている。
すごいね、のび太くん並のスキルじゃないかしら。
そしてティアナに意識が集中している今こそ絶好のチャンス。

Ａｃｔ　１

「行くぜなのはさん！　『幻視「質量を持った残像』」

かのダンゴムシとボムキングもといガジェット達を翻弄したこの技。
全力で横跳び回避より、止まる位置があるので本当の全力でやっても大丈夫な分身の術。
さぁ、この技、貴様に見切れるｋグッハァァアア！？

「高速移動で反復横跳びしてるなら、別に当てなくても移動する予定の場所に攻撃を放てば自分から当たってくれるの」

Ａｃｔ　２

「狐ならやっぱりこれだろう！！　『幻覚「狐火」』」

俺の周りに出現する５０以上の鬼火達。
妖力を燃やせないかなぁとイメージしまくってたら出来ました。
汎用性高いね、妖力。
よく魔法とかそういった類のものはイメージが大切って聞くけど、本当のようだ。
さぁ、なのはさん。
この視界を覆う炎の嵐。
避けきれるか？

「なっ！？
……あれ、熱くない？」

５０を超える炎弾はしっかりしっかりなのはさんに着弾し、火柱を上げた。
なのはさんはいきなりまともな技を使ってきた事に驚き、防御が遅れたようだ。
でも聞こえるのは、疑問の声。
それもそのはず。

「狐火って鬼火とも言われてるらしくてさ。
鬼火って熱いのもあるけど、そうじゃないのもあるらしいんだよ」

「ふぅん……つまり？」

「幻覚なのらー」

弾幕でボコボコにされた。
最初に『幻覚』って言ったじゃないか。

Ａｃｔ　３

「狐や狸は変化の術が得意らしいぜ。
てな訳で狐版の変化の術を見せてやる。
狸版は八神に頼んでね。
『変化「狐の尻尾太刀」』　」

某獣の槍に出てきた九尾のお仲間が使っていた、尻尾の1本が大量の剣になるやつ。
憧れていたので、実際にできた時には喜びました。
でもあんなに剣でいっぱいにしたら他の尻尾が切り刻まれるので、毛を一本だけ抜いての変化。
手に現れたものは刀身が1m程ある大太刀。
ヤベ、今俺最高にカッコよくないか？

「お稲荷さん、それ……質量兵器？」

「質量……なんだって？」

「誰が使っても、例えば、私やティアナが使ってもお稲荷さんが使うのと同じ効果な刀なのかな？」

「剣道初心者な俺が使って切れる刀なのに、なのはさん達が使って切れない訳がなかろう」

「没収」

「なして！？」

Ａｃｔ　４

「これは使いたくなかった諸刃の剣だが……今までの技が通用しな

いなら仕方ない。
下手すれば俺は再起不能になるだろう。
だが、それでも俺はやってみせる！」

「ちょ、そんな危険な技使っちゃダメ！！」

「だが断る！　『妙技「知られざる秘境」』　」

セリフと同時になのはさんの視界から消える俺。
いや、実際はフェイトさん戦の時に使った神速なんだけどね。
後で実験したら、どうもあの時の死にそうな程の痛みは長時間使用してしまったが為に起こったものであって。
数秒程度なら、俺のロースペック頭脳でもあまり負担が無いことが判明。
で、素早くなのはさんの足元に移動。
神速を一旦解く。

「足元がお留守だぜ」

「っ！？」

今、なのはさんは俺を警戒して、大股を開いてどっしり地面に立って構えている状態。
その足の間に俺が仰向けに寝そべっている。
上に向ける手の中には、通信機。
なんとこの通信機、携帯みたいにカメラ機能ついてたんだぜ？
もう分かったよな、『知られざる秘境』の全貌。
そぉい、富竹フラッシュ！！
そこでもう一度神速を発動。
危険区域から抜け出す。

ここからが、この技の真骨頂。

「さぁ、なのはさん。
貴女の知られざる秘境が、この送信ボタンを押すだけでヴァイスに送信される。
嫌ならば抵抗はやめて敗北を宣言してもらおうか」

「……」

ヴァイスのアドレスいつ知ったかって？
ヘリの中でな。
意外とウマがあったので。

「さぁ、どうすｒ」

ジュッって音が聞こえた気がした。

○●○●○●

意識が戻って周りを見ると、俺の後ろから先が一直線に消し飛んでいた。
よく生きてるな、俺。
因みに近くに落ちていた通信機には、先程のデータが削除されていたばかりではなくカメラ機能までもが壊されていた。
マイガッ！
これでみんなの変身シーンの真っ裸を撮る予定だったのに。

「あ、お稲荷さん起きた？」

そこには、先ほど一緒に訓練していたなのはさんとティアナだけじゃなく、エリオとキャロ、フェイトさんとエターナルロリータもいた。

何事？

「お稲荷さんも起きたし、お昼になったから午前の訓練は終了。みんな、ご飯にしようか」

ボロボロで座り込んでいるチビッコ達から歓声。

なるほど、飯か。

しかしよっぽど辛かったのだろう、へたりこんでみんな動かない。

俺もある意味辛かったけどさ。

仕方が無いのでもう少し休んでから移動になった。

「個別スキルに移ると、ちょっときついでしょ？」

「ちょっとと……言うか……」

「その……かなり……」

なのはさんの問いかけに息も絶え絶えに答えるティアナとエリオ。

でも、くれぐれも無茶はしないようにとのお達しがフェイトさんからあった。

「なのはさん、無茶しないようにだって。

俺にももうちょっと優しくして？」

「よく聞いて。
フェイトちゃんは体が成長途中のみんなに言ってるの」

理不尽だ。
使い魔だってバファリンくらいの優しさが欲しい。

「フェイトさんフェイトさん。
アルフさん今何してますか？」

「え？
家にいると思うけど……」

ちらり。

「他所は他所、ウチはウチ」

「お前は俺のかーちゃんですか！？」

涙が血涙に変わる日も遠くはなさそうだ。

「あ、お稲荷さん。
さっきのだけど、幻術と変化は凄かったよ？
でも変化は質量兵器にだけしないように注意して。
後はそれをしっかり使えるモノにできるようにしていこうね！

因みに最期のヤツをもう一度使ったら、非殺傷解除のスターライトブレイカーなの」

「二度と使いません、ご主人。
にしても変化で攻撃ができて質量兵器じゃないようにって無茶振りにも程がある」

「後、さっきヴァイスくんに聞いたんだけど。
お稲荷さんが大太刀持ってるのをシグナムさんと一緒に見てたらしくてさ。
剣の素人っていうのを聞いて、稽古をつけてやろうって言ってたって……」

「シグナムさん……？
あ、フェイトさんに斬れば分かるとかとち狂った事教えた人か。
泣くまで説教するって心に決めてたんだった。
……ん？　稽古？」

「あの人も剣を使う人で、戦いも好きだから。
稽古に関しては、私より厳しいかもね」

今後は事務職の人と仲良くなろうと固く心に決めた稲荷です。

7話（後書き）

ＰＶ１００００を突破してました。
感慨ものです、ありがとうございます。
感想も初めてもらいました。
ヒャッフー、なのです。

えっ、主人公が厨二？
いいえ違います、あれはケフィアです。
後、東方のスペカ名が結構好きだったりします。

8話（前書き）

見えない空気の奇行文。

8話

チビッ子達も回復し、お昼ごはんと相成った。
さっきまで飯だ飯だと楽しみにしていたのに、今は下手に動きまわるのが恐怖でしかない。
ダンボールに隠れてスニーキングミッションを遂行中。
任務失敗は、シグナムさんに見つかったときである。

「9本の尻尾が生えたダンボールが動きまわる姿って……シュールね」

「ティアナ、何を言うか。
これはかの有名な蛇男も絶賛したスニーキングアイテムだぞ。
光学迷彩なんて目じゃない」

「機械溢れるこの景色にレトロなダンボールがあるってだけで異色よ。
というかどこで仕入れてきたのよそれ……」

「変化の術の応用でござる」

「なんでもいいけど、目立つし恥ずかしいから使うの禁止です」

なのはさんに破り捨てられました。
横に愛媛みかんって文字までちゃんと書いた、力作だったのに……

「ところでダンボールの文字って日本語だったけど……お稲荷さんってもしかして地球出身？」

周りが外国人の名前っぽかったから日本人？　って聞かれるかもとは思っていたが。
まさか惑星出身から疑われていたとは心外である。

「どこをどう見ても地球産の純粋日本人でしょうが」

「そのセリフ鏡見てからもう一度言って欲しいかな」

毒舌さに磨きがかかってきましたねなのはさん。

「でも地球の日本なら私も同じ出身だね！
……あ、そういやお稲荷さん一応次元漂流者扱いでもあったんだっけ……
帰る世界分かっちゃったし……地球に帰りたい……？」

「意味が分からない。
なにここ地球じゃないの？」

「あんた一体どれだけ基礎知識が抜け落ちてるのよ……」

ティアナが馬鹿にしてくるが、俺が何を知らないのかを俺は知らない。
お、今の名言っぽくね？

「だって詳しく訊こうにもなのはさんに連絡したら、
あ、じゃあ丁度いいからお稲荷さんも一緒に訓練しよ？
とか言い出す可能性があるんだぞ？
そんな事になったら俺の寿命がストレスでマッハ。
なのはさんの魔砲で俺は骨になる」

首筋にヒヤリとした何か。
ちらりと見る。
赤い珠の周りを金色の金属が囲って、そこから一本の棒が伸びている杖のような物が。
そしてその杖は、魔王の両手に握られていた。

「だって詳しく訊こうにもなのはさんに連絡したら忙しいのにさ、あ、じゃあ丁度いいからお稲荷さんも一緒に訓練しよ？
なんて言ってくれる可能性があるんだぞ？
そんな事になったら俺の寿命が罪悪感でマッハ。
なのはさんの優しさで俺は骨抜きになる」

首筋に突きつけられていた死の宣告から解き放たれる気配。
命拾いをしたようです。
てか実際、地球じゃなくてもそこまで気にしてないから。
とりあえずどこででもいいから、生きてて人並みの生活ができればそれで満足。
連日魔砲を受けてて人並みかはとても微妙ではあるけど。
またヒヤリとした。
訂正、満足です。

「だからわっちは地球に戻る気も、なのはさんの使い魔を辞める予定も今のところありんせん。
安心してくりゃれ」

「……そっか、そっか。
よし、お稲荷さん今日は私が払っちゃうよ！
何でも好きなもの食べてね！」

何故か分からんが上機嫌なのはさん。

この機を逃す事なかれ。

「では揚げ尽くしといこうか」

○●○●○●

食堂に着くとチビッ子達は早々と料理を注文しに行った。
俺となのはさんも席だけ確保し、それに続く。
先日から密かに食堂のおばちゃんに頼んでいたメニュー、揚げ尽くしを食べる時がきたのである。
いい仕事をしてくれた。
おばちゃん、愛してる。
それを受け取り、なのはさんも定食を貰って席に戻る。
俺が取った席には丸めがねのお姉さんが。
テーブルには謎の山が。
どこから突っ込めばいい。

「とりあえず……
何がテーブルにあるのかと思ったらスパゲッティーの山ですか。
てかこんなに誰が食うんだ」

「スバルとエリオよ。
全く、そこまで食べても太らない秘訣を教えてもらいたいものだわ。
で、あんたのそれ……何？」

「お稲荷さん要望の揚げ尽くしメニューらしいよ？」

「うむ。
主菜は稲荷寿司。
副菜に油揚げのサラダ、油揚げの煮物、油揚げのお造り。
油揚げのステーキもあったんだが、そこまでは食べれないからまた今度だな」

幸せなり。

「油揚げのお造りってなによ……味覚も狐化してるみたいね……」

「ティアナもなってみるか？
油揚げがあり得ないくらい美味しく感じるぞ」

必死に否定されました。
まぁこんな事態にならなかったら俺も狐になろうなんて思わなかったけど。
なってしまったものは仕方ないから楽しむだけさ。

「で、そこは俺のキープした席なのだがどちらさん？」

「あら、なのはさんもお昼ご飯ですか？」

丸めがねのリバースカードオープン。
魔法カード『スルースキル』が発動。
次のターンに俺の怒りは有頂天になる。

「あ、シャーリーもご飯？」

「えぇ、みなさんを見かけたのでご一緒しようかと」

「うん、いいよ」

なのはさんは自分がキープした席に座り、丸めがね……シャーリー？と談笑ムードに突入。
チビッ子達もそれに乗じてワイワイし始めた。
俺、席が無いため揚げ尽くしを手に立ち尽くしている。
今うまいこと言った。
なのに涙が出ちゃう。

仕方無しに隣のテーブルに座る。
人がいっぱいでみんな楽しそうにご飯食べているのに俺の座るテーブルだけ孤独。
絶品なはずの揚げ尽くしが何だかしょっぱく感じる。
この切なさを、稲荷、心を込めて歌いたいと思います。

「ちーさいあーきー　ちーさいあーきー　ちーさいあーきー　みーつけたー……」

歌声は、食堂の喧騒に溶けていった。

○●○●○●

あまりの寂しさに意識が夢幻の彼方へ飛んでいっていたようだ。
気がつくと既に訓練室に戻っていた。

「何故みんなとご飯に行って1人で食べなければならないのか」

「そこに席が無いからよ」

何、決まった……！　みたいなセリフ言ってやがりますかティアナさん。
ウサギじゃなくても孤独死できると思ったよマジで。
仲間はずれ良くない。

「さぁ、今から午後の訓練だからみんな準備してね！」

あ、やっぱり仲間はずれでお願いしますご主人。
え、だめ？
ですよねー。

壮絶。
その一言に尽きた。
志村後ろ、後ろ！作戦も。
タンスの角に小指がゴン作戦も。
全て耐え切られて後に撃ち抜かれた。
特にタンスにゴンの時はダメージを与える事ができた分、返ってくるのも凄かったとです。
一撃入れたら見逃してくれるんじゃなかったのか。
逆に見逃すかって意思がありありと見て取れました。

え？　どうやったかって？
幻術と変化の合わせ技。

狐火の形を全部タンスに変えただけです。
迫り来る５０近いタンス。
その中に１つだけ変化で作った実物。
うん、それはそれで怖いかもね。

「はーい、じゃあ夜の訓練、おしまい」

「あ……ありがとうございました……」

「……」

所々ボロボロになりながらも、何とか立ちながらなのはさんに礼を言うチビッ子達。
無言でうつ伏せで黒焦げになって、ブスブスと煙を上げている俺。

「いつか何かに触れると必ず静電気が発生する呪いをかけてやる……」

「そんなことしたら八つ当たりされる回数が増えるだけだと思うぜ」

エターナルロリータもといヴィータに諭された。
どうやら俺がなのはさんに一矢報いる日は訪れないようである。

お疲れさまでした、と声をかけて帰宅するチビッ子達。
なのはさんはそれに応えると、今日の訓練結果を纏めたような物を表示しているモニターを空中に出現させた。
もはや魔法というよりＳＦである。
キーボードっぽい何かでピッピッピッピとやりながら、ヴィータと話している。
黒焦げ状態から回復した俺は、近くの壁に寄りかかりながら座って

その光景を眺めていた。
超回復って凄いよね。

「けどあれだ……なんつぅか、もっと、厳しくしねぇでいいのか？」

「俺に死ねと申すかエターナルロリータ」

ハンマーが顔の１０センチ横の壁にめり込んだので自重します。

「小さいことで怒鳴りつけている暇があったら、模擬戦でしっかり叩きのめした方が、教えられる方も学ぶことが多いって……教導隊では、よく言われてるんだ」

叩きのめされる度に記憶が飛ぶ時もある俺に学ぶものなど何も無い。というか、あの教導はまっさらな新人を育てるものじゃなく、もっと強くなりたいって意思と熱意を持った魔導師に、ハイレベルな戦技を教えていくものらしい。

「意思も熱意も戦闘技術もない俺はただただ平穏無事に毎日を過ごしたいだけなんですが」

「ま、何にしても大変だよな、教官ってのも」

「でもヴィータちゃんも、ちゃーんと出来てるよ？　立派立派！」

「撫でるなぁー！」

「あっはははは！」

「聞いてよ」

他の人がアットホームな雰囲気を醸し出していると俺はエアーマンになるようだ。
食堂に続き二度目の切なさを歌いたくなりました。

「結局あのまま空気かよ。
泣いてない、泣いてないよ俺。
1人夜道を歩くのにも結構慣れてきてしまったさ」

「お前が稲荷だな」

「ん？　どちらさ……
ピンクのポニテ、無愛想な口調、ボイン……
まさか、シグナムさんか！？」

「ほぅ、些か気になる特徴ではあるが。
なのはから話は聞いているな？」

「聞いているけど聞いていない。

クッ、このままでは俺は終わってしまう……！
危険ではあるが、この場を脱出するために俺はあえてこれをする！
！」

「な！？」

「これは……D……か？
ノギャァァァアアアァァアアアア！！！」

―防

犯用街中カメラの音声より抜粋　―

8話（後書き）

友人が授業休んで1人学食でご飯を食べる寂しさは異常。
アニメを見ながら書いてる筈なのに、描写されてるところよりもされてないところを妄想して書いてる自分も異常。

という訳で8話でした。
閲覧ありがとうございました。

9話（前書き）

森の中の奇行文。

9話

「私の周りには、優秀すぎる相棒。
そして天才と、歴戦の勇者ばっかり。
今でも疑問に思っている。
私は何でここにいるのか……」

「うるせーよ。
書類1つ書くのに何ぶつくさ言ってんだよ。
他人のモノローグ聞こえるとか苦痛以外の何者でもないんですけど」

どうも、稲荷です。
今始末書を書いています。
や、正式な物じゃなく、なのはさんに提出する用のね。
昨日の帰り、シグナムさんの拉致から逃れるために禁断の右手を使用したのだが。
気がついたらパンツ一丁でゴミ捨て場にポイされてたんだ。
そこを次の日通りかかったなのはさんに拾われた訳なのだが。
もうなのはさんに迷惑をおかけしませんという内容の反省文を原稿用紙20ページ分。
手が痛いです。

で、隣にいるのが例のごとくチビッ子達。
今日は午後から任務があるらしく、午前中は書類の処理になったとか。
みんな珍しく黙々と机に向かっている。
約1名うるさいが。

「お稲荷さん、書けたの？」

「もうちょいで終わるんだけどさ。
隣で私は何でここにいるとか、みんな天才秀才で私凡人とか、明らかパワーアップフラグなモノローグを延々聞いていたらやる気が萎えた」

「あ、あああああ、あんた何言ってるの!?
なのはさんに何言ってるの!?」

「正気に戻ったなら黙って書け。
厨二発言を聞いていると俺の精神的ダメージが鬼になる」

全く、俺よりティアナが厨二と呼ばれる方が相応しいのではないだろうか。
因みに俺は厨二じゃないのであしからず。

「そう……ティアナの事も気になるんだけど。
お稲荷さん、何であんな事したの?」

「シグナムさんに出会って問答無用で稽古という名の処刑が行われそうだったから、ムネ揉んだ。
気がついたらああなってた。
でもまだ体中が痛いのと裸を衆人の目に晒した事を考えると処刑の方がましだったかもしれないと後悔中。
あ、もしかしてシグナムさんって脱がし魔か」

「話の飛躍の仕方が尋常じゃないの……
ともかく50枚反省文追加」

おい馬鹿、やめろ!

午前中までに書き終わらなかった分については宿題になった。
合計７０枚とか無理。
手がもう動かない。
午後は休もうとしていたらなのはさんに以前と同じヘリポートへ拉致られた。
どこに連れていかれるのか説明がないのはもうデフォ。
使い魔使いの荒い人だ。
使うから使い魔なんだろうが。
使うがゲシュタルト崩壊を起こした。
それにしてもフェイトさんちのアルフさんは今頃家でのんびりしているだろうに。

「そこんとこどうなんですかねフェイトさん」

「えっ？　えっと……アルフは多分稲荷より仕事できるから」

お前は休むよりも働けと。
普通はフォローを入れる所で鋭い一言ありがとうございます。
おかげで俺の心はブロークンファンタズム。
塵も残らない。
そうこうしているうちにチビッ子達も集合。
ヘリに搭乗し、すぐに空へと飛び立った

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者、及びレリックの蒐集者は現状ではこの男、広域次元犯罪者であるジェイル・スカリエッティの線を中心に、捜査を進める」

「どこから現れた八神」

「あんたが現れたんやあんたが。
私は先にシャマルとヘリに乗ってたんやで。
てかあんたは今話した内容、理解しとるん？」

「シャマルすら理解できなかった」

「私の名前です……」

「お前はリツコさんだろう」

「誰ですか！？」

違うのか。
まぁどうでもいいや、内容把握は適当で。
基本流れに身を任すタチですから。
お陰でとんでもない目にあってる気もするけど。
その後のリインの説明となのはさんの補足で今日の目的を大体把握した。
曰く、高級なホテルに行くらしい。

「アグスタかぁ……ネーミングセンスはともかくきっと素晴らしいホテルなんだろうなぁ……フカフカのベッドあるかなぁ……」

「重要な所をすっ飛ばして状況を把握するあんたに脱帽やわ」

「褒めるなよ」

「照れんなや」

「あ、お稲荷さんは入れないよ？　ペット禁止らしいから。後、泊まりに行くんじゃなくて警備の仕事をしにいくんだから入れてもベッドに関係は持てないよ？」

フカフカベッドと結婚してハイパーイチャイチャタイムに突入する夢が崩れ去った。

落ち込みがヤバイが無理なものは仕方がない。

気を取り直す。

そして誰がペットか。

「警備と申したか。

よかろう、では今回は誰が一緒になるのか分からんが、俺のフォローを頼むぞチビッ子達」

「今日はフォワード陣とは組まないで、お稲荷さんは1人でホテルの外を警備ね！」

希望も崩れ去った。

○●○●○●

今俺は、森の中にいる。

あ、ありのまま起こったことを話すぜ。

『ホテル周辺の警備をしようとふらついていたら、二階からシグナ

ムさんがこっちを睨みつけていた』
頭がどうにかなりそうだった……
何か恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

という訳で逃げてきました。
だって見られてるだけで冷や汗が止まらなくなるんだぜ？
ありゃ絶対脱がす気だね。
しかも視線で、何故お前がここにいるって語ってたし。
絶好の標的！　って感じがした。
もう脱がされたくないんです。
で、ここどこよ。

「俺が迷うのはいつだって森の中。
世界はこんなはずじゃなかったことばかりだ。
誰かヘルプ」

「え？」

「ん？」

進んだ先には幼女が居た。
紫の髪を長く伸ばした、ヴィータやキャロと同じくらいの幼女である。

「つまり幼女版ライダーですね分かります。
しかも眼帯をしていないとか俺を石化させる気マックス。
この世の不条理に不満を叫ばざるを得ない」

「？　よく分からないけど、私はルーテシア。
こっちはガリュー。

ライダーじゃない」

手の甲辺りに宝石っぽい何かを取り付けたグローブを俺に見せて言う幼女。

ルーテシアって言うのね。

ガリューって何？

……あぁ、格闘が得意だけど我流だってか。

グローブカッコイイし強そうだね。

いいじゃん我流でも。

そして肉弾戦をするからライダーじゃないと。

「初めましてこんにちは、稲荷です。

レベル１のスライム程度の相手なのでそれで殴らないでね。

適当に歩いてたら迷った。

ホテルまで行くにはどうしたらいい？」

「迷ったの？

……連れていってあげようか？」

「神は俺を見捨てなかった！

いつも見放したとか言ってごめん！

是非お願いします」

「うん……でも、私はドクターの頼み事でここを動けないから、この子にお願いする」

紫幼女がそういうと草むらから大きな影が飛び出した。

どうみても以前のダンゴムシもどきです、ありがとうございました。

でも今回は敵意はない様子。

「ん？　ドクター？」

「スカリエッティ……だったかな、本名呼ばないから、忘れた。
この子の、製作者」

「ふぅん」

興味無し。

「あ、狐さん、乗って。
案内させるから」

「稲荷です。
ありがとう、紫幼女。
また会おう！
じゃあいっちょよろしく頼むぜダンゴムシ！」

「私も、ルーテシア。
うん、またね」

ダンゴムシに跨ると、１ｍくらい浮遊して動き始めた。
ありがとう紫幼女。
君はきっと将来立派なライダーになるよ。
この恩はいつか、覚えていたら返そう。

そして１０分程進んだら他のダンゴムシが集まっている場に出た。
前方には見知ったオレンジの髪と青い髪。

「おーティアナとスバルじゃん！
やっほー」

「クロスファイアー……シュ――――ト！！」

「えっ」

○●○●○●

「もう一度、言ってくれるかな？」

俺、正座。

目の前には、またもや額に怒りの四つ角を貼りつけたなのはさん。

俺が何したし。

「ある日、森の中、紫幼女に出会いました。

花咲く森の中、紫幼女に出会いました。

紫幼女の言う事にゃ、狐さんダンゴムシでお行きなさい。

スタコラサッサッサのサ。

……で、ティアナやスバルと合流できたと思ったら撃ち抜かれました。

あいつは絶対幼女ライダー。

Ｆａｔｅから参戦とかビックリだ。

てか味方を撃つってどうよ？」

「呼んだ？」

呼んでません。

「乗っていけって、完全にガジェット操ってるやないか……
私らが苦労しても見つけ出せんかった黒幕をどうしてそんな簡単に見つけ出せるんや……
というか、ガジェットが現れた時点でおかしいと思わなかったんか！？」

「だよな？
俺もあんな美的センス溢れるモノ、市販して売れるんだ～って疑問に思った」

「着眼点がちゃうわあああああ！！」

「あぁ、スカさんの美的センスの方か」

「もっとちゃうわあぁぁぁぁあ！！！！」

「てかガジェットに乗った不審者が現れたらあたしでも撃つぞ」

「無垢な一般ピーポーに何するか」

「辞書貸そうか？」

八神はともかくヴィータとフェイトさんは何気にひどい。
てかヴィータいたんだ。
あぁ、そういやスターズ副隊長とか言ってたね、任務ならいるかそりゃ。

「ねぇティア……隊長達みんなスルーしてるけど、稲荷さん、今凄いこと言わなかった？」

「スカさんって……なんでそんなフランクな呼び方なのよ……」

「稲荷さん、犯罪者なのかな」

「あいつが犯罪者なら今世界は極悪犯で溢れかえってるわ」

ティアナとスバルも遠回しにけなしている気がする。

てかここまで馬鹿にしてるのに一向に状況説明してくれないみなさんに全俺が泣いた。

「お稲荷さん？」

「……はい」

「後でお話しようか……」

オワタ。

「そういや……その……さっきはごめん、撃っちゃって」

「１０円ハゲが出来たら訴えてやる」

「だからごめんって。
ところでさ、何で迷ってたの？」

「そこに道が無かったから」

「ハイハイ。
というか道が無いなら飛べば良かったじゃない」

「あっ」

9話（後書き）

アニメ7話で初めてシャマル先生とルーテシアの姿を見た。
そこから感じ取った熱きリビドーを抑えることが出来なかった。

因みにＦａｔｅも内容把握してる訳でもなければエヴァも全話見たことはない。
キャラだけ知ってるとです。

自分が危機にさらされると騒がしく。
別段危なくないときは冷静に。
そんな稲荷です。
あ、筆者も。

という訳で9話。
閲覧ありがとうございました。

慌てて訂正。
キャスターをライダーに直しました。
確認してたのに間違えたとか脳汁がでます。
ご指摘ありがとうございました。

１０話（前書き）

死亡フラグ回避劇場

１０話

任務が終わり、六課に帰還したのは夕方過ぎだった。
今入口の外には、チビッ子達、なのはさん、フェイトさん、ヴィータ、シグナムさん、犬、シャマル先生がいる。
シグナムさんからの熱烈な視線で胃がとろけそう。
後、犬。
おめぇ誰だ？
あ、そういえば結局、どういった任務だったのかが最後まで分からなかった。
誰も事情を説明してくれないまま終わったし。
けど夜の訓練が無いってことは分かった。

「うひはー！！
帰ってグダグダして過ごすぞー！！」

「こら、何言ってるの。
夜の訓練がないのはフォアード陣だけだよ？
お稲荷さんは私と特訓しようね」

「理不尽だ」

夜の訓練はさっきいい雰囲気だったユーノとベッドの上でどうぞ。
割と本気で言ったのにグーパン貰った。
あ、鼻血……

「女性がグーパンとか野蛮的過ぎるでしょう」

「こんな私も含めて私なんだよ」

なのはさん……！！
あれ、いい言葉な筈なのに少しもじ～んとこない。
そしていつの間にやら襟首掴まれて引きずられていく。
なんつー力。
と思ったらフェイトさんも引っ張っている。

「ブルータス、お前もか」

「シグナムから聞いたよ、昨晩のこと。
言ったよね、なのはに迷惑かけたらブレイカーって」

「うおぉぉぉぉぉお誰か助けてぇぇぇぇえええ！！」

だが現実は非常だ。
もうすぐ六課の入り口という冥界の門をくぐることになる。

「ねぇ、あんたさ、強くなろうって思わないの？」

だが、それも途中で止まった。
突然のティアナの問い。

「幻術や変化の術も、あのふざけた右パンチも、どれも効果や威力は桁違い。
そもそもなのはさんの砲撃に匹敵する攻撃を、ノータイムパンチで繰り出せるとか変態よ」

「いや、まぁ、うん……ん？」

「なのに、何でもっと強くなろうって思わないの？
もっと努力しようって思わないの？」

そう聞いてくるティアナの表情は優れない。
なのはさんとフェイトさんの手が襟首から離れる。
この雰囲気に乗じてこの場からの脱出方法がティンと来たのだが、
どうやらシリアスタイムに突入のようだ。
こういうのは苦手なのだが、後ろに死亡フラグが2本待ち構えてい
るため真剣に答えざるを得ない。

「えーと、じゃあ逆にティアナは何のために強さを求めてるんだ？」

「何のためって……」

「色々あるじゃん。
この人を打ち負かしたい。
敵討ちがしたい。
モテたい。
厨二的な事がしたい。
エターナルフォースブリザードって叫びたい」

「最初2つ以外あんたの妄想じゃない……」

「俺は厨二じゃない」

でも、そうね……と呟く。

「私は、守る力が欲しい。

もう誰も傷つけたく無いから。
そして兄さんが使ってきた……ランスターの銃が、無駄じゃないことを証明したい」

「また新キャラか。
ランスターって誰だ。
てか俺を撃ち抜いた後でよくそんな事言えるな」

「あんたの名前覚えの悪さはよく分かったわ」

てへへ。
グーパン！？

「お前も野生児だったか……もう俺の鼻のライフは０よ……ったく。
んじゃあ、どういう強さを求めてる？」

「へ？」

「強さって言っても色々ある。
１人で結構何でもできるなのはさんやフェイトさんのような変態な強さ。
個人個人はそこまで強力じゃないけど、チームを組むことで得られる変態な強さ。
戦う力は全くなくても、色んな人を束ねることで得られる変態な強さもあるな。
他にも色々と」

「普通の力はないのね……」

「なのはさんの魔砲が変態じゃないわけがない。

それはともかく。
どんな強さを求めるかによってどう戦うかが変わる。
じゃあそれに合わせてする努力も変わってくる。
レベルなのはさんなら、魔法技術や戦闘技術、戦略、その他様々なトリビアを完全にモノにする。
じゃないと色々な場面に対応できないからな。
チームプレイなら、長所をひたすら伸ばして、短所は補ってもらう。
最後のは……カリスマが必要だからまぁここにいるやつらには無理なので端折る。
ティアナはどういうのを求めてるか知らんが、とりあえず今はチームプレイだろ？
焦らず自分の長所を伸ばせばいいんじゃね？」

「でも……強くなっている実感ができない……
周りはみんな優秀なのに……私は全然で……」

まただよ（笑）
語りながら、俺は少しずつティアナに近づく。

「じゃあ仮に、今突風が吹いたとしよう。
後ろにいるなのはさんのスカートがめくれ上がった。
咄嗟に振り向くが、俺の視力じゃなのはさんのパンツが白な事しか分からない。
だが、そこでキャロの強化魔法が発動して視力が強化されたらどうだ。
白いパンツの形、装飾、全てが手に取るように分かるようになる。
もしかしたら脳内も強力になって、永久保存版として記憶できるかもしれん」

そんな事しませーん！！

と横で騒いでいるのはスルーで。

「だが、実際に見て感じるのは俺だ。
キャロが役に立ったかなんてキャロ自身には分からない。
でも確実に、俺はキャロのお陰でなのはさんのパンツを拝むことができた。
俺1人では出来ないことを、チームプレイで成し得たんだ。
チームプレイってのはそういうもんでな、自分の行動が味方にどんな影響を与えているのかが分かりにくいもんなんだ。
センターとか、吟遊詩人とか、赤魔道士とか、前衛と後衛の中間にいる人は特に」

「……」

「ここまで色々言ってきたが、別に俺は教導してる訳じゃないし、こーしろあーしろなんて言えん。
だからティアナがどんな強さを求めても頑張れよ～って言うくらいしかできん。
けどまぁ、今やってるチームプレイとは別のやり方をしたいならなのはさんに断りだけはいれておけよ。
チーム内で別々の思惑で行動したら、個人スキル以下の動きしかできないからな」

俺が言葉を言い切ると、辺りが静かになった。
ここで、死亡フラグを回避する最後のピースをはめる。

「ま、何を悩んでるのかは知らんが、てめぇの悩みはてめぇにしか解決できねぇ。
せいぜい悶え苦しめや」

そう言いながらティアナの左肩を左手でポンっと叩き、そのまま歩き出す。

「……結局あんたは何で努力しないのよ！」

足を止める。

ティアナの声に、振り向かずに少し顔を上げて応える。

「俺のこと、知ってるだろ？
努力・熱血・根性には興味がないんです」

そして再び歩き出す。

俺が見えなくなるまで、その場に居た人達が言葉を発する事はなかった。

「ってなると思ったのにナー」

「ごめんねお稲荷さん。
私もう、限界みたい」

見えなくなる前に、両肩をなのはさんとフェイトさんに掴まれました。

てか分かりましたからその手の杖をしまってください。

力入れすぎてギシギシ言ってますから。

マスタァァアアア！！　って幻聴も聞こえるから。

てかその杖、喋ってね！？

「キャロによくも、よくもそんな汚れ仕事を……！！」

あなたは現実と妄想の区別をつけてください。

「あんなひどい事言う人にはおしおきです！」

わぁ、一番和むなぁそのセリフ。
でもドラゴン召喚とか一番危険。

「じゃあお稲荷さん」

「訓練室で一緒に」

「訓練しましょーね！」

「え、ちょ、俺今ティアナのすっごく重い人生相談受けてたよね！？
結構真面目に答えてたよね！？
ちょ、ま、みんな助けて！！」

死亡フラグが増えたのは想定外。
みんなにヘルプを送る。
ティアナが先ほどとはうって変わり、明るい表情……ニヤニヤした表情でこっちを見ていた。

「そうねぇ、丁度いいしあんたの言うチームプレイを試してみよっか。
もちろん標的はあんたで。
キャロも行くみたいだし。

スバル、付き合いなさい」

「うん、ティア！」

「あ、僕も行くよ！」

「あたしも行くぜ」

「烈火の将の所以、見せてやる」

「守護獣とて、攻撃くらいはできるものだ」

「あらあら、私の分は残るのかしら」

あ、ごめん。
俺死んだわ。

○●○●○●

「生きてる、俺、生きてるよぉ……
てかなんでヴィータとシグナムさんと犬とシャマル先生も来るんだよぅ……
そして犬……ザフィーラさんだったんだね……」

消し炭になったり潰されたり吹き飛ばされたり切り刻まれたり。

妖怪の体になったことを本気で嬉しく思いました。
というか全員が全員、笑いながら攻撃してくるのである種のホラーです。

で、みんなひと通り気が済んだのか帰っていき、今はなのはさんとティアナだけになっている。
てかお前らは何故まだいるし。

「しっかし、例えも凄かったけど話の内容も凄かったわね。
あれを聞いて何か少しスッキリできた自分が嫌になるけど。
なにあれ、経験談？」

「ネトゲとアニメとＳＳ巡礼の賜物。
あの程度の説教ならどこにでも書いてある」

「今までの話が全てどうでもいいものに思えてきた……」

最初から死亡フラグ回避が目的だったから実際どうでもよかったんだ。
というのは言わないでおこう。

「はぁ、まぁいいわ。
ありがとね、色々聞かせてくれて。
私は明日早いから、もう帰るわ。
なのはさん、また明日、よろしくお願いします！」

そう言うとティアナも訓練室から出て行った。
後に残されたのは、俺となのはさんである。

「ねぇ、お稲荷さん。

こうなるの分かってたの？」

……。

「そ、そう、分かってたよ。
いやぁ、ティアナの悩みもあれで解決してくれればいいなー」

「そっか、別に考えて言ってた訳じゃなかったんだね」

何故ばれたし。

「あ～あ、私教導官に向いてないのかなぁ」

「うん」

「にゃはは……
お稲荷さんのそういう歯に衣を着せないところ、好きだよ？」

ならこのアイアンクローをやめてはもらえまいか。

「俺に安息の時はないのか」

「全く……
まぁ、今回は私のせいでもあったかな……」

「うん？」

「何でもない。
お稲荷さん、ありがとうね」

「ん～？
よく分からんが、油揚げで手を打とう」
「ははは。
そうだ、じゃあ私が晩ご飯作ってあげよっか？」
「マフィアは殺す相手に贈り物をするという」
「後１戦だけやっていこっか」
絶望した。
口は災いの元って本当みたいだ。
「あ、そうそう、反省文だけど免除してあげる」
「マジでか、やっふぅ！！」
「うん、５０枚プラスしたのを３０枚プラスにするから２０枚免除ね。
だから合計５０枚、明日中に私の所に持ってくること」
「上げて落とすとかドS過ぎる」
どうやら明日も手が吹っ飛びそうである。

１０話（後書き）

俺はどうやらシリアスも書けるようだ（キリッ
こういう場面に出くわしたら筆者も同じ感じになると思われる。
アニメ見たら、重い、重いよこの話。
思わず目を背けながら書きました。

でもシリアス慣れてないので何かしっくりこない。
でも筆者の力量は臨界点を突破したのであえて投稿。
ここで読者数が分かれる……！！

という訳で１０話。
見てくれてありがとうございました。

11話（前書き）

ごはん処の奇行文。

11話

こんばんは、稲荷です。
挨拶でも分かるように、今は夜。
ティアナ人生相談事件、略してT・J事件から数日後、訓練が終わった後になのはさんに呼び出された。
その時はほいほい頷いたが、今になって後悔している。
眠気が、ヤベェ。

「あ、お稲荷さんごめんね、突然呼び出しちゃって」

指定場所は六課裏手の林。
なのはさん曰く、他人に聞かれたくないのだそうで。
みんなと別れてから、気付かれないようにこっちに来たらしい。
この流れ、俺には分かる。
どうやらフラグを立ててしまったようだね。
砲撃の日々の中でいつ立てたのかが謎だが。
無意識に立ててしまうのが俺クォリティーか。
ハッハッハ、モテる狐はつらいよ。

「お稲荷さんには、言っておきたくて……その……実は……」

うんうん、何だい？

「ティアナと、もう一度しっかり話してきたんだ。
私がやってる教導の意味を、知って欲しくて」

遂になのはさんも俺の魅力に気づい……なんだって？

「私、不器用だから……
私みたいになって欲しくないって思って一生懸命教えてたんだけど
……
その意味を知らずに続けてたら、結局どこかで綻びができちゃうもんね」

「あ、その話、長くなりそう？　俺眠いから続きは明日で」

「特に、この間の、一件で、ティアナとは、きちんと、話す必要が、あると、思ったんだ！」

なのはさんが俺の首に腕をまわしてきた。
ギブ！
しまってる！
綺麗に入ってるからぁ！！
てか、なのはさんの腕力テラツヨス。

「この間の事で、ティアナが抱えてた悩みも少し軽くなったみたいだし。
そのお陰で私もお話しやすかったんだ。
だからお礼を言いたくて。
ありがとうね、お稲荷さん」

「首に集中していたがこの背中に当たる気配……まさかC」

「ちゃんと、聞いて、欲しいかなぁ」

グキッて聞こえた気がした。

「お礼を言われるだけで死にかけるとかありえねぇ。
てか数分前の俺の妄想もありえねぇ。
欝だ、死のう」

「何を妄想してたの？」

「言ったらオカンにエロ本を種類別に分類されているのを発見した時と同じくらいの絶望感を味わうことになる」

「持ってるの？」

「ないよ」

「お小遣いを何に使ってるかな。
今度、お稲荷さんの部屋を掃除するの……」

ナンテコッタイ。

「とにかく、お礼を言いたかったんだよ！
みんなの前じゃちょっと恥ずかしかったから言えなかったし！
分かった！？」

「イエス・マム」

あれ、何でお礼言われて怒られてるんだ？

「よろしい。
じゃあ今日は家に帰って明日に備えよっか。

夜も遅いし……っ！？」

言葉の途中で突如響くアラート。
二度目だから驚かない。
何でも海上に敵が出現したとか。
通信も緊急アナウンスがあったわけでも無いのにそう言うなのはさん。
端から見てると電波を受信したようにしか見えない。

なのはさんは即座に現場に向かうらしく、今日はすぐ家に帰って大人しくしていなさいとのご命令を受けた。
任務について行かなくていいとか初めてじゃね？
なんて思いつつ、颯爽とかけ出すなのはさんを見送る。
後には俺と静寂だけが残された。
何という急展開。
さて。

「1人になると少し前の自分の行動を後悔する時ってあるよねー
調子乗ってました自分。
この沈んだ気分を晴らすにはどうしたらいいものか」

トボトボと、家への帰り道を歩き出した。

「……君が、稲荷くんだね？」

○●○●○●

「でな、基礎知識のない俺には理解出来ないことがあったり、そもそも説明自体が無いのに意味分からんまま砲撃受ける事もあるんだぜ。
もうトリガーハッピーだよなのはさんは。
何で一瞬でもフラグ立ったとか思っちゃったんだ俺は」

先ほど帰ろうとしていたところ、紫の髪のオッサンに呼び止められ話がしたいと言われた。
紫に最近縁があるようである。
悩んでいると、油揚げ系を奢ってくれるとか。
二つ返事でＯＫしました。
眠気？
首を落とされて眠いままでいられるか。
てかある意味二度と起きない眠りにつくところだったわ。
という訳で六課から少し離れた飯屋に直行。
色々と話していたら愚痴りタイムに突入した。
もちろん稲荷寿司を片手に。

「それはなんとも……そもそもにおいて知識を蓄えようとは思わないのかい？」

「睡眠学習なら大好きです」

「ふむ……無限の欲望と呼ばれた私と正反対の人物というのは、なかなかに興味深いね」

「どんだけエロイんだあんた」

「欲望のベクトルが違う気がするのだがね……
あぁ、そうだ。
それだけ頑丈な体を持っているのなら、１つ私の所で仕事をしてみないか？」

「働きたくないでござる。
絶対働きたくないでござる」

「おや、どうしてだい？」

「今なら胸を張って言える。
俺の夢は美人の嫁さんを貰って退廃的な生活を送ることだから」

「ハハハ！　断る理由も面白いね稲荷くんは！」

働いたら負けだと思っています。
訓練？
いいえあれは拷問です。
なのはさんとか他の人にアッ――――――！！　されていないときは基本グダグダなので。
使い魔いいよ使い魔。
合法ニート。
主人が優しければ。
その前提条件が俺には無いが。

「む？
すまない稲荷くん。
どうやらそろそろ時間のようだ。
面白い話を色々聞けたよ、ありがとう。

会計は済ませておく、ゆっくりしていくといい」

「むぉ、そうか。
オッサンもまたな」

「あぁ。
そうだ、もし気が変わって仕事を受ける気になったらここに連絡するといい」

そう言って俺に名刺を渡してきた。
日本語じゃなかった。
……何語？
読めん。
しばらく名刺を見つめていたが、いくら見てもミミズがのたうち回っているようにしか見えないので脇に置いた。

「サンキュー」

「クックック。
あぁ、君は本当に面白い。
では、また会おう」

俺が名刺を見て何の反応もしないと、オッサンは笑い出した。
意味が分からない。
とりあえず、おぅ、と返すと、オッサンは満足したのか店の出口へと向かっていった。
俺もその後、少し残った稲荷寿司を食べ終えて帰ることにした。

○●○●○●

「って事が昨日あってさ。
いやぁ、初対面なのに飯奢ってくれるとかいい人もいたものだね」

「お稲荷さん、私昨日、すぐ家に帰るように言ったよね？
というかその姿であまり1人で街中に出歩かないで欲しいんだけど」

「稲荷寿司の前では全ての障害が紙になる。
ごめんなさい」

何でも、昨日敵は撃退したものの、その後に俺の姿がないということでひと騒動あったらしい。
今日、六課に来たらすぐに隊長室に呼び出されて3人に説教されています。

「てか何で俺が居なかったこと知ってるの？
監視カメラ！？
まさか監視カメラがついてるのか！？」

「まぁ、何事も無かったようで一安心だよ」

流さないでよフェイトさん……！！
監視カメラがあるとか、夜の営みができないじゃないか……
ん？

「いや、まてよ……まさか今までの営みも既に……
オワタ。

時既に時間切れ」

「で、誰やったんやそのいい人は」

「傷心の俺を放置する心意気はないのか。
名前は聞いたけど横文字って覚えにくいよね。
車の名前だった気がするけど。
あ、私は無限に欲望があるとかエロイこと言ってた」

「あんたは誰でも2回以上会わんと名前覚えんやろ。
……ん？　無限の欲望？」

あ、そういや名刺貰ってたんだ。
八神に渡す。
てかそれ、文字だよね？

「あ、あ、あ、あ、あ、あんたこれ！！
ジェイル・スカリエッティって書いてあるやないか！？
しかもメルアドまで書いたる……」

「ジェイル・スカリエッティ！？」

なんぞ問題あるんかね。

「お稲荷さん……
ホテルの任務の時にはやてちゃんが言ってたの忘れたの？
ジェイル・スカリエッティは私達が追っている広域次元犯罪者だよ？
お稲荷さん風に言うとラスボス」

「俺の記憶が正しければ全てはシャマルのせいだったと思う」

「大いに間違ってるよ稲荷」

「しかも！　一緒に！　飯食うて来たやと！？
あんたはなんでそんなに私らの追う黒幕に簡単に出会えるんやぁぁ
あああ！！！」

何か俺と話すと叫んでばっかだね八神。
血管切れるよ？

「誰のせいや誰の……
はぁ、いいわもう。
フェイトちゃん、このアドレス一応確認しといてや。
後、なのはちゃん。
今後は出来る限りこいつと行動一緒にしてもらえん？
一緒におったらなんや簡単に見つけれそうやし」

「分かったよ、はやて」

「了解、はやてちゃん」

「えっ、俺のプライベートな時間は？」

「1人でいるよりも一緒に居たほうが楽しいよ！
今度からはお稲荷さんも任務にちゃんと連れて行ってあげるからねっ」

働きたくないでござる。
てかそれは絶対楽しくないでござる。
フェイトさんちのアルフさんとチェンジを要求する。

「だが断るなの」

「私も稲荷はちょっと……」

「何故私には言わない」

八神、てめぇはダメだ。

「なのは、はやて。
やっぱりこのアドレスはダミーだったみたいだよ」

「連絡してこいと言ってダミーとかスカさん酷過ぎる。
アドレス携帯に登録して今度会ったらこれをネタにゆすろう。
後フェイトさんの固有名詞に俺の名前が無いのは何故」

「その前に私らの前に連れてきぃや」

「フェイトちゃん、お稲荷さんの扱いが上手だね」

どうやら俺の扱いが酷くなるほど、周りからは上達したと思われるらしい。

……ん？　ということは。

「最近周りの反応が酷いのはまさかのなのはさんのせいか。
諸君、これを許せるか？　答えは否。
よろしい、ならば戦争だ。
昇華技　『神技「取り払われた秘境」』　の完成披露会といこうか」

その日、俺の右手に白が握られた瞬間。
訓練室に、最大級のピンクの光の矢が放たれた。

１１話（後書き）

気づいたらＰＶ数が２００００を突破してました。
ユニークも累計２０００超えました。
わーい。

念話って、アニメで見てると普通のセリフなのか思ってることなのか判別がつかないとです。
そしてきっと隣でやられたらシュール。

そしてスカさんってあんなに悪役キャラだったんですね。
ＳＳしか読んだことなかったからもっと軽いキャラだと思ってた次第。

という訳で１１話。
ご来場ありがとうございました。

12話（前書き）

首輪物語

12話

いつも通り午前中の訓練が終わり、チビッ子達は地面にへたりこんでいる。
俺もいつも通り、炭化して異臭を放ちながら地面に放置されていた。
あぁ、チビッ子達が心配してくれた頃が懐かしい。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了、お疲れ様！
でね、何気に今日の模擬戦が、第二段階クリアの見極めテストだったんですけど……
どうでした？」

「合格」

なのはさんの問いに、にこやかに答えるフェイトさん。

「マジで、やった」

「何言ってるの稲荷。
あなたは別」

「えっ」

「ま、こんだけみっちりやってて、問題あるなら大変だってこった」

だよなヴィータ。
やはりお前は俺の味方だ。

「ほら見ろやっぱり大丈夫じゃないか」

「問題が尻尾つけて歩いてるヤツが何をいってやがる」
敵だった。

「まぁ、お稲荷さんは置いといて。
みんなは良い線行ってると思うし、じゃ、これにて二段階終了！」

やったー、とチビッ子達は歓声をあげている。
デバイスリミッターも一段解除するらしい。
デバイスってなーに？
その場の全員が今まで見たことのない表情をしてこっちを見てきた。
どうやら聞いてはいけなかったことらしい。

「明日っからはセカンドモードを基本にして訓練していくからな」

「はい！
……え、明日？」

「あぁ、訓練再開は明日からだ」

「チビッ子達、よくやった。
そしてヴィータもいいこと言った。
久々に午後が平穏無事になる。
プライベートな時間が得られる。
遊びにいくのも一興」

「お稲荷さんは私と一緒だよ。
はやてちゃんに釘を刺されたの忘れた？」

「なのはさんの午後の予定は？」

「隊舎で待機だね」

「うぁあああありえぬぇぇぇぇえええ！！」

頭を抱えてその場をゴロゴロしだした俺は決して悪くない。

「あ、それとお稲荷さんにはプレゼントがあるんだ」

そう言って差し出してきた右手の品を名付けるなら、獣の首。
装備することで、なのはさんに対する隷属力がアップしそう。
何でも発信機的なものがついているから、どこにいても場所が分かるらしいが……

「どう見ても赤い首輪ですありがとうございました。」

こらチビッ子達、笑うな。

「さて、今日はみんなは街にでも出かけて、遊んでくるといいよ」

「はーい！！」

○●○●○●

「お稲荷さん、似合ってるよ」

「嬉しくないから」

結局装着することになった赤い首輪。
絞めつけられるのは嫌なので、ブカブカにしているのは最大限の譲歩。
そして今は街に繰り出すというチビッ子達のお見送り。

「ハンカチもったね？
ＩＤカード忘れてない？
あ、お小遣い足りてる？」

目の前には、お母さんでもそこまでするかね、といった感じのフェイトさん。
色々と心配されているエリオは、恥ずかしそうに大丈夫と応えている。
微笑ましい光景である。

「ごめんなさい、お待たせしました！」

「あぁ、キャロ。
いいね、可愛いよ」

「ありがとうございます！」

「はー……」

「ん？　……フフ」

「っ！」

フェイトさんの評価に喜んだ後、別段話している訳でもないのに見つめ合って互いに顔を赤くして笑いあうエリオとキャロ。
微笑ましい光景である。

「に、憎しみで人が殺せるなら……」

「こーら、どこから出したのその藁人形！」

「止めないでくれなのはさん！
俺は、俺はあの歳でリア充してるエリオに同性として天罰をくれてやらねばならんのだ！」

「エリオとキャロに手を出したら……」

フェイトさんの死神の鎌が俺の喉に添えられる。
非殺傷設定な筈なのにヘモグロビンが流れ出てる気がするのは気のせい。
微笑ましい光景である。

その後、ティアナとスバルもバイクで街に繰り出した。
免許持ってたのね、あいつら何歳よ。

「ところで稲荷、さっきの人形って何？」

「呪いの藁人形。
俺の居た所で大人気だったストレス発散法。
午前2時か3時くらいに顔写真を貼りつけて五寸釘で木に打ち付け

る。
相手は頭がおかしくなって死ぬ」

「じゃあスカリエッティの写真あげるからお願いしていい？」

「あんた腹黒いって言われねぇ？」

そもそも俺は今、対なのはさん用の髪が常に口の中に入ってくる呪いの製作中で忙しいんだ。
あの口の中に髪の毛がある時の違和感。
あれが常に襲ってきたら耐えられまい。

「なんでお稲荷さんはそっち方面ばっかり鍛えようとするのかな……」

「個人的には真剣に考えてます。
命がかかってますので」

「その努力で更に寿命を縮めてることを稲荷は理解するべきだと思うよ」

その発想は無かった。

○●○●○●

「あぁ、暇って素晴らしい。

今日1日、こんな感じで過ぎるとか至福の極み。
なのはさん、夕食は外食しない？
この感動を更に良くするためにリッチなものを食べたい。
その為のなのはさんの協力は必要不可欠」

「ハハハ、分かったよ。
じゃあ今日の仕事が終わったら一緒にご飯にいこっか！
……ん？　キャロから全体通信……」

「やな予感がマッハ」

空中に画面が出現する。
エリオとキャロと金髪幼女が映っていた。

『こちら、ライトニングフォー。
緊急事態につき、現場状況を報告します。
サードアベニューＦ２３の路地裏にて、レリックと思しきケースを発見。
ケースを持っていたらしい小さな女の子が1人……』

『女の子は、意識不明です』

『指示をお願いします！』

「放置で」

「……スバル、ティアナ。
ごめん、お休みは一旦中断」

『はい！』

『大丈夫です！』

俺の素晴らしい案は即座に却下されたようである。

「救急の手配はこっちでする。
2人はそのまま、ケースとその子を保護。
応急手当をしてあげて」

フェイトさんの指示に応えるエリオとキャロ。
じゃ、なんか慌ただしくなりそうだから俺は帰るね。

「……お稲荷さん、どこいくの？」

「油揚げの未来を探しに」

「却下」

ですよねー。

『全員、待機体制。
席を外してる子達は、配置に戻ってな！
ええか、安全確実に済ませるんやで！』

「任せろ。
俺の至福の時を壊したあの幼女には、安全確実に闇へ葬ろう」

『保護や保護、真逆の事をしてどないする。
後その言い方、厨二っぽいで』

「お稲荷さん、今回はおふざけは無しで行くよ」

「何度も言うけど俺はいつでも真剣だ。
そして八神には何かに触ると絶対に静電気が発生する呪い試作ｖｅｒをかけてやるからな」

『ちょ』

「ほらほら、バカやってないで私達も早く現場に行くよ」

なのはさんとフェイトさんに引きずられ、俺も現場に赴くことになった。
やはり俺には休日は訪れないようである。

「いや待てよ？
ポジティブに考えろ、俺。
今回の件はエリオという早過ぎるリア充に天が下した鉄槌ではないのか？
ということは、ヤツの行動は世界にも認められなかった。
むろん、モテない同士達からは反感を買う行為でしか無い。
つまり、世界とそこに生きる半数の人類の敵となったのだ。
それ即ち悪ではないか？
おぉ、俺はまさかの黒幕に気付いてしまった！
なのはさん、フェイトさん、至急キャロ達に連絡だ！！

犯人はこの中に居た！！」

「は、話の飛躍の仕方が神がかり過ぎてて分からないよ……」

「寝言は寝てから言おうか、稲荷」

迷推理がズタズタにされたのでアドレスを知っているヴァイスとスカさんにこのやるせない気持をメールで送ってみた。

『（，・ω・、）』

返事は無かった。

１２話（後書き）

見た目３１でレギュラーサイズのアイスを一口で一塊食べるスバルはヤバイ。
バニラ・チョコ・桃・ソーダは分かるけど一番上のは何だろう。
同じアイス好きとしては興味が尽きない。

そして書き溜めがなくなりました。
明日の投稿マニアウカナー

という訳で１２話。
ご来店ありがとうございました。

13話（前書き）

不幸電子郵便物

13話

こ、この金髪幼女のせいで、俺の平穏な休日が壊されたというのか……

「バイタルは安定してるわね……危険な反応もないし、心配ないわ。
でも稲荷さん、虚ろな目をしながら藁人形片手にフラフラと寄ってくるのやめてください。
あなたが唯一の心配事です。
どこのC級ホラー映画ですか」

「黙れシャマル。
それだからお前は何時まで経ってもシャマルなのだ」

「意味が分かりません！
というか私がシャマルなのは当たり前です！」

「ほら、休みならまたなのはがくれるから落ち着いて稲荷。
みんなもごめんね、お休みの最中だったのに……」

いえ！　と元気に応えるチビッ子達。
そこまで仕事が好きなのかと小一時間問い詰めたい気分である。

「ケースと女の子は、このままヘリで搬送するから。
みんなは、こっちで現場調査ね」

「はい！」

「稲荷さんは、この子をヘリまで抱いて行ってもらえますか？」

「へへへ……了解」

「やっぱりなのはちゃん、お願いできる？」

珍しくやる気を出したのに何故。

そして幼女のヘリへの護送は本当になのはさんが行い俺は下水の調査となった。

今は一刻も早くレリックを確保しなければならないんだとか。

少しでも人員を割くために俺も急遽下水調査班に回された。

でも俺が幼女から離された訳は最後まで分からなかった。

しかし、チビッ子達が向かってからしばらく経っているために現在1人である。

別段臭いとかそういった類のものは無いのだが、暗いトンネルに1人ってなかなかに怖いものだ。

「覚えてて良かった狐火。

幻術でしかまだ使えないが照明になるとは重畳。

しかしチビッ子達はどこへ行った。

なんちゃって地下のダンジョンに1人取り残されるとか死亡フラグ」

……お、何か広い空間に出た。

「しかし暗いし狭いし怖いから独り言が多くなってかなわん。

あ、中央に近代的宝箱発見。

中身は……デデーン！

稲荷は炎のクリスタルちっくな何かを手に入れた！

下水に捨ててあったものだし、貰ってもいいだろ。

一応持ち主が来たとき怒らないようにカモフラで似たようなのを変

化で作って入れておこう。
3日くらいで元に戻ると思うけど。
この辺りが小心者なんだろうなぁ……
っと、蓋は閉めておくか」

しかし何かね、このクリスタル。
赤いし、一番大きな結晶の周りに小さな結晶がくっつかず離れずで浮いてるし。
まぁいいや。
尻尾に収納しておこう。

「でもレリックって何なんだろ。
名前的に何か古い物な気がするけど。
一度見てみたいよーな、でも触れると火傷じゃ済まなさそーな……」

興味はあるが、俺のシックスセンスがアラートを鳴らすのでやめておく。
さて、5分は探し回ったしもう十分だろ。
後は地上に上がって、適当に時間潰してからなのはさんの所に行こう。
何か奥から爆発音もたまに聞こえるし……
厄介ごとに巻き込まれそうだから早々に脱出であります。

○●○●○●

久々に陽の光を見た。

と言っても１０分と経ってないけど。
いいんだよ、孤独は俺の体感時間を数十倍に引き伸ばしてくれるから。

「ん？」

見上げたビルの屋上付近には、先日道をロストしていた俺に進むべき方向を示してくれた紫幼女。
これは挨拶にいかねばなるまい。
以前ならばビルの中の階段を登らねばならなかったが今は違う。
パワーアップした稲荷様はジャンプするだけでビルの屋上へとひとっ飛び。
某忍空アニメの酉忍の藍眺はこういう気分だったに違いない。

そして屋上に着地するものの、紫幼女の姿は何故か無かった。
登っている間に、ダンゴムシもどきで俺とは逆方向に飛んでいったのだろうか。
いつもなら無視する所だが、どの道今は俺は地下にいる設定だ。
時間潰しには丁度いい。
見晴らしもいいし、埋まることも無いだろうからちょっくら力を入れて走りながら紫幼女の捜索を始めることにする。

十数回目の跳躍時だろうか。
何かに足を引っ掛けてビルから落ちそうになった。
同時に、ガッって声みたいなのが聞こえたけど気のせいかね。
でも辺りを見回しても、同じようなビル群の屋上ってだけで違いはない。
何に引っかかったんだろうと疑問に思い足元を探ってみた。
すると、なんということでしょう。
目には見えないのに、触れる事ができる何かがあるじゃありません

か。

「見えるのに触れられないではなく、触れられるのに見えないということから幽霊ではないと判断。
バーロー並の推理力が火を噴くぜ。
とりあえず……ペロッ。
こ、これは青酸カリ！」

な訳がないが、柔らかい何かがそこにある。

「う～む……
証拠がなさ過ぎる。
……ん？　これは？」

グルグル巻の包帯に包まれた、先ほどまでは無かった物。
ホラーを感じずにはいられない。

「だけどそっと封印を解いてみる……な!?
こ、これはまさか……レールガン？」

マガジンもリボルバーも無い、何か平らな部分がある銃を俺はレールガン以外知らない。
個人で扱えるようになってたんだね。
少し重いが、使えない事はない。
空に向けてみる。
カッコイイ。

「はーなーてー　こーころーにーきーざんーだーゆーめをー！」

ノリに任せて歌い出す。

トリガーを引いた。
極太のビーム砲がでた。
呆然とした。

「……またつまらぬものを撃ってしまったようだな」

「人の作戦無茶苦茶にして何を言ってるんですか」

突然声が聞こえた。
振り向く。
変態が居た。

「俺さ、眼鏡にいい思い出無いんだ。
具体的に言うと食堂で空気にされるから。
なのに眼鏡に青タイツに白マントってヤバイよ。
お前もう病院行けよ。
いやむしろ病院が来い」

「ひ、酷い言いようですわね。
ディエチちゃんもなんでこんなヤツに気絶させられちゃうんですかねぇ……」

DHCが何だって？

「ん？　その尻尾……
もしかしてあなたが、ドクターが言っていた稲荷さんですか？」

「違います」

「悲しがってましたわよ

メルアドまで教えたのに迷惑メールしか来ないって」

「違うと言っているだろうダラズ。
てかドクターって……スカさんか？
むしろアドレスが偽物だったことに俺のほうが深い悲しみを背負ったのだが」

「あれ、ドクター言ってませんでした？
そのアドレスは稲荷さんの携帯からしか連絡出来ないようになっているんですわよ」

「なん……だと……」

≪このメールが届いたあなたは、メールを送ってきた人を含めて13人に『ぬるぽ』というメールを送らないと3日後に死にます≫

そーしん。
ちゃくしん。

≪ぬるぽ≫

本当だ。

「てか私の所にも来たんですが……
ま、いいですわ。
暇が出来たら連絡してくださいね、ドクターが心待ちにしております。
さて、目的の1つは完了したみたいですし……
もう1つの方はもう無理でしょうから、私たちは早々にお暇させて頂きますわ」

そして青タイツは去っていった。
結局名乗らなかったが覚えられないので無問題。
なにやら焦っている風味でもあったが何故だろう。
あ、右手上空にフェイトさん発見。

「おーいフェイトさーん」

黄色い弾幕で撃ち抜かれました。

○●○●○●

「ごめん、稲荷だとは思わなくて」

「また誤射か。
１０円ハゲ出来たらマジで呪うぞ」

何でも高ランクな砲撃が空に向かって放たれたから、危険なヤツがいると思われたらしい。
とりあえず鎮圧して拘束、事情聴取の流れだったとか。
普通は説得が先じゃなかろうか。

「で、なのはさんは？」

「海上に現れたガジェットを殲滅して今帰還中。

別段危険は無さそうだったし、私はあの砲撃が見えたから先に戻ってきたんだ」

「おい待て。
あの砲撃俺が放ったなんて言ったらなのはさんの事だ。
紛らわしい行動するのは良くないよ？
というかお稲荷さん、今下水の調査なはずじゃなかった？
とか言って俺も殲滅の対象にされる。
是非とも事実の隠蔽を要求する」

「あ、私の言いたいこと、ちゃんと分かってるんだね」

「大丈夫、私の口からはなのはに言わないから」

「助かります」

……ん？

「じゃ、お稲荷さん。
ちょっとだけお話しよっか」

……何故いるし
アッ――――――――！！

「俺、今日悪いことしたっけ」

「うっせーよ、今気が立ってんだ！」

任務が終了したらしく、なのはさんにしっぽり砲撃を受けた後にチビッ子達やヴィータと合流した。
だが何か空気がピリピリしている。

「そういえばお稲荷さん、何であんな砲撃したの？
結構危険な攻撃だよあれ」

「面倒だから3行で説明しよう。
・透明な何かを発見。
・足元に超電磁砲が出現。
・よろしい、ならば砲撃だ。」

「なるほど、全然分からないよ稲荷」

「考えるな、感じろ。
しかしこの空気は耐え難い。
キャロ、何があった？」

「えっと、レリックを見つけて確保したのはいいんですが……
わざわざ一工夫加えて取られないように中身を箱から出して私が保管してたのに、それ自体が偽物で……
後、犯人らしき人物も捕まえたんですが、その人の仲間がまるでプールから出てくるみたいにこう……じゃぽんって地面から現れて、逃げられてしまいまして」

そーいう夢を見たのか？

「じゃあ何か、そいつは地面をまるでプールで泳ぐかのように移動できると。
どこの未来的青狸だよ。

そのひみつ道具の名前忘れちまったよ」

「ドラえ……」

なのはさんは知っているようである。

未来的青狸。

「まぁ、でも今日はとりあえず、女の子とレリックの1つは回収できたからよしとしよう？

さ、帰って報告書だよ」

「俺は残りの休日を謳歌するわ」

「お稲荷さんも報告書、今日中にちゃんと提出してね」

「なーぜー」

「今回は緊急事態で一緒に居られなかったから、何をしていたか知る必要があるの。

というか、何気に重要な事やってそうだし」

「俺の休日は？」

「明日からは訓練再開だよ！」

目の前が　真っ暗になった。

「フンフンフ～ン」

「お稲荷さん、ご機嫌だね？」

「あぁ、綺麗な拾い物してさ。
形が何となく花にも似てるから、鉢植えに植えてデスクに飾ろうと思って」

「へぇ、どんなものなの？」

「これ。
命名するなら、炎のクリスタル花。
いやぁ、みんなしっかりした机なのに俺だけみかん箱って寂しかったから。
これでようやく、文字通り華ができたよ。
てか俺とみんなの机の格差、おかしくね？」

「……これ、どうしたの？」

「この間の任務の時に、下水ダンジョンの大広間っぽいとこの宝箱に入ってた。
捨ててあるんだから大丈夫だろうと思ったけど、ちょっと怖かったから変化で似たような物を入れて元通りにしておいたけどね」

「……うん、やっぱりお稲荷さんからは目を離さない方がいいみた

いだね。
私達がどれだけの量の報告書を書いたと思ってるのかな。
ちょっと訓練室行こうか……」

「え、ちょ、ま、なんで！？」

その日、スターズ隊とライトニング隊　ｖｓ　俺　が行われた。
後、俺の力作の炎のクリスタル花も没収された。
本気で泣いた。

１３話（後書き）

スランプじゃー
戦闘描写が苦手なのでしない方向に走ったらこうなった。
シリアスを書いた時よりしっくりこない。

でも投下。
多分不人気。
今後に期待。

ＰＶ数とユニーク数が素晴らしいことになっていました。
いくつか忘れましたがありがとう、ありがとう。

という訳で１３話。
ネタが無いので普通にありがとうございました。

１４話（前書き）

狐と幼女の奇行文。

１４話

「お稲荷さん、教会に行くよ！」

「あ、宗教の勧誘はちょっと……」

と思ったが違うらしい。

この間の金髪幼女が聖王教会なる所に預けられているから、見に行くんだとか。

それは是非ともご一緒したい。

俺の休日が完膚なきまでに破壊されたからな。

幼女だから優しく鼻に細めたティッシュを突っ込みの刑１０分間で我慢してやろう。

「まーたよからぬことを考えてるでしょ？」

「俺の熱きパトスは誰にも止められない」

「ならば止めずに切り捨てればよかろう」

シグナム　が　あらわれた。

稲荷　は　にげだした。

……しかしまわりこまれてしまった。

「とりあえず動き回られると面倒なので縛ってみた。どうだなのは？」

「いいね。

じゃあ車に積みこんでおいて下さい」

「あぁ、分かった」

「もはや人扱いすらされなくなった件」

蓑虫状態のまま車まで運ばれる。
本当にこのまま積み込まれるようだ。

「ん？　この車って2人乗りなのか？」

「あぁ、テスタロッサから借りたものだからな。
大勢で移動するための車ではない」

「サイドウィンドウが前と後ろ2枚ずつちゃんとあるセダンチックな車で2人乗りとかイミフ。
てかそれなら1人余るじゃないか。
展開が予想できたから俺やっぱり行くのやめていい？」

何を言っている、という視線を向けられた。
どうやら俺の想像通りらしい。
トランクの扉の封印が今、解き放たれた。

「広いぞ」

嬉しくないっす。

○●○●○●

「暗い、狭い、揺れる、酔う。
前から何か話聞こえるけどうるさくて内容が分からん」

てか本当に気持ち悪いから。
今ここに今朝食べたものをもんじゃ焼きにできるから。
感電死フラグだからしないけど。
体感時間アバウト1時間程耐え抜いたら停車した。
ドアの音も聞こえたから着いたようだ。
俺、頑張った。
ここに来て初めて優しい光に包まれる。

「お稲荷さん着いたよ。
……顔青いよ？」

「トランクの車酔いは異常。
後10分救出が遅かったらもんじゃ焼き作ってた。
だめだ、酔い覚ましに散歩してくる」

「あ、うん。
私達、ちょっと行方不明のあの子を探してくるから。
しばらくしたらまた連絡するね」

行方不明？
まぁいいや、気持ち悪くてそこまで気をまわしてる余裕はない。
はいはい、とその場を後にする。
しかしあれだね。
教会って屋根に十字架あって、大広間しかない結婚式場みたいな場所を想像してたのに全然違うね。

普通の金持ちのお屋敷みたい。
いや、金持ちのお屋敷、見たことないけどさ。

なんて取り留めのないことを考えてたら四方を建物に囲まれた場所にでた。
いわゆる中庭である。
ここにベンチ的なものがあったら最高だったのだが、生憎なさそうだ。
代わりになるものはないかと辺りを見回す。

「……」

金髪幼女が居た。
赤と緑のオッドアイとは珍しい。
思わず凝視する。

「……」

幼女も黙って見返してきた。

「……」

「……」

……。

「あ、ここにいたんだ。
お稲荷さんが見つけてくれたの？
ありが……何やってるの？」

「話しかけるな、今俺とヤツは目に見えぬ戦いを繰り広げている。
目を先に逸らした方が負けだ。
この勝負、負けるわけにはいかぬ……！！」

「意味分かんないよ……」

そう言うとなのはさんが俺と幼女の間に割って入った。
第三者の介入というのはいただけないが、今回はドローということ
にしておいてやる。

「初めまして、高町なのはって言います。
お名前、言える？」

「ヴィヴィオ……」

「ほう、ヴィヴィオか。
俺は稲荷だ。
いずれお前の鼻をクラッシュさせる人物とだけ言っておこう」

「お稲荷さんの事は放っておいていいからね。
ヴィヴィオか、いいね、可愛い名前だ。
ヴィヴィオ、どこか行きたかった？」

「……ママ、いないの？」

「パパの不遇さに全俺が泣いた」

そっか。となのはさんが呟く。

「それは大変。
じゃあ、一緒に探そうか」

「……うん」

なのはさんと話していた幼女は、目に涙を湛えながらも納得したようである。
子どもは分からないね。

「なぁ幼女よ。
お前さん、パパは探さなくていいのか？」

「……パパ？」

「うむ。
パパにももう少しスポットライトを当ててやらないと、客観的に見てる俺が切なすぎる」

「……狐パパ」

何故目の前のもので代用しようとするし。

「パパはやめれ。
そうさね、特別にお兄様と呼ぶことを許可してやろう」

「狐パパ」

「無視すんなや」

○●○●○●

なのはさんは用事があるらしく、俺にヴィヴィオの面倒を頼んでいったのだが。
何かめっさ懐かれました。
どこに行こうにもついてくる。
親鳥の後ろをついてくるヒナってこういう感じなのかね。
しかし、だ。

「すまん、俺は行かねばならんのだ。
頼むからここで待っててくれ」

「やだあぁぁぁあああ！！
狐パパやだぁぁあああ！！」

「パパ言うな。
分かってくれヴィヴィオ。
俺はもう限界なんだ」

「やだあぁぁぁあああ！！」

「そんな事言っても、俺の膀胱はもう破裂寸前」

このヴィヴィ子ったらトイレの中にまでついてこようとするんですよ奥さん。
やーねー。
でも例え幼女と言われようと俺の息子を見られたら羞恥で死ねる。
これなーに？　とか言われたら狂ってなのはさんの部屋に全裸で突入してしまうやもしれん。
あかん、思考がまとまらなくなってきた。

「稲荷さん！
なのはさんに言われてヴィヴィオさんの面倒を見に来ました！」

突如聞こえる神の声。
振り向くとエリオを初めとしたチビッ子達がいるではないか。

「頼むエリオ。
俺はもう発射5秒前の位置まできている。
ヴィヴィオっ……すまないっ、さらばだ……！！」

「パパァァァアアアア！！」

「危なかった。
あと少しで暴発するところだった。
ヴィヴィオ、恐ろしい子ッ！
後パパ言うな」

「パパァァアアア！！　くさい」

「トイレから出てきた人に対して何その言い草」

おらチビッ子達、何を笑っている。

「さて、狐パパが固有名詞になりそうだからちゃんと覚えさせないとな。
ほら、俺は稲荷だよ。
言ってみな？」

「い……なり？」

「そうそう。
で、こっちがツンデレとリア充」

「誰がツンデレよ誰が」

「リア充？」

ツンデレとはティアナの為にある言葉である。
しかしエリオもそうだが、ヴィヴィオもよく分かっていないようだな。
ともかく俺の名前を覚えさせればそれでいいだろう。

「じゃ、俺の名前もう一度言ってみようか」

「狐パパ」

「頭かち割ったろか」

チビッ子達からなだめられる。

「はぁ、じゃあ次だ。
ヴィヴィオ、さっき中庭で会った女の人を覚えてるか？」

「……うん」

「あの人は魔王だ。
ほら、続けて」

「まおー？」

「あぁ、魔王だ。
トリガーハッピーでもいいが、ヴィヴィオには難しいだろうから魔王で……はっ殺気！」

振り向く。

「ヴィヴィオ、ただいま！　いい子にしてた？」

「うん」

「ありがとね。　エリオ、キャロ」

「いつもの事だがフェイトさんの感謝の欄に俺の名前が無い件。
めっちゃ頑張ったのに。

まぁ途中から記憶無いが。
てかティアナとスバルはどこ行った」

「稲荷さんが伸びている間に帰りましたよ？」

血も涙もないヤツらである。

「もういいや、俺も帰ろ。
ヴィヴィオはどうするんだ？」

「もちろん連れて帰るよ。
その為に今日は来たんだし」

「行きはシグナムが運転してたから、帰りは私が送って行くね。
シグナム、ここに泊まるらしいし」

ふうん。
まぁいいけど。

「帰りはもっと特等席がいいでござる」

「えっ、荷台嫌なの？
稲荷の大きさでも余裕のあるスペースなのに」

「根本的に間違っていることに誰か気付いてくれ。
てか酔うからやだ」

「仕方ないね、分かった。
稲荷だけ特別だよ？」

マジで、やった！
……そう思っていたのに。

「何故に俺は車の屋根に縛り付けられてるんでせう？」

「ここはいいよ。
風も感じられるし、景色もいいし。
稲荷なら落ちても大丈夫だろうから特別ね」

くっ、特別ってそういう意味だったのか！
逃げてやる、俺は歩いて帰るぞ！

「じゃ、夜だから車もないだろうし飛ばすよー！」

俺は風になった。

「時になのはさん、見送りに来ていた紫短髪の方はどなた？
てかまた紫か」

「彼女はシャッハ・ヌエラって言うんだ。
聖王教会所属のシスターをやってるんだよ。

凄くトンファー使いが上手いんだ」

「マジでマジで!?
じゃあさ、トンファー置きっぱなし式ブレーンバスターとか、思い出のトンファーとか出来るのか!?」

「え、えと、よく分からないけど多分できるんじゃない……かな?」

「ＡＡをリアルにやってる人を初めて見た。
俺、これからあの人のことを師匠って呼ぶ」

「な、何か果てしなく間違った認識を植えた気がするの……」

１４話（後書き）

凄いトイレに行きたい時に書いた文。
最後のはいらないけど筆者のトンファーに火がついたので付け足し。
よく分からない人は『思い出のトンファー』でググるべし。

ＳＳでは結構最初から喋ってたけど、アニメじゃ
やだぁあぁぁあぁぁあ　と
わぁぁぁあぁぁあぁん　と
うん　しか喋ってない。
イメージとかけ離れていくとです。

そんな訳で１４話。
有難う御座いました。

どっかこの辺の話（前書き）

一旦封印処理して訂正しようと思ったのですが、削除しないでっていう文が出てきたのでしばらく訂正前の原文で置いておきます。

陸戦魔導師なはずのフォワード陣が飛びます。
飛びます、飛びます。
それを訂正したかったのに、おのれにじファン。
という訳で、その部分はスルーして下さい。
いずれ直します。

どっかこの辺の話

「先日、存在が確認されたロストロギアが、レリックの可能性があるということで六課が回収を担当することになりました。
よって、早速現地へ赴き回収作業に入ります。
場所は第９７管理外世界。
スターズ・ライトニングの両隊はすぐに準備をしてくること」

「はい！」

「ヴィヴィオも、今日は六課の方に任せられる人が居ないから私達について来てね。
現地で私の知り合いが預かってくれるから」

「うん！」

「お稲荷さんもいい？」

「第９７管理外世界か……また厄介な場所に行くことになるな。
分かった。
俺も準備をしてこよう」

今日も今日とて訓練開始かと思いきや、集合をかけられ新たな任務があると言い渡された。
俺はチビッ子達の隊に入ってはいないものの、話の流れ上行くことは確定しているらしい。
拒否権がそろそろ本格的に欲しくなってきた。
チビッ子達は、なのはさんの号令後すぐに任務の準備に取り掛かる。
俺も重い腰をあげようと思ったが、その前に聞く。

「ところでなのはさん」
「どうしたの？」
「第９７管理外世界って、何だ」

全員準備が完了したらしい。
何でも泊まりの任務らしく、みんな鞄にお泊り用具を入れてきたとか。
修学旅行に行く前の集合場所に居るときのようだ。
因みに俺には泊まりの連絡が回ってこなかったので、着替えてきただけ。
どうしよう。
「じゃあ、みんな準備できたかな？」
「あの……なのはさん」
「どうしたのティアナ？」
「こいつも連れていくんですか？」
名前で呼んで。

「うん、私の使い魔だもん！
連れて行くよ」

「……この姿で騒ぎになりませんかね」

「大丈夫、対策はあるから！」

そう言って、なのはさんは自分の荷物の中から何かを取り出した。
リュックと紙袋である。

「リュックは分かるけどこの紙袋は何でしょうかなのはさん。
凄いピンクでアニメ絵が書いてあるんですが。
そして俺の尻尾がアラートを鳴らしまくっているので出来ればお留守番していたい」

「文句言わずにお稲荷さんも来る！
お稲荷さんは目的地に着いたら、このリュックを担いで紙袋下げて移動してね。
そのままだと本当に騒ぎになっちゃうから」

「つまり、オタクスタイルに変装し、俺のこの姿はコスプレしてますよアピールをしろ……と？」

「流石、よく分かってるね！
あ、因みにその格好でいるときは私達の５０～１００ｍ後ろを歩いてね」

あまりの理不尽さに涙が止まらなかった。

○●○●○●

俺達は今、六課から第９７管理外世界とやらに着いた先の湖畔で休息している。
因みに第９７管理外世界とは地球の事なんだとか。
最初からそう言えよ。
そして、この静かな湖畔にマッチしたコテージが今日の俺達の宿舎になるんだとか。
加えてこの場所は、現地協力者のおかげで準備できたとか。
実はその協力者はなのはさんの知り合いなんだとか。
色々な情報が飛び交ったが、右手から発せられている禍々しいオーラをもつピンクの紙袋が気になり過ぎて、右から左に聞き流している。

「これって任務というより罰ゲームじゃなかろうか」

「あ、お稲荷さん。
５０ｍは離れてって言ったでしょ？」

「泣くぞフォルァ」

少しでも気晴らしをしたいのでみんなから離れて幻覚の狐火で紙袋を放火してみる。
燃え上がった。
けれど炎の中に無傷で佇む紙袋を見ていると、なんだか呪いの装備に見えてきた。

知ってはいけない一面を知ってしまったようである。

「あ！　あんたが稲荷？
……何やってんの？」

燃え上がる紙袋を見つめていると突然声をかけられた。
振り返ると、見た目なのはさんと同い年くらいの、金髪で気の強そうな子がいるではないか。

「なのはさんが用意した呪いの装備を処理したいのだが方法が分からない。
で、どちらさん？」

「噂に違わずよく分からない事言うわね。
私はアリサ。
アリサ・バニングス。
なのはの親友よ。
あんたの事はなのはから色々聞いてるわ。
まぁ、短い間だけどよろしくね」

「よろしく、稲荷です。
親友ならもう少しなのはさんの暴走を押さえて。
俺の命が毎日すり減ってるから。
とりあえずこの紙袋をあげようか」

「うわ、あんたそんなもの持つ趣味ある訳？」

俺の精神力はもうそろそろ底をつく。

「あ、お稲荷さんここにいたんだ。

任務の説明に移るから集合してね。
ヴィヴィオはアリサちゃんに任せたから」

「いいよ、俺が動くとこの紙袋ももれなくついてくるから。
もうこの地域歩けなくなるから。
この素晴らしいコテージで食っちゃ寝してるので行ってらっしゃい」

「ママー、あれなにー？」

「こら、指さしちゃいけません！」

結局問答無用で連れて行かれました。
着いてほとんど時間は経っていないが、早速捜索を開始するんだとか。
何でも対象が移動してるから歩きまわって見つけないとなんだそうだ。
で、探し始めたのだが。
俺の精神力は先ほど臨界点を迎えました。
ヤンデレな顔で笑いながら泣いてフラフラとみんなの約５０m後ろをついていっています。

「狐だー！」

「おい狐、こっち向けー！」

「わ、本当にこっち向いたぞ！」

「こ、怖いよー！」

「ママー！」

「わーん！」

「……騒ぎを抑えようとした対策なのに何でお稲荷さんは騒ぎを起こすかな」

どう見ても俺は悪くないだろう。

「しょうがないなぁ……

あ、そういえばさっき依頼主から連絡があったんだ。

私達が探してるロストロギアには危険性がないから、焦って回収する必要は無いみたい。

だから、みんなちょっと寄り道しちゃおっか」

何でも、近くに喫茶『翠屋』なる店があるのだとか。

しかもそれは、なのはさんの両親が営んでいる店なんだとか。

遠くで楽しそうに話しているなのはさんの話を聞き取った感じそんな内容の事を話していた。

丁度いい。

こんな娘に育てた両親の顔を拝んでおくとするか。

「お稲荷さん、ちゃんとついて来てね。

あ、でも近づき過ぎないでね」

「でも、あいつが後ろからあんな表情でついてくるのもホラーね」

「ティア、私、怖い」

「フリードも鞄の中で怖がってます……」

「稲荷さん……辛いのは分かりますが、出来ればもう少し離れてください」

お前らに慈悲という言葉はないのか。

「みんな楽しそうだなー賑やかだなー
何で俺の周りだけこんなに木枯らしが吹くんだろう。
あ、みんな店に入った。
なのはさーん！
そこが翠屋って店！？」

叫ばないと声がもう届かない寂しさ。

「そうだよ！
あ、でもお稲荷さんはちょっと待っててね！」

なんでさ。
でも言われるままに、みんなが入っていった店先でなのはさんを待つことに。
数分後、何かを抱えたなのはさんが再登場。
その手には、ダンボール。

「うちってペット入店禁止なんだ。
でも地面に座らせるのは可哀想だから、はい！」

「はいって……これ、ダンボール」

「じゃあ、もう少し待っててね！」

ただ呆然と、店の中に入るなのはさんを見送る。

残された俺とダンボール。

そして紙袋。

仕方なく、入り口の横にダンボールを置いて、その中に体操座りしてみる。

ふむ、なるほど。

切ない。

中でシュークリームを美味しそうに頬張るチビッ子達を見ていると、心が張り裂けそうだった。

○●○●○●

あの後、再び探索を開始したものの、日が落ちる現在に至るまで有益な情報を得ずに終わったようだ。

もっとも、俺はただ後ろをついてまわっただけなので毛程の役にも立っていないのだが。

そして翠屋から湖畔のコテージに戻ると、その周辺でバーベキューの準備をする人影が。

よくよく見てみると、フェイトさんと八神、アリサと……紫の髪。

新キャラがまた増えているではないか。

「あら、なのは達もう帰ってきたの？」

「うん、ヴィヴィオの面倒見てくれてありがとうね、アリサちゃん。
これお土産！
ヴィヴィオにも食べさせてあげて」

「いいわよ。
……てかあんたはどうしたのよ、目が真っ赤よ」

「体中の水分を目から垂れ流した。
もう出るものも出ない。
で、あの紫の髪は誰だ」

「泣き腫らした訳ね。
あの子は月村すずかって言って、私となのはの親友よ」

「そうか。
またなのはさん絡みか。
興味なし。
それじゃ」

「ちょ、お稲荷さんどこいくの！？」

旅に出ます。
探さないでください。

「これからご飯だよ？」

「一日中後ろ指さされてみろ。
ご飯なんて喉を通らなくなるから。

という訳で散歩してくる」

なのはさんは渋ってはいたものの、騒ぎを起こさないのと遠くに行き過ぎない事を条件に許可してくれた。
昼の騒ぎの原因はなのはさんではないかと思うのは俺だけだろうか。
しかし既に日が落ちた湖畔を歩くのも、風情があっていいものである。
しばらく行くと、茂みがガサガサと動いた。
今この周辺は俺以外誰もおらずとても静かなので、聞き間違いという事は絶対にない。
これはアレか。
プラズマか。

「大槻教授もビックリだな。
出てきてみろ。
あまつさえ俺に取り憑こうとしてみろ。
即座に湖にダイヴしてやるからな」

ピョン、と草むらから何かが飛び出る。
ここで何故だか無性に夜間水泳をしたくなって湖に入った俺だったが、飛び出てきた物を見てそんな事をしている場合じゃないと一旦湖から上がる。
草むらから飛び出てきた物。
それはスライムだった。
丸い目に、人を小馬鹿にしたような笑い方が印象的である。

「こんなにドラクエ風味なスライムが地球にいたとは。
お前はスラリンか？
それともスタスタか。
まさかのゆうぼう……」

プルプルと震える事しかしないので判断に困る。
勝手にスラリンとしておく。
情けない顔だが、その分俺の心を和ませる。
これは癒し系グッズとしてゲットしておくべき物ではないだろうか。
思わず脇に抱えてしまった俺は悪くない。
さて、今日の愚痴をスラリンに聞いてもらおうか。
そういやさっき探索してる時、近くに臨海公園があったな。
スラリンを引き連れ、早速向かうことにした。

「でな、あの紙袋のせいで俺は恐らくこの辺に類を見ない変態という名の紳士になったと思うんだ」

プルプル。

「ふむ、スラリンもそう思うか。
やはりなのはさんが原因だよな」

プルプル。

「あぁ。
その内なのはさんに一矢報いてやるよ」

プルプル。

何を話してもプルプルなので、勝手にスラリンの言葉を妄想して愚痴ってみる。
端から見たら頭のおかしい人に見えるだろう。
３０分程愚痴って冷静になった後に、客観的に自分を分析すると俺もそう思った。
こういう人がいるから夜の公園は危ないんだね。
１つ学習した。

「稲荷さん！」

突然響き渡る声。
見上げると、竜に乗るキャロと空に浮かんでいるその他３名。
なのはさんはいない。

「どうした？
後、キャロも竜に乗っててても、立ち乗りでその位置から話しかけられるとスカートの中が丸見えだから。
スカートやめるか座ろうな。
因みにエリオ、キャロは白だぜ」

「え？
……え！？　本当ですか！？」

「エリオくん、何食いついてるの……？」

「あ、ゴメン……」

で、結局なんぞ？

「ティアナ、状況報告を頼む」

「ロストロギア反応有り。
現場に直行。
あんたがロストロギアに話しかけていた。
危険物と危険人物が一緒になっていると判断。
どちらも撃墜・封印するため今全員が戦闘準備完了。
さぁ、攻撃するわよ。
今ここ。
分かった？」

分かりたくないでござる。

「てかスラリン、お前ロストロなんたらだったのか……？
信じていたのに、裏切ったんだな！？」

プルプル。

「クッ！
これは罠だ！
スラリンが俺を陥れる為に仕組んだ罠だ！」

「クロスファイアー……シュート！」

「グハッ。
松田ァァア！
誰を撃っている！！」

「誰が松田よ誰が」

あ、ちょ、ゴメンティアナさん、自分調子乗ってましたヤメテイタイイタイ。

「ティア、封印するよ！」

「えぇ、こいつに構ってる場合じゃないわね。
エリオとキャロも準備いい！？」

「はい！」

「いけます！」

４人のコンビネーションにより、ボコボコにされた後に光の奔流に飲まれ消えていくスラリン。
普通ならここでよくもスラリンを、というパワーアップフラグなのですが。
どう考えても今さっきのはスラリンのせいということで。
同情の余地無し。

「さて、封印も無事終了。
後はなのはさんに連絡を入れて任務完了ね」

「あ、ティアナ。
俺はこの場に居なかったことにしておいてね」

「ゴメン、言うのが遅かったわ。
今こっちに全力で向かってきてるらしいから諦めなさい」

わーい。

「狐パパー！
……焦げ臭い」

「そろそろ敵からの攻撃を受けたくなってきた。
味方からの攻撃テラツヨス。
むしろなのはさんの砲撃が容赦ない」

「お稲荷さんが悪いんだよ！」

身に覚えがないにも程がある。

「でも、無事ロストロギアを封印・回収できたね。
みんなお疲れ様。
申し訳ないけど、回収が完了しちゃった以上長居は出来ないから。
今日はこのまま休んで、明日の朝一で六課に帰還するよ」

チビッ子達が威勢よく、はい！　と応える。
なるほど、なるほど。

「つまり今回も俺はなのはさんからの砲撃を受けるためだけに地球に来たと。
慰謝料を要求する」

「なのはママ、狐パパをあんまりいじめちゃダメだよ？」

「ヴィヴィオー！
お前は俺の心のオアシスだー！」
「焦げ臭いから近寄らないでー！」
真っ白に、燃え尽きた。

「じゃあいくぞヴィヴィオ」
「はーい！」
「そんな装備で大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題ない」
「足止めをお願い！」
「足止めはいいが、別に倒してしまっても構わんのだろう？」

「こういう時、どうすればいいか分からない」

「笑えばいいと思うよ」

「お稲荷さん、何やってるの？」

「ヴィヴィオを教育してる。
いつか必要になる時が来るはずだ」

「地球から帰ってきた早々変なことしないでよ……
それはそうとお稲荷さん、今日の訓練行くよ？」

「嫌でござるー！」

「働きたくないでござるー！」

「あはは、ヴィヴィオに変なことを教えた罰として今日は5割増しで行こうか」

「ナンテコッタイ」

「こったーい！」

どっかこの辺の話（後書き）

サウンドステージ結局聞かず。
海鳴・翠屋・湖畔のコテージ・対象はスライムくらいの情報で妄想しました。
何でここにヴィヴィオがいるのか。
それは筆者にも永遠の謎です。
何でおかわりで、あのセリフを書いてしまったのか。
そして六課とつるむとやっぱり稲荷はこうなってしまう。
何故だろう。

綺麗なヴィヴィオ。
書いてて懐かしくなりました。
ヴィヴィオも成長しているんですね。

ホラーでよく、燃やしても燃えない人形ってありますね。
怖いですね。
筆者の目の前で起こったら、知人の大学の核実験の中に放り込みます。
それでも無事だったら、なのはさんにも勝てるレベル。

という訳で、どっかこの辺の話です。
因みに筆者は明日から４日間、家に帰れません。
どっか遠くに拉致られます。
ウボァー。

15話（前書き）

狂幻稲荷奇行文。

15話

「はい、じゃあ復習だ。
あの赤い髪の子はなんて言う？」

「りあじゅー！」

「よし、じゃあオレンジの髪のあの人は？」

「つんでれー！」

「じゃあお兄さんの名前は？」

「狐パパー！」

「もう……ゴールしてもいいよね……」

この金髪幼女、俺の事を絶対稲荷と呼ばない。
朝起きてから朝練の為に訓練室に来る今まで言い聞かせてきたが、
リア充とツンデレは覚えて何故俺の名前は覚えてくれない。

「お稲荷さん、ヴィヴィオに何を教えているのかな……」

「人の名前はしっかり覚えるように教育中」

「まおー！」

「あ、こら、ばか」

「お稲荷さん、ちょっとこっち来ようか」

今日の第一射が確定しました。

俺がブスブスと煙を上げている頃。

スバルと、同じ青い腰まで括った長い髪を持った女性が空から降りてきた。

ギンガというらしい。

スバルの姉さんなんだとか。

なのはさんを初めとする、フェイトさんとシグナムさん、ヴィータの隊長陣がチビッ子達＋αの前に立って何かを話している。

そしてヴィヴィオ、木の棒で俺を突付くな。

「じゃあ今日は折角だから、ギンガも入れたチーム戦、やってみようか。

フォアードチーム5人対、前線隊長4人チーム。

対、お稲荷さん」

「……えぇ？」

何だって。

「いや、あのねギン姉、これ時々やるの。

稲荷さんが敵になるのは初めてだけど」

「隊長達、かなり本気で潰しに来ますので……」

「まずは、地形や幻術を駆使して何とか逃げまわって」

「どんな手を使ってでも決まった攻撃を入れることが出来れば撃墜になります」

スバルの言葉を、ティアナ、エリオ、キャロが引き継ぐ。

「てか驚く場所そこじゃないよね。
どんな手段を使ったとしても5対4対1とかスマブラでも格好の的になるのは確定的に明らか。
はっ、よく考えたらヴィヴィオを盾にすることで誰も俺に攻撃することが出来ないじゃないか。
どんな手段でもOKなんだから即ちこれ合法。
さぁ、ヴィヴィオ。
パパの胸に飛び込んでおいで」

「じゃあ、やってみようか！
あ、ヴィヴィオは危ないから向こうで見学しててね」

「うん！」

俺のイージスの盾はもろくも形成前に砕け散ったようである。

○●○●○●

「狐パパ、何してるの？」

「あの戦火の中に飛び込むとか夏の虫でもしないので見物中」

訓練が始まってすぐにフォアードチームと隊長チームが空に飛び立った。

俺はそんな彼女らを見送ってから、いそいそと逃げ出した次第。

もちろん、頭に草と手に木の棒でカモフラも欠かしてません。

「私は木、私は木、私は木、私は木……」

お稲荷さんはどこ行ったの!?　というなのはさんの声が聴こえるが幻聴。

上空では既に戦争が勃発している。

先ほど崩落したイージスの盾が隣にいると言っても怖いものである。

「はっ。

幻術というのでティンと来てしまった。

幸いな事にヴィータは結構1人で突っ込んでいる事が多いようだ……

何やってもいいって言われてるし、やってみるか」

ヴィータが次にチビッ子達に突撃し、他の隊長陣の視線から外れる……今！

「ハッハッハ！

てめぇらは俺の罠にかかった。

後はやられるのを待つだけだぜ？」

「な、貴様は稲荷！
どこから現れた！！
お前が通ってきた場所に居たヴィータはどうした！！」

「ヴィータか？
クックック。
ヴィータなら一番最初に沈んでもらったよ。
笑っちまうくらい雑魚だったぜ。
次はシグナムさん、あんただ」

「なっ！？
貴様、我らを愚弄するか！！」

「稲荷、いくらなんでもそれは言い過ぎだよ」

「お稲荷さん、どうしちゃったの？」

「俺は気づいたんだよ、俺の中に眠る本当の力にな……！！
フェイトさんもなのはさんもまとめてやってやるよ。
昨日までの俺とはひと味もふた味も違うところ、見せてやる！！」

うわぁ、痛い、痛すぎる。
上空で舌戦を繰り広げる稲荷と隊長陣を眺める俺とヴィヴィオ。
厨二ってやーねー。
俺の中に眠る力って何よ。

「狐パパ、ここにいるのに何であそこにいるの？」

「ん？
ヴィータに幻術かけて、周りにはヴィータが俺に見えるようにしてみた。
因みに本人には幻術がかかったことが分からないので混乱の極み。
後パパじゃねぇ」

先程の会話の内容、幻術をかけた本人である俺には聞こえるのだがヴィータは実際こう言っている。

「ちっ、あいつらも結構やりやがるぜ」

「ヴィータはどうした！！」

「は？　あたしはここにいるじゃないか」

「愚弄するか！」

「いやだから意味分かんねーから」

「それは言い過ぎ」

「どうしちゃったの？」

「あたしは稲荷じゃないし、分からねー事を分からねーって言って言い過ぎって……」

大体こんな感じ。
今まさに隊長陣同士での戦いが始まろうとしている。
その緊迫した空気をフォアードチームは好機と見たのか、突っ込む。
乱戦になる。

聞こえる爆発音。
響く厨二発言。

「ヴィヴィオ。
俺戦ってないのにダメージ受けてるのなんでだろ。
自分の姿になるようにしただけで、厨二発言に関しては全く知らないのだが。
しかし自分の姿したやつがハッスルするとこんなに心が痛むモノなんだね」

「狐パパ？」

「あぁ、何でもないよ。
パパでもないよ。
そうだ、ポジティブに行こう。
以前もそうして乗り切ったじゃないか。
という訳でヴィヴィオ、一緒にあの幻術の名前考えようか。
俺としては二度と使いたくない意味も込めて『禁忌「狂言の鏡像」』ってのはどうだろう」

「おなかすいたー」

「知らんがな」

ホント空気を読まない子である。
しかし砲撃のない訓練というのは久しぶりだ。
ましてや隊長陣とチビッ子達＋αを相手にしているのだから余計に。
たまにはこんな時間を享受してもバチは当たるまい。
そのままヴィヴィオと話して時間は過ぎていった。

○●○●○●

「はい……じゃあ今日は……ここまで……」

「あ、お疲れさん」

息も絶え絶えに空から降りてくるなのはさん。
それに続くやはり息が荒い隊長陣。
地面には既に座り込んでいるチビッ子達と、ボロボロのヴィータがいた。
俺とヴィヴィオは、空腹とあまりにヴィヴィオが騒ぐのでシートを敷いておやつタイムとしゃれこんでいる。

「しかしいつもボロボロの俺って客観的に見るとこうなるのか。
確かにいじりたくなる気持ちも分からんでもない。
ニヤニヤ」

「口に出して笑わないでよ気持ち悪い……
所でお稲荷さん、一体何をやったの？」

「俺の周りが全て敵な時にしか使えない仲間割れの幻術。
味方の1人に俺そっくりになるように幻術をかける。
でも見た目だけな上に本人はかけられたことが分からないただの幻。
思ったより効果があった見たいだけど、自分の痛い姿を見せつけられて俺へのダメージも尋常じゃない諸刃の剣。
自分の姿に見えるようにしただけなのにあの発言は想定外。

もう二度とやんない」

というか俺の周りが敵だらけな状況なんてそうそう……
ん、よく考えたら俺の周りに味方が居るときなんてそうそう無いだろう。
涙が出ちゃう。

「何で凄いことやってるのにその価値を下げちゃうかな……
で、あれだけ混戦してたらお稲荷さんでも善戦できたんじゃない？」

「ふ……分の悪い賭けは好きではない」

赤い弓兵っぽく格好つけて言ってみたのに俺が言うと情けなくなるのは何故。

「まぁいいや。
ともかくみんなは、今の気持ちを忘れないまま反省レポートを書いてね。
お稲荷さんは訓練を放棄したから、普通の反省文を書くこと」

「どうしてこうなった」

「訓練中にピクニックシートに座っておやつ食べてる人が何を言ってるの？
そもそも私達に一撃入れるのがクリアの条件なんだから攻撃しないのはダーメ」

「初耳すぐる」

キャロがギンガへの説明の時に言ってたでしょ、と叱られる。

何故俺に直接教えてくれないのか。
結局今度は、私は二度と訓練をサボりませんという内容の反省文を５０枚提出だそうだ。
また湿布を仲間に手の痛みと戦う日々が始まる。

「稲荷……てめぇ……後であたしとタイマンで勝負だ……」

また湿布を仲間に体中の激痛と戦う日々も始まるようだ。

「どうして俺は簀巻きにされているんでせう」

「愚問だな。
貴様の言動や行動に怒りを覚えたのがヴィータだけだとでも思ったか」

「私もちょっと、稲荷のセリフには頭にきたんだ」

「だからヴィータの相手をする前に、貴様には私達の相手をしてもらおうと思ってな。
何、１時間もやれば満足できる」

「その発言だけ聞くと微妙にエロいな。

てかあれは幻が勝手に言ったことでありまして、俺は関係ありんせん」

「いいんだ。稲荷の姿で、稲荷の声で、私達を罵ったという事実だけが重要だから」

今度、匿名で稲荷好感度調査を行おうと心に固く決めました。

１５話（後書き）

ヴィヴィオがめっさ喋ってた。
でもアニメの半分までしか進まなかった。
やはり戦闘描写は苦手である。
誰がなんと言おうと戦闘描写である。

書いてて楽しかったのでいいかと思い今回は訓練のみの話。
任務の時以外はアニメも朝練から始まる事が多いキガス。

という訳で１５話。
何かＰＶとユニーク数の増え方がガガッと上がったことにニヨニヨしつつ。
ありがとうございました。

16話（前書き）

花火大会物語

16話

『そういう事があったのさ。
俺に戦闘を求めるとか竹串1本でラスボスに挑むようなものだ』

『なかなかに波乱な毎日を送っているようだね。
やはり稲荷くんと話していると退屈しないよ。
そうだ、そんな君にプレゼントをしよう。
今夜、とある場所で盛大な花火が上がる。
君には是非見てもらいたいものだ』

『花火か。
そういやずっと花火大会なんて行ってなかったな。
ここじゃこの時期に行われるのか……』

『あぁ、綺麗だと思うよ。
きっと稲荷くんも気に入るさ。
クックック。
ハーッハッハッハッハッハ！！！』

『高笑いしたいのは分かるけど、メールでそれやってもキモイだけだから』

「狐パパ何やってるの？」

「ん？　友達……じゃないな。
知り合いが花火大会を見に来ないかって」

「花火？」

「あー、空に打ち上がった火がこう、バーンって言って色とりどりの火が舞い踊る夜空の芸術。
ヴィヴィオも見たいか？」

「うん！」

訓練終了後、みんなで昼食になったのだが。
いざ食べようと思ったら、スカさんから携帯にメールの着信。
今の流れになった訳である。

「なのはさんなのはさん、午後の予定は？」

「ん？
六課のフォアード達と一緒に、警備の任務があるんだけど……
今回はちょっと事情が複雑で、正式に隊員じゃないお稲荷さんを連れていくことはできないんだ。
ごめんね？　任務には連れて行くって言ったのに……」

「むしろ諸手を上げて喜びたい所存。
じゃあさ、夜に花火大会を見に来ないかって知り合いに誘われてるから行っていい？」

「知り合い？」

「友達ではないと思っている」

「花火大会なんてあったっけ……
まぁいっか。
いいよ、行ってきて。

後、友達じゃないなんて言っちゃダメ。
ちゃんと仲良くならないとだよ？」

スカさんはガジェットがレリックでドローンな広域なんたらだから
六課が追ってるんじゃなかったっけ？
未だに理解が追いつかないスーパーフォックス頭脳が恨めしい。
スカさんの名前がでたときにシャマルの名前も一緒に出たのが原因
である。
おのれシャマル。
……まぁいいや、お咎め無いなら。

「なのはママ、ヴィヴィオも！」

「俺がパパでなのはさんがママとか人類が踏み込んではいけない領
域な気がする。
まぁ、いつまでもあの呼び方だと俺の命がヴィヴィオの呼び声１つ
で１個減るからいいか」

「私が直したんだよ！！
大変だったんだから……
ヴィヴィオは……お稲荷さんがいるなら大丈夫かな。
いつも無傷で済んでるし。
ちゃんと守ってあげてね？」

無傷なのは受けたものが素晴らしい回復力で治っているからです。
因みにその傷の全部が味方から受けたものです。
敵はこの中にいた！！

「うい、了解。
んじゃ先方にも行けるって言っとく。

ヴィヴィオ、夜までに出かける準備すませとけよ」

「うん！」

うむ、うむ。

『という訳でスカさん。
なのはさんからの了承取れたから行くことにする』

『どういう訳か分からないが、了解したよ。
場所は六課からでも見える細長い建物が何本も建っている所だ。
迎えを出そうか？』

『あそこか。
いいよ、別に。
特等席を探しとく。
それを探すのも醍醐味だから』

『あぁ、楽しみにしているよ。
クックック』

メールでクックックなんて書く人を俺は他に知らない。
それはともかく、どうやら結構近くで行われるようだ。
花火大会とか久々過ぎてワクテカが止まらない。
俺も準備に取り掛かるとしよう。

「そういやお稲荷さん、ミッド語読めるようになったっけ？」

「んにゃ。
相手が日本語で書いてきてくれてる。

もはや天才だね」

あんなに頭いいとか本当に何してる人なんだろうね、スカさん。
あ、ダンゴムシもどき作ってる人か。

○●○●○●

そして今は目的地付近。
街からなるたけ離れた場所で空がよく見える位置を探しています。

「狐パパ、何でこんな所にいるの？」

「街の光があると花火が綺麗に見えないからな。
スカさんの言い方だと結構大きなモノらしいし、最高のコンディションで見たい」

「ふ～ん」

とかいいつつ歩いているとちょっと開けた場所に出た。
建物もよく見えるし、周りも明かりがほとんどないベストポジションである。

『そろそろ開幕と行こうか。
稲荷くん、堪能してくれたまえ』

そのメールが届いたと同時に、空に一条の赤い矢が走った。

「うおおおぉぉお」

「わあああぁぁあ」

その光が細長い建物に当たった。
赤い炎が爆発と共に舞い上がる。

「あれが花火～？」

「世間一般にあれは砲撃と呼ぶ」

上空では、何かがいくつも連鎖的に爆発していた。

「あれは～？」

「爆撃と呼ぶ」

「むぅ～、花火は？」

「世界が違うと花火の概念も違うのかもしれん。
とすると、最初のヤツは景気付けの二尺玉で次のはナイヤガラ的な何かか。
ダンゴムシもどきを量産してるスカさんの美的センスがまともな訳無かった」

しかし、花火好きの俺がこんな物で納得出来るはずがない。
……はっ。

「もしや俺の幻術ならばなんちゃって花火が作れるのではないか…

…！？
流石幻術万能過ぎる。
ヴィヴィオ、スニーキングミッションスタートだ。
これより花火大会の中心地に赴き、日本式花火の素晴らしさを見せてやる」

「わーい！」

「よし、ならば尻尾に入るがいい。
少し力を入れて跳ぶから振り落とされないようにするんだぞ」

「警備厳重すぎね？」

辺りにはダンゴムシもどきが徘徊している。
動き方を見るに、不審者を探す感じ。
ロボットが警備もするようになるとは、世も末である。

「狐パパ、ちょっと怖い」

「安心しろ。
俺はもっと怖いから。
何かこう、進んではいけない方向に足を向けている気がヒシヒシとするんだ」

ヴィヴィオはイン・マイ・テール。

俺は幻術をかけて周りから見えなくすると同時に、自分の前に俺とヴィヴィオの幻を出している。
誰かに見つかったら前の幻が逃げ出して、俺様素通り作戦。
因みにこの幻、触れられるんだぜ？
製作時間１０分。
妖力は汎用性高いけど扱いがやっぱり難しい。
某紅魔館にいる妹吸血鬼はよく一瞬で４人になれるよね。

この技の練習はしてたけど、模擬戦では時間がかかり過ぎるため陽の目を見なかったのだが、ここにきてようやく使える機会に巡り会えた。
幻に模擬戦させりゃ砲撃受けなくてすむんじゃね？　なんて思ったこともあったが過度の攻撃を受けても消えるから、一度この幻に模擬戦させてた時余裕でバレた。
本体はティータイムしてたら後にみっくみくにされたのはいい思い出。
そんなこんなで建物の中を徘徊中。
気分はリアルメタルギア。
敵の上に『！』とか『？』が出ないようにしなければ。

「お前たちは……ドクターの言っていた稲荷と聖王の器か」

思ってたそばから見つかった。
Ｔ字路に差し掛かったときに敵とエンカウント。
恐怖の青タイツの頭上に『！』が出現した模様。
なお、今回は白髪という新キャラである。
だが片目に眼帯をしているから多分厨二病患者。

「ほう、我らを見つけるとは大した奴だな」

「ママァ――――――――――！！」

「普段なら問答無用でやりあう所なのだが、こちらにも少々都合があってな。
今回は逃げさせてもらうよ」

「ママァ――――――――――！！」

「何！？
逃がすと思うか。
別働隊でお前らを探しているようだが、私が捕まえれば済む話だからな」

「フッ、ならば追ってくるがいい。
追いつけるものならな」

「ママァ――――――――――！！」

「クッ、待て！！
こちらチンク、聖王の器と稲荷を発見した！
ルーテシア、六課に目標は居ない！
すぐにこちらへ来るんだ！」

ひと通り会話を終えた後、幻と白髪タイツはＴ字路を左へと曲がって走って行った。

「……あぁ、そういやあの幻も厨二発言するから使用をやめてたんだっけ。
忘れてたなー」

「ヴィヴィオ、あんなにママーって叫んだこと無いよ？」

「知らんがな。
あんなにスネちゃまチックに叫ぶ奴リアルで見たことがない」

幻が行ってしまったので仕方なく姿を隠すだけで移動を開始。
T字路を抜けるくらいで進行方向から誰か来た。
あれは……ギンガだっけ。

「クッ……AMFが濃すぎる……！！
早くスバル達と合流しないと……！！」

そう言いながら俺たちの通ってきた道を駆け抜けて行った。
幻が曲がった方に行って、姿を見られても面倒なのでよしとする。

「因みにヴィヴィオ。
AMFとはなんぞや」

「ん～……
前から2文字読んでも後ろから2文字読んでもラジオ局」

「お前天才じゃね？」

ヴィヴィオの頭の良さに感心しつつ、再び屋上を目指すのであった。

○●○●○●

「ナンテコッタイ」

「なんてこったーい」

階段を見つけたら後は屋上に登るだけなので楽ではあったのだが。
いざ屋上に出るとあら不思議。
ダンゴムシもどきとボムキングが上空を占領しているではありませんか。

「いくら俺でもこれが花火大会ではない事が理解できたぜ。
てか空にダンゴムシとボムキングとかなんてデジャヴ」

「ふぇ、これ花火じゃないの？」

「スカさんの美的感覚じゃ花火かもしれんが俺には地獄の宴にしか見えん」

燃えてるし。
建物崩壊してるし。
海上から何か出てきてるし。
てか何あれ。

「わー龍さんだー！」

「いやいや待て待て。
凄い可愛く聞こえるけどおかしいから。
よしんば龍さんだとしても頭に汎用人型決戦兵器がつくよ。
どう見ても暴走モード突入してるし」

一度咆哮したかと思うと、エネルギー的な物を集めだす龍さん。
しかも体がこっち向いてます。
顔の前、両肩付近に集められた紅い弾が、今砲撃として放たれた…
…！！

「ヴィヴィオ、こっち来て座ろうぜ。
多分二度と見れない何かが来そうな気がする」

「うん」

３点の砲撃は１点で交わり、極太の砲撃となって上空に居たダンゴムシ達を薙ぎ払った。
つまり、俺達の上空１００m付近を通過していった訳である。
姿は隠したままだから、絶対ダンゴムシがここにいたら焼き払われてた。

「凄いねー！」

「あぁ、オメガが放つ波動砲を至近距離で見れた気分。
発射角度が数センチずれてたら、俺ら塵も残らなかったけど」

「でも花火じゃないんでしょ？」

「ん～……ある意味花火よりも迫力はあるが。
まぁ本当の花火は俺が今度手持ちのやつ買ってやるから我慢しれ」

渋るヴィヴィオだがそこは譲れない。
ここで俺が幻術たーまやーとかやったら、俺が花火にされそう。

「ともかく、今日は帰ろうか。

何が楽しくて爆破現場を花火として見なければならんのか。
スカさんには感謝のメールを送ろうかと思っていたが、これは無視するしかねぇ」

「帰るの？」

「うむ。
折角の外出なんだし、帰りにコンビニでもあったらアイスでも奢ってやるから。
コンビニあるか知らんけど」

「やったー！！」

このままいても不法侵入で何か面倒事になりそうだし、そのまま現場を後にした俺らだった。

「六課が……崩壊している……だと……？」

「狐パパ、どうしたの？」

「うむ、俺とヴィヴィオの寝る場所が無くなってしまった。
このままでは寝不足→心が荒む→顔に出る→一生童貞→いくえ不明」

「みんな無事なのかな？」

「見た感じ壊れてるのは入り口付近だけ。
後は火が回っててんてこ舞いって感じだな。
怪我人はそんなに居なさそうだし、消火活動も終わりそう。
俺に手伝える事はないな。
寝床はずぶ濡れか燃えてるか……無事かもしれんが望み薄だなぁ」

「行かないの？」

「面倒事に巻き込まれるのが目に見えている。
持ってて良かった多めの現金。
今日はビジネスホテルか２４時間営業のファミレスで夜を明かすぞ。
俺が今行っても邪魔にしかならんだろうから明日早めに行けばいいさ」

「……うん」

「……あ、なのはさんに連絡入れてないや。
まぁいいか、明日で。
しかし使い魔なのになのはさんのアドレス知らないとはこれいかに」

１６話（後書き）

１６話・１７話・１８話を続けて見ないと内容が全く把握出来んかった罠。
時間が無いのに９０分拘束で後に書き出したから今までかかったよママン。
てかギンガが死んでた。
ひぐらしを見てる感じだったとです。

３話続けて一夜の話なのにこいつが動くと１話で終わる。
そして次回の始まりが多分みんな予測できる。
そんな感じ。

という訳で１６話でした。
もうアニメは重すぎてみてられないと思いつつ、ありがとうございました。

17話（前書き）

狐通信奇行文。

17話

「夜を何とか越したのはいいが着替えが無いことに愕然とした。
という訳でヴィヴィオ、オペレーション・トレジャーハントの開始だ。
タンスを見つけ出し、中の衣服を回収せよ」

「らじゃ！」

昨日の服のままでいるのは何だかやるせなかったので六課に着いてまずは着替えをと思ったものの、入り口付近はキープアウトのテープが張ってあって入れず。
仕方無しに別の入口から潜入することにした。
表の自動ドアは崩壊していたが、そこらかしこにある手動で開くドアは無事でして。
早速開いて中に入る。

「ヴィヴィオ……お稲荷さん……
守れなかった……約束してたのに……
あの子、泣いてた……！！」

「なのは、助けよう。
2人で、きっと。
……え？」

「……お邪魔しましたー」

「しましたー」

踏み込んではいけない場面に出くわしてしまったので小さく謝りドアを閉める。
フェイトさんと目があった気がするが気のせい。

「ヴィヴィオ、俺こういう時どうすればいいか分からない」

「笑えばいいと思うよ」

「この子どこで知識を仕入れてくるんだホント」

「前に狐パパが言ってたよ？」

原因は俺だった。
まぁいいや。
ここは入れないから別の入口からにしようか。
歩き出そうと後ろを向くと、先ほど開けたドアが勢い良く開かれた。
視線を戻すと、涙目のなのはさんとフェイトさんがこっちを凝視している。

「あ、百合百合しい展開はもういいの？」

「ヴィヴィオ空気読んだよ！」

ヴィヴィオ、そういう事は言っちゃいけません。
心の中に留めておくものです。

「え、何で……だって、ヴィヴィオとお稲荷さん捕まってたんじゃ……」

「何のことかサッパリングだが、味方以外に今まで俺に危害を加え

ようとしたやつはいない」

なのはさんがよろよろと歩き出す。

「良かった……良かった……！！」

そして最後には走りだした。

この展開、分かります。

ズバリなのはさん抱擁フラグ。

今脳内には、抱きつかれた後どのような切り返しをしようか１０８式のシミュレートが展開されている。

だがまずは受け止めることからだ。

両手を広げる。

「なのはさん……！！」

「ヴィヴィオ――――！！！」

俺をスルーしてヴィヴィオに抱きつくなのはさん。

行き場を失った両手をじっと見つめる。

この発想は無かった。

呆然としていた俺の肩に手が置かれる。

視線を上げると、凄くいい笑顔をしたフェイトさん。

「稲荷、事情を聞かせてもらおうか」

「今回ばかりは心の底から言わせてくれ。

それでも俺はやってない」

有無を言わさず正座の構え。

ヴィヴィオはなのはさんにしがみついている。
裏切ったな？

「さて、色々聞きたいことはあるんだけどまずは、何でお稲荷さんは捕まってたのにここにいるの？」

「その前提条件が分からない。
捕まった記憶はないぞ」

聞くと、スカさんが通信で俺とヴィヴィオの姿を映してきたらしい。
その中での俺は、また……この手の届く範囲の者ですら守れないのか！　と言ってたとか。
ヴィヴィオはヴィヴィオで、ママァ――――――！！　って叫びまくってたとか。

「あ、原因はやっぱ俺だわ。
てかヴィヴィオはともかく、俺は本人じゃない事に気付いて欲しかった。
そんな厨二発言しません。」

「ヴィヴィオもそこまで叫ばないよ」

「あ……
そ、それはともかくお稲荷さんの仕業？」

「あぁ。
あんな過激なものを花火と言うものかと、俺の祭魂に火がついてさ。
ヴィヴィオに日本式花火を見せてやろうと建物に侵入したら、眼帯白髪青タイツに出会ってな。
俺とヴィヴィオの触れる、似てる、喋れるのお買い得な幻を囮に出

してたら、見事にそっちを追いかけていった。
多分捕まったのはその幻。
あれ、なのはさんのスターライト砲撃レベルのダメージ与えないと消えないし。
そういや途中でギンガとすれ違ったが何であそこにいたんだ？」

「あぁ、以前模擬戦でズルした……
あの分身は卑怯だよ、お稲荷さんと同じ技も使ってくるから砲撃で消えたときは本当に焦ったんだから。
……ん？　ギンガが居た？」

「まぁ俺の幻は厨二発言。
ヴィヴィオの幻はスネちゃま。
もう二度と使わない。
ギンガは何か凄い焦っていたがスバルと合流するって走っていったぞ。
な、ヴィヴィオ」

「うん！」

そっか、そっかーと呟くなのはさん。
今まで黙って隣に立っていたフェイトさんも何やらお怒りのご様子。

「お稲荷さんの知り合い。
都合よく花火大会の知らせ。
これで場所を教えてくれたらピンと来てたんだけどなぁ。
何で教えてくれなかったかなぁ」

「稲荷、スカリエッティと連絡が取れたのなら何で私達に伝えてくれないかな」

「ぬぉぉぉぁぁぁあああああ！！」

今は訓練室でお仕置きが出来ないからと、２人に挟まれて頭の前後左右からウメボシを敢行された。
マジで頭が割れるかと思いました。

「砲撃は普通に痛いがウメボシは地味に痛い……
てかやっぱりダメージを受けるのは味方からだけなのね」

「自業自得だよ」

……えっ、俺が悪いの？

「まぁ、２人が無事で良かったよ。
後はスカリエッティの目的だね……
何でヴィヴィオとお稲荷さんを攫ったのか」

「頼むからあれを俺と言わないで。
俺は前々から勧誘受けてたから分かるがな。
働きたくないから断ってたが。
ヴィヴィオは何でだろうね」

「……前々から？」

「……あ」

「じゃあ私は事の次第を一旦はやてちゃんに報告してくるね。
あ、そうそう。
お稲荷さんとヴィヴィオは一度病院にも顔を出してね。
ヴィヴィオを攫われたことに、隊長達やフォアード達だけじゃなく
面識が薄いギンガまで落ち込んでたんだから」

「俺は？」

「ヴィヴィオ、しっかりみんなに元気な姿見せてきてね」

「うん！」

「ねぇ、俺の心配は？」

「じゃあ私は調査に加わってくる。
なのは、ヴィヴィオ、また後で会おうね」

「うん、またねフェイトちゃん」

「フェイトママ、後でねー！」

「俺がパパでフェイトさんがママとか未曽有の大事故。
てか普通に考えたらママが2人って俺変態になるじゃないか」

「えっ、今更？」

何故にそこだけ反応する。

○●○●○●

病院に行った俺達を待ち構えていたのは、手厚い歓迎と安堵の息だった。
もちろんヴィヴィオは抱きつかれ、撫で繰り回されたのに対し、俺は斬撃銃撃打撃噛み付きだった事は言うまでもない。
チビッ子達と副隊長陣、その他の方々が勢揃い。
またも正座している次第である。

「扱いについてはもはや何も言わんが。
病院で怪我人作ってどうするんだ」

「お前なら病院などいらんだろう？」

シグナムさんが未だにキツイです。

「あ、そういやギンガ大丈夫だったのか？
すれ違ったけどあえて無視したから心配だったんだ」

「今のセリフをもう一度読み返して自分がおかしい事を言ってるのに気付きなさい。
……それはともかく大丈夫よ。
敵とも遭遇したけど、その前になのはさん達と合流できたし。
苦戦はしたけど。

上空のガジェットが殲滅されたら撤退したしね」

「そうか、うむ、うむ。
他のみんなも包帯巻いてるが元気そうで何よりだ。
てかそのくらいの傷、5分で治せよ軟弱だな。
俺なら次のコマですら治るのに。
……ぬ？」

突然響くアラート音。
同時に俺達の前に巨大な画面が出現した。
そこにはスカさんが映っている。

『さぁ、いよいよ復活だ。
私のスポンサー諸氏、そしてこんな世界を造り出した管理局の諸君。
偽善の平和を謳う聖王教会の諸君も。
見えるかい……これこそが、君たちが求めていた絶対の力」

仰々しい振り付けを交えながら演説を始めるスカさん。
同時に、そのスカさんの映っている画面の横に、八神とフェイトさん、なのはさんが映った画面も現れた。

『みんな！　スカリエッティからの一方通信や！
管理局全体に流されてる！』

『旧暦の時代、一度は世界を専権し、そして破壊した。
古代ベルカの悪魔の叡智。
見えるかい？
古代の技術と叡智の結晶は、今その力を発揮する……！』

『ママァ――――――――――！！

ママァ――――――――――――!!』

『やめろおぉぉぉぉぉぉぉおおお!!』

『さぁ、ここから夢の始まりだ!
聖王の器を鍵に、ゆりかごは今蘇った!!
ハッハッハ、アーハッハッハッハッハッハッハ!!!』

ぶつん、とスカさんの通信が切れる。
通信が残っているのは、残りの3人のものだけだ。
そして、流れていた沈黙を、ティアナが破る。

「何でここにいるあんたがライブ中継に出演してるのよ……」

「こういう展開は流石に想定外。
というかヴィヴィオ椅子に座ってたのに俺ってば横で簀巻きじゃなかった?
何? 敵側でもああいう扱いなの俺……」

「ヴィヴィオもまた叫んでたねー」

『へ? え?
な、何であんたとヴィヴィオがそこにおるんや!?』

「ググれ」

うが――――!! と吠え出す八神をフェイトさんとなのはさんが事情を説明して宥める。
因みに病院に居た人達にもついでに説明する。

みんな納得はいかないが、理解はしたようだ。

『つ、つまりあそこに居たのはあんたが作り出した分身体って事でええんやな。
てか分身体なら何でゆりかごを飛ばせるんや。
スカリエッティの話から推測するに、聖王の器ってヴィヴィオの事やろ？
本人がおらんとあかんやん』

「一生懸命妖力使って無駄に精錬された無駄のない無駄な分身を作ってみた。
見た目、性能、潜在能力を全て模写できるんだぜ。
でも何故か厨二やスネちゃまになるから価値がボットン便所に落ちたダイヤモンドレベル」

『無価値って事やな。
私、これから何か起こったらあんたの写真出して「大体こいつのせい」って言うわ』

ひどくね？

「しかしあんな巨大な物を動かすとかヴィヴィオ、お前何者よ」

「ググれ」

なるほど、いざやられるとこれは心に響く。

「まぁ、でも体感的に後2～3時間で幻消えるから。
古代ベルカのHな技術の結晶だかなんだか分かんないけど、あんだけ高いところから落ちたら壊れるでしょ。

スカさんの野望も兵どもが夢の跡」

『発音は間違ってないけど大いに意味が間違ってるよ、お稲荷さん。叡智ね、叡智』

『というか稲荷、後2~3時間で分身消えるって言った……？』

「ん？　あぁ、多分そんくらい。ヴィヴィオだけグングン魔力吸われてるみたいだからもっと早いかも」

『今、ゆりかごは市街地に向けて航行中なんだけど……』

マジでか。

まぁ大丈夫、対策あるから。

「ヴィヴィオ、財布は持ったか？」

「持った！」

「非常食は？」

「まかせてー！」

「着替え数点もオーケー？」

「なのはママのパンツも持ってきた！」

「けしからん。

それは後で没収です。

じゃあ逃げるぞ」

「はーい」

全員からガッされた。

「じゃあヴィヴィオ、なのはさんのパンツを出しなさい。
それは第一級危険物に指定されてるから」

「狐パパ、変態さんみたい」

「流石に俺にこれをクンカクンカする勇気はない。
今度模擬戦と称した処刑の交渉材料に使うか、ヴァイス闇市のルートで金にするか……
期待に夢がひろがりんぐ」

「あ、なのはママ！」

「オワタ」

１７話（後書き）

スカさんの言い回しを聞き取るのに手間取り、辞書を引くのに手間取り。
ぬっころしてやろうかと思った次第です。

あぁシリアス。
苦手なシリアス。
今後の展開どうしよう。

１７話に来てくれてありがとうございました。
この後、アニメは数話続きますが、こいつが動いたらすぐ終わりそうで怖い。

18話（前書き）

白昼のぶら下がり奇行文。

18話

スカさんから通信があったあの時に、八神は壊れた六課の代わりの本部を用意していたらしい。
六課周辺に人が少なかったのは移動していたからだそうだ。
病院に居た主要人物も、スカさんの通信後すぐにその仮説本部に招集。
仮説本部はなんと、見た目巨大な航宙艦だった。

「ソードブレイカー……だと？
まさかロストシップが実在していたとは。
キャナルはどこだ」

「また意味不明なこと言ってるね。
これは私達が昔お世話になった船、アースラだよ。
こんな状況じゃなかったらお稲荷さんと一緒にもう一度アースラに来れたことを素直に喜べたんだけどなぁ」

「どんな状況であろうと俺は素直に喜べない。
今まで完全に空気だった俺の首輪に何故鎖をつける。
そういう趣味か」

あぁ、このなのはさんの片手が繰り出す割れるような頭の痛みもなんか久々だ。

「こうでもしないとお稲荷さん逃げるでしょ？
ちゃんと鎖の先は私に繋げておくからね！」

「何嬉しそうに言っちゃってるのこの子。

発信機ついてるって言ってたんだからそれ使えばいいじゃん。
てかヴィヴィオ助けて」

「なのはママ、狐パパの事好きなんだね～」

「ちょ、何言ってるのヴィヴィオ！？」

助けてくれたのは嬉しいがヴィヴィオ、それは逆効果だ。
何を動揺しているのかは知らないが、首が絞まるので急な動きはやめて下さい。
そして発信機は、何でも俺が何かをやらかすときは大抵なのはさん達も切羽詰ってる状況なので調べる余裕が無いのだとか。
意味無いじゃん、外してよこれ。
で、俺がここに連れてこられている理由をそろそろお聞かせ願いたい。

「ある意味最大の主要人物がお稲荷さんとヴィヴィオだから。
2人も加えて、緊急会議を開くんだ。
と言ってもメンバーの役割を割り振るだけですぐに出動だけど」

「村人Aのポジションな俺が主要人物だと？
普通に考えて俺とヴィヴィオはお留守番だろう。
大丈夫、ゆりかごとか言うあの物体の被害が届かない世界の果てまで逃げるから。
あ、ヴィヴィオ。
非常用リュック、俺の分も用意しておいて」

「はーい！」

「何逃げる前提で話をしてるの。

とりあえず会議室に行くよ。
もうみんな集まってるんだから」

「ぐぇ」

飼い主と一緒に散歩してる犬の気持ちになったとです。

○●○●○●

「床が光っててテラマブシス」

「お稲荷さん、黙ってて」

みなさん椅子に座ってテーブルに体乗り出してるから大丈夫でしょうが。
この会議室、床が光ってる上に俺は床に座らされているので光がダイレクト。
照明は普通に天井からにしろよ。

「とりあえず現状なんやけど、地上部隊が自分らのみでの調査を固く主張してるもんやから、今回の件に関して本局からの戦力投入は無い。
そして、本局に所属する機動六課にも、捜査情報は公開されん。
そやけどな、私らが追ってるのはテロ事件でも、その主犯格としてのジェイル・スカリエッティでもない。
ロストロギア・レリック。

その捜査線上に、スカリエッティとその一味がおるだけ。
機動六課の方針は、一応はそういう方向や」

喋ってるのは多分八神。
テーブル高くて床からじゃ見えない悲劇。

「てか何でヴィヴィオは椅子に座っている。
ほらヴィヴィオ、そんな椅子より俺の尻尾の方が気持ちいいぞ」

「わーい！」

「重要な事やで頼むから聞いてや。
六課に地上部隊から捜査情報は公開されんものの、私らはそれ以上の情報を得てる。
原因は大体こいつのせい。
で、後2～3時間もしたらあのゆりかごは鍵を失い、起動停止する。
あんな巨大なもんが街中に落ちたら、死傷者がどれだけ出るか予想できん。
だから出来る限り迅速に、ゆりかごの進路を街から遠ざけること。
これが最大の目標や」

「狐パパ、分かる？」

「つまりあれだろ、今からラストダンジョンに突入するんだろ？
熱いね～主人公達は。
俺とヴィヴィオはアイスでも食べながらみんなの活躍をテレビ中継で見てようぜ」

「ホント？　バニラがいい！」

「お稲荷さんとヴィヴィオも来るんだよ？」

なん……

「だと……」

「2人とも凄い驚いてるみたいだけど。
残念だけどアースラはもう老朽化が激しいんだ。
この間の青い子達がもう一度攻めて来たら、防ぎきれない可能性が高い。
なら、ヴィヴィオはお稲荷さんと一緒に居させたほうが安全じゃないかって。
ぶっちゃけ、お稲荷さんなら無傷で帰って来れそうだし」

「ヴィヴィオの命は俺次第って事か」

「私の冒険はここで終わってしまった」

うむ、ヴィヴィオは俺のことよく分かってるじゃないの。

「そしてお稲荷さんは私とチームを組んでもらうよ！
一緒にゆりかご止めようね！」

「つまり一番の死亡フラグ満載な地域に行くことになると。
生きて帰れたらもう怖い物なんて無さそうだ。
ヴィヴィオ、俺この戦いが終わったらなのはさんの胸を揉みしだくんだ」

「狐パパ……！！
どうして二重の意味でそんなに死を急ぐの……！！」

チビッ子達や副隊長陣の立ち回りも説明されていたが今の俺には馬に念仏状態。
気が付いたら解散になっていましたとさ。
で、なのはさん。
もう出陣ですか？

「後3時間もないんでしょ？
急がないと。
帰ったら揚げ尽くしをご馳走するから頑張ってね」

「対価が足りん。
帰ったらチューくらいしてくれ。
俺のファーストだぜ？」

「ヴィヴィオ、私達は生きて帰ろうね！」

「狐パパはゆりかご内で事故に見せかけて殺されるんですね分かります」

えっ

○●○●○●

「なのはとレイジングハートのリミットブレイク・ブラスターモード。

なのはは言っても聞かないだろうから、使っちゃダメとは言わないけど。
お願いだから、無理だけはしないで」

「あたしはフェイトちゃんの方が心配」

「ヴィヴィオはそれ以上に狐パパの事が心配」

「ん？　ヴィヴィオの声……
……なのは、左手のそれ何？」

「これ？
お稲荷さん用の首輪に繋いである鎖。
すぐ逃げ出そうとするから、こうしちゃった」

「じゃあ、もしかして、少し後方でプランプランしてるのって……」

「お稲荷さん、空飛べても私達みたいに高速で移動できるわけじゃないから。
ヴィヴィオはお稲荷さんの尻尾に入ってもらって、引っ張ってあげてるんだ」

「そ、そうなの？
大丈夫、稲荷？」

「……」

「ほら、お稲荷さんも大丈夫って言ってるし。
急いだ分向こうでの時間に余裕が持てるんだから、頑張っていくよ！」

「青白い顔して無言だった気がするけど……
まぁ稲荷だし、いいか」

「狐パパ……今度ヴィヴィオのアイスあげるからね……」

「……」

俺は風になった。

「九死に一生スペシャル。
あの河の渡し守が緑髪の子に居眠りで怒られてなかったらやばかった。
俺の幻想入りも近い。
てか俺の死亡フラグは戦地ではなくなのはさんではないかという疑惑が浮上」

「生きてるんだから文句言わないの。
さ、ゆりかごの突入口も六課のみんなが見つけてくれたし。
ヴィータちゃんと私達は突入するよ！」

俺は意識を取り戻したらもうゆりかごの上にいた。
超スピードとか空間移動とかそんなチャチなもんじゃねぇ。
もっと恐ろしい物の片鱗を味わったぜ。

「生きているから文句を言うんだ。

死人に口なしという名セリフを知らないのか」

「うるせーよ稲荷。
あたしらが一番重要な役割を果たしに行くんだ。
話してる暇があるならさっさと行くぞ」

いつの間に現れたヴィータ。
え？　俺が倒れてヴィヴィオにつつかれてる時？
助けてよ。

「ヴィヴィオ、俺の味方はお前だけだ。
俺の癒しの為にずっと一緒にいてくれ」

「あ、お稲荷さん。
ヴィヴィオに傷１つでも付けたら任務終了後にお話しようね」

「何故俺はお前という危険物を抱えてないといけないのだ」

この世の不条理を嘆いていたら有無を言わさず鎖を引っ張られて突入口へ入っていった。
誰か俺に優しさを下さい。

「なぁヴィヴィオ。
ゆりかごを止めるって事は、俺の作った幻達のもとへ行くのか？」

「そうじゃないの？」

「自ら黒歴史のもとへ赴くとか苦痛以外の何者でもない。ここで消しちゃダメかね」

「分身が消える→ゆりかごが落ちる→街破壊の犯罪者になる→顔に出る→いくえ不明」

「その発想は無かった。じゃあさ、私が本物のヴィヴィオだー！　って敵に名乗り出て幻と交代するとか」

「あの幻でもうゆりかごが動いてるんだから、偽物にしか見られない気がする」

「クソッ！　Ｌめ！　こんな屈辱は初めてだ！　というかどうしてこんなことになってしまったんだ！」

「花火のせいじゃない？」

「それでも花火に罪はない」

１８話（後書き）

書いてる途中で「Ｏ」のキーを押しながら寝ていたので今朝起きたら「お」がゲシュタルト崩壊を起こしていました。

ソードブレイカー分かるかなー
結構古いような気がするからなー
でもリツコさんの時と同様に筆者の熱きパトスを止めることができませんでした。

ともかく遅れましたが１８話を投下。
昨日の遅れを取り戻す余裕があったら２２時～２時頃に次話を。
やる気が無かったら明日になります。
確率は６０％

では、またお会いしましょう。
お越しいただきありがとうございました。

19話（前書き）

狐が星になった奇行文。

19話

「時にヴィータさんや。
突入時に俺達が一番重要な役割を果たすとか言ってたけど何するんだ」

「お前って本当に人の話聞かないのな。
あたし達は今分身を消されるとゆりかごが市街地に落ちるから、制御を奪って被害の無い場所へ移動させるんだよ。
フェイト達はスカリエッティの研究所を同時攻略中だ」

「でも、そこに行くまでには敵の妨害があるだろうからね。
出会った場合は撃破するよ。
でもゆりかごの進行方向を変える事が最優先事項だから、今は戦わない事に越したことはないんだけど」

へぇー。
言ってる側からダンゴムシもどきとボムキングと新顔のカマキリもどきが通路の奥に見えるのですが。

「ガジェット！」

「しかもあいつは……なのはを墜としたヤツか！！」

「あ、俺ヴィヴィオを守ってるんで戦術的撤退をしますね」

尻尾に入れたままのヴィヴィオと共に逃げようとしたら鎖をガッされた。
いや、無理だって。

目測で５００体はいるもん。

「お前それ乱視じゃねーか？
どう見ても５分の１もいねーよ」

「ついに視力も疑われるとかもうね」

「お喋りは後！
行くよヴィータちゃん！　お稲荷さん！」

「おう！」

行ってらっしゃい。
さてヴィヴィオ、どうしようかこの状況。

「ガジェットが攻撃できないようになればいくらいても問題ないんだけどねー」

「その案貰い」

流石ヴィヴィオ、俺の右腕。
爆撃打撃で殲滅をしているなのはさんとヴィータに巻き込まれないように離れて。
レッツ変化。
ダンゴムシ達の前に出る。
えっと、こんな口調だったかね。

「やぁ、私のオモチャ達。
あの２人にそこまで数はいらんだろう？
彼女らは今いるオモチャ達と私で対応しよう。

君たちは、外で遊んできたまえ」

「狐パパ、スカさんのマネ上手だね」

「黙りたまえ」

俺に向かってくるダンゴムシ等々のみ、外に行けと言っておく。
逆らうことなく外に向かうダンゴムシ達。
どこの世界でも製作者の命令は絶対なのね。

「さぁ、ヴィヴィオ。
あの2人のもとへと赴こうか。
クックック。
楽しいことになりそうだ」

「そう？
ヴィヴィオには狐パパの不幸な将来しか見えない」

この口調、なんか癖になりそう。

「お、お前はジェイル・スカリエッティ！？」

「お稲荷さん達をどうしたの！？」

おっと、ヴィータとなのはさんに見つかったようだ。
どうやら2人とも、もうほとんどの敵を倒し終わっているようである。

「フ、どうやらそちらも終わったようだね」

「なのは、こいつに問答なんて無用だ！
ぶちのめした後に聞き出せばいい！」

ハンマーを振りかぶってこちらへ向かってくるヴィータ。
髪をかきあげる。
ヴィータも騙せてるとかちょっと面白い。
つい顔がニヤける。

「あぁ、待ちたまえ」

「俺さ、一生懸命考えてやってるのにさ。
この扱いは本当に酷いと思うんだ」

「紛らわしい事するテメーが悪いんだろうが！」

既に変化は解けて、頭にはでかいたんこぶが出来上がっている。
ヴィータがあのハンマーを俺の脳天目がけてぶちかましたのだ。
文句を言ったところ、先程の切り返しが来た次第。
おら、行くぞ！　と言い放ってヴィータとなのはさんは俺達の少し前を歩き始めた。
けど、完全に先に行かない所を見ると俺達を逃がす気はないようである。

「何が非殺傷だ。

ハンマーで脳天ぶち抜かれたら昇天するだろう常識的に考えて。
あぁ、俺の心を癒す物は何か無いものか。
……む、ボムキングは何かを隠し持っていたようだ。
デデーン、稲荷は綺麗な石を手に入れた。
青い菱形の石とは珍しい。
尻尾に収納しておこう」

「狐パパ、これなーに？
何か数字が書いてあるけど」

「ボムキングの残骸らしき中にあった。
俺の心を癒す予定の一品だ、しまっといて」

「はーい！」

さて、あんまし待たせるとまたなのはさんに鎖を引っ張られそうだし行きますか。

○●○●○●

「いらっしゃーい、お待ちしてましたぁ」

「ママァ――――――――――！！」

なのはさんとヴィータが撃ち抜いた巨大な扉跡を潜ると、椅子に座ったヴィヴィオと横に簀巻きの俺。

そして前にビルの屋上で出会った眼鏡の青タイツがいた。
あえて言おう。
また眼鏡か。

「こんなとこまで無駄足ご苦労様。
あなた達のお仲間の、フェイトさんでしたっけ。
そちらも丁度、いい頃合のようですわよ？」

「ママァ――――――――――!!」

そう言って眼鏡が指を鳴らすと、椅子の後ろに巨大な通信画面が現れた。
フェイトさんが捕まっていて、それをスカさんがニヤニヤして見ている。
周りには、側近らしき2人の青タイツも居た。
しかもまたスカさんが何やら演説をしているようである。

『君と私は、よく似ているのだよ。
私は自分で造り出した生体兵器達。
君は、自分で見付け出した、自分に反抗することのできない子供たち。
それを自分の思うように作り上げ、自分の目的のために使っている』

「そうか、その手があった。
流石スカさんいい事を言う。
ヴィヴィオ、今からお前は俺に反抗してはならない。
何故ならお前は俺の目的の為に動く事になるからだ」

「狐パパ、頭大丈夫？」

「少なくとも今の突っ込みでクラッシュしそう」

「ママァ――――――――――!!」

「うるせーよ」

今のやりとりで俺の存在に気付いたのだろうか。
スカさんの視線は、目の前のフェイトさんではなく画面越しの俺に向けられる。

『おや君は、稲荷くんではないか。
君もなかなかに面白い人物だと思っていたのだが、いざこういう状況に立たされると常人と同じ反応なんだね、少々がっかりしたよ。
しかしよくあの拘束から抜け出せたものだね』

「もっと下を見ろ下を。
カメラワークが悪すぎる。
今も絶賛拘束され中だ。
俺の形をした何かが」

『……む？
そう言えば口調も少々違うようだね。
クックック、なるほど、偽物が潜り込んでいたという訳か。
あぁ、やはり君は素晴らしいよ稲荷くん。
まさか私を騙す者がいるとはね……』

「褒められた。
凄いだろ俺。
そこに座ってるヴィヴィオも偽物なんだぜ」

『なるほど、それは凄い。
ハッハッハ、アッハッハッハッハッハ！！
……は？』

大笑いしていたかと思ったら次の瞬間、見たこともない顔でポカンとするスカさん。
表情の移り変わりが激しい人である。

「や、言わないのは悪いかなーとは思ったんだけどさ。
あんな死亡フラグ満載の花火大会に無垢な俺を招待した腹いせに黙ってようかと。
それがまさかこんな大事になるとは誰も夢にも思うまい」

『……まさか稲荷くんもプロジェクトFを？』

「プロジェクトはXしか知らん。
挑戦者たちのヤツ。
もう終わってしまったが、NHK再放送しないかね」

「お稲荷さん、それ……テレビ番組じゃ……」

知っているのかなのはさん。
てか違うのか。

「因みにあのヴィヴィオと俺は、俺が10分間めっちゃ頑張って作ったただの幻。
なのに能力は本人と変わらないって凄いね。
というか、話す言葉がママァ――――――！！　しか無いことに疑問を抱いて欲しかった」

『そんな……まさか……全ては稲荷くんの手の上で……？
ではゆりかごは……』

「何か盛大に勘違いしてるみたいだけど、俺のせいじゃないかんね。
でももう少ししたら幻消えちゃうのでゆりかごは墜落しやんす。
許してくりゃれ？」

「どう考えてもお前のせいじゃねーか」

ヴィータ、黙らっしゃい。
落ち込み気味のスカさんを他所に、いつの間にやら拘束から抜け出したフェイトさんがスカさんの隣に居た青タイツ2人を倒していた。
みんな通信に集中してる時に攻撃するとか、なかなかに鬼だねフェイトさん。
てかあの青タイツ、結局何人いるんだ。
と、突然ここまで聞いていた目の前の眼鏡が騒ぎ出した。

「う、嘘ですわ！
ゆりかごは予定通り、2つの月の魔力を受けられる軌道上へ向かっています！
陛下が偽物な訳ありませんわ！」

「陛下だって。
お前も凄いのな、そりゃグッても出てこないわ」

「狐パパ、本当にやったの？」

「グーグレってパチもん臭いサイトがあったから検索してみた。
ヴィヴィオで軽自動車っぽいのが出てきたから実は凄くないんだと思ってた。

反省してます」

『スカリエッティ、話はそこまでです。
あなたを、逮捕、します！！』

ゆりかごが……私の計画が……とブツブツ呟いていたスカさんの後ろから、フェイトさんが巨大な剣の腹でスカさんを吹き飛ばした。
あれは痛い。
てか無抵抗な人を次々と倒していくフェイトさんに乾杯。
そしてその光景を見ていた眼鏡は、何かに取り憑かれたように笑い出した。

「アッハッハッハッハッハッハッハ！！
まぁいいですの。
仮にドクターが捕まり、他の子達やゆりかごがダメになったとしても。
ドクターのコピーは私も持っていますし、逃げきればいくらでも挽回は出来ますわ！」

「っ！？
ヴィヴィオ、こっちに来て！
ヴィータちゃん、ヴィヴィオを守って！
お稲荷さん、神速を使ってあいつを羽交い絞めにして！」

「はーい！」

「お、おう！」

「何故に」

疑問を抱きつつ、けど言われたことに体が反応してしまうのはチキンの習性。
数秒あれば十分に届く距離なので、即座に眼鏡の後ろにまわり羽交い締めにする。

「クッ、放しなさい！」

「お稲荷さん、そのままで！
ヴィータちゃん、撃ち抜くからヴィヴィオをお願いね！」

「どゆこと？」

「任せろ！」

「スターライトォ……」

「なるほどな。
やはり犯人は味方の中に紛れ込んでいたか。
おい眼鏡。
この状況を脱する術を俺に提示してくれ」

「あぁぁぁあ……あぁぁぁあ……」

完全にトラウマってるので無理だなこれは。
そうこうしている間に、なのはさんの姿は既に自身の前に収束しつつあるピンクの光の玉に隠れて見えなくなっている。

「狐パパー！
骨は拾うよー！」

「残らないと思うんだ」

「ブレイカァァアアアアアアアアアアアア！！！！」

『稲荷……！！

クッ、スカリエッティ、貴様……！！』

『君もいい具合に壊れてきているようだね、ますます私に似ているよ。

因みに私のせいではないと思うのだがね』

『黙れ！！

なのはがどれだけ稲荷の事を大切に思っていたか分かるか！？』

『……いや素直に全く分からないんだが』

「フェイトちゃん、いいんだ。

お稲荷さんも分かってくれてるよ……」

『なのは……』

「クッ、あたしはまた守れなかったのか！！」

「狐パパ……あんなにフラグを乱立させるからだよ……」

『ふむ。
こういう毎日を送っていたのなら、やはり私のところへ来たほうが良かったのではないかね、稲荷くん』

……。

１９話（後書き）

ミッションコンプリート。
２時までに投稿出来た。
なのはさんのエクセリオンなスターライトブレイカーは魔力ダメージでノックダウンとかいうレベルじゃない気がします。
ヴィヴィオとかクアットロが消滅していくフリーザーのように……

今回１つ伏線張っちゃいました。
まぁもちろん見ればすぐに分かるモノですが、後に話を続けようと思うと欲しくて。
続けるかはノリ次第ですが。
そんな事よりゼストカッコイイよゼスト。

という訳で１９話でした。
ＳｔＳは後僅かですね、感慨深いものです。
では、来てくれてありがとうございました。

20話（前書き）

涙ながらの奇行文。

20話

「……」

「うぅ……ごめんなさい。
謝るから無表情で泣きながら何も言わずに見つめるのやめて……
地味に怖いよ……」

「狐パパが珍しく有利。
けどガチで泣いてるのはキモイ。
わ、こっち見た」

「だが気持ちは分かるぜ。
あれは撃ち抜かれたヤツにしか理解出来ないよな。
てかてめーは何で無傷で居られるんだ」

撃ち抜かれた俺の後ろには外まで貫通している穴が空いていて。
床には少し焦げた眼鏡が気絶していて。
目の前ではなのはさんが土下座している。
あまりの俺の反応にビビっているようだ。

「ヴィータ、分かってくれるか。
あの光の奔流に飲まれる瞬間。
俺は小学生から今までの記憶を追体験してきたんだ。
世間一般に言う走馬灯。
深い絶望感が稲荷を襲った。
なのはさんには帰ったら、語尾に『ゲス』が絶対付いてしまう呪いをかけてやる」

「許して……それ社会的に抹消されるから……」

だが断る。

さて、いつまでもこんなことをしている暇はない。

さっさと目的を達成しないと、後何回なのはさんに殺されかけるか分かったものじゃない。

ゆりかごの進路方向を変えるということだったが、はて。

「そういやさっきこの眼鏡、月の軌道上へ行くとか言ってなかったか？

つまりしばらく放置して落ちない宙域まで行ったら幻を消せばいいという結論に至る」

「そういやんなこと言ってたな。

自分から目的話してくれるとか楽でいいな。

遠隔でお前の分身って消せるのか？」

「無問題」

遠くでママァ――――――！！

とか、この俺を消す……だと？

とか言ってるヤツらがいるけど放置で。

「じゃあ、一旦帰ろうか！

ここ、ＡＭＦがちょっときつくて念話出来ないから状況報告できないし」

「電話？

それくらい出来るだろ。

……あぁ、ラジオ電波が強いから受話器から番組が聞こえるのか。

それは確かにうざい」

「通信はダメなのかな？
さっきスカさん使ってたし」

「ヴィヴィオの頭の良さに感動した」

「あたしはあんたらの知識の無さに愕然とした」

早速携帯を取り出す。
アドレス帳を開く。
登録件、２件。
ハハ、スカさんとヴァイスのアドレスしかねーや。

「なのはさん、後でアドレスと番号教えて。
登録スカさんとヴァイスの２件とか切な過ぎるからアドレス帳の肥やしにする」

「え、あ、うん！　いいよ！」

何喜んでるんだこの人。
さて、メールは歩きながら打つとしてなんて書けばいいのかね。

「とりあえず現状報告と外はどうなっているのかを聞いといてもらえるかな？」

「了解」

『ラストダンジョンは攻略した。
被害者は俺だった。

外はどうなっている？』

そーしん。
ちゃくしん。

『リアルタイムで見ていたよ。
あぁ、外はクアットロがやられたことでガジェットは全て停止しているし、私の作品達も全員捕まったから君たちの勝利という事だろう。
まぁ私はドゥーエが目的を果たしたからそれでいいさ』

「だそうだ。
流石スカさん、情報が早い」

「誰にメール送ってるんだてめーは！！」

いや、返信早そうだったから。
でも外の状況しれたし問題ないでしょ。
という訳で早く帰ろう、すぐに帰ろう。
何か既に次の死亡フラグが立っていそうで怖いんだ。

「なぁなのは、あいつを後ろでプランプランさせておいていいのか？」

「だってお稲荷さん飛ぶの遅いし、今は一刻も早くみんなの無事を確認したいからね！」

「流石のあたしも不憫に思えてきた。
行くときもあれだったんだろう？」

「狐パパのライフは０だよ！」

「大丈夫だって！
こんな事で倒れてたら私の使い魔なんてできないよ！」

「なるほど、じゃああいつしか出来ないな」

「でしょ！」

フラグ回避できなかった。

○●○●○●

ベッドの上で目が覚めた。
どうやら俺はまだこの世にいていいらしい。
たっぷり１０分は生還出来たことに感動し、今まで寝ていた部屋の外に出た。
どうやら仮説本部の……アースラ？　の一室で寝ていたようだ。
しかしどこに行けばストーリーが進むのか分からないので、近くに居たお姉さんに聞いてみる。

『迷子のお知らせをします。
9本の尻尾を生やした稲荷くんの保護者の方。
艦内におりましたら至急ロビーまでお越しください』

放送された。
なんでよ。
数分経たずに、なのはさんが文字通り飛んでくる。

「もう！
何やってるのお稲荷さん、凄い恥ずかしかったんだから！」

「この年齢で迷子放送をされる俺の方が恥ずかしかったのだが」

すぐに腕を引かれて別の部屋へと連れて行かれた。
注目の的だったのだから仕方ないと言えば仕方ない。
因みにゆりかごだが、なのはさんが言うには結局宇宙空間に出たところを、待機していた他の艦が主砲の集中砲撃で爆破したらしい。

終わった。
何か知らんうちに長い1日がやっと終わった。
てかさ、幻を消す必要が無かったのなら俺が突入した意味ないじゃん？
俺ってばスカさんの格好で殴られて、スカさんと通信して吹き飛ばされただけだし。
あれ、スカさんが主な原因じゃね？
ぬっころす。

着いた一室は、プレートが掛けられていたが例の如く読めず。
中に入ると前回来た会議室に似ていたので会議室2と称する。

既にチビッ子達とヴィヴィオ、フェイトさんが居た。
そしてここは床は光っておらず、照明は天井から。
あるならこっち使えよ最初から。

「狐パパ、無事だったんだ！」

「おーヴィヴィオ。
チビッ子達も所々包帯巻いてるけど大丈夫そうだな。
俺は結局最後まで危害を受けたのは味方からだけだったのはやるせないが、何とか生きてるぞ」

だがその程度の傷、即座に治せんでどうする。
まだまだ修行が必要だなお前らも。
フェイトさんが一歩前に出てきた。

「稲荷、君が通信でスカリエッティと戦闘機人達を引きつけてくれたおかげで楽に捕まえられたんだ……ありがとう」

「その光景を見ていた俺はフェイトさんの事がサディスティッククリーチャーに見えたとです。
演説中くらい見守ってあげようよ。
フェイトさんもマッパになる変身シーン、見逃してもらったんだから」

スカさんをふっ飛ばした巨大な剣をこっちに向けてきたので黙る。

「お稲荷さん、改めて突然撃ち抜いちゃってごめんね？」

「なのはさん……ふん！」

柔らかい。
右手におさまる丁度いい大きさ。
揉んでみる。
良い弾力。

「ちょ、あっ……ん、え？」

「何やっとるかあんたはあぁぁぁああ！！」

「今日の出来事を体験した俺にもう怖いものはない。
宣言通りに無事に帰れたからなのはさんの胸を揉んでみた。
ティアナ、グーで殴るな結構痛いぞ」

「狐パパ……何でそこまでして死にたいの……？」

今の俺は何でもできそうな気がするんだ。
ティアナ、グーから蹴りに変えないで、もっと痛い。

「……もう、お稲荷さんったら何するの？
そんな事しちゃダーメ！」

人差し指を立て、メッていう感じに言ってくるなのはさん。
別にアイアンクローをされている訳でも、グーパンされた訳でも、
砲撃された訳でもない。
ただ注意をしてきているだけなのだ。
俺だけじゃなく、ヴィヴィオやチビッ子達も、えっ……という表情
でなのはさんを見ている。

「……違う。
なのはさんはそんな反応をしない。

クソッ、どうしてこんなことに。
ゆかりさん、早く梨花ちゃんを出せ。
梨花ちゃんに変わるんだ」

「勝手に人を多重人格者にしないでもらえるかな。
しかも2人とも私じゃないし……」

なのはさんの肩をガクガク揺さぶりながら言ってみた。
あながち間違いじゃ無さそうなのは何故だろう。

「……あ、そう言えば」

そんな事をしていると、1つの案件を思い出した。
思えばずっと、歯の間に肉が挟まったようなもどかしい気持ちになっていたのはコレのせいかもしれない。
故に、この問題は可及的速やかに解決する必要があると思う。

俺が真顔でそう切り出すと、みんなシリアスモードに入った。
なのはさんから手を離し、近くにあった1つの椅子に腰掛け、肘をついて手を口元で組む。
イカリのゲンドウスタイル。
重い口を開く。

「……俺のパンツが、もうそろそろ3日目に突入するんだ」

どうしてこうなった。

「稲荷くんがパンツを取り替えるのを忘れたからじゃないのかね。
あぁ、私の所にもちょっと近寄らないでもらおうか」

つまり、スカさんの犯罪と俺のパンツは同罪って事ですか。
てか着替えられなかったのはタンスを探す前に病院に行ったからで。
病院からはゆりかごに直行した訳で。
替える暇が無かったんだよ。

「そして独房なハズなのに2人押し込められるとかもうね。
せめて替えのパンツを置いて行って欲しかった」

「そのずっと履いてきた脱ぎたてほやほやのパンツを見ながら独房生活を過ごせと言うのかね？
ふむ、稲荷くんはなかなかに鬼畜な事を言ってくるね」

「どう考えてもスカさんの発言の方が俺の精神をガスガス削っていっています。
何気になのはさん、胸を揉んだこと怒ってたのかなぁ」

「そもそも何故、胸を揉もうと思い至ったのだい？」

「そこに胸があったからかな」

「クックック。
なるほど、真理だね」

世界は本当に、こんなハズじゃなかった事ばかりだ。

２０話（後書き）

コタツって魔王にも勝てるんじゃないかと思ってきた今日この頃。
また起きたら真夜中でした。
途中まで出来ていた文を読み返したら相当支離滅裂だったのでかなり朦朧としてたにちまいない。

チビッ子達の影が薄くなった。
でも基本誰かの存在感が薄くなっているのが奇行文クォリティー。
その内逆転するでしょう。

さて記念すべき２０話。
多分次がＳｔＳのエピローグ。
何故ならアニメも後日談がエピローグ。

見に来て頂きありがとうございました。

えぴろーぐ……？（前書き）

お稲荷様奇行文。

えぴろーぐ……？

スカさんの起こした事件が過ぎ去りある程度時間が経った。
今ではあの事件は、ジェイル・スカリエッティ事件。
通称ＪＳ事件と呼ばれている。
加えて小耳に挟んだ話ではＤＩＳ事件……つまり、大体稲荷のせい事件とも呼ばれているらしい。
誠に遺憾である。

『スカさんスカさん。
そう言えばゆりかご内のボムキングから青い菱形の石を拾ったんだけどあれは何？
また俺の死亡フラグじゃないよね』

『ふむ、それはジュエルシードと呼ばれるロストロギアでね。
ＰＴ事件時に管理局が押収したものを拝借したのだよ。
それ自体は巨大な魔力貯蔵器で、使い方によっては願いを叶えるとも伝えられている。
死亡フラグかと問われれば、その可能性は大いにあると言えるだろう。
理解できたかね』

『ドラゴンボールって事は分かった。
死亡フラグ発生する前になのはさんに一矢報いる為に使ってみる。
シェンロン出してみたい』

『使用する事で死亡フラグが発生するとは考えないのかね。
あぁそうだ、使用後の感想は是非聞かせておくれ』

こんな感じにスカさんとの関係も良好。
しかし俺は出れたものの、スカさんは相変わらず独房にいるのにどうやってメールしているのか。
まぁ天才には、こんなこともあろうかと！　な品がいっぱいあるんだろう。

そんなのんびりした日々を送りつつ、六課の修理が終わり、俺の部屋もようやく元通りになってきた頃。
ようやく教えてもらえたなのはさんのアドレスにより、登録件数が3件になった俺の携帯にスカさん以外の着信が。
見てくれよこの画面。
3回スクロールができるくらいになのはさんで埋まってるんだぜ。
因みに3回スクロールしたら大体スカさんがいる。
なのはさんとは毎日会ってるハズなのだが。
とりあえず朝シャンした後の尻尾の手入れに手間取っていたので30分経ってから中身を見てみる。

『今日はとても大事な集まりがあるから、9時に六課の集会場に集合してね！
きっとお稲荷さん、驚くと思うな』

今、8時58分。
むしろ時間が無いことに驚きです。

「狐パパ～どうしたの？」

「何故ここにいる。
それはともかくこれを見るがいい。
9時に集合なのに後2分しか余裕がないとかムリゲー過ぎる」

「あ、ヴィヴィオと話してる間に右上の時計が9時になったよ！」

お、お前がラスボスだったのかヴィヴィオ……！！

とにかく急ぐぞ。

今ならまだ焼き土下座で勘弁してくれるかもしれん。

○●○●○●

「いいかヴィヴィオ。

集まりと言うからにはきっとみんなが並んでいるはずだ。

仮にも部隊だしな。

俺達は扉を開いたら何食わぬ顔でその列の一番後ろに並ぶんだ。

いつからそこに？　え、最初から居ましたけど作戦と名付けよう」

「分かったよ！

狐パパのネーミングセンスが皆無って事が」

よろしい。

では、オープン・ザ・セサミ。

「本日をもって、機動六課は任務を終えて解散となります」

「マジでか。

いきなりホームレスとか勘弁して欲しいんですけど」

「あ、お稲荷さん！

9時に集合って言ったでしょ！？」

「狐パパ……開始と同時に自分で作戦終わらせてどうするの……」

思わず演説していた八神に突っ込んでしまった俺は悪くない。
だって六課が無くなるイコール俺の行く末真っ暗。
俺の部屋ってどうなるんでしょうか。

「もう……
ほら、2人共こっちに並んで！」

「はーい」

「うい」

なのはさんの隣に並ぶ。
八神の演説が再開される。

「みんな、次の部隊でも頑張って！
では、解散！」

拍手と共に、散り散りになっていく今まで整列していた六課の隊員達。
俺さ、並んだ意味なくね？
10秒とこの場所に居なかったんだが。

「で、何でお稲荷さんは遅れたの？」

「ヴィヴィオもカウントしろヴィヴィオも。
仕方ない、語ってやろうその理由。

ヴィヴィオ。
約束とは？」

「破るためにあるー！」

「時間とは？」

「遅れる為にあるー！」

「よくできました。
なのはさん、この子はワシが育てた」

あの、掴まれた頭がメキメキ言ってるんですが。

「全く……ヴィヴィオはお稲荷さんの影響を受けちゃってるね……
私が再教育しようかな」

「なにそれこわい」

ヴィヴィオ、もっと言ってやれ。

「あ。
それはそうとしてお稲荷さん。
フェイトちゃんやはやてちゃん達と一緒に、訓練室に行ってもらえる？
私はギンガとフォアード陣を呼びに行ってくるから」

「分かった。
という訳だヴィヴィオ。
フェイトさん達と一緒に訓練室に行ってこい。

俺の事を聞かれたら、明日に向かって走っていったと言っておいてくれ」

ガチャンって音がした。
何の音かと振り返る。
俺の首輪から伸びた鎖を、笑いながらフェイトさんに渡しているなのはさんがそこにはいた。

「ナンテコッタイ」

「じゃあ稲荷、行こうか」

フェイトさんに引きずられ、俺は隊長・副隊長陣と共に訓練室へと連行されていった。

○●○●○●

訓練室はいつもの森や市街地とはうって変わり、桜が咲き誇る素晴らしい景観の地へと変貌を遂げていた。

「なるほど。
また処刑が始まるとビクビクしていた過去の俺を笑ってやりたい。
今から花見が始まるんですね分かります。
早速ピクニックシートを創りだそうか」

「いや、ここでリミッターを外した最後の模擬戦をなのはは行うよ

うだ」

「なるほど。
楽しい花見が始まるとワクワクしていた過去の俺を笑ってやりたい。
今から惨劇が始まるんですね分かります。
早速この場から逃げ出そうか」

シグナムさんのセリフで現実を見つめるようになった俺。
いそいそと出口へと向かう。
鎖をグイッと引かれる。
グエッとヒキガエルのような声が出る。

「ふむ、なかなかに癖になりそうだなこれは」

「今すぐその手に持ってる物から手を離してください」

しげしげと鎖を眺めていたシグナムさん。
頼むからこれ以上Sは増えないでください。
そうこうしている内に、なのはさんとギンガに連れられフォアード陣も到着。
鎖はなのはさんの手へと渡った。
そして事情が説明をされる。

「じゃあ六課としてのチビッ子達の最後の任務を言い渡す。
オペレーション・俺の命を大事に。
隊長陣はリミッターが外れたとか言ってたから多分サイヤ人になる。
だからキャロとエリオはフュージョンでキャリオになれ。
ティアナとスバルはぐぇぇ」

「お稲荷さんが何か言ってたようだけど気にしないでね。

さぁ、折角の卒業、折角の桜吹雪なんだから、湿っぽいのは無しにしよう！
全力全開、手加減無し。
機動六課で最後の模擬戦！」

「だからその模擬戦中の作戦が俺の命を大事ぐぇぇ」

引っ張るのやめて。

「全力全開って……シグナムっ！　聞いてないんだけど！？」

事態についていけてないのか、慌てるフェイトさんが問い詰めている。

「やらせてやれ、これも思い出だ」

「ヴィータ、なのはっ」

「固いこと言うなよ」

「心配ないない、みんな強いんだから！」

「マジでか。
ヴィヴィオ、俺ってば強い？」

「夢でも見てるの？」

最近、ヴィヴィオの何気ない一言が胸に突き刺さるんだ。
じゃれあっていたら、みなさんもう戦闘準備が完了しているようで。
八神とギンガが手を上に振り上げ、高らかに宣言した。

「レディー・ゴ――――――――――！！」

○●○●○●

「何でだよ。
作戦名は俺の命を大事にって言っただろうが。
何で開始と同時に俺に両陣営からの集中砲火が来るんだよ」

「それでも狐パパが無傷ってある意味凄いと思う」

だってヴィヴィオよ。
非殺傷で怪我したらもはやそれは非殺傷ではなかろう。

「あ、お稲荷さんここにいたんだ」

なのはさんが現れた。
因みにここはどこか。
六課裏の林の中、いつぞや俺が麝になって死にたくなった妄想をしたあそこだ。
模擬戦が終わった後にひっそりとやってきた。
辺りは暗くなり始めている。

なのはさんはそろそろ二次会が始まるから、探しに来たのだろう。
ゆっくりとこちらに近付いてくる。
だが俺の数メートル前で立ち止まった。
どうしたのかと思っていると、顔を俯かせて聞いてきた。

「ねぇ、お稲荷さん。
突然変なこと聞くようなんだけどね……
六課は解散しちゃった訳だけど、私はこれからも管理局に残るんだ。
で、でね……お稲荷さん、良かったらこれからも、私と一緒に居てくれないかな？」

「良かったらも何もなのはさんのヒモになっている状態で放り出されるとか何そのプレイ。
でも出来ればアルフさん的ポジションがいいです。
もう美人の嫁さんとかいいから怠惰な生活を送りたい」

「そ、そっか！
でも怠惰な生活なんてダメです。
今後もしっかり鍛えていくからね！
お嫁さんはもうちょっと我慢しなさい」

なんでさ。

「ところで、こんな所で何してたの？」

「なのはさんに一矢報いる方法をヴィヴィオと検討しあってた。
後模擬戦の理不尽さに嘆いていた。
技術提供スカさんのおかげで何とかなりそうだぜ」

「非常に何とかなって欲しくないんだけど……

今度は何するの？」

「ん、ドラゴンボールに願う。
使用後の感想も頼まれてるしね。
普通は7個揃えるのに1個で十分とか凄いね。
丁度なのはさんとヴィヴィオしかいないし、やってみようか」

「え、ちょ……待って」

さぁいくぞヴィヴィオ。
お前と俺で数時間悩んだ答えを今ここに出そう。

「目覚めろドラゴンボール。
いでよシェンロン。
なのはさんの黒歴史を見てニヤニヤしたいです」

「したいでーす！」

「それ……ジュ、ジュエルシード！？」

「ヴィヴィオ、何で今まで黙ってたよ」

「ヴィヴィオは空気を読めるから」

俺達3人は、光に包まれた。

「お、あれがシェンロン？
黒いな。
てかキショイな。
もっとあからさまに竜でかっこよかった気がするが……
あんな毛玉っぽかったっけ」

「狐パパ、ここどこ？」

「六課の裏の林ではない事は確定的に明らか。
どう見ても市街地だな。
何故シェンロンを呼び出しただけでこうなる」

「お、お稲荷さん、あ、あれ……」

「どうしたなのはさん、呆けた顔して」

「こ、今度は何なの――――――！？」

「何なのーってそれは俺が聞きたいが。
すげーななのはさん、口を動かさずに喋るとかいっこく堂レベル」

「狐パパ、後ろ、後ろ」

「やめてよその志村！　のノリ。後ろ？　……わぉ」

えぴろーぐ……？（後書き）

ＳｔＳが完結。
ＳｔＳが完結。
大事なことなので2回言いました。

感慨深いものです。
お付き合いしてくれた方々は本当にありがとうございました。
書き終わって気付いたのですが、海鳴に行くミッションってドラマＣＤだったんですね。
その辺も何か書けたらいいなぁと勝手に妄想しております。

なのはさんフラグが周りで囁かれているんですが、ドウシヨウカナーまぁ、ノリで書いている作品なのでノリで全てが解決されるでしょう。

では、えぴろーぐ……？でした。
またのお越しをお待ちしております。

え、最後の？
君が何を言っているのか分からないよ。

おかわり　1杯目（前書き）

いつでもどこでも奇行文。

おかわり　1杯目

「リリカル！　マジカル！
……ぷっ」

分かった分かった。
謝りますからその杖こっち向けないで。
あの後、ヴィヴィオの指摘通り後ろを見たら、なんと幼女なのはさんが居た。
なのはさんなのは名前を聞いたから間違いない。
因みにシェンロンもどきは、リミッターのとれたスーパーサイヤ人なのはに勝てるはずもなく。
いつもの砲撃で吹き飛ばされた後に、幼女なのはさんに封印された次第。
その時の封印の呪文が、さっきのリリカルだった訳で。

「ヴィヴィオ。
俺、なのはさん必勝法を思いついた。
なのはさん限定にはなるが、どんな魔法を使う時でも必ずリリカルマジカルを言う呪いをかければ魔法自体使えなくなるはず」

「えげつなさに磨きがかかってきたね、狐パパは。
全然そこに痺れないし憧れない」

「というか、それやったらお稲荷さんの尻尾の毛、1本ずつ抜いていくの」

何怖いこと言ってるのこの人。

「あ、あの……」

「あなた達は誰ですか？」

幼女なのはさんと、その肩にいたイタチが話しかけてきた。

「幼女なのはさんはともかくイタチが喋ったことに驚きそうになったが、よく考えたらザフィーラさんという前例がいた。
俺達の事はそうさね……ドラゴンボールの被害者と言えば分かるかね」

「全く分からないの」

幼女なのはさんは理解力に欠けるらしい。
嘆かわしい事だ。
結局、本人繋がりでなのはさんが事情を説明することとなった。
俺とヴィヴィオはお役御免らしい。

「そこはかとなく理不尽さを感じるがどこもおかしくはなかった」

「というか狐パパが説明したら誰も理解できないと思うよ。
それで、ここはなのはママの子どもの頃の世界なの？」

「あの幼女がとち狂ってなければそうなんじゃね？
幼女ななのはさんか……
おい、待て。
幼女のなのはさんだと？
ならば今のうちに俺に逆らえないように躾をしておけば、明るい未来が待ってるじゃないか。
やはりスカさんの言うことは格が違った。

ほら、幼女なのはさん、こっちにおいでー怖くないよー。
なのはさん、こっちに来ないでー怖いよー」

「もう！
状況が状況なんだからお稲荷さんも少しは真剣に考えてよ！」

この上なく真剣に考えた結果を実行したら怒られた。
だが俺のライフカードはまだ尽きていない。
任せろ、となのはさんを宥めそのカードを切る事にする。

『という訳で青い菱形のドラゴンボールを使ったら過去に戻ったようだ。
へるぷ』

『どういう訳か分からない上に誰だい君は。
私のこのアドレスを知っている……過去に戻った？
なるほど。
ではこのアドレスは未来の私が君に教えたという事かね』

流石スカさん、頭のキレが違う。

『願いが叶うってスカさんに聞いて、なのはさんの黒歴史が見たいと願ったらここにいた。
反省も後悔もしていない。
そして私は稲荷』

『願いが叶う……青い菱形の……
もしかしてジュエルシードの事かね。
ふむ、だとしてもあれは願いをねじ曲がった方向に叶えてしまう物のハズなのだが』

何でそんなものを使わせて感想を聞こうとしたし。

『あぁ、性格が歪んでいそうな君が願ったものはそれ自体が歪んだもの。
更に歪んで願いを叶えるジュエルシード。
2つの負が掛けられ、プラスに転じたと言った所か』

『分かりやすく言うと？』

『稲荷くんが闇系の物を持つと最強に見える』

『把握』

「俺は最強だった」

結論を出したのにグーパンとか。
結局事情を説明したらアイアンクローをされ。
スカさんに連絡を取ったって言ったら射撃され。
あまりの理不尽さになのはさんの胸を揉んだら砲撃された。

「何がダメだったんだろう」

「分からない狐パパが凄い」

褒めるなよ。

で、今後どうしようって話になった。

「野宿かなぁ」

「布団で寝たいでござる。

なのはさん、財布ないの？」

「ミッドのお金はあるけど、流石に休暇でもないのに円は持ってないなー」

「ヴィヴィオは狐パパの尻尾で寝るからどこでもいいよ！」

「あ、ヴィヴィオ、私もいいかな……」

つまり俺だけ冷たい地面で寝ろと。

「あ、あの！」

「ん？　どうした幼女なのはさん」

「その幼女なのはってやめてくれませんか？

なのはでいいです。

それはともかく、助けてくれたお礼にウチに泊めてもらえないか、

お父さんとお母さんに聞いてみますか？」

なのはさんの両親だと？
ワクテカが止まらないじゃないか。

「あれ？
お稲荷さんってお父さんとお母さんに会ったことなかったっけ……
翠屋には一緒に行ったよね？
六課のみんなとロストロギアの確保に来たときに」

「ペットは入店禁止なの、とか言って外に締め出した人の言葉とは思えない。
あれを行ったとカウントしていいものなのか。
入り口でダンボールに入って体操座りしてただけだぞ俺。
アイフルのチワワの気持ちがよく分かった。
どれだけチビッ子達が甘味を食べてる様を見て羨ましかったか分かるまい」

「あのシュークリーム美味しかったよー！」

「良かったねーヴィヴィオ」

エリオに続いて憎しみで人が殺せたら。
因みに他に行く宛も無い俺達は、結局なのはの案を飲むことにした。
そして幼女なのはさんは呼び捨てにすることに。
2人ともなのはでややこしいしね。
しかし何か凄い優越感である。

○●○●○●

「こ、ここが地球版のゆりかごか。
なるほど、ラストダンジョン的なオーラがビシビシ出てるぜ。
いつスカさんが現れてもおかしくないな」

「十分におかしいよ。
ここは私の家なのに何でスカリエッティが出てくるの。
厳密には私の家でもないけど」

「なのはママのパパとママが居るんだね！」

「まて、今気付いた。
ヴィヴィオ、可及的速やかに俺の呼称を稲荷に変えろ。
なのはママと狐パパは塩素系と酸素系の洗剤のような物。
混ざり合えば地獄の協奏曲を奏でることになる」

「だが断る」

ネタを教えた過去の俺をぶっ飛ばしたい。

「いいんじゃない？
私とお稲荷さんがパパとママで。
ちゃんと私が説明するから」

なら別にいいが。
ブツブツ言いつつも家の門をくぐる。
広い庭。
池付き。

忌々しい。

「おかえり」

「あっ……お、お兄ちゃん……」

先にくぐったなのはが、黒髪イケメンの男に話しかけられていた。
黒髪のイケメンの男に話しかけられていた。
ザフィーラさんとアルフさんの時以来だが、大事なことなので2回言いました。
なのはの言葉を聞く限り兄貴らしい。

「こんな時間に、どこにお出掛けだ？
それと……こちらの方々は？」

「まぁ落ち着けリオン」

「誰がリオンだ」

違ったようだ。

「あ、お兄ちゃん、あの、その、えっと……」

なのはが焦りだす。
いくらなのはさんの幼少期とは言え、流石に昔からこんなんじゃなかったようだ。
ちらりとなのはさんを見ながら思う。
いい笑顔をされて恐ろしかったので目をそらす。

「私達に関しては、私から説明をさせて頂きます。

お稲荷さん、ちょっと庭の隅で待っててね」

「楽しそうだなぁ。
暖かそうだなぁ。
俺、いつまでここに居ればいいのかなぁ。
あのイタチでさえ家の中でみんなにちやほやされてるのになぁ。
せめて家の中に入れてくれないかなぁ」

なのはさんの家のリビングは、庭に面している部分がガラスドアになっているようでして。
庭にいる俺からは、中にいるみんなの楽しそうな姿が見えるわけでして。
なのに俺は、外でまたダンボールに入って体操座り。
六課での生活は肉体的に辛かったが、どうやらここでは精神的に辛いことが多くなりそうだ。

「いいもんね。
スカさんとメールして時間潰してやるもん。
……ん？」

スカさんに『（´ω`）』って送った所で人の気配がした。
顔を上げる。

「……君が稲荷くんかい？」

「はぁ、そうですけど」

「俺はなのはの父親の士郎と言うんだ、よろしく。
大体の事情はなのはに聞いたよ。
あぁ、君の主のなのはにね。
それであのヴィヴィオって子、可愛いね」

「あの子はワシが育てた」

ネタ的な意味で。

「うん、うん。
それでね、なのははママって呼ばれてて、君が狐パパって呼ばれてたんだ」

「はぁ」

「そこで俺は思ったんだ。
あぁ、決闘しないとな、って」

「はぁ……ん？　何だって？」

「さぁ、行こうか」

なのはさん。
全然説明できてないじゃないか。
俺の死亡フラグがビンビンにおっ立ったぜ。

「クソッ、やっぱりなのはさんの親って事か！
ヴィヴィオー！　なのはさーん！　助けてー！」

「なのは達はお風呂に入ったよ」

「俺も入るー！」

「ハッハッハ。
そんな事をしたら、俺は真剣で稲荷くんの相手をしないといけないじゃないか」

真剣と書いて、マジとは読まない。
結局有無を言わさず道場に連行されてボコられました。
道場もあるのかよこの家、妬ましい。
そして士郎さんの動きは人外染みていたとだけ言っておく。

「お稲荷さん、大丈夫？」

「狐パパの頭が大仏みたい！」

「何、大丈夫さ。
なのは達が言う非殺傷とか言うものはできないが、木刀だし手加減はしたからね。
連撃はしたが」

「私の砲撃じゃ、こんな感じにならないから何か新鮮だね」

「いつもは黒焦げだったもんね！」

「そ、それはそれで凄いね」

「まぁ、お稲荷さんなら5分後には復活してそうだから大丈夫かな」

「大丈夫だ、問題ない」

「ヴィヴィオ……何キリッとした顔で言ってるの……
やっぱり再教育しようかなぁ」

「狐パパ、ヴィヴィオを助けて！」

返事がない。
ただの屍のようだ。

おかわり　1杯目（後書き）

海鳴出張任務が書きたかった。
書いたけど状況が他の方のＳＳでしか見たことなかったので分からなかった。
結果妄想力不足につきまだ封印中。
いつか投下したい。
更にそこからこれを書き始めたのでこの遅さ。
反省はしていない。

途中のヤツの翠屋での待遇はその封印中の物から。
１０万ヒッツ記念も書いてみたいけど、そのうち。
士郎さんの一人称が分からない。
なのは家のリビングの様子も分からない。
でかいカーテンがあったので勝手にガラスドアと妄想。

さて、奇行文も誰かがおかわりしました。
１杯目です。
無印ってまだスカさんほど重くはないのねーと感心しつつ。
どうぞ召し上がってください。

おかわり　2杯目（前書き）

街中奇行文。

おかわり　2杯目

目が覚める。
知らない天井だ。
道場で気を失ったはずだが、どうやら部屋に運ばれたらしい。
それは嬉しいが、仰向けにされたせいで尻尾が痛い。
ご丁寧に時計も置かれているので見ると5時半。
早過ぎる起床だ。
寝かされていた布団から起き上がる。

「ん……」

俺の右隣りの布団になのはさんが居た。
おいおい。
何で俺の隣に人型の爆弾が置いてあるんだよ。
起爆数分前って感じだぞこれは。

「あ、狐パパ起きた？」

左隣には今まで気付かなかったが、ヴィヴィオが寝ていたようだ。

「どうしてこうなった」

「シローさんが運んでくれたんだ！」

「あの人外か。
見えない動きは多分感覚的に俺の神速と同じ感じだが、壁とか天井も足場にするとか。
もっと重力仕事しろよ。

右パンチ放つ間もなく終わったし。
まぁ……あの父親にしてこの人ありってのは分かったけど」

まぁいいや。
ヴィヴィオ、俺尻尾が痛いからほぐしついでにちょっと散歩してくる。

「その姿で外に出て大丈夫なの？」

「キョドるからダメなんだ。
堂々としていれば何も問題はない」

「不審者から変態になるだけだと思うな」

「過去の偉人は言った。
変態じゃない。
仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ。
という訳で行ってくる。
３０分程で戻るから。
なのはさんが起きたら、３０分間トイレで頑張ってる事にしておいて」

「はーい！」

うむ、いい子だ。
なのはさんを起こさないようにそっと部屋を出て、久方ぶりの地球を堪能するために歩き出した。

○●○●○●

いい朝だ。

「おや、綺麗な尻尾だねぇ」

おばあちゃんも。

「お、坊主いい尻尾持ってるな！
どうだ、狐なら油揚げ好きだろう？
豆腐と一緒にどうだ！？」

店先のおいちゃんも。

「狐さんだー！」

サッカー少年達も。

「みんなが優しい。
こんなに平穏な時間を送れたのはいつ以来だろうか。
ありがとう、みんな、ありがとう。
そこのサッカー少年、俺の気分は今最高潮だから俺自作の炎のクリスタル花ｖｅｒ．変化をあげよう。
前に頑張って作ったものだから壊さない限り消えないぞ」

「うわ、綺麗……
ありがとうございます！
あ、じゃあお返しにこれあげます。

さっき拾ったんですよ」

おや、ドラゴンボールじゃないか。
結構身近に落ちてるのね。
スカさんが言うには俺が願えばちゃんと叶うらしいし。
折角なのでもらっておく。
サッカー少年は今日試合があるらしく、練習に向かうため走っていった。

「頑張れよ少年！
あ、後おいちゃんも今度は絶対金持ってくるからな。
その時は極上の油揚げを頼む」

「おう！
いつでも来な、狐の兄ちゃん！」

主食の当てもできた。
後は金をどう稼ぐかだが……なんとでもなるだろう。

「いい感じに尻尾もほぐれてきたし、気持ちのいい朝を迎えられた。
そろそろ帰るか……なのはさんも起きてそうだし」

「あ、お稲荷さん。
どうだった？」

「あぁ、気持よかった。
こんなに清々しくなれたのは本当に久方ぶりな気がする」

「そ、そうなんだ……
ひどい便秘だったんだね」

何の話をしている。

「あの、それでね。
ちょっと相談したいことがあるんだけど……」

「なんぞ？」

聞けば、今日はなのはさんのお父さんがコーチをしているサッカーチームの試合があるんだとか。
そしてなのはさんには、この時に良くない思い出があるんだとか。
介入して、その惨劇を回避するべきか悩んでいるらしい。

「具体的にどんな惨劇があったのかにもよる。
なのはさんが初恋相手に告って、振られた腹いせに砲撃をかましたなら相手のためにも止めるべき」

「私を、何だと、思って、いるかなぁ？」

頭が割れそうに痛いです。
離しテ！

「そうじゃなくて、ジュエルシードが発動しちゃうんだよ。
サッカーチームの子が持っててね……
私、気付いてたんだけどそのまま放置しちゃったんだ。

そのせいで周りみんなに迷惑をかけることになって……
結果的にジュエルシードを集める覚悟がついたんだけど、どうしても忘れられなくて」

「ジュエルシード？
どっかで聞いたことあるが思い出せん。
まぁサッカー少年が被害に会うというのは見過ごせぬ。
何とか介入して止めようか」

「何で覚えられないかな……
ジュエルシードはほら、お稲荷さんがドラゴンボールって呼んでるやつだよ。
やっぱり、被害に会うのは見過ごせないよね！
じゃあ先回りして、貰っちゃおうか！」

「あ、ドラゴンボールなら今朝貰ったわ」

「お話聞かせて？」

助けテ！

「あ～あ、お稲荷さんから目を離すとすぐそういう事するからなぁ。
もういっその事、四六時中一緒にいようか。
あ、それだと、お、お風呂も一緒に入ることに……」

俺の関与しないところで勝手に俺の死亡フラグ立てるのやめてくれませんかね。
しかしこれでなのはさんの言う惨劇は回避されたと。
時になのはさん。

「どうしたの？」

こう、昔の記憶に俺が入ってきたりしてない？
後はこの後起きる予定だった惨劇がもう記憶には無いとか。

「あ、そう言えば全然そんな事はないね……
なんでだろ？」

「スカさんから聞いた。
何でも過去に起こった事はそのまま未来に反映されるんじゃなく、俺達が居た未来とは別のパラレルワールドが出来るだけなんだと。
だから、既にここはなのはさんの過去であり過去じゃない。
俺達が未来に戻っても、そこは今日起きるはずだった惨劇が起きた世界らしい。
つまりここは過去というよりもう１つの世界。
この言い方厨二っぽいね。
嘆かわしい」

「ちょ、な、何でお稲荷さんがそんな事覚えていられるの！？
スカリエッティの件は後で問い詰めるとして」

「テイルズのマクスウェルもなりきりダンジョンの小説で同じ事言ってたから理解できた。
３０分は同じ場所読み返さないと分からなかったけど。

凄いねスカさん、もはやマクスウェルレベル。
エターナルソード無くてもあの人単体で時間移動できるんじゃなかろうか」

後、スカさんとメル友になってるのは許してください。

「という訳だ。
未来に影響は出ないし、なのはさんの黒歴史を一通り堪能したら帰ろう。
ここのなのはにネタを仕込んでもどうやら俺に恩恵は来そうにないし」

「動機が不純だよ……」

元々それが望みだったしね。
俺が願わないと帰れないから、黒歴史見るまでは帰らん。
泣いて許しを乞うがいい。
……そういやヴィヴィオは？

「ご飯食べてるんじゃないかな？
さっき、狐パパはトイレで頑張ってるから狐パパの分のおかず貰うね！　って言ってたし」

ちょ、待てよ。
俺のおかずが無いとか死活問題。
すぐにリビングへと駆け出す。
ドアを開ける。
なのはが着替えをしていた。

「お邪魔しましたー」

何か騒いでいるが無視。
次のドアを開ける。
なのはのお兄様が居た。

「なのはが、覗きが出たと騒いでいるのだが？」

「人違いです。
失礼しましたー」

ドアを閉めて駆け出す。
てかリビングどこよ。
再び彷徨いだしたら廊下でヴィヴィオとばったり。

「あ、狐パパ！」

「ヴィヴィオ！
俺の飯は無事か！」

「はい！」

「はいって、これゆでたまごやないか。
坂東にでもなれと？」

せめて塩か醤油持ってきてよ。
てか、飯はこれだけ？

○●○●○●

色々あったもののグダグダと1日を過ごし、夜になった。
試合観戦から帰ってきたなのはの様子と、別段騒動が起きなかった事からやはり惨劇は完全に回避されていたようである。
俺の飯がゆでたまごのみという惨劇は回避できなかったが。

そして今は晩ご飯。
みんなでテーブルを囲んでワイワイ。
俺は床で青森りんごのダンボールを逆さにして1人食べてます。

「六課に居た時も思ったんだけどさ、何でみんなとご飯食べに来て1人で食べてるんだ俺」

「そこに席が無いからかな」

黙れ眼鏡。
何ティアナと同じこと言ってやがる。
てかいつの間にそこにいた。
前に俺の席を奪ったのも眼鏡だったんだよ。
眼鏡素手で触って指紋でギトギトにしてやろうか。

「眼鏡じゃなくて美由紀だよ!?
そして指紋は勘弁してください」

「狐パパ、ヴィヴィオもそっちで食べていーい?」

「あ、じゃあ私もお稲荷さんとヴィヴィオと一緒に食べようかな。
なんか、本当に家族になったみたいだね!」

「ハッハッハ。
なぁ恭也、なのはは将来幸せになりそうだなぁ」

「そうだな父さん。
稲荷くんには感謝しないとな」

本当にそう思っているのなら今すぐに手から力を抜いてください。
箸がミシミシ言ってるので。
あ、ヴィヴィオとなのはさん。
流石にダンボール1つじゃ3人は厳しいのでまた今度ね。

「ぶー」

「ぶーじゃねーよ。
お前が俺をパパと呼び、なのはさんをママと呼ぶ限り俺の平穏はなのはさんのママさんが居る時じゃないと訪れない」

「あらあら、桃子でいいわよ?」

にこやかに笑ってはいるがこの人がヒエラルキーの頂点に君臨しているのだから油断できない。

「だがイタチがそっちで食べてるのは気に入らんな。
こっちこいや」

「フェレットだ!」

何人前で喋ってる訳?
動物が喋るとかお前化け物と思われるぜ?

「妖怪の権化とも言えるお稲荷さんが何を言ってるの。
というか私の事を説明したら、魔法の事を話すのは仕方ないでしょ？」

なるほど。
だがそれはイタチがそっちで食べている理由にはならん。
こっちこいや。

「稲荷さん、不快な思いをさせてしまってごめんなさい。
でも、ユーノ君は私がこっちで食べさせてあげたかったから……」

「ユーノ君？
あぁ、なのはさんがホの字の人か。
あの人って人間じゃなかったっけ。
てか、こんないい子があんな風になっちゃうのかぁ……」

ちらっ。

「お稲荷さん、後で訓練しようか」

「久々過ぎて俺の絶望感がハンパない。
だが残念、ここには訓練室はないのだー」

「けど残念、封時結界っていうので魔法を使っても大丈夫な空間を作れるからいくらでも本気出せるんだ」

「わぉ」

それなんて封絶。

「じゃあお稲荷さんは久々なので耐久訓練を。
なのはちゃんは魔法訓練を開始します。
なのはちゃん、お空にバインドで縛ったお稲荷さんが浮いてるの見える？」

「はい！」

「何故なのはがいるし。
そして俺が縛られてるし。
耐久訓練って響きが地獄からの呼び声に聞こえてならない」

「私が教導官してるって教えたら、指導して欲しいって言ってきたんだ。
じゃあお稲荷さんを標的に、魔法を放ってみるよ！
まずは私がお手本を見せるから」

「くそ、やめろ、離せショッカー！！」

「ディバイーン……バスター！！！」

アッ――――――――――――――――！！

「じゃあなのはちゃん、やってみて」

「はい！
ディバイーン……バスター！！」

アッ――――――――――――――――――！！

おかわり　2杯目（後書き）

書きためていた部分を少し訂正と追記して投下。
なんかサザエさんみたいな感じでほとんどが家の中の話な罠。
無印にした意味が無い。
その内多分外に出ます。

しかしＳｔＳより無印って書きにくいんですね。
シリアス度合いが低いから？
ぬ～ん、分からん。
てか無印時代の高町家で六課の話をするとシュールに感じるのは俺だけでしょうか。

後、登場人物が3人超えると難しいなんてものじゃない。
飯時なんて6人と1匹。
書いてる自分は分かりますが、読んでくれている方々は分かるのだろうか。
なのはさんとなのはがややこしすぎる。

まぁそれはともかく。
おかわり2杯目です。
ご賞味頂きありがとうございました。

おかわり　3杯目（前書き）

喫茶『お稲荷』

おかわり　3杯目

「平凡な……小学3年生だったハズの私……高町なのはに訪れた突然の事態……
受け取ったのは……勇気の心……
手にしたのは……魔法の力……
魔法少女……リリカル……なのは……始まります……
んふふ……」

「すげえ寝言だなおい。
過去の自分を見て何か思うものがあったのだろうか。
ヴィヴィオ、録音は完璧か？」

「うん！
映像付きー！」

「素晴らしい。
まさかなのはじゃなくなのはさんが黒歴史を掘り返してくれるとは。
これをネタに今度ゆすろう。
決して昨日の処刑の腹いせではない。
てか何で昨日はあんな事になったんだ」

「狐パパはそれが分かってないからああなったんだと思う」

マジでか。

「まぁ考えても分からないから今はいいや。
ところでさ、昨日はスルーしたんだけど何でなのはさんとヴィヴィオがこの部屋にいるのさ？」

「なのはママがみんな一緒って言ってくれたんだ！
だから3人同じ部屋なんだよー」

「また余計なことをしてくれたな。
ギャルゲーの主人公なら起き抜けに胸揉んでポッ、略してモミポが発生するが俺が同じことをしても悲惨な未来しか見えない。
知ってるか、昨日の昼になのはさん、木刀で素振りしてたんだぜ？
フラグじゃねーよな、あれ」

因みになのはに教えるのが終わったら、士郎さんと手合わせみたいなのをしてたのも見たけど。
決して射撃砲撃グーパンアイアンクローに飽きたのではないと切に願いたい。

そうこうしているうちに朝食の時間となった。
なのはさんは幸せそうな夢を見ていたので放置することに。
今日は清々しい朝の散歩に行くことが出来なかったが、それ以上の収穫があったのでよしとする。
ヴィヴィオと共にリビングに行くと、テーブルを拭いている桃子さん。
鼻歌混じりで上機嫌である。

「あら、稲荷くん丁度良かった。

料理を運ぶから、布巾でテーブル拭いておいてもらえない？
稲荷くん専用の机もお願いね」

「ダンボールに水分とか正気の沙汰とは思えない。
てかこれ、俺のマイデスクで決定なの？
いや確かに六課に居た時もこれがマイデスクだったけどさ」

文句を言いつつもテーブルを拭く。
マイデスクは拭くとフニャフニャになるので、炎のクリスタル花ｖｅｒ．変化をインテリアとして設置して準備完了。
料理を並べ終え、いざ茶碗にご飯をというところで続々と高町家が集まりだす。
みんな席に着いたところで、頂きます。

「そういえば、君の主のなのははどうしたんだい？」

居ないことに気付いたのか、士郎さんが問いかけてくる。

「魔法少女だった頃の自分を夢見てニヤニヤしてたんで放置してきました。
時の流れとは残酷ですね。
しっかりと寝言を録音してきた次第」

「うぅ、他人事とは思えないから笑えないの……」

そりゃそうでしょう、あなたの未来の姿なのですから。

「そういや、母さん。
俺となのはは今日出掛けてくるよ」

「あら、どこに？」

「月村家まで、な。
なのはがすずかちゃんにお誘いいただいてるらしくて」

「お茶会しようって誘われたの！
ユーノ君も一緒だよ！」

「狐パパ、お茶会ってなーに？」

「そんな卑猥な言葉を覚えちゃいけません」

お兄様にガッされた。

「ヴィヴィオとお茶会はどう考えても水と油の関係だから。
どっちかっていうとお前は屋台でラーメンかっ食らってる方だから」

あ、油で思い出した。
桃子さん、この姿でも出来るアルバイトってないかな？

「どうしたの？　突然……」

「油揚げを買いたいのです。
文無し故に1枚も買えない」

桃子さんはう～ん、と悩む。
時折士郎さんと相談もしている。
やはりこの姿で受けれるバイトなんてそうそうないのだろう。
3分はそんな状態だったが、やがて顔をあげてこちらを見てきた。

「じゃあ、稲荷くんには私達が働いている喫茶『翠屋』でウェイターをやってもらっちゃおうかな」

「ペット入店禁止からなんという格上げ。
素晴らしい、流石桃子さん素晴らしい」

「ヴィヴィオもー！」

「ふふ。
じゃあヴィヴィオちゃんも雇っちゃおうかしら」

「やったー！」

えぇ、やりましたとも。
これでお揚げは確保できたも同然。
人類にとっては小さな一歩だが、俺にとっては偉大な飛躍。
じゃあ飯も済んだし、店の方へ行こうかという士郎さんの声を皮切りに、リビングにいたメンバーが各々の行動を開始する。
俺達は士郎さんと桃子さんを先導に、高町家を後にした。

「あ、そういえば眠り姫はどうするんだい？」

「なのはさん？
あぁ、メール送っとくか」

『俺とヴィヴィオ、職を得た。
ご飯はテーブルの中央に、ゆでたまご。
ネ兄！　脱ニート！』

そーしん。

ちゃくしん。

『……えっ？』

○●○●○●

初めてとはいえ結局は飲食店。
注文を取って、料理を運び、皿洗い。
主な仕事はそれくらいである。
溶け込み力ＥＸな俺にとっては別段難しいことではない。
午前中の業務を難なくこなし、昼食休憩を挟んで後半戦スタート。

「ヴィヴィオちゃん、３番テーブルにチョコケーキと紅茶をお願いね」

「はーい！」

桃子さんの指示にしっかりと従うヴィヴィオ。
元気いっぱいなあの子は周りから、特にお姉さんやおばあちゃん、おじいちゃんに大人気。

「おい狐、なんか化けてみろよー！」

「これ、コスプレって言うんだろ？
すげー、本物みてーだ！」

「フォルァ！
何勝手に尻尾に触ってるんだ！」

俺は悪ガキ共に大人気。
お姉さんにモテたいです。

「でも平和だから何でも許しちゃう気分になるのは、きっと俺の日頃の行いがいいおかげ。
あ、客……いらっしゃいませー」

……ん？

「フェイトさん、フェイトさんじゃないか」

「えっ？」

店に入ってきたのは何と金髪をツインテールにした幼女。
つまり幼女フェイトさん。
なのはさんの過去なんだから、フェイトさんの子供時代であってもおかしくない。
同じ学校通ってたとか言ってたし。
意外にエンカウントが早かった。

しかし、フェイトさんって子供の頃からそんなきわどい服着てたのね。
スカさんと戦った時も似たようなの着てたけど。
なんて言うんだっけ……レオタード？
でもそれにマントは合いません。

「あ、あの……どこかでお会いしましたっけ？」

「なのはさんと友人のフェイトさんなら会ったけど君とは初対面。
初めまして稲荷です。
今の夢はアルフさんと同じ扱いをなのはさんから受けること」

「ア、アルフの事も知ってるんですか！？
まさか魔導師……！
さっきの子の仲間か！！」

どの子よ。

「狐パパーまたサボってるの？
あ、フェイトママ」

「おぉ、ヴィヴィオ。
何勝手にサボり魔にしてる訳？
それはそうと、何か幼女フェイトさんが盛大な勘違いをしているようなんだ。
ん、まてよ？
ヴィヴィオ、お前今核爆弾並の発言をしなかったか？」

「稲荷くーん、この子もママってどういうことだい？」

振り向くと士郎という名の修羅が居た。
流石に飲食店だから木刀は無かったが、元祖アイアンクローを食らいました。
やはりこの父にしてあの子あり。
でも握力がなのはさんの比じゃねぇ。

「へぇ、オカンの頼みで捜し物してるんだ」

「は、はい。
母さん、最近元気無くて……
頑張ってジュエルシードを母さんに届けて、また以前みたいに笑ってもらいたいんです」

騒ぎは起こったものの、何とか幼女フェイトさんと士郎さんを宥めることに成功。
俺の頭もパーンとならなくて済んだ。
立ち話もなんだと、テーブル席へ案内した次第。
なお、昼時を過ぎてお客もまばらになってきたので俺も休憩を貰うことができ、じっくり話を伺うことに。
桃子さんの気遣いか、幼女フェイトさんにはイチゴショートと紅茶が置かれる。
俺には無いのですね分かります。

「へー。
捜し物届けると笑顔になる方程式が俺にはよく分からんが。
頑張れ幼女」

「フェイトでいいですよ？
あ、後……稲荷さん、でしたっけ」

なのはに続いてフェイトも呼び捨てでいいとな？

ムフフ。
優越感がウナギ登りですのぅ。
ニヤニヤが止まらない。

「母さんがその、知り合い伝で稲荷さんの事を聞いたらしくて。
一度会ってみたいって言ってたのを思い出したんですが……」

「俺の事を話せる知り合いなんてここにはスカさんくらいしか居ないぞ。
フェイトのオカンとも知り合いとか交友関係広すぎる。
今度スカさんと飲もうって言ってあるから、その時に声かけるって伝えておいて」

はい！　と元気よく応えるフェイト。
どうしてこの子も将来あんな風になってしまうんだろうか。
その後、母さんへのお土産をとシュークリームをいくつか包んでテイクアウトしていった。
この世界のフェイトは是非ともあのまま大きくなってほしいものである。

「稲荷くん」

「桃子さん……どした？」

「はい」

なんぞコレ。

シュークリーム×3
イチゴショート

ダージリンティー
小計　１１３０円

「ホワッツ？」

「今日のバイト代から引いておくわね」

……ホワッツ？

○●○●○●

「今日、私と同い年くらいの女の子にジュエルシードを封印しようとしたら襲われたの……
金髪の可愛い子だったけど、とっても強くて。
ジュエルシードを取られちゃったの……」

「今日、私と同じだと思っていたお稲荷さんがヴィヴィオと一緒にニートを脱出したの……
何とかしなきゃって思ってたけど、みんなもう家に居なくて。
六課の時と立場が逆転しちゃったの……」

「今日、私が働き始めた喫茶店になのはと同い年くらいの幼女フェイトさんが来たの……
お母さんにお土産も買っていったけど、支払いしてなくて。
請求書が私の所にきちゃったの……」

「狐パパ、キモイ」

流れ的に前の２人と同じ感じに言ったのに何故。

結局フェイトの代金１１３０円を俺が払った。

つまりその日のバイトの約４分の１を無駄にさせられた。

意気消沈で帰宅し晩ご飯と相成った。

今度見つけたらきっちり請求してやる。

「うぅ、お稲荷さん働くことを嫌ってたハズなのに……」

「油揚げの誘惑には勝てなかった。

今度桃子さんに頼んで揚げ尽くし作ってもらう」

時に桃子さん。

その炎のクリスタル花ｖｅｒ．変化はマイデスクのインテリアなのですが。

何でそちらのテーブルを彩るかのように中央に配置されているのですか。

「いいでしょ。

ダンボールよりやっぱりテーブルの方が栄えるかなって思って」

涙が、止まらない。

「なのはさん。
私をもっと強くして欲しいの。
あの子が何でジュエルシードを集めるのか、理由を聞きたい。
だって、何だか悲しい目をしていたんだもん」

「なのはちゃん……
うん、ニートがどうのこうの言ってる場合じゃないよね！
よーし、私がビシビシ鍛えちゃうから覚悟してね！」

「なのは、それフェイトだろ？
何で俺に支払いさせたのかその理由も聞いてくれ。
俺の目が悲しくなる」

そしてなのはさんは少しはニートを気にしましょう。
というか、直接介入はしないの？

「私が解決しちゃったら、なのはちゃんがフェイトちゃんと仲良くなれないでしょ？」

さいで。
考えてはいるんですね。

「稲荷……」

「どうしたユーノ。
貴様に呼び捨てを許可した覚えはないのだが」

「今日戦ったのは、間違いなく僕達の世界の魔導師なんだ。
いくら魔力量があると言っても、なのははまだ小さい。

大丈夫かな……」

「そうだな、『神技「取り払われた秘境」』とまでは言わないが、
その基本形くらい出来れば多少は勝機が見い出せるのだが。
いや待てよ？
セクシーコマンドーでマサルさんがズボンおろして小股で走り寄り
攻撃する技があったな。
これだ。
なのは、特訓だ。
これが出来ればフェイトに勝てる。
だが習得した後は俺に近寄ることを禁ずる」

「何を、教えようと、してるの、かなぁ」

ギブ、ギブ！
首が、締まってます！

「む、背中に当たるこの感触。
貴様、つけていないな！」

力が強まっ……

「……」

「きゅ～……」

「なのは……さん」

「どうしたの、ユーノ君？」

「あの、ちょっとやり過ぎなんじゃ……
稲荷はいつものことだけど、なのはもボロボロになってるんですが……
もっと基本的な事から教えたほうがいいのでは」

「あはは、確かに厳しいとは思うよ。
でも、細かい事をあれこれ言うよりも、模擬戦できっちり叩きのめした方が、教えられる側も学ぶことが多いって。
教導隊では、よく言われてるんだ」

何度も言うが叩きのめされる度に記憶が飛ぶ時もある俺に学ぶものなど何も無い。
因みにこの教導は、もっと強くなりたいって意思と熱意を持った魔導師に、ハイレベルな戦技を教えていくものらしい。

「もっとニートになりたいって意思と熱意は大いにあるのですが。
帰っていい？」

「へ、へぇ……教導官って言うのも、大変そうなんだね」

「でもユーノ君も、ちゃーんとなのはちゃんのフォロー出来てるよ！　立派立派！
私は大っぴらには助けられないから、なのはちゃんの事、よろしく

ね？」

「そ、そうかな……えへへ。
任せて下さい！」

「ふふふ」

聞いてよ。
あれ、何かこの流れデジャヴ。

おかわり　3杯目（後書き）

超難産。
ＳｔＳ時と同じくアニメ見ながら進めているのですが。
グダグダ具合に拍車がかかってきました。
もはや完全に別の物語へと進化を遂げていそう。

この話も不人気だろうなぁ～と思いつつ。
さっさと次へ進むために敢えて投下。
でもこの後どうしようか。

士郎が恭也に見えます。
桃子がなのはさんに見えます。
そんな高町家。
だが美由紀、てめーはダメだ。

おかわり3杯目でした。
もう1杯いかがですか？

おかわり　4杯目（前書き）

居酒屋奇行文。

おかわり　4杯目

「いらっしゃーい」

店主の挨拶を聞きながら暖簾をくぐる。
カウンター席が１０席程度。
座敷も、カウンターの後ろに２つ、横に１つしかない。
木造のこじんまりとした居酒屋だ。
風情がある。
なのに店名が『アルハザード』だったのはきっと店主がまだ厨二病を患っているのだろう。

稲荷です、と店主に告げる。
彼は奥の座敷へと案内してくれた。
目的の場所には、既に２人の人物が腰をおろしている。
店主に礼をいい、２人のもとへと向かった。

「やぁ、こちらでは初めまして、になるのかな。
君は知っていると思うが、ジェイル・スカリエッティだ」

「遅れてスマンな。
なのはさんがどうも疑り深くてなかなか抜け出せなかった。
とりあえず今俺は１人海で夜間水泳を楽しんでいることになっている。
しかし未来と全然容姿が変わらんな。
蓬莱人かお前は。
で、こちらの方が……？」

「あぁ、私が君のことを話した知り合いの、プレシア・テスタロッ

サだよ」

「プレシアよ。
あなたが稲荷？」

「あぁ。
まぁ自己紹介も済んだことだし。
先に注文して、話すことにしようや」

メニューを見る。
俺はレモンチューハイを。
スカさんとプレシアさんは生中を頼んだ。
後はおつまみを少々。
異口同音で子どもだな、と言われた。
ビールの味はまだよく分かんねーんだよ。

「まずは、乾杯っと。
いやぁ、開催が遅れてごめんなスカさん。
予想外の出費で計画が狂った」

「何、構わないさ。
もっとも、プレシアの方はそうではなかったようだが」

「当たり前よ。
私は一刻も早く目的を達成したいの」

「愚痴はフェイトに言ってくれ。
あいつの１１３０円のせいで２日働けば行けたかもしれないものを、
大事を取って３日間働いてから来たんだからな。
てかフェイトのオカンなら１１３０円払え」

「何よ、そのくらいでケチケチ言わないでよ。
後、娘じゃないわよ、あんな人形」

日給３０００～４０００程度の俺に１００００円単位がどれほど重いか貴様に分からいでか。

「ん？　人形？
プレシアさんって実はパペットマペットだったのか」

「何の話よ。
フェイトは私がプロジェクトＦから造り出した、ただのクローン。
私の娘は、ただ1人よ」

「そうか。
興味なし。
おっちゃん！　枝豆追加！」

あいよ！　とカウンターの中から威勢のいい返事が聞こえる。

「ふ、普通は怒るんじゃないかしら、人を人形呼ばわりされたら」

「稲荷くんは普通じゃないからね」

「今の俺は枝豆の方が興味ありんす」

「クックック、あぁ本当に面白い。
未来で私が君に興味を持ったのもよく分かるよ」

それは褒めているのか貶しているのか。

「産んでないから生みの親ではないという解釈なのか。
文化の違いだねぇ。
ともかく、生みの親ではないとしても育ての親には違いない。
帰るまでに絶対１１３０円は頂く」

「はいはい分かったわよ……
育てたには違いないし……
あ、生中おかわり貰おうかしら」

「私も頂こう」

「で、プレシアさんの俺に用って何だったの？」

「えぇ、それなんだけど。
あなた、ジュエルシードを使って未来からやってきたって言ってたわね？」

ジュエルシードってドラゴンボール？
スカさんの分析が間違っていないのならそうだと思う。

「普通はジュエルシードって、まともな願いを叶えてくれないらしいのよ。
だから、数を集めて伝説の地、アルハザードへの道を開くつもりだったんだけど」

「すげーな。
ここって伝説の店だったのか。
ならもう目的達成じゃね？」

違うわよ、と怒られた。
なんでも、死者蘇生とか、そういった伝説級の魔法が眠る地なんだとか。

「私も正直、ここの店名見た時は吹き出したわよ……」

「おっちゃんが関係者じゃないことを切に願う。
てか死者蘇生とかやめてよ俺ホラー苦手なんだから」

「おや、プレシアが君に願うことも死者蘇生なのだよ？」

マジでか。

「そう、蘇らせたいのは私の一人娘のアリシア。
あれは約7年前、次元航行エネルギー駆動炉ヒュウドラの実験中……」

「あ、その話、長くなりそう？
なら飛ばしていいよ」

プレシアさんにガッされた。

「ここから私の悲劇の物語が始まるんじゃない」

「どう考えても悲劇なのはプレシアさんよりも死んだ娘さんな罠」

「クックック。
過程を気にせず結果が知れればそれでいい、か。
私達科学者とはまさに対極の存在だね」

「聞いても理解できないと怒られるのをここ最近学んだ。
けど説明を飛ばすように求めても怒られる。
俺に逃げ場はない。
あ、カルピスサワーをお願いします」

「そりゃあ、一生懸命説明して分かってもらえなかったら叩きたくもなるでしょ。
でもあなた、カルピスとか本当に子どもね。
あ、私にはこの黒龍ってお酒頂戴。
ここのお酒は初めてだから楽しみだわ」

「まぁそれも稲荷くんの美点なのだろう。
ふむ、私は酒呑童子というにごり酒を貰おうか」

唐揚げが来た。
レモンが効いててウマス。

「で、その娘さんを俺がドラゴンボールで蘇らせて欲しい、と。
できるんじゃね？
確か悟空も何回か蘇ってたし」

「誰よ悟空って。
それはともかく本当なの？
嘘だったら殺すわよ？」

「日本酒片手に唐揚げ食べながら凄まれても怖くねッス。
まぁ試してみてもいいんじゃない？
マイナスにはならんでしょ」

そう、と一息つくプレシア。

「時間移動も出来るのなら、死者蘇生も夢ではなさそうね。
後は成功した後にどうするか、か……
私自身も病気で結構マズイし、何より違法研究とかやって管理局に目をつけられてるから。
ジュエルシードの護送船も襲撃しちゃったし。
あら、このお酒美味しいわね……」

「何、プレシアさんも犯罪者？
スカさんといい、科学者はそういうのが多いんだね」

「私はまだ君の言う管理局襲撃はしていないけどね。
しかし襲撃してみるのも面白いな……
あのスポンサー諸氏にはウンザリしてきた所だしね。
こちらのにごり酒もなかなかだよ」

「ヤメテ。
この世界でも『大体稲荷のせい』って言われちゃうから。
因みに病気って何でさ。
いいもん、カルピス美味しいから……
おっちゃん、ナンコツくれナンコツ！」

「知らないわよ。
ちゃんと1日2回は注射で栄養補給してるし。
睡眠時間も1時間は取ってるのに」

「そりゃ病気になるわ。
ちょっとフェイトと一緒に温泉行ってこい。
この地域にあるから。
プレシアさん1人だと何しでかすか分からん」

「あなたに言われるのは何か癪ね」
人が心配して言ってるのにこの仕打ち。
「ふむ、だが管理局の方はどうするのかね？」
「みんなの見てる前でそっくり人形でも投身自殺させたらー？
今の俺はナンコツにしか興味がない」
「いい案をくれたら、１１３０円と一緒に稲荷寿司も奢ろうかしら」
「俺がプレシアさんと娘さんの分身を作りましょう！
喋って動ける本人ソックリなのを妖気で！
二度と使わない気でいたんだけどまぁ、自分のじゃないし大丈夫でしょ。
……所で俺も犯罪者になるってことはないよね」
身内にそういうのに敏感なのはさんが居るのですが。
「使うのは私だし、あなたには危害が及ばないようにするわ。
その妖気ってのを調べたいものではあるけど……
あ、お酒もう１本貰えるかしら？」
「死亡フラグにしかならないので全力で拒否します。
俺はライムチューハイを」
「おや、残念だね。
私も少し興味があったのだが。
ふむ、では麦焼酎を貰おう」

「じゃあこれでプレシアさんの悩みはすべて解決？」

「そうね、後は実行するだけ……ね」

そうかそうか、それは重畳。
でもやる前に温泉行ったりしてまずは体治してからな。

「後、なのはさんのなのは育成もなんかノリにノッてきてるから、ドラゴンボール集まるまでやらせて頂けると嬉しい。
途中で止めると俺にどんな被害がくるか分からない。
それに俺もいくつか持ってるから、そのお願い自体は行けばいつでも出来るし」

「何で持ってるんだい？」

「歩いてたら結構落ちてるもんだよ、これ」

何故プレシアさんは頭を抱えるし。

「ま、まぁいいわ。
蘇生できそうって事が分かったし、精神的にかなり楽になったわ」

そうかそうか。
あ、ついでにメルアド教えてね。
何かあったら連絡するから。

「しかし、このメンツが管理外世界の、ひっそりと佇む居酒屋で仲良く酒を酌み交わすとはね。
あぁ、世界はなんて面白くできているんだ。

クックック……ハッハッハッハッハ！」

「俺は一人演劇をしているスカさんを見ているだけで面白いのだが」

「感情が高ぶるとこうなるのよ、こいつ。
スルーしなさい」

どうやら一番酒に弱いのはスカさんのようである。

「なかなかに楽しかったよ、稲荷くん」

「アリシアが死んでから初めてだわ、こんないい気分になれたのは」

「そいつは良かった。
俺が帰るまでにまた飲もーな」

「えぇ。
あ、そうそう、これフェイトが支払いを押し付けたお金ね。
１１３０円よね」

「お、サンキュ。
これで明日の朝はお揚げが買える。
……じゃ、またなー」

別れの挨拶を交わすと、2人は一瞬の内に消えた。
あれが転移魔法ってヤツだろうか。
何とも便利なものだ。
飲酒運転にならないし。

さて、それじゃあ俺も帰るとしますかね。
もう午前1時だし。
部屋に戻るとバレるからリビングのソファーで寝ようかな。

○●○●○●

「みんな就寝済みだろうけどただいまっと」

「おかえりお稲荷さん。
誰と飲んでたの？」

「スカさんとプレシアさん……
な、なのはさん、何故……」

なのはさんがゆっくり、俺の首を指差す。
首？
……おいおい、またお前か。
存在が希薄すぎるぞ首輪よ。

「発信機がついてるって前に言ったよね？
初めて役に立ったなぁ。

お稲荷さんが居酒屋に居ることは分かったんだけど、誰と一緒までかはちょっと分からなかったんだ」

「それでこの誘導尋問とか。
汚いさすがなのはさん汚い」

「全くもう……
いつものことだし、騒ぐとみんなに迷惑だから今は流すけど、後でちゃんと聞かせてね？
後、何でお稲荷さんは、私と一緒には行かないの？」

行きたかったの？

「うん」

ありゃ。
今日は何か素直ね。
いつもと違う行動は危険信号。
俺、何されるのよ。
連れていかないとか言ったら俺蒸発しちゃうので今度ね、と答えておく。

「じゃあ今日は嘘ついた罰として、一緒に寝てもらおうかな」

「えっ」

そう言って俺達の部屋に連行される。
中には既にヴィヴィオが就寝中だったので、起こさないように寝間着に着替えて布団へ向かう。
なのはさんも続いて入ってきた。

マジで一緒に寝るつもりか。
眠かったのか、すぐに寝息が聞こえてきた。

俺これから何されるのだろうか。
なのはさんの寝言や寝返りにいちいちビクビクしながら、更に夜はふけていく。
気にせず無理矢理寝てしまえばビクビクせずに済んだのではと思ったのは、一睡も出来ずに目を充血させて朝を迎えた時だった。

おかわり　４杯目（後書き）

実は書いてて超楽しかった回。
居酒屋へ行きたくなってきました。
飲んでる時ってこんな感じですよね。
でも稲荷と同じくチューハイとか梅酒しかダメな人です。
焼酎も少しいけますが。
いいんです、美味しいから。

身内が絡まないとこんなに平和になるんですね。
なのはｗｉｋｉの時系列表だとスカさんはもう２５歳はいってるようで。
ＳｔＳ時何歳よあんた。
若すぎじゃね。

という訳でほのぼの回のおかわり４杯目。
お口休めのお茶タイムでした。
またよろしくお願いします。

おかわり　5杯目（前書き）

エロス

おかわり　5杯目

スカさんとプレシアさんとの飲み会から数日。
今日も今日とて、喫茶『翠屋』で過ごす日々。
この数日で変わった所と言ったら、我が食卓に揚げ尽くしが並ぶようになったことである。
桃子さんの料理は天の贈物。

しかし、なのはさんはもとより、なのはでさえリリカルマジカル以外の黒歴史を中々さらけ出さない。
まぁ、年がら年中思い返すと悶え苦しむような事をしていたのなら、今頃なのはさんは東尋坊や富士の樹海に行っていてもおかしくないので仕方がないと言えば仕方が無いのだが。

あぁ、忘れてた。
後、なのはさんも翠屋で働くことになった。
だがホールではなく、厨房で料理を教わりながら作っているようである。
この辺りから桃子さんの俺を見る視線が生暖かいものに変わった気がする。

「回想は終わった？」

「何故バレたし。
桃子さんも新種のサトリ説が浮上」

「5分近く同じテーブルの一部分だけ拭き続けてたら気づくわよ？
ほら、そこだけピカピカだし」

俺頑張った。

「まぁそれはそうと。
大きい方のなのはとヴィヴィオちゃんには言ったんだけど、今度の連休に家族旅行に行く予定があってね？
稲荷くんも一緒にどうかなって」

「目的地は？」

「海鳴温泉の旅館よ」

素晴らしい。
温泉なんていつ以来だろうか。

「あぁそうだ、修学旅行以来やもしれん。
是非行きたいとです」

「そう、良かった。
じゃあ明後日出発だから、明日までに準備済ませといて頂戴ね」

「合点。
ヴィヴィオー！」

「狐パパ、呼んだ？」

テーブルに残った食器を片付けていたヴィヴィオが、呼び掛けに応えひょっこり顔を出す。

「温泉だ。
カメラとビデオの準備はいいか。

ちゃんと湯けむり対策しとけよ」

「狐パパってたまに欲望に忠実だねー
またなのはママに怒られるよ？」

だってお前、女性が温泉に誘うっていうことは覗いてくれっていうのと同義って何かの本で読んだぞ。
む？　ということは桃子さんが俺に気があるということか。
モテる狐は辛いね。

「こんな狐パパを持ったヴィヴィオも辛い」

「最初に目の前の者で代用したのはお前だお前。
あ、桃子さん。
因みにその温泉旅館にはしっぽ穴のあいてる浴衣って置いてあるかな？」

「う～ん、置いてないと思うけど。
穴あけちゃダメよ？」

温泉で浴衣が着れないとか。
明日安売りの浴衣探しに行こう。

○●○●○●

そんなやりとりがあったのが2日前。

昨日、近くの服屋を見て回っていたらまだ4月だというのに、いい柄の浴衣が安売りしてたので買ってみた。
因みに店員さんが、俺の姿を見てしっぽ穴まであけてくれた。
ここの地域の人達は優しい人達ばかりである。
一部を除いて。
財布が俄然軽くなったが、悔いはない。

「遂にこの日がやってきた。
手ぬぐいの準備もOK。
いざ行かん幻想の郷！」

「張り切るのいいけどまだ家の前だからね。
お稲荷さん、頭に乗せた手ぬぐいをおろしなさい。
恥ずかしいから……」

ぬう。

「あ、あんたね！
なのはの言ってた狐って！」

渋々ながら手ぬぐいを頭からおろしていると、なのはが何だか騒がしい子ども2名を引き連れてやってきた。

「高町家に住みつく狐と言えば俺だが、俺はお前を知らない。
初めまして稲荷です。
ところでなのは、どちら様だこの金髪幼女とその隣の……
ま　た　紫　か」

どうも俺は紫の髪を持つ人に縁があるようである。

「にゃはは……
えっと、こっちの金髪の子はアリサちゃんって言うんだ。
紫の髪の子はすずかちゃん。
2人とも、私のお友達だよ！」

「アリサ・バニングスよ。
よろしくね」

「月村すずかです。
えっと、稲荷さん……ですよね？」

おぉ、君たちが。
あれだね、あんまし話した訳じゃないけど未来と雰囲気が違うね。
で、すずかは何か用かね。

「えっと、その尻尾って本物、ですか？
人間、ですよね……？」

「最近その辺の境界が曖昧になってきた。
もう種族：稲荷でいいよ。
人でも妖怪でもキョドるからダメなんだ。
堂々としていれば何も問題はない。
因みに尻尾は本物だが、触りたければ揚げを持ってこい」

「堂々と……
は、はい！　分かりました！」

揚げをゲッツできそうである。

「ところで、後ろのなのはソックリの人は誰よ？」

突然話題を振られた、俺の後ろで黙って立っていたなのはさん。
なのはの姉に当たるんだけど、今まで外国にいて最近戻ってきた設定らしい。
なのはが産まれる前の事だから、なのは自身は知らないとか。
ここ数週間だけ日本に居れるんだとか。
息を吐く様に嘘が出てくる出てくる。

「何、その設定とか、しかも名前が高町このはって。
あなたなのはさんじゃないですか」

「なのはが2人居たら怪しまれるでしょ？
昨日お母さんと考えてつけてみたんだ！
可愛いでしょ」

えっ。

「さ、ヴィヴィオ。
車に乗るとしようか。
数台停まってるけど俺達はどの車だろうなー」

「ちょ、お稲荷さん！
可愛いでしょ？　このはって可愛いでしょ！？
ねぇ！？」

以前車に乗ったときは2人乗りの車に3人だったからトランク行きだったが、今回は溢れたのが丁度3人だったから新たに車を1台借りたらしいので、普通にシートに座れました。
車2台で9人乗れるのに、後3人誰よ。
とか思っていたら、すずかの姉の忍さんって人と、ノエルとファリンとかいう月村家のメイドと名乗る人が出てきた。
一緒に旅行についてくるらしい。
俺には忍さんとすずかとファリンの違いが縦の大きさでしか分からなかった。
同じ顔が揃うとかあいつらも多分クローン。
みんな紫だし。
唯一、ちょっと顔が違うノエルでさえ紫。
きっとみんなスカさん一味。

「なのはさん」

「どうしたの？
あ、みんながいる時はこのはって呼んでね」

「拒否。
免許持ってたんだね」

「何で！？
というか当たり前だよ。
向こうじゃ色んな乗り物乗ったりするんだから」

「いや、地球での免許」

「あっ……」

「なのはママ、大丈夫？」

「だ、大丈夫！
うん、そんなに長い間は運転しないし、事故らなければバレないよね！
あ、ヴィヴィオも向こうではこのはって呼んでね」

「拒否」

うむ、うむ。
染まってきてるのは嬉しいが、純粋だった頃のヴィヴィオを懐かしく思うのは何故だろうね。

そんな事を話してる内に目的地に到着。
確かに移動時間は１時間程度だったが、帰りは別の誰かに運転してもらいたいものである。

「んっ――――――――！！
っくあぁぁああ……」

「扉を開けたらそこには幼女なオッサンが居た。
なのは、お前にそれは早過ぎる。
それは３０を過ぎて人生に疲れた人がする行為だぞ。
まぁ……緑溢れる場所での背伸びが気持ちいいのは分かるが」

「だって、旅行中は訓練お休みってなのはさんに言われたの。
この２日間だけは、あのピンクの光から解き放たれるの……」

遂にお前もその域まで達したか。

なのは本人がこういうことを言うって事は、六課のチビッ子達はどれだけMだったかって話だな。
だがなのはがピンクの光に包まれる時は、俺はその数倍は包まれている事を理解して頂けると嬉しい。

「でも、強くなってるとは思うの！
もうどんな攻撃も気絶せずに受けれそう！
これであの子ともお話できそうなの！」

「そうか。
避けたり反撃するって選択肢は無いんだな。
まぁ、頑張ってフェイトの攻撃を受けてこい」

うん！　と元気な返事を残してなのははみんなのもとへと走っていった。
……あれ、そもそもあいつらって何のために戦ってたんだっけ。
何か忘れてる気がするけど……まぁいいか。

○●○●○●

「こうなると思ったよ」

「わぁ、ひろーい！」

「いつもと一緒なんだから文句言わないの」

旅館に入り、案内された部屋。
高町家やその他の大人組で1部屋。
子ども組で1部屋。
まさかの未来組で1部屋である。
ところでヴィヴィオ。
お前は子ども部屋じゃなくていいのか。

「遊びには行くよー！
でも寝るのは狐パパとなのはママと一緒がいい！」

「この子ってば時たま純粋な頃に戻るよね。
いつもとのギャップで俺の心がボロボロにされていくのだが」

まぁいいさ。
さぁ、ここに来たからにはやることはただ1つ。

「温泉に来て温泉に入らず何をしろというのか。
ヴィヴィオ、なのはさん。
温泉に行くぞ。
ヴィヴィオ、カメラの使い方は覚えてるな？」

「うん！
ビデオは？」

「思ったんだが、ビデオ撮ってもリビングで見るしかないから危険度が高すぎるんだ。
何が悲しくて入浴シーンを本人が横にいる状態で見ないといけないのか。
という訳でカメラにする」

「お稲荷さん、ヴィヴィオに何撮らせるの？」

「裸体」

カメラからフィルムをビーってされた。

「うあぁぁぁぁぁぁぁ……」

「もう！

ヴィヴィオ、行くよ！」

「うん」

意気消沈したまま温泉に向かい、服を脱いで脱衣所から風呂場に続くドアを開ける。

今から湯船に浸かろうとしている誰かがいた。

「おや、稲荷くん。

君も先に温泉かね。

……どうしたんだい？」

「あぁ、士郎さん。

いえね、男のロマンを先ほど破壊されてきたので」

「……あぁ、なるほど。
だがな、それは正解だ。
仮に成功してもその後バレると……
あぁ、今思い出しても背筋が凍るよ」

ま、まさか士郎さん。
あなたも……
クッ、涙が止まらんよ！

「士郎さん！」

「稲荷くん！」

「何をやってるんだ父さん達は……」

嫌な物を見たと言うような視線でこちらを見ているお兄様。
どうやら今、風呂場に入ってきたようだ。
確かに男2人が涙を流しながら抱き合っているところは見た目相当キモイかもしれん。
かけ湯をして、3人揃って湯船に浸かる。

「しかし士郎さんの体は凄い。
これは切り傷？
これは……銃傷？
傷の多さと筋肉の付き具合が顔と合わない」

「いやいや、稲荷くんの体もなかなか凄いじゃないか。
細いと思ってはいたが、無駄なものが無いだけなんだね。
かなり理想的な体つきだと思うよ」

毎日逃げまわってましたから。
傷は負っても治るから残らないのはある意味僥倖。

「……お？
なんだなんだ、こっちの方も凄いじゃないか稲荷くん」

「ちょ、どこ見てるんですか。
む、そういう士郎さんもなかなか……」

「何の話をしているんだ父さん達は」

「ふ、温泉での語らいと言ったらまずこれだろう。
さぁ恭也も、そんなタオルで隠すな。
温泉にはタオルを浸けてはいけないルールだろう」

「ちょ、何するん……あ」

……ふほほ。
流石お兄様。
士郎さんに迫るものがある。

「これで忍さんとしっぽりするんですね分かります」

「稲荷くん！」

「ハッハッハ、照れるな恭也。
稲荷くんも、主のなのはをよろしくしてやってくれ。
それなら大丈夫だろう？
ま、稲荷くんも恭也も、俺のには勝てそうにないがな」

「前半はともかく後半は聞き捨てなりませんな」

「あぁ、父さんには負けないさ」

「お？　じゃあ勝負と行くか？」

『ちょ、お母さん！　忍さんとこのはさんが鼻血出して倒れたの！』

『あらあら、まだまだねぇ……』

『何が！？』

何やら女湯の方が騒がしい気がするが……まぁいいか。

さぁ、士郎さん、お兄様。

いざ、勝負！

「ドローか。

いい戦いだった。

しかし湯当たりとは……なのはさん、情けない。

とりあえずそこのソファーに寝かせとけばいいか。

さてヴィヴィオ、コーヒー牛乳とフルーツジュースどっちがいい？」

「コーヒー牛乳！」

「お、醍醐味が分かってきたな。
じゃあ行くぞ。
準備は万全か？」

「うん！」

「それでは！
……クッはぁぁあ」

「おいしーい！」

「風呂上りのコーヒー牛乳は何故こんなにも美味いのか。
トリビアの種に送ったら検証してくれそう」

「……あなた、稲荷よね？
何やってるの、こんな所で……」

「おぅ？」

おかわり　5杯目（後書き）

1話で終わらそうと思ったら終わらなかったとです。
温泉に行くとぶっちゃけ話とかこういう話によくなる筆者。
いや、周りがね……
でも読者サービスシーンは書いてて前回同様楽しかった。

誰が忍で、誰がすずかで、誰がファリンかを見た。
すずか以外クリソツで分からなかった。
あの世界では家族は同一人物にちまいない。

1つ心残りがあるとすれば。
浴衣を出せなかった。

おかわり5杯目です。
ありがとうございました。
多分次回で温泉は終わるので、6杯目もご一緒にいかがですか？

おかわり　6杯目（前書き）

狐呪術奇行文。

おかわり　6杯目

声のした方を見てみると、あらビックリ。
プレシアさんとフェイトがいるではありませんか。

「色々と聞きたいことはあるけど……その浴衣、どうしたの？」

「旅館の浴衣に穴をあけると桃子さんとのリアル鬼ごっこが開催される故。
自腹をはたいて買ってみました。
似合う？」

「あなたの姿に黄色い浴衣、しかも柄が油揚げって……合いすぎてて逆に怖いわよ。
それ売った人絶対狙ってたでしょ」

ヴィヴィオ、この浴衣似合ってるって。
やったね。

「で、プレシアさんとフェイトは何故ここに？」

「あなたに言われたとおり、療養も兼ねて温泉旅行よ。
早く良くならないとアリシアも悲しませちゃうし」

「そうか。
フェイト、旅行は楽しいか？」

「は、はい！
母さん、やっと以前みたいに笑ってくれるようになったんです！

稲荷さんのおかげと聞きました、ありがとうございます！」

うむ、うむ。
プレシアさん、フェイト頂戴。
こんな素直な子、なかなか居ないから癒し系で置いておきたい。

「何言ってるのよ。
あなたに渡したら『大体フェイトのせい』って言われるように育っちゃうじゃない」

「ひどくね？」

「ヴィヴィオは素直だよ？」

「ヴィヴィオ、夢は寝てる時に見るから夢なんだぞ」

分かった分かったから。
尻尾の毛を引っ張るんじゃない。
ハゲるから。

「しっかしプレシアさんの後ろをトコトコと、鴨の親子みたいだな。
……あ、そうだ。
フェイト、実を言うとな。
ちょっと前にプレシアさんってお前のこと、クローンだから娘じゃなくて人形だって言ってたんだぜ？」

「えっ……」

「ちょ、あなた何言ってるの！？」

「いや、フェイトがプレシアさんを見限れば癒し系アイテムとして俺がゲッツできると思って」

「それを暴露しているあなたの株も急落していることに気付きなさい」

そんな訳は無い。

な、フェイト。

「か、母さんを悪く言わないで！」

「やべ、怒った。

選択肢間違えたようだな。

ヴィヴィオ、リセットを頼む。

さっきセーブしたところから別の分岐選ぶから」

「狐パパの人生をリセットしますか？」

なにそれこわい。

「大丈夫よフェイト。

あなたを稲荷には渡さないから。

染まっちゃったら手がつけられないし」

「母さん……！」

何やらハートフルな展開になったがいまいち釈然としないのは何故だろう。

まぁ、とりあえずこの親子は仲が良いようである。

短い邂逅を終え、フェイト親子はその場を後にした。
何でも外を少し散歩してから、温泉に浸かりに行くのだとか。
いつまでもここにいる訳にはいかないし、俺もなのはさんを背負ってヴィヴィオと共に部屋に戻ることにする。

○●○●○●

ようこそ、この素晴らしきまったり空間へ。
あれから部屋に戻り、そのままボサッとして過ごしている。
あれだね、最近の俺は働きすぎだと思うんだ。
因みにヴィヴィオは先ほど、なのは達とどこかへ遊びに出かけた。
なのはさんも、部屋の布団に寝かせた１０分後には目覚めた。
けれど別段何をする訳でもなく、俺と同じ感じにお茶をすすったりしながらボーッとして時間を潰している。

「あ、お稲荷さん。
通信機に呼び出しがかかってるよ？」

「むぉ？
……あ、プレシアさんからだ」

ちょっとなのはさん。
飲んでたお茶を噴出すのやめてくださるかしら。

「ゲホ……な、何でプレシアさんが……ゲホ……お稲荷さんに！？」

「前に飲み会で連絡先交換したからじゃね？
えっと……飯が終わったら一緒に飲まないかってさ。
フェイトも来るってよ」

「な、何でフェイトちゃんがプレシアさんと!?」

「さっきも見たけど余程仲が良いんだなあの親子」

私の思い出がどんどん崩れ去っていくの……と、白い灰になっているなのはさん。
親子の仲が良いと思い出が崩れ去るとか、どんな状況よ。
さて、返事はＯＫっと。
飯の後が楽しみである。

「それでね、花火大会に行ったんだけど、建物がバーンって爆発してたんだ！
狐パパが言うには、文化の違いらしいよ」

「あんたそれ、テロじゃないの？」

「アリサちゃん、お祭りが派手な地域は結構あるんだよ？」

「ハハハ……私もいずれ通る道なの」

「後はね、後はね！」

時は夕食時。
俺達も大人組の部屋で集まって、みんなで食べることになった。
更に運ばれてきた料理を食べ尽くした後には、子ども達の間でヴィヴィオの昔話に華が咲いているようである。
その昔話の1つ1つで、俺が惨劇に巻き込まれたのはいい思い出。

「さ、時間も結構遅くなってきた事だ。
そろそろ子ども達は寝ようか」

ふと時計を見ると9時を回っていた。
平穏な時間は過ぎるのも早いとです。
士郎さんの言葉を皮切りに、布団を敷いて寝る体勢に入るなのは達。
多分ファリンが、お話を聞かせて子ども達の眠気を誘っている。
もう一度言うが、あいつは多分、ファリン。

「さて、それじゃあ俺達も部屋に戻ろうや。
みんなおやすみ。
2人とも、行こうか」

「うん！」

「あ、はい。
じゃあおやすみなさい」

大人組はもうしばらく雑談に興じるようだが、俺は先約があるので軽く挨拶を済ませて部屋を後にする。
と言っても俺達の部屋は隣なのだがね。

「あら、丁度いいタイミングだったみたいね」

「ん……？
おや、プレシアさん。
フェイトも、さっきぶり」

既に俺達の部屋の前でプレシアさんが待ち構えていた。
今の言葉から、丁度来た所みたいなので長時間待たせることにならなくて良かった。
部屋に招き入れ、早速飲み会が開始される。

「と、その前にヴィヴィオはどうするよ。
フェイトいるけど、もし眠かったら先に寝るか？」

「大丈夫！　まだまだ起きてられるよ！」

「そうけ。
フェイトも大丈夫？」

「あ、はい」

よろしい。
ならば飲み会だ。

「あの、プレシアさん。
フェイトちゃんの事は、その、えっと……」

「……？
あぁ、あなたが稲荷の言っていた主の高町なのはかしら」

「えっと、はい。
私の記憶じゃ、フェイトちゃんとプレシアさんは、仲が……良く、なかったので」

昔の事を思い出しているのか、なのはさんは少し顔色が良くないようである。
だが、プレシアさんは別に仲は悪くないと主張。
心なしかフェイトの顔も明るい。

「そうですか、良かった。
お稲荷さんが何かやらかしたからどうなっちゃったかと思ったけど、いい方向に進んでるみたいだね」

「道筋を知っていながらあえて違う道を行く。
人はそれを原作ブレイクと呼ぶ。
だが俺は一体何をブレイクしたのか分からない」

「全てをブレイクしてるよ。
……っ！？」

突然、なのはさんが顔を強ばらせた。
何事かと周りを見ると、どうやらこの場に居た全員が同じ感じになっているようである。
電波でも受信したかね。

「母さん！」

「えぇ」

「なのはママ！」

「うん、間違いない。
お稲荷さん！」

「あぁ、１５年ぶりだな……使徒だ」

口の前で手を組むイカリのゲンドウスタイルでキリっと答えたのになのはさんからグーパンを頂きました。
ネタふりかと思ったが違うようである。

「ヴィヴィオ、お稲荷さん！
ジュエルシードが発動しちゃう！
急いで封印しに行くよ！」

「フェイトも行ってらっしゃい」

「はい、母さん！」

「展開についていけない。
ヴィヴィオ、お前はさっき何の電波を受信したんだ？」

「魔法の力！」

全てが魔法の一言で片付く世の中って便利ね。
けど何でヴィヴィオは俺の尻尾に潜り込んでるんだ？
その理由は分からなかったが、俺の首輪にまた鎖がガチャンとされたから俺の行く末だけは分かった。

○●○●○●

「あの、稲荷さんがゴミのように後方でブランブランしてるんですが」

「お稲荷さんって飛行が全然上達しないんだよねー
地上の移動は凄い速いのに。
急いでる時はいつもこんな感じだから気にしないでいいよ？」

「ち、地上を走るのが速いなら走らせてあげればいいと思うんですが」

「お稲荷さん頑丈だから大丈夫！
あ、あそこだね目的地」

「はい！
あ、でも低空飛行すると稲荷さんが……」

「狐パパの体が絶賛摩耗中。
気分は陸上サーフィン！」

俺の背中でヴィヴィオが何か言っているが、聞き取る前に意識がブラックアウトした。

「なのはさん、介入しないって自分で言ってたじゃないか。
何勇んで飛んできてんの？　バカなの？　死ぬの？　俺が」

「ここまで変わっちゃったらもう介入してもしなくても変わらないと思うの。
放置してたらフェイトちゃんがジュエルシード集めやめちゃいそうだし」

「だからと言って転身の仕方が異常。
今まで凄い考えてるように見えてたけど実は何も考えてないだろ。
で、ドラゴンボールは？」

「封印したよ？
暴走すると危険だし」

俺が文字通り飛んできた理由を聞かせて頂きたい。
体をすり減らして来たのだから。

「そ、それをどうするつもり！？」

突如聞こえた叫び声。
何事かと視線を向けると、封印したドラゴンボールを右手に持つフェイト。
それを見てなのはが焦っている。
いつの間に現れたのだろうか。

「どうするって、封印？」

「それは危険な物なんだよ！」

「……？

君だったら、どうするの？」

「話し合いで、何とかできるってこと、ない？」

「それは、どうにもならない」

「……そういう事を簡単に決めつけない為に、話し合いって必要なんだと思う！」

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらない。

そもそも、話の流れが分からない」

ふむ。

修羅場ですな。

ところでなのはさん。

「どうしたの？」

フェイトは、ドラゴンボールを封印しなかったら君はどうするのって聞いてるんだよね？

なのはは何故にドラゴンボールそっちのけでフェイトと話したがっているのだろうか。

「なのはちゃんは封印後のジュエルシードをどうするのかって聞いてるんだろうね……

この頃の私って、国語の成績悪かったから気付いてないんだろうなぁ……」

「日本語って難しいね、なのはママ」

「そうだね、ヴィヴィオ」

むぅ、不運な行き違いってヤツか。
仕方ない。
喧嘩両成敗。

「だからって……っ！？」

「どうし……っ！？」

空高く飛び上がってヒートアップしていた2人がゆっくりと地上に降りてくる。

「お稲荷さん、何したの？」

「最近開発した、喋ると絶対口角が切れる呪いをかけた。
口の両脇が常にプツプツ切れるからな。
いてぇぞ、あれ」

「それ、お願いだから私には絶対しないでね……」

えー、元々なのはさん対策の呪いなのに。

「まぁいいや。
おら2人共。
この9本の尻尾が目に入らぬか。
そこに直れ」

「そんな大きいの入らないの……いたっ」

「稲荷さん、何するん……うっ」

口答えは許しまへんで。

「ねぇ、お稲荷さん」

「ん？」

「さっき地面に寝転んだのに、何でその浴衣、汚れてないの？」

「ほほう、なのはさんにはあれが寝転んでいたように見えたと。
俺は江戸時代の拷問を受けた気分でしたよ。
それはともかく、気を込めると物が丈夫になるって描写を漫画で見たことがあったので。
妖力を込めてみました」

「これ……バリアジャケットよりも丈夫なんじゃ……」

「バリアジャケットって何ぞ。

……何でそんな目で見つめてくるかな」

「いや、結構長い間一緒にいるけど、まだ知らない事あったんだね。
そういや前にデバイスって何って聞いてたっけ」

「聞くに聞けない雰囲気を醸し出されたので。
知らなくても生きてこれました」

「アハハ……それはある意味凄いけど。
デバイスってこれの事だよ。
レイジングハート」

≪Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ　ＩＮＡＲＩ≫

「なのはさんの胸が喋ってる。
ふん！
いつもと変わらない、柔らかないい弾力。
何故この胸が喋ったのだろう……」

「……ふん！」

「ちょ、待てなのはさん、それは洒落にならん。
分かった、俺も胸から手を離すから。
なのはさんも俺のお稲荷さんから手を離してくれ！」

「一握必殺……」

「ノゥ」

おかわり　6杯目（後書き）

今日卒論の発表なのに現実逃避に書いているとです。
最後の数行を書いているときにＢＧＭがトイレの神様になった。
ある意味泣けた。

みんな多分疑問に思うこと。
自分自身が疑問に思ったこと。
アルフどこよ。
きっと玄関先に繋がれているにちまいない。

旅行編が終わらない。
でも次は間違いなく終わる。
というか次の話にも食い込むはず。
妄想爆発させすぎて次の話を見ていないので、さっさと視聴しなければ。

おかわり6杯目でした。
そろそろお腹が膨れてきませんか……？
まだまだいけるようでしたら、もう1杯入れますね。

おかわり　7杯目（前書き）

出会いと、別れの、奇行文。

おかわり　7杯目

「で、お前らは何ですれ違ったのかもう一度話し合え。
そして結論が出たら、何故俺のお稲荷さんが握りつぶされたのかを説明しろ」

「お、おっきかった……お、お稲荷さんの、お稲荷さん……」

なのはさん、真っ赤になって悶絶するくらいならやらないでください。
危うく士郎さんとお兄様との勝負に白黒つける前に戦闘不能になるところだったのだから。

「後、お前らの呪いは解除したけど、傷までは治らないから。
それ治るの1週間はかかるから。
口を開く度に油断するとプツっといく苦しみを味わうがいい」

「酷いの、稲荷さん……」

「稲荷さん、呪いって、どうやって……」

気合いだ。
世の中には普通の藁人形に釘を打ち付けるだけでイケメンに呪いをかけれる煩悩高校生もいるんだから不思議じゃない。

ともかく、俺の機転により争いの火種は鎮火できた模様。
なのはとフェイトはお互いが改めて話し合う事で、どんな勘違いをしていたのか気付けたようである。
主になのはが。

国語が出来ないなのは。
これは黒歴史にカテゴライズしていいものなのだろうか。

「ところでなのは。
ユーノはどうした？
あいついつもお前と一緒に居なかったっけ」

「にゃ、にゃはは……
アリサちゃんに握られたまま、脱出できなかったみたい。
『僕に構わず先に行け！』って言ってたから置いてきたの」

「そいつは早く帰ってやらないと内臓的な何かがはみ出している可能性が高いな。
しかし今日は何故こんなにも握るという行為が危険になる日なんだ。
……はっ！
なのはさん、早く帰るのはなのはだけだからね。
俺は月明かりを楽しみながら帰るから」

「狐パパが学習した」

首吊りもホラーだが、体をすり減らされるのも嫌なんだ。
俺の言葉を聞いて心配になったのか、なのはは旅館へと急いで帰還していった。
因みにドラゴンボールは、なのはが持つことで決定したようである。
既に3個は所持している俺は興味無し。

「さぁフェイト、俺達も帰ろうか。
あ～あ、この時間からじゃ飲み会は無理かなぁ……
ほら、なのはさんも行くよ」

「え、あ、うん、いいよ。
大きくても私頑張るから！」

何が？

「狐パパ。
顔を赤くしてモジモジするなのはママを見てどう思う？」

「股間をクラッシュさせられた後では何かの儀式にしか見えない。
完成させる前に連れて帰るぞ」

「……なのはママにはもうちょっと積極的に行くように言っておくね」

お前、俺の股間に何か恨みでもあるのか？

○●○●○●

旅館に着いたらもう０時を回っていまして。
フェイトとヴィヴィオは流石に限界ということで先に寝たが、大人達にとっては今がゴールデンタイム。
仕切り直して飲み会を始めた次第。
途中、なのはさんが実は１９歳という事実を知り阿鼻叫喚になったのはいい思い出。

だが、楽しい時間とは足早に過ぎ去るもの。

気付いたら4時を回っており、その日の飲み会もお開きとなった。
そして翌日は午前中に旅館を出発したため、昼過ぎには俺の7割方平穏だった休暇も終わりを迎えたのである。
帰りは別の誰かに運転してもらおうと思ったが、なのはさんがどうしても譲らずまた行きと同じメンバーで帰った次第。
捕まらなくて本当に良かったです。

「また翠屋の日々が始まるんですね分かります。
あえて言おう。
なのはさんが働いているのなら、俺はもう働きたくないでござる」

「何言ってるの？
ニートになっちゃうよお稲荷さん」

フェイトさんちのアルフさんはそういう扱いじゃないのかね。

「まぁまぁ、いいじゃない！
一緒に働くと楽しいよ？」

「部屋に篭ってコメントが流れる動画見てニコニコしてるほうが楽しいです」

「またそんな事言って……
……ん？　あ、いらっしゃーい！」

愚痴っていたらどうやらお客が来た模様。
テーブルに案内するため近寄ると、なんと先日まで旅行で一緒だったお子様2人組ではありませんか。
なのはは今居ませんが。

「いいのよ、あんなやつ！」

「ア、　アリサちゃん……」

興奮したアリサをすずかが宥める

喧嘩でもしたのかね。

また両成敗の出番か？

「あいつ、私達がいくら話しかけても何も喋らないで笑うだけなのよ！？

そんなに私達と喋るのが嫌なら1人で居ればいいのよ！！」

「ふ～ん。

原因である俺が言うのも何だが、あいつもそうなるのは仕方ないんだ。

許してやれ」

「うるさ……ん？　原因があんた？」

「なのはの口の両脇をプツッとさせたのは何を隠そうこのワシだ。

治るまで今やつは喋る度に何とも言えぬ痛みを味わうことになる」

そして俺はアリサに蹴られてこれまた何とも言えぬ痛みを味わっている。

幼女と思って油断した。

スネは無いでしょうスネは。

「容赦って言葉が無いのかお前には」

「うるさい！

あんたのせいでなのはに酷い事しちゃったじゃない！！」

「そこはかとない理不尽さを感じたがどこもおかしくはなかった」

「アリサちゃん！
それよりも早くなのはちゃんに謝りに行こう！」

「そうね、こんなヤツに構ってる暇なんて無いわね」

言いたいことを言ったかと思ったら、2人はすぐに店から出て行った。
嵐のようなお子様達である。

「『大体こいつのせい』かぁ……
はやてちゃん元気かなぁ。
今ならこの言葉の意味がよく分かるの」

「むしろ俺が取り持ったおかげで被害が俺のスネだけだったことに感謝すべき。
まだジンジンする」

「それはそうなんだけどね。
こうも私の時と違ってくるとこう、言い得ないモヤモヤ感に襲われるの。
気晴らしにお稲荷さんの尻尾の毛、抜いていいかな？」

何故そうなる。
あ、ヴィヴィオ！
ちょっと助けて欲しいのだが。

「ん～？
……はたらけー！」

無邪気さに溢れたその笑顔で発せられた言葉に、俺となのはさんの心は抵抗虚しく崩れ落ちた。
倒れた俺達の向こう側は、ガラス越しに青い空が広がっていたという。

○●○●○●

「休暇から帰ってきてすぐこれとは。
俺の安寧の地は温泉だったということか。
おいちゃん、今日はやけだ！
油揚げ１０枚くれ！」

「お、狐の兄ちゃん今日はやるねぇ！
はいよ、持ってきな！
……それと聞いたか？
ちょっと街中になるが、新しくオープンした寿司屋の話。
稲荷寿司が結構美味いらしいぞ」

「詳細キボン」

翠屋での仕事を終えて家に帰る途中。
切らしていたお揚げを補充すべく、いつもの豆腐屋のおいちゃんのもとへ馳せ参じました。

そこで仕入れたこの情報。
なのはさんは、お揚げを買ったらすぐに帰ることって言ってたけど。
俺の熱きパトスは止められない。
場所も詳しく聞いたし、稲荷寿司を求めて三千里といこうか。

少し迷ったが、何とか目的地に到着した。
財布はもう空っぽだが、それでも十分に満足できる分買えたと思う。
心なしか歩調が速くなるくらいウキウキな気分で、家に帰る。
手に持つパックの中には、黄金のオーラを纏っている様に見える稲荷寿司。
早くこの封を解きたいものだ。

「……ん？
あ、これはまたドラゴンボールでは無いですか。
４個目かこれで。
本当にいっぱい落ちてるなここ。
サイヤ人もビックリするんじゃね？」

右手にドラゴンボールを持ち、呟く。
こんなにあったらシェンロンの大安売りができそうである。
いつものように尻尾に収納しようとした。
と、ここで背後から声が聞こえる。

「ああ――――――！！」

「い、稲荷さん――――!!
危ない――――――!!」

何事かと振り返る。
親方！　空から少女が！
むしろ少女達が降ってきています。
何やら武器をこちらに向けて砲撃しながら。

「わお」

いつもピンク一色だった光に、今日は黄色が混ざった。
轟音のみが、耳に残る。

「い、稲荷さん……大丈夫、なの？」

「大丈夫に見えるなら眼科と脳外科に行くことをオススメする。
どこの世界にコゲて無事なヤツがいるか」

「大丈夫みたいだね」

フェイトがフェイトさんになる事を確信した瞬間である。

何故またこんなことになったのか聞いてみると、どうやら2人同時にジュエルシードを発見したらしく。
じゃあどっちが先に封印できるか勝負になったと。
で、空から封印の為の砲撃をしたら、発射と同時に俺がドラゴンボールと砲撃の間に来たらしい。

「なるほどな。

まぁ、今回は俺が悪いっポイから呪いは勘弁してやろう」

「よ、良かった……」

「あれのせいでアリサちゃんに怒られちゃうし、散々だったの……」

前回のは君たちが悪いんです。
じゃ、よく分からんが封印とやらは終わったのだろう？
さっさと帰って飯にしようぜ。

「あ、はい！」

「じゃあ私も、母さんがご飯作って待ってるから帰るね。
ジュエルシードは、なのはが持ってて」

「分かったの！」

うむ、うむ。
ドラゴンボールをなのはに渡して、フェイトはまた空へと舞い上がった。
はて、右手に持っていたハズのドラゴンボールを何故フェイトが持っていたのだろう。
謎が謎を呼ぶが、俺はいわゆる迷探偵。
事件を難事件に変えることはできるが、解決に導く事はない。
ぶっちゃけ、考えるのも面倒なので放置。
今の俺には、左手の稲荷寿司にしか興味は無い。
そう、左手の……

「あれ……？」

左手にあるはずの物がない。
辺りを見回す。
恐らく、俺が砲撃を受けたであろう爆心地。
その脇に、中身がグチャグチャになって散乱した、ナニカがアッタ。
なのはが怪訝そうな顔でこちらを見ているが、気にする余裕など俺にはない。
ただ、フラフラと、その残骸に近寄る。

両膝を地面に着く。
既に原型をとどめていないそれを、震える両手で掬い上げる。
仄かに香る、酢の香り。
小さく千切れてしまってはいるが、茶色い、色々な具を包み込んでいたであろう物。
そう、それは正しく。
俺が、先ほど有り金をはたいて買った。
楽しみに待ち望んでいた、稲荷寿司だった。

「あ、あの……稲荷、さん？」

今日の俺の唯一の楽しみだった物。
ほんの数分前までは、パックに綺麗に並んでいた物。
それが、今は無残な姿を、晒している。

「あの……えっ！？」

「……ひっく……ズズッ……えぐっ……」

「ガチ泣き！？
な、なのはさん、至急来て下さい！
稲荷さんが……稲荷さんが！！」

「ふぇぇ……ぐすっ……うあぁぁ……」

「お稲荷さん！
……っ、これは……酷い。
お稲荷さん、大丈夫！？　しっかりして！」

「ぐすっ……俺の有り金……全部使ったんだ……
それでも……これだけしか買えなくて……
でも……でも……」

「分かったから！
それ以上、言わなくてもいいから！
この子達だって、食べては貰えなかったけどきっとお稲荷さんに買ってもらえて、ここまで想ってもらえて幸せだったと思うから」

「俺、俺……守れなかった……
絶対、絶対食べてやるって、１粒残さず食べるって、誓ったのに…

…」

「お稲荷さん！」

「……ねぇ、なのは。
僕は今来たばかりだからよく分からないんだけど……
これってどういう状況？」

「大丈夫だよユーノくん。
初めからずっと現場に居た私にもよく分からないの……」

おかわり　7杯目（後書き）

いつの時も、出会いがあれば別れがある。
奇行文にも、そんな一節を加えてみたかったんです。
今回は、彼が出会い、そして別れを経験した悲しい物語。
今、この奇行文で全米が涙する……！

旅行編では3話も使ったのに、アリサとの喧嘩では1話で終わるとか。
大体こいつのせい。
筆者はとことんほのぼのが好きな人のようです。
だって速攻で終わる話には大体戦闘が絡んでるから。

という訳でおかわり7杯目でした。
お召し上がりありがとうございます。
もたれて来たかなと思ったので、塩味にしてみました。
お口直しになったのなら幸いです。

おかわり　8杯目（前書き）

夕食醤油奇行文。

おかわり　8杯目

「……」

「お稲荷さん。
今度一緒にそのお寿司屋さんに食べに行こ？
奢ってあげるから」

「なぁ、なのは。
一体何があったんだ？
稲荷くんがいつもと違いすぎてて怖いんだが」

「お父さんが思ってる以上に、稲荷さんは稲荷寿司が好きだったって事なの」

「なるほどなるほど。
さっぱり分からないんだが」

胸に北斗七星の傷を持つ男も涙するくらいの深い悲しみを背負った俺は、あの後なのはさんに連れられて帰宅した。
食卓についても、今目の前にあるご飯が本当は稲荷寿司だったのだと思うと涙が出ちゃう。
だって狐だもの。
そして、その間なのはさんに慰められている。

「なのはも大変ねぇ……
ねぇ稲荷くん、そろそろ元気出さない？
じゃないと桃子さん、稲荷くんの買ってきた油揚げをみんなにあげちゃうわよ？」

「ねぇ、なのはさん。
実は桃子さんって次元犯罪者じゃないの？
スカさんの犯罪が霞んで見えるくらいの悪に見えるんだけど」

「あ、あはは……」

笑って誤魔化すなし。

「でも、稲荷寿司がダメになって泣くなんて……
稲荷くんって、結構可愛いところあるのね。
大きいなのはは、どうだった？」

「いつもと違うそのギャップにキュンときたの」

「あらあら。
あなた、恭也、美由紀も協力してね？」

「ヴィヴィオもー！」

「あら、ありがとうねヴィヴィオちゃん。
なのははどうする？」

「ん～……いいけど、なのはさんが夢中になる理由を聞かせて欲しいの」

「えっ！？」

そういう真っ黒な会話は本人が居ないところでしてくれませんか。
俺これからどうされるのよ。

明日になったらスッパテンコーで街中に放り出されるんじゃなかろうか。

俺を他所に、テーブルでは何か話が盛り上がりつつあるみなさん。
あんな悲劇があった後なのに俺のマイデスクは未だにダンボールなので、ひどく村八分を食らっている気がします。
慰めるならせめてそっちで飯を食わせてよ。

「だが最大の悲しみを味わった俺にもうこれ以上辛い悲劇は訪れない。
一度スターライトなブレイカーを食らうと、ディバインバスターがあまり怖くなくなる様に。
な、ユーノ」

「そういえばなのはがそんな事言っていたような……」

「なのはも食らったのか、スターライト」

「僕も隣で見てたけど、あれはスターライトというよりニュークリアって言葉が合ってると思う」

うまいな。
『核砲撃「スターライトブレイカー」』って感じか。
誰が対抗できるんだよ。
個人で撃てるとかアメリカも真っ青だな。

「しかしまだ、使ったことはないけどブラスターモードってのがあるって聞いた。
負担がでかいけど、普通にブレイカーするよりも格段に威力が上がるらしい。

受けたら脳汁出る」

「脳汁じゃ済まないでしょ。
というか受けた瞬間に蒸発してそう」

「確かに海鳴市が軽く地図から消えそうだな。
その後草木1本生えなさそうだし」

「僕達はなんて人に魔法を教えてしまったんだ」

「勝手に人をカウントしないでもらおうか。
教えたのはお前だお前」

魔法の魔の字すら使えんよ俺は。
しかしユーノと話すのが何気に面白い。
向こうは向こうで盛り上がっているけど、こっちはこっちで楽しかったとです。

○●○●○●

翌日。
いつものように翠屋での勤務を終え、家に帰宅。
部屋に戻って風呂に入って、尻尾の手入れに今日は40分かけてみた。
素晴らしいフカフカ具合である。
ただ根本がうまくブラッシングできないので、後でなのはさんに手

伝ってもらおうと思う次第。

「ヴィヴィオがやろうか？」

「だが断る。
前に櫛に毛が引っかかった時、力任せに引っ張って尻尾がハゲかけたのを忘れたか」

「むー」

むーじゃねーべさ。
鼻を摘まんで言ってみる。
さ、飯の時間だぞ。
尻尾の手入れに時間をかけ過ぎると、どうも飯に遅れそうになるから困る。
渋々ながらに俺の尻尾の手入れを諦めたヴィヴィオを引き連れて、リビングへと向かう。
そこでは、髪を下ろしたなのはさんと桃子さんが料理を運んでいた。
しっかりと、俺の分はマイデスクに運ばれている。

「桃子さん、そろそろ俺もテーブルデビューしちゃだめ？」

「私とお母さんを間違えてるからダーメ！」

理不尽である。
容姿だけで2人を判別するのって無理じゃね？
間違えた罰として夕食後の皿洗いを命じられた次第。

「口は災いの元とはよく言ったものだ。
あ、なのはさん。

後でブラッシング手伝ってもらえませんか」

「ん？　お稲荷さんの尻尾の？
いいよ！」

良かった。
これでヴィヴィオに任せずに済む。

程なくして高町家全員集合。
夕食開始となった。

「ねぇ、みんな。
ちょっとお話があるの……」

突然切り出すなのは。
その場に居た全員が耳を傾ける。

「実は今日、ジュエルシードの探索の時にフェイトちゃんと会ってね。
一緒に見つけ出すことはできたんだけど、その時になのはさんの言ってたような木のお化けが出たの」

「なのはー！
醤油取ってくれー！

ダンボールとテーブルの高低差に俺は手が出せない」

「今大事な話をしてるから後で！
それでね、そのお化けは退治できたんだけど……その時に時空管理局のクロノくんって人達と会ったんだ」

醤油ェ。

「時空管理局っていうのはもうみんな知ってると思うけど。
で、その人にジュエルシードを集めることをもう一度考えてみてって言われたんだ」

「なのはさん、醤油を」

「はい」

いや、はいって。
ペットボトルで渡されても。

「私は、やっぱりジュエルシード集めを続けたい！
ユーノくんのお手伝いで始めたことだもん、最後までやり遂げたい！
お父さん、お母さん、いいかな？」

なのはの問いにしばらく黙る士郎さんと桃子さん。
無事な例が隣にいるものの、やはり危ないことには変わりないので心配なのだろう。

「……ん？
そういやフェイトはどうしたんだ。
一緒にいたんだろ？」

「あ、フェイトちゃんはいつもみたいに封印のお手伝いしてくれた後にすぐ帰ったよ！
前の旅行の時に会ってから、友達になったんだ！
それで、フェイトちゃんはもうジュエルシードを集める必要がないから、手伝ってくれることになって」

「何故目の前に居た俺がその事実を知らない。
いつ話したよ」

「え、旅館に帰る途中に念話で」

ふむ、電話か。
しかしフェイトは電話に出てた記憶は無いのだが。
てかいつの間に番号交換したよ。

「……正直、心配ではある」

今までずっと黙っていた士郎さんが、口を開いた。
桃子さんがそれに続く。

「でも、なのははもう決めちゃってるんでしょう？
迷ってるんだったら、やっぱりやめたら？　って言っちゃうんだけど……」

「あぁ。
自分の中で既に結論が出ているのなら、俺達が何を言っても曲げないだろうしな。
だから、気が済むまでやっておいで」

「お父さん、お母さん……！
ありがとう！！」

「まぁでもお稲荷さんのおかげで、本来会うはずだった危険よりは全然危なくないものになってるんだけど、ね？」

話しかけるな。
今真剣に醤油かけてるから。
ペットボトルでかける醤油は、油断するとドバっといくから。
……あ。

「あ～あ、私の子供の頃にもお稲荷さんが居たらもっといい結果になったかもなのになぁ」

「子ども時代からなのはさんの砲撃に悩ませられたら１０円ハゲどころじゃなくなる」

「あの頃の私は、お稲荷さんと戦っても負けそうなくらいだよ？

戦闘経験なんて無いし、運動神経もからっきしだったからね。
……あ、枝毛」

「マジでか」

夕食後、部屋に戻りなのはさんに尻尾を梳いてもらっている。
なかなかに上手なのこの人。
流石、普段から使っている人は違うね。

「ヴィヴィオも髪長いんだから自分で梳けばいいんじゃね？
そうすれば、引っかかった時に力任せにされる俺の苦痛が理解できる」

「ヴィヴィオはまだやってもらいたいー！」

「あ、じゃあ俺がやろうか」

「なんてこったい」

何故頭を抱えるし。
少なくとも毎日使っているからお前よりは上手いぞ。

「……はい、終わり！
でもお稲荷さんの尻尾って、本当にフカフカしてて気持ちいいよね。
……えい！」

「こらこら、何尻尾に抱きついているんだ。
それは俺がやってみたかったのに。
何故自分に尻尾をつけてしまったのだろう」

「あ、ヴィヴィオもー！」

「気持ちいいね～」

「うん！」

「全く……」

その日は寝るまで、２人にモフモフされてました。

おかわり　8杯目（後書き）

最近ユニーク数が異常。
気付いたら来週の週間アクセス７０００行きそうなんだもん。
ＰＶ数は２６００００突破。
何か記念をしたいものの。
ぬ～ん。

なのはさんのＳＬＢの検証動画を見ました。
何でも威力はペタジュールになるとか。
阪神淡路大震災が起きてお釣りが来る威力なんだそうです。
下手な土着神より強そう。

さて、おかわり8杯目でした。
ありがとうございます。
ただ、土日がちょっと遠出をするのでまだご飯が炊きあがっていません。
日曜はうまくいけばお茶碗に盛れますが、はてさて。

おかわり　9杯目（前書き）

体内爆弾奇行文。

おかわり　9杯目

今日の翠屋のシフトは、俺が休みでなのはさんが出勤。
ヴィヴィオは気分に任せて店の手伝いをしているようだが、今日は俺と一緒に休むらしい。
なのはさんがヴィヴィオを羨ましそうに見ていた。
六課に居た頃はワーカーホリックだったのに、ここに来てからなのはさんもニートに憧れてきているようである。

「さて、今日は貴重な休みだ。
なのはさんという死亡フラグも居ない今、俺の平穏を脅かすものはない。
一日中家でゴロゴロしてやる」

ピンポーン

「脅かされた。
ヴィヴィオ、客だ。
新聞だったら爽やかな笑顔で一昨日来やがれって言っといて。
純真な心の持ち主なら多分自殺するから」

「はーい！」

ペタペタという音が聞こえそうな足取りで玄関に向かうヴィヴィオ。
新聞なら追い返せと言ったものの、俺の第六感が新聞じゃ無かった場合は更に面倒な事になると告げているのだが。
どうしたものか。

「狐パパー！

新聞じゃなかったよ！
ちっちゃいフェイトママだった！」

ヴィヴィオが玄関から大声で状況報告をしてくる。
なるほどなるほど、フェイトだったか。

「ヴィヴィオー！
俺は居留守してるから誰も居ないって言っといて！
対応するの面倒だから！」

「はーい！」

「あの……出来ればそういうやりとりは玄関に招く前にヒッソリとやって欲しいんだけど……
後、ちっちゃいフェイトママって？」

ガッデム。
敵は既に内部に居た。
仕方が無いので玄関に向けて重い腰を上げる。
そこには、人差し指でコメカミを抑えたフェイトの対応をヴィヴィオがしていた。
だが俺が来たことに気付いたのだろう。
ヴィヴィオを見ていた視線が、俺に向いた。

「あ、稲荷さんお久しぶりです。
母さんが、稲荷さんに頼みたいことがあるらしくて。
普通じゃ行けない場所なので、迎えに来ました」

「悪いけど俺、今から陽の光に耐えながら羊の数を数える使命があるのでな。

ヤツら、大人しく数えられていればいいものを、５０を超えると何かしらの術を使うのか意識が朦朧としていかん」

「あ、すぐに来てくれたら、稲荷寿司を奢るとも言ってました。……えっ、消えた！？」

「狐パパなら後ろにいるよ？」

神速が使える俺に隙はなかった。

稲荷寿司が食えると聞いて、速攻で寝間着から着替えて靴に履き替えた。

凄いだろ？

「え、えっと……

キ、キモいですね！」

「誰から教わったその言葉。

そして用途を間違えてはいないか？」

「ヴィヴィオはあんまり間違ってないと思う」

ヴィヴィオにも再教育が必要なようですね。

○●○●○●

早速出発しようとしたのだが、歩いていける場処ではないとの事な

ので。
フェイトに転移魔法とやらで、家の前まで連れてきてもらいました。

「六課に居た頃はヘリしか移動手段なかったので新鮮ナリ。
てか出来るなら転移しろよ。
どう考えても緊急時とかこっちのが早いだろう常識的に考えて。
で、ここがフェイトんち？
ラストダンジョンのオーラを漂わせているのだが、これもゆりかご
じゃないよね」

「ゆりかご？
ここは時の庭園って言うんです。
高次空間内に浮かぶ建物なんです」

「つまりはヴィヴィオ、どういう事だ？」

「ちゅうにー！」

なるほどなるほど。
俺が足を踏み入れてはならない場所だったか。

「帰るぞヴィヴィオ。
ここにいては俺はエターナルソードを取り出してダオスを倒さなけ
ればならなくなりそうなのでな」

≪その発想が出るだけ危ないと思うなー≫

「何を言う。
過去の俺ならこのまま突入して、プレシアさんに突っかかってる可
能性があるぞ。

ただ剣を振り抜くだけで、天翔龍閃とか言っちゃうかもな。
今の俺は大丈夫だが」

≪好きなの？　御剣流≫

「そこはかとなく。
だがまさかフェイトが知ってるとは思わなかったがな」

「あの、稲荷さん、誰と話してるんですか？」

「狐パパの頭が遂にイッちゃった……
ごめんなさい、なのはママ。
ヴィヴィオも守れなかった……」

何でそうやってすぐ痛い子認定するかな。
てかフェイト、お前いつ服着たよ。
今マッパで俺と話してたじゃないか。
ほら、まだ目の前にはお前とソックリさんのマッパな子が半透明で浮いて……
半透明……だと……？

「クソッ！
ここはリアル幽霊屋敷だったのか！
ヴィヴィオ逃げるぞ！！」

呆けるフェイトを他所に、ヴィヴィオを脇に抱えてその場を後にしようとする。
だが、あと少しで危険域を脱出できそうというときに、俺の体を紫の輪が縛り上げた。

「母さん！？」

「まずい、捕まった……！
ヴィヴィオ、今すぐ俺の身代わりになれ！
お前のことは未来永劫忘れないから！」

「狐パパが真っ黒になっていく」

そうこうしてるうちに、ほら！
半透明のフェイトもどきが来てる！　来てる！
うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？

「……で、この子が生き返らせて欲しいって言ってたアリシアか。
あ、俺の半径１０ｍには近寄らないでね」

≪それはちょっと酷いよ≫

「泣くなよ。
だって近寄られたら俺漏らす自信あるもん。
てか嘘泣きだろお前、何計画通りって顔してるんだ」

「稲荷、あなた、アリシアを泣かせたの！？」

「むしろ泣かされそうです」

あの紫の輪はプレシアさんが使った魔法だったそうで。
俺がいきなり逃げ出しそうだったから、慌てて捕縛したらしい。
おかげで俺の周りにはアリシアが常に飛び回ってて、しかも逃げれない。
何という悪夢。

「で、何であなたは“見える”のよ」

「知らんがな。
いつもは見えない、見たくない。
もしかして、俺の中に眠っていた力が覚醒したのか？」

何故笑いが起きる。

≪稲荷さんって妖怪ってヤツでしょ？
幽霊も妖怪も似たようなもんなんだから、見えてもおかしくないと思うな≫

「何いきなり近寄ってきてるわけ？」

「あなたの反応見てるだけで、アリシアがどこにいるか手に取るように分かるわね……」

「正直いっぱいいっぱいです。
早く蘇生させちゃおう。
じゃないとこいつ、見える俺に付きまとってくるから。
平穏な日々におさらばしなければならなくなる」

「あ、稲荷さん。

姉さんの事、よろしくお願いします」

そのよろしくする姉さんは今、君に浣腸するスタイルを取っているのだがいかがなものだろうか。

あ、炸裂。

フェイトの顔が微妙に歪んだ。

何、尻に違和感を感じた？

そりゃあ存在自体違和感で構成されたものが攻撃してますから。

そんなこんなで時の庭園内に侵入。

どう見ても一般家庭の様式とは思えない内装。

というかどこかゆりかごを彷彿させます。

何でも、奥には玉座もあるらしい。

どんな家庭かと。

で、通された一室。

研究室のようにも見えるその部屋の中には、死体アリシアがカプセルの中で浮いていた。

「何とまぁ……

ヴィヴィオ、シャッターチャンス」

「富竹フラッシュ！」

うむ、うむ。

「あなた達、何を撮ってるのよ！？」

「裸体」

≪照れるねー≫

またフィルムをビーってされた。
温泉の時といい、どうも写真には縁がないようである。
今回は幼女なため、そこまで悲しくもなかったけど。

≪それはそれで複雑なんだけど？≫

「近い近い。
般若心経唱えるぞフォルァ。
そういやプレシアさん、俺をここに呼んだ理由ってなんだった訳？」

「本当は先に私とアリシアの分身ってヤツを作ってもらおうと思ったのよ。
多分近々、ここの居場所もバレそうだし。
身代わりとしてジュエルシードで虚数空間作って、飛び降りさせる計画を発動させようかしらって」

「ふ～ん……本当に俺も犯罪者にならないよね？
まぁ、なったらなったですぐに未来へ帰るけど。
……はっ！？
ヴィヴィオ、今の聞いて……」

「今度、狐パパの尻尾をブラッシングさせてくれたらなのはママに黙っててあげるー！」

俺の尻尾はそう遠くない未来にハゲそうである。

○●○●○●

時間移動も出来るドラゴンボールが死者を蘇生できないハズがない。
悟空とか事実蘇ってたハズだし。
いやぁ凄いね、ドラゴンボール。
まぁ、ヤツの場合死んでも頭にリングつけて現世をふらついていたが。
とにかくドラゴンボールを発動させた結果、アリシアを難なく蘇生させることが出来ました。
今回もシェンロンの召喚を試みたのに出なかった。
残念である。
しかし、蘇生させる際にプレシアさんの言ってた、魔力が強すぎて軽い次元震が発生したってどういう意味だろうか。
アリシア蘇生後は例の幻を渾身の力を込めて作ってみた。

「もう終わりにする。
この子を亡くしてからの暗鬱な時間も。
この子の身代わりの人形を、娘扱いするのも。
フェイト、よく聞いて。
私はね、あなたを創りだしてからずっと、あなたのことが大嫌いだったのよ！
アッハッハッハッハ！
私達は、旅立つの！
忘れられた都、アルハザードへ！」

目がイッちゃってる幻が出来た。
俺やヴィヴィオはもちろん、プレシアさんやフェイト、蘇生させたアリシアまでもが『うわぁ……』って視線を向けたのは言うまでもない。

アリシアの方は、カプセルに浮かばせるだけだったので適当にやった。
反省はしている。
何はともあれ、これでプレシアさんとしていた約束は果たしたことになる。
うまくいったら連絡をくれるように頼んで、再びフェイトに送ってもらった。
フェイトんちを後にする時、何かアリシアが今までの事全部見てたよって言ってプレシアさんを怒ってたけど、あれはなんだったんだろうね？
因みにあの幻は、うるさかったのでダンボールに押しこんでおいた。
使用する日になったら開封してください。

「狐パパ、回想終わった？」

「だから何でお前らは俺の脳内読み取れるの？
もしかして俺ってサトラレか？」

「帰ってきたら既に夕方。
家の玄関先を見つめたまま動かない狐パパを見たら大体予想つくよ？」

そう、フェイトんちは空が常に暗かったので時間の感覚なんてわからなかったが。
帰ってきたらもう夕方。
俺の死亡フラグのない素晴らしい休日は、こうも無残に終わりを告げてしまった。

「一戸建てというかもはや神殿クラスの家なのに時計の１つもないとはね……」

「お礼の稲荷寿司も貰いそびれたしね」
あっ……
「ただいまー」
「なのはママ、おかえりー！」
「おかえり、なのはさん。
疲れてるところ悪いけど、俺とデートしない？」
「うん、いいよ。
……へ？　デート？
え、あ、うぇぇぇえ！？」
何その驚き方。
「え、ちょ、ちょっと待って！
何で、突然、いきなり、えぇぇえ！？」
「俺はもう、待つのはやめたんだ。
積極的に行って、モノにする。
だからお願いします」

俺の為に、稲荷寿司を奢ってください。
もう2回、食べる機会を逃してるから。
……ヴィヴィオ、何こっち見て拝んでるんだ？

「え、えと、じゃあ……行こっか？」

「やった！
これでようやく稲荷寿司食べれる。
ヴィヴィオ、どうやら俺の渇きを癒すことができそうだぞ」

「……へ？
稲荷寿司？」

「おぅ。
もう2回、食べる機会が逃げていったんだ。
三度目の正直。
確かなのはさん、奢ってくれるって言ってたでしょ？
ごちになりまーす！」

明るく元気にお礼を言う俺。
無言でこちらへ歩み寄ってくるなのはさん。
目のハイライトが若干消えてるのが怖いのですが。
両肩を掴まれる。
俺何される。

「やめろショッカ……っ！？」

「んっ……」

「わぁ……なのはママ、大胆……！」

唇に当たるやーらかい感触。
俺の舌に絡みつく、なのはさんの若干小さい舌。
喉を通り過ぎるひんやりとした何か。
５秒だったのか１０分だったのか分からない時間が通り過ぎた後、離れる。
なのはさんの顔は、真っ赤になっていて。
俺の顔は、真っ青になっていて。
湧き上がる疑問。

「……何を、飲ませた？」

「私ってね、魔力の収束が得意なんだ。
それを球状にとどめてお稲荷さんに送り込んでみたの。
もし、私が収束された魔力球を開放したら……」

パーン。
と、両手をあげて素晴らしい笑顔で答えるなのはさん。
何という残酷な技を、作り出してくれたんだ。

「罰だよ」

「何の！？
てか非殺傷仕事してよ！？
というか根本的に人の体に爆弾仕込むってありえねぇぇぇぇえええ！！」

「うわぁ……なのはママ、大胆……」

ヴィヴィオでも顔が真っ青なんだからきっと大したことなんだと思う。

「じゃ、デート行こうか？」

「この状況で何を楽しめと。
仮に稲荷寿司が体内爆弾を刺激したら俺に未来はにぃ」

「魔法に影響を与える稲荷寿司なんて聞いたこと無いから大丈夫大丈夫！
ヴィヴィオはどうする？」

「ん～、食事中に狐パパが破裂するの見たくないから家でご飯食べる」

ちょ、どういう事？

「じゃあ今日は2人で食べに行こっか！
ちょっと着替えてくるから、待っててね」

そう言って部屋に戻るなのはさんを見送る。
姿が見えなくなったら、視線をヴィヴィオに戻す。

「俺、なんか悪いこと言ったっけ」

「言ってないけど言ったと思う」

それ即ち矛盾と言う。
程なくしてなのはさん再登場。
向こうはもう行く気満々である。

「ヴィヴィオ。
俺、稲荷寿司食べに行くのにここまで身の危険覚えたの初めて」

「こら、またそんな事言って。
文句ばっかり言ってると、お稲荷さんをキュッとしてドカーンしちゃうよ？」

リアルなフランがココにいた。
まさか対象を俺にされるとは夢にも思わなかったが。
もしかして姉の美由紀さんは運命を操れるんじゃなかろうな。

「狐パパ、なのはママ、行ってらっしゃい！」

「いってきます」

ヴィヴィオに見送られ、俺達は以前の寿司屋へ出かけた。
唯一助かったのは、恐怖が体を支配していたのに稲荷寿司の味が分かった事だろう。
絶品だった事を記しておく。

おかわり　9杯目（後書き）

土日帰ってきたら夜で。
コタツに入ったら朝で。
布団に入ったら昼だったのでこの時間。
反省してません。

書ける所まで行くのにアニメを3話くらい見ないとダメになった。
というかこの流れだと後何を書けと。
多分無印自体後2～3話で終わりそう。
だって稲荷があまりに動かないから。

最近、なのはさんとイチャイチャしてるこいつにムカツイて酷い目に合わせてやりたいのですが。
でも当事者になると洒落にならない状況なので何とか押し留まってます。
いいなぁリア充。

という訳でおかわり9杯目でした。
ありがとうございます。
材料が残り少ないので、無くなったら申し訳ございません。

おかわり　１０杯目（前書き）

映画上映会。

おかわり　１０杯目

右よし。
左よし。
前よし。
後ろよし。
上よし。
下よし。

「狐パパ、何やってるの？」

「前フェイトんちで“見え”ちゃったからな。
もし普段その辺を歩いているときに“見える”のならば、公衆の面前で失態を晒すことになるから警戒してる」

フェイトの家へ拉致されてから数日後。
また俺の仕事休みの日が訪れた。
ここ最近は、暇があればフェイトんちの悪夢の再来を防ぐために頑張っている。
あんなものが毎日その辺に見えるとか正直勘弁願いたい。
何とか調節が効かないものか。
そう思い練習はしているがしかし、まずは普通の状態で見えるようになるという前提条件すらクリアできない。
要練習である。
果てしなく本末転倒な気がするのは何故だろう。

「ふ～ん……
それはいいけどお客さんだよ？」

「興味なし」

「持ちなさいよ、お客よ？」

俺とヴィヴィオしかいない部屋に聞こえる第三者の声。
だが聞いたことあるなと思いながらその声の先を見ると、あらビックリ。
プレシアさんがいるではありませんか。
後ろにはフェイトとアリシアも。
どっちがどっちか分からんけど。

「また既に敵は内部に侵入していたパターンか。
で、どうしたん？」

「あなたの作った幻影を使って、管理局をうまく騙せたから晴れて自由の身になったのよ。
だからお礼と報告に来たわ」

ん、もう終わったのか？
意外に早かったね。

「あなたがアリシアを生き返らす時に使ったジュエルシードの力を、管理局が気付いたらしくてね。
あの2日後にはもう来てたわよ？
あ、これもあげるわ」

「なにこれ。
見た目直径3センチ程度の正方形の鉄板。
こんなのプレゼントされて喜ぶのは鉄工所の人だけ」

「まぁ、確かに見た目は普通の鉄板だけど……
それ、ストレージデバイスって言うのよ。
まぁあなたに分かるように言ったら、ビデオカメラかしら。
管理局の連中が結構面白かったから、撮ってみたの」

レンズもボタンも無いのにどうやって撮影できるのか。
謎は深まるばかりなので、なのはさんが帰ってきたらみんなで上映会をすることにする。
ストレンジデバイスだっけ。
名の通り奇妙な形をしたビデオカメラを部屋にあったテーブルの上に置き、折角来たのだからと雑談を開始する。
フェイトとアリシアはヴィヴィオと共に遊びに出かけた。
アリシアが何ともいえない表情をしていたのは何故だろう。

「あの子、幽霊になった後もずっと私の側にいたらしくて。
肉体年齢こそまだ小さいけど、精神年齢は大人よ。
おかげで色々と怒られたわ」

「リアルバーローとか。
少年探偵団に引っ張りまわされる構図なのですね。
なるほど、それは確かにどう接すればいいか分からない」

「舌足らずな感じでお母さんって言ってくれた日が懐かしいわ。
今は妙に大人びていて……いやそれでも可愛いんだけど。
でも今は中身も見た目通りのフェイトの方が可愛いかも……」

プレシアさんの中では何かしらの葛藤があるようで。
俺はそこまで他人の家族関係に興味がないので聞き流す。
あ、そういや今日の上映会、一緒に見ない？
撮影側からのコメントもあると面白いので。

「いいの？
そんなに長い間お邪魔してても」

「桃子さんには言っておくので安心してくりゃれ」

今から夜が楽しみである。

○●○●○●

フェイト一家もご相伴に預かることになったので、大賑わいの夕飯となった。
テーブル無いじゃんという俺の突っ込みは、幻影で出しなさいというプレシアさんの一言で打ち砕かれた。
その発想は無かった。
今度から俺もそうしよう。

因みに今日は、最近ずっと夕飯の時顔を出していなかったなのはが出現した。
管理局の拠点であるアースラで数日泊まっていたのだとか。
初耳である。
てかアースラって聞いたことあるんだが、なんだっけ。
……あぁ、光る会議室だ。

なのはにはお父さんとお母さんに、ジュエルシード探しの許可を取ったときに一緒に言ったはずだと言われたのだが。

あの時俺はペットボトルの醤油と格闘していたので記憶にない。
覚えているのは、黒い液体に浸ったサバ焼きだけ。
そんななのはが、プレシアさんを見た時に凄い驚いていた。
なんでここにいるのー！？　って。
プレシアさんがここに来た経緯を説明すると、燃え尽きた感じになっていたが。

「私の苦労はなんだったの……？」

「知らん。
さて、それでは皆さん御覧ください。
ここに居る俺の友人、プレシアさんの提供により、なのはの勇姿が見れるそうです」

拍手喝采。
なのはさんに、プレシアさんから受け取ったビデオカメラを手渡す。
流石は手慣れたものか、戸惑うこと無くなのはさんはビデオカメラをいじりだす。

「えっ？
にゃはは、撮ってたの～？
恥ずかしいなぁ……ん？
にゃぁあああ！！
再生しちゃだめえぇぇぇぇえええ！！」

「何いきなり騒いでいるんだ？
なのはさん、再生準備ＯＫ？」

「うん、それじゃあ再生するね」

やめてよぅやめてよぅと騒ぐなのはを尻目に、その場に居た者はリビングの中央に出現した大スクリーンに釘付けになる。

映像は、プレシアさんが以前アリシアを蘇らせた研究室っぽい部屋で、カプセルに入ったアリシアに縋りついているシーンから始まる。

『プレシア・テスタロッサ！
貴女がジュエルシードを得るために護送船を襲撃したこと。
更に、そのジュエルシードを使って先日次元震を発生させたことは既に調べで分かっている！
よって、ロストロギア不正所持、及び護送船への攻撃容疑であなたを逮捕します！
武装を解除してこちらへ』

どこかのＲＰＧを思わせる装備をした管理局員達が、プレシアさんに近づく。
彼らは持っている杖から、ビームをプレシアさんに放つが、見えない壁で防がれる。
プレシアさんは、うるさいわねと一言呟き、反撃で紫の雷を放つ。
管理局員は、その攻撃を防ぐことが出来ずに全滅してしまったようだ。

「撮ってる時も思ったのだけれど……
あなたの作る幻影って何なの？
私と同じ力で攻撃出来るのっておかしいと思わない？
いやその前に、あの幻影の性格自体おかしいと思わない？」

「お稲荷さんの理不尽な幻術は、私が未来でもっと凄いのを体験しました」

「幻がおかしくなるのは今に始まったことじゃない。
だから二度と使うまいと思っていたのに唐揚げと日本酒片手に脅すからこうなる」

『たった数個のロストロギアで、アルハザードへ辿りつけるかは分からないけれど。
でも、もういいわ。
全部終わりにする。
この子を亡くしてからの暗鬱な時間も。
この子の身代わりの人形を、娘扱いするのも……』

映像の中のプレシアさんは、今初めて映ったが通信が繋がっていたなのはとフェイトとその他大勢の人達に語りかけている。
てかこのセリフ、デジャヴ。

「母さんの幻影って、基本あれしか言わないから」

『聞いていて？
あなたの事よ、フェイト。
折角アリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ』

『やめて！』

プレシアさんの言葉に、なのはは叫ぶ。

『アリシアは……いつでも私に優しかった……
フェイト。
あなたはやっぱりアリシアの偽物よ。
アリシアの記憶をあげても、あなたじゃダメだった』

『やめて、やめてよぅ……！』

『だからあなたはもういらないわ……
どこへなりとも、消えなさい！！』

『お願い！　もうやめて！！』

おやおや、なのはが何やら必死ですね。
どうですか、士郎さん、桃子さん。

「あなた、なのはが物語の主人公みたいですよ！」

「フェイトちゃんが悲劇のヒロイン、なのはがそれを助ける主人公か。
クッ、こんなことならウチの剣術も教えてもっとカッコよくしておくんだった……！」

盛り上がってるようで。
ところでなのは。

「なーに？」

お願い！　もうやめて！
……ぷっ。

「にゃあああぁぁぁぁぁあああ！！！！」

「うお、桃子さん、なのはが発狂した」

「あらあら。
なのは、メッ」

「だってぇ……」

まぁ俺も同じ立場だったら1ヶ月は部屋から出ないがな。
必死にやってるのに実は空回り。
当事者にとっては悪夢である。

「時にフェイトは何であそこにいる？」

「なのはの手伝いをしてる時に、民間協力者として一緒にアースラへ連れて行かれたんです。
丁度幻影の母さんがモニターに映ってる所だったからちょっとビックリしましたけど」

「じゃ、じゃあフェイトちゃんが、アースラでさっきの言葉を言われたときに微妙な顔をしていたのって……」

「うん、あれが稲荷さんの作った幻影であるのは知ってたんだけど。
改めて見ると酷いなぁって思って」

フェイトの言葉に更に落ち込むなのは。

俺は悪くない。

「心配したのに……」

「ごめん、なのは。
でも母さんと稲荷さんの話からすると、バラすとまずいかなって」

「口止めしておいて正解ナリ」

「本当ね」

っと、事態は進んでいるようだ。
プレシアさんのもとに、少年が1人たどり着いた。
……誰？

『世界は、いつだって……こんなはずじゃないこと、ばっかりだよ！！』

「あいつ今いいこと言った。
肩のアクセサリーのトゲは少々気になるが名言集に深く刻んでおく。
で、あいつ誰？」

「お稲荷さん知らなかったっけ？
私達の世界のフェイトちゃんの、お兄さんだよ。
クロノくんって言うんだ」

「あぁ、クロノってあいつだろ？
ラヴォスに戦いを挑んだ」

「むしろそっちが誰？」

クロノ・トリガーを知らんのか。
お、フェイトが登場したぞ？
隣に居るのは……アルフさんじゃないか。
未来と変わらぬ姿に安心したぞ。

『母さん！』

『何しに、来たの？』

『……いやそれは私にも分からない。
むしろ何をすればいいの？』

『……消えなさい。
もうあなたに用は無いわ』

『はぁ……』

テンションの噛み合わない2人がシュール。
アルフさんも、どうしていいか分からない感じにオタオタしている。
そうこうしているうちに、プレシアさんが持っていた杖を1回、地面に突く。
広がる魔方陣。
揺れるフェイトんち。
床には、見ていて気持ちの悪い変な配色の光が揺らめいていた。
なのはさん曰く、虚数空間って言うらしい。

「へぇ。
初めて見た」

「お稲荷さん、虚数空間って知ってたの？」

「まぁな。
初号機も突入したことあるからね。
なんだっけ、ディグダの海とも呼ばれてるんだっけ？」

え、何、ディラックの海？
そういやそんな感じ。
難しい言葉をよく覚えてるねなのはさんは。
そして崩壊するフェイトんち。
広がる虚数空間。
プレシアさんはフェイトとクロノ、アルフを一瞥する。

『私は向かう……アルハザードへ！
そして、全てを取り戻す。
過去も、未来も。
そして、たった1つの幸福も……！』

遂にプレシアさんの足場にしていた床も崩れ去り、辺りは虚数空間に飲まれた。
カプセルに入ったまま隣に居たアリシアは言わずもがな、プレシアさんと一緒に虚数空間へと落ちていく。

『あ……
えと、母さんバイバイ』

『フェイト、ここもそろそろ崩れる』

『あ、じゃあ帰ろうかアルフ。
クロノも、早く帰らないと危ないよ？』

『何で君たち2人は、そうも平然としていられるんだ……
特にフェイト・テスタロッサは、母親が虚数空間に落ちたんだぞ？』

『あの2人は虚数空間でもたくましく生きて行くと思うから大丈夫』

クロノとアルフを引き連れ、フェイトはその場を後にしようとする。
と、そこで天井からピンクの砲撃が降り注いだ。
なのはが、壁抜きならぬ床抜きをして、別の部屋から救援に駆けつけたようである。

『フェイトちゃん！
プレシアさんは……？』

『えと、落ちた』

『っ！？
フェイトちゃん……
泣いている暇は無いの。
今は一刻も早くここから脱出する事が先！
大丈夫。
辛いと思うけど、私が一緒に居てあげるから』

なのはさん、巻き戻して。

『っ！？
フェイトちゃん……
泣いている暇は無いの。
今は一刻も早くここから脱出する事が先！
大丈夫。

辛いと思うけど、私が一緒に居てあげるから』

「もういっそ殺してくれなの――――！！！」

いい。

凄くいい。

なのはさん幼少期の黒歴史が溜まっていく。

思わず笑ってしまった。

なのはさんに頭を鷲掴みされた

思わず泣いてしまった。

後は４人とも、転移魔法で帰還。

あまり大きな次元震ではなかったので周りに被害は無かったが、フェイトんちは爆発したらしい。

爆発って……一体何で出来ていたのかが果てしなく気になるところではある。

で、そのまま虚数空間に落ちていったとか。

「いやぁ、面白かった。

しかし家が爆発とか、ホームレス小学生が誕生するんですね分かります。

書いたら売れそうだな。

で、プレシアさん実際のところ家はどうするの？」

「少し前に貴金属をこの世界のお金に換金してもらったから。

それをもとにマンションを借りてあるわ」

用意周到なこって。

「因みにジュエルシードだけど、もう全部集まったことになってる

わよ。
足りない分は、時の庭園と一緒に虚数空間に飲み込まれたことになってるから」

「マジでか。
じゃあ俺らもそろそろ潮時ですね。
まぁ、いい感じに黒歴史集まったから不満はない。
喜べヴィヴィオ、帰れるぞ」

「本当！？
フェイトママに会えるー！」

「ふふっ。
ヴィヴィオも、元の世界に帰れたらなのはちゃんみたいに学校行こうね？」

「勉強したくないでござる」

なのはさん、その鬼のような目をこちらに向けるのやめて下さい。
俺のせいじゃないでござる。

「あ、そういや帰る前に、またスカさんと3人で飲もうって言ってたんだな……
計画しとくからまた数日後に連絡でいい？」

「構わないわよ。
あ、フェイトとアリシアも来たがってたから一緒にいいかしら？」

「無問題。
フェイトが来るならなのはとユーノも来るか？」

「え、えと……行きたいの！」

「あ、お願いします」

うむ、うむ。

じゃあ豪勢に行きましょうか。

ヴィヴィオとなのはさんは強制参加で。

全員で９人か？

大勢で押しかけても大丈夫な所を選ばなければ。

ともかく、残り僅かな滞在時間。

楽しんで過ごしましょうかね。

おかわり　１０杯目（後書き）

なのはのユニークアクセスで2位に居るんですが。
なにこれこわい。
卒論の現実逃避に書き始めた奇行文もよく分からない成長を遂げました。

もう無印も終わりですね。
ＳｔＳよりも終わるの早かったのは何故だろう。
アニメを見返す。
無印は全１３話だった。
ＳｔＳは全２６話だった。
気付かなかった俺は凄かった。
さて、次でエピローグ……かな。
書いてみて量が多いようなら2話に分けますが。

もうおひつの中には隅っこにご飯がちょっと残っている程度です。
これ、サービスするんでどうぞ食べちゃってください。
あ、伝票ここ置いておきます。

おあいそ（前書き）

みんなの奇行文。

おあいそ

時が過ぎるのは早いもの。
スカさんが意外に早く予定をあけてくれたので、上映会をしてから本当に数日で最後のイベントである飲み会を開催することになった。
暇なのだろうか。

そして未来組も、飲み会を最後に帰ろうという話になったのでなのはさんちに居るのは今日の夕方まで。
時間にして1ヶ月程度しか居なかったものの、なんと翠屋を貸し切ってお別れパーティーをしてくれたのは感動ものだった。
桃子さんや士郎さんを始め、色々な人がなのはさんに頑張れと声をかけていたのは妙に記憶に残っている。
だってみんな声をかける時に俺をジロジロ見たから。
動物園のパンダになった気分である。

「そしてもう夕方になってしまったと。
寂しいが仕方がない。
今度はスカさんやプレシアさんと別れの杯を交わして、潔く帰るとしよう。
チビ達も、最後の交友を深めるがいい」

「あぁ、どこに連れていってくれるのか楽しみにしているよ」

「フェイトとアリシアも今日を楽しみにしていたしね」

丁度いい事に、なのはさんちの近くに臨海公園があったのでそこを集合場所にした。
集合時間5分前集合完了とか、どこの小学生ですかあなた達は。

因みにリアル小学生達は、少し離れた所で和気あいあいと話している。
やっぱりアリシアは少し微妙な顔だが。

「でもお稲荷さん、この辺でこんな大人数入れるお店ってあったっけ？」

「ん？
あぁ、店じゃないよ。
でもまぁ、大勢いるし紛れ込んでも大丈夫でしょ。
なのは達くらいのチビッ子もいるし」

「……？　そう？」

「イケルイケル。
おーいチビッ子達よ。
そろそろ行くぞい」

俺の掛け声でワラワラと集まるチルドレン。
では早速、と尻尾からドラゴンボールを取り出す。
何事かとなのはさんは驚くが、無視して高らかに掲げる。

「んじゃドラゴンボール。
シェンロンはもう出ないっぽいからいいけど。
俺達を過去に戻ったその時間に返してくれ。
あ、スカさん達は向こうで飲むから今晩だけ俺達と同じ未来によろしく」

「ちょ、ま、え、お稲荷さん！？」

掲げたドラゴンボールが青白い光を発したかと思ったら、その光が爆発的に広がる。
あっという間に、俺達はその光に包まれた。

○●○●○●

「ここはまさしく俺達が旅立った六課裏の林。
だってここに、俺が最後の模擬戦の理不尽さに泣いた涙のシミが残っているから」

「そんな事を覚えてる稲荷さんがキモいの」

……辛いと思うけど、私が一緒に居てあげるから！

「にゃぁぁぁぁあああ！！
それはもう忘れて！！」

「だが断る。
さぁ、今から六課解散の飲み会があるらしいから。
さり気無く登場して、え？　お前らいつからそこに？　まぁいいや
作戦で行くぞ」

「なるほど。
クックック、一部とはいえ未来をこの目で見ることができるとはね。
これほど愉快な事はそうそう起こり得まい」

「むしろホイホイ起こってもらっちゃ困るわよ。
私達科学者に真っ向から喧嘩売ってるような状況よこれ」

こまけぇこたぁ気にするな！

「お稲荷さん……
いつかやらかすと思ってたけど、やっぱりやらかした……」

「何頭抱えてるのさ。
さぁ行くぞチビッ子達。
向こうにはキャロとかエリオって言うカラフルな髪の毛のヤツらがいるぞ」

わーい、と俺の先導についてくるチビッ子達。
ブツブツ言いながらも、なのはさんやスカさん、プレシアさんも来た。
最後の飲み会だ、楽しく行きましょうや。

辿り着いたのは食堂。
ここでやるという情報はなのはさんから。
1ヶ月前にその情報が欲しかった気もするが。
扉を開け放つ。

「飲み会があると聞いて」

「あ、稲荷。
……あれ？　なのはが呼びに行かなかった？」

一番近くに居たフェイトさんが俺に気付いた。
フェイトを見た後にすぐフェイトさんを見ると、違和感バリバリである。

「むしろ来なかったら飲み会がどこであるのかすら分からなかった。
それはそうと、俺の友達も参加させたいのだがいい？」

「え？
それはいいと思うけど……稲荷に友達なんていたっけ？」

「泣くぞフォルァ。
まぁ大丈夫ならいいや。
あ、チビッ子達は？」

「あっちのテーブルで楽しくしてるよ」

フェイトさんが指差す。
そこには部屋の一部分を陣取って、フォアードの面々が山盛りの料理を相手に格闘していた。
テーブルの面積＝料理になりそうな勢いである。

「よし。
ヴィヴィオー！　なのはー！　フェイトー！　アリシアー！
お前らはあそこのカラフルチビッ子達と仲良くやってこい」

「わーい！」

「あ、ヴィヴィオちゃん、置いてっちゃいやなの！」

「そういうなのはも私を置いて行かないでよ」

「こらこらー！

周りに迷惑かけないようにしなさいよ？」

４人はすぐさまキャロ達の所へ向かった。

ヴィヴィオがフォアード陣に何やら説明をしているようで、声は聞こえないが大きな身振り手振りが見える。

しばらくすると、響き渡る絶叫。

うむ、うむ。

しかし、アリシアは他の３人の保護者的な立ち回りになってしまっているな。

「アリシ、え？

フェイ……えぇぇ……

母さん、私こういう時どうすればいいか分からないよ」

「笑いしか出ないと思うわよ。

全く、あなたの思いつきは本当に私達の想像を超えるわね」

恐悦至極にございます。

「え、母……さん……？」

「あなたが大人になったフェイトね。

色々言いたいことはあると思うけど。

そうね、大体稲荷のせいって説明で通じる？」

「あ、はい。
大丈夫です」

感謝したらこれだよ。

「しかしあのフェイトが立派になってるわねぇ……
頑張ってるじゃない？
流石私の娘ね」

「母さん……！」

感極まったのか、涙目になりながらプレシアさんに抱きつくフェイトさん。
俺完全に蚊帳の外。
そういやなのはさんはどこに行ったのだろう。

「彼女ならシャマルという人に頭痛薬を貰いに行ったよ。
さて、稲荷くん。
こんな愉快な席だ。
早速飲もうじゃないか」

「おや、スカさん。
そうだな。
お、あそこのテーブルにあるのはまさかのカルピスチューハイでは」

「ふむ、日本酒も置いてあるね。
素晴らしい、なかなかにこの飲み会を企画した人は分かっているじゃないか」

途中のテーブルで、おつまみを少々拝借。
目的の酒があるテーブルでお互いに酌をし合う。
カルピスチューハイをグラスに注いでもらっても、雰囲気出ないのは何故。

「みんな楽しそうだね」

「時折聞こえる絶叫が何とも言えないものだね。
こういうのをカオスと言うんだったか。
まぁ私好みではあるが」

「プレシアさんは未だにフェイトさんに捕まってるな」

「私が彼女の誕生に関わっていたのなら、二つ名に無限の抱擁と名付けたものを」

じゃあ一生プレシアさんは開放されない気がする。
もうちょっとしたら助けてあげよう。

「稲荷さん！」

「むぉ？
あ、キャロじゃないか。
どした？」

「な、なのはさんがフェイトさんで、私達と同じくらいの大きさでなのなの言ってて、アリシアって人がジェイル・スカリエッティな金髪！？」

なるほどなるほど。

日本語でＯＫ。

「なのはくんとフェイトくんが縮んでいる。
アリシアって金髪の人も居た。
そしてお前は何故ここにいる、といった所か。
後、キャロくん、だったかね？
大体は稲荷くんのせいだよ」

「素晴らしい通訳だスカさん、やはり頭にコクがある。
最後の言葉が無ければ」

ここで騒ぎに気付いたのか、みんながこちらに視線を向ける。
人ごみの中から、１人こちらへ近づいてきた。

「ジェ、ジェイル・スカリエッティ！？
何であんたがここにおるんや！
独房で捕まっとるはずやろが！」

「ふむ。
君が話に聞く八神くんかね。
ここにいる理由は君たちの言葉を借りるなら、大体稲荷くんのせいと言ったところか」

「納得してしまった自分が嫌や……」

納得したお前が嫌だ。
てかもう3回は俺のせいにされてるんだが。

「流石にこれはやり過ぎだと思うよ、お稲荷さん？」

「あ、なのはさん。
まぁ確かに事前連絡無しの飛び入り参加は迷惑だったか。
でも何だかんだ言いつつみんな楽しんでるから無問題でござる。
ほら、なのはを見てみろ。
スバルにアホ毛を弄られてるから」

そういう意味で言ったんじゃないんだけど、と項垂れるなのはさん。

「なのはちゃん、状況報告してんか……」

「あはは……
まぁ詳しくは後で言うけど、このジェイルさんは私達が捕まえたのとは別人だから。
結構いい人だよ」

「そこまで嫌われる未来の私というのも興味が沸くものだね」

八神は既に燃え尽きた感じになっている。
そしてスカさんはやはりスカさん。
何にでも興味を持つお年頃らしい。

あの後、プレシアさんから事情を聞いたフェイトさんも合流。
流れに任せてチビッ子達も参入。
途中ヴィータとかシグナムさんとかに見つかってまた波乱が起きか

けたが、みんなで楽しくワイワイ飲みました。
なのはとフェイトとヴィヴィオはキャロとエリオがお気に入りらしく。
アリシアはティアナとスバルがお気に入りらしい。

後、何でこういう状況になったのか聞かれたから過去から連れてきたと言った。
全員からガッされた。
みんな頭を叩いてくるものだから、士郎さんの時のように大仏頭になった次第。

スカさんは、八神にどれだけ苦労したか愚痴をネチネチ言われていた、と思う。
絡み酒とは面倒な。
けど途中からスカさんが『私はヴィータなのだが……ジェイル・スカリエッティはそこの小さい子だよ』と言ったら標的がスカさんからヴィータに移った。
でも内容はスカさんを怒る内容だったので、八神の中ではスカさんに説教したことになっているはず。

プレシアさんは、なのはさんとフェイトさんを交えつつ談笑。
フェイトさんは過去に戻っている間にどんな事が起こったのかを聞いて呆然としていた。
何でも、あの幻で作った目がイッてるプレシアさんが、フェイトさんのオカンだったとか。
折角なので例の上映会ＩＮ六課を開催してみた。
なのはが半泣きになったので、３回リピートさせてみた。
なのはさんとティアナにグーパンされた。
ティアナもそっち側の人だったのを忘れていたよ。

ついでに以前撮ったなのはさんの寝言も放映してみた。
『魔法少女リリカルなのは』って部分で全員が爆笑した。
仕返しだったのか、なのはさんにいつ撮ったのかも分からない俺の楽しみにしていた稲荷寿司が無残になったシーンも流された。
何人かの人が優しくしてくれた。

そんなこんなで宴もたけなわ。
そろそろお別れの時間のようである。

「おや、体が半透明になってきたのだが。
物語にはよくあるが、自分がこういう体験をすると何だか不思議なものだね」

「稲荷がここに来るときに、『今晩だけ』って言ったからじゃない？
そろそろ時間だから、過去に戻されるんだと思うわ」

「そうですか。
2人とも本当に、お稲荷さんがご迷惑かけてすみませんでした」

俺がいつ迷惑かけたし。

「ちっちゃいなのはママとフェイトママ……元気でね！」

「ママじゃないの。
まだ9歳だよ私。
ヴィヴィオちゃんも、元気でね！」

「私もママじゃない。
けど元気で」

「うん。
２人の勇姿はあの映像と一緒にヴィヴィオの脳裏に焼き付けておくね」

「もう忘れて欲しいの……」

何を言う。
後１０回は爆笑できる。

「短かったけど、楽しかったね」

「私もよ。
でも精神年齢大人とか。
その姿じゃ辛いものがあるわね……」

「アリシアが大人になる頃には中身はおばさんだね。
長生き出来てお得と考えるべきなのかな」

姿に合わない哀愁を背負ってティアナやスバルと別れを交わすアリシア。
強く生きて欲しいものである。

「それじゃあ、ドラゴンボールを発動させると怒られるのでもう会うことはないと思うけど」

「あぁ、楽しかったよ。
八神くん、君も稲荷くん程ではないがなかなかに面白い人物だった。
君と出会うために、管理局を襲撃するのもいいかもしれないね」

「ヤメテや。

大体はやてのせいとか言われるようになってまうから」

「フェイト、厳密には違うけどあなたも私の娘なのだから頑張って。
仕事に熱中するのもいいけど、いい人探しなさいよ？」

「か、母さん！！」

「こっちのフェイトって暗そうだからなー
お姉ちゃんも心配だなー」

「もう、アリシアまで！！」

「ヴィヴィオちゃん、なのはさんと稲荷さんの事よろしくね？
高町家全員の願いです」

「任せて！」

「キャロ、エリオ。
私達もほんの数時間しか話せなかったけど、楽しかった」

「私もです、フェイトちゃん！」

「僕も楽しかった！
そっちの世界に戻っても、頑張ってね」

もう残すところ１０秒も無いだろう。
過去組の体は、ほとんど消えてしまっている。
最後に、これだけは言っておかないといけないことを思い出した。

「なのは」

「何ですか？」

「ユーノはどうした？」

「えっ？」

過去組が、完全に消えた。
今頃、あの公園に再び戻っているのだろう。
後に残るのは、俺とヴィヴィオ、隊長・副隊長陣とチビッ子達。
しかしこの胸に残る寂しさ。
言うなれば、小学生の頃に祭りの後とかに感じたあの寂しさに似ている。
……ん？

「ヴィヴィオ、おいで」

「狐パパ……」

「なのは達と一緒にいるのは、楽しかったか？」

「うん……」

「そっか、良かったな」

我慢していたのか、若干涙目になっているヴィヴィオを抱きしめる。
こうやって別れを経験して大人になっていくのだよ。
かつて俺が、稲荷寿司と別れを迎えたように。
俺を見るみんなの視線が、生暖かいものになった。

「稲荷、少し変わった？」

「何を言うフェイトさん。
俺は理不尽な仕打ちが無ければ基本優しいぞ」

「その理不尽な仕打ちを受ける原因になってるのはあんたやあんた」

マジでか。

「何はともあれ、終わったね。
明日から管理局でまた仕事かぁ。
……管理局やめて翠屋継ぐのもいいなぁ」

「フェイトちゃん、シャマル呼んできぃ！
なのはちゃんが手遅れになる前に！」

「分かったよはやて！」

「何で私には変わったの？って聞いてくれないの……」

人徳です。

「さてヴィヴィオ。
俺達は今夜からどこで寝ればいいと思う？」

「ヴィヴィオは狐パパの尻尾でいいよ！」

「だから俺は冷たい地面の上で寝ろってか」

「お稲荷さん、今日はとりあえずまだ六課を使えばいいと思うから。

次の配属先が決まるまでに私も部屋を探さないとだから、一緒に探そ？
あ、また3人で一緒に暮らす？」

「それもいいかもね」

「わーい、また狐パパとなのはママと一緒に寝れる！」

この子が、パパは私の部屋に勝手に入らないでって言う日はいつくるんだろうね。

「またってなんや」

「なのは、稲荷ともうそこまで……」

「ティア、なのはさんってもしかして稲荷さんを？」

「あんた知らなかったの？」

「エリオくん、なのはさん何か可愛くなったと思わない？」

「うん、何か雰囲気柔らかくなったね」

何やら色々と囁かれているが。
ようやく過去の物語は終わり、次は舞い戻ってのここでの物語が再開される。
願わくばこれからは、より平凡な毎日を送れる事を。

「後、向こうじゃのんびりしてたから、お稲荷さんもまた訓練を再開しようか」

「砲撃の的になっていたのにのんびりとかありえん」

平凡な日は、遠い。

おあいそ（後書き）

終わってしまった。
文字数が一番多い話になったとです。
この展開は書き始めてから書きたかった私の夢ですが、いざ書くと登場人物の多さに半泣きになりました。
ここどうよって思う部分は、皆さんの妄想力でカバーしてください。

祭りの後という言葉を作った人は天才。
自分自身、小学生と言わずこうした催し事の後には寂しさを覚えます。

さて、しばらくは書きたかった外伝のような本編のようなちまちまあげていこうかなと思っています。
海鳴出張編、まだ眠ったままですし。
A's どうしよっかな。
リクエストを結構聞くものの、ネタが思い浮かばない。
まぁ、無印もネタが無いまま書き始めてこういう形になっているので、何とかなるのかもですが。

では、おあいそでした。
こちらが合計金額になります。
閉店までまだ時間がありますので、お茶をお持ちしますからごゆっくりどうぞ。

食後のヴィヴィオ（前書き）

学校奇行文。

食後のヴィヴィオ

『何故私を呼んでくれなかったんだい？』

『独房にいるスカさんを呼んでどないしろと。
過去のスカさんを連れてきたから勘弁』

『ふむ。
それは私であって私ではないのだが。
まぁ仕方が無いね。
いつか稲荷くんが言っていたアルハザードに私も行きたいものだ』

『この時代では文無しな俺にはどうにもできない。
あれ……俺過去に残ってた方が生活充実してたんじゃね？』

『こちらでもう一度働こうと思ったらなのはくんの力添えが必要だからね。
そうなると、またなのはくんのお父さんと決戦か』

『いや、大仏頭はもう勘弁。
一撃でいいじゃん、何であの人連撃するのよ』

飲み会から数日後。
ようやく新しい部屋に引越しした俺達。
色々と落ち着いたので、こちらの世界のスカさんに事後報告をしてみた。
何でも、そんな歴史的瞬間に立ち会えなかったのが残念でならないとか。
確かになのはさんのあの寝言は歴史的瞬間に違いない。

「狐パパ、何してるの？」

「お稲荷さんの事だから、良からぬことをしてるんじゃないかな」

「何を言う。
俺の心の友、スカさんに報告をしていたまで」

「何で独房にいるスカリエッティとメールできるの……」

スカさんが頑張ってるんじゃね？

「あ、そうそう。
お稲荷さんに相談があるんだ」

「なんぞ？」

「ヴィヴィオの学校編入についてなんだけど」

ヴィヴィオ、脱兎。

「お稲荷さん、確保！」

「合点！」

フハハハハハ。
神速が使える俺から逃げれると思ったか。

「いやでござるー！
勉強したくないでござるー！」

「その叫びには激しく同意する。
俺も働きたくないでござる。
という訳でヴィヴィオ、夢の退廃的な生活を送る為の口添えをなのはさんにしてくれたら離してやろう」

「狐パパの要求がルナティック過ぎるー！」

……え、そんなに難しいことなの？　俺の退廃的な生活。
羽交い締めにしたヴィヴィオをなのはさんに渡す。
いやだいやだと騒ぐのはいいが、学校編入を拒否するのにネタを使うのはやめてくれ。
1つ披露する度に、俺に対するなのはさんの目付きが鋭くなるから。

「で、こいつの学校編入がどうしたって？」

「うん、聖王教会系列の学校に入れようかとも思ったんだけど……地球の学校に入れてもいいかなって思って」

「あ、じゃあ地球の学校にしよう。
保護者として俺も行くから、翠屋に住めるように手配してくれ。
ふふふ、あの悠々自適な生活がまた俺のモノに……」

「お稲荷さんとヴィヴィオが行くなら私も行くよ？」

なんだって？

「管理局も勿論いいんだけど、はやてちゃんが六課を設立した目的ももう達成しちゃったし。
区切りとしては丁度いいから、管理局をやめて翠屋を継ぐのも本当

に考えようかなって」

ふむふむ。
本音は？

「向こうの生活って楽しかったよね！
今までずっと仕事ばかりだったけど、ああいう生活もいいなぁって思って」

「つまりなのはさんも、仕事したくないでござる、か」

「なのはママはヴィヴィオを叱る資格無いと思う」

これが私のご主人様。
いや待てよ？
このままなのはさんも一緒に堕落させれば……

「名案かと思ったが収入が無くて悲惨な未来しか見えない。
てか当事者のヴィヴィオはどうしたいよ」

「勉強したく」

「ないでござるはもういいから。
それ以外でな」

ぶーじゃねーべさ。

「見たことないから分からなーい！」

「ですよねー

まぁ地球の学校に関しては、一度なのはさんちに行って滞在許可を求めないと話が進まない。
今度行って話すだけ話してみるか。
聖王学校ってどんなのか俺も見たことないし、見学に行くのも一興。
……なのはさんち行ったら、俺士郎さんとお兄様に殺されないよね」

「あ、それいいね。
お父さんとお兄ちゃんは……
キ、キスまで済ませたって言ったらどうか分からないね！」

何でそんな死亡フラグをわざわざ立てないといけないのさ。
てかあれはｋｉｓｓというよりｋｉｌｌだろう。
２文字違うだけでなんて物騒な。
あの時はドキドキが半端無かったよ。
主にいつ俺が内部爆発を起こすかって所に。

「またしてあげるね！」

「マジで勘弁してください」

「なんで！？」

いやむしろ何故その疑問が湧き上がるのかが分からない。

○●○●○●

「聖王教会を訪れる～ヴィヴィオの学校編入を求めて～」

「いえーい！」

「ところでなのはさん、仕事はいいの？」

「昇格断った代わりに休み頂戴って言ったらくれたから大丈夫。
凄い嫌な顔してたけど」

そりゃあスカさんのせいで今管理局がてんやわんやってニュースで言ってたのに、そんな時に休むとか悪魔にしか見えないだろ。
さて、ヴィヴィオをどこに編入させるかという話し合いからまた数日。
すぐにはアポが取れなかったので少し間が開いたが、学校見学に行ってみるということに。
因みに当事者であるヴィヴィオ本人の希望は却下された。
食っちゃ寝の生活とか、お前にはまだ早い。

「そういや学校行くと名前が必要だな。
ヴィヴィオの苗字ってなんだ？」

「高町ー！」

なのはさんの苗字だろそれ。
高町ヴィヴィオか。
ぬ～ん。

「ママだからいいの！
狐パパも、高町狐パパでしょ」

「え、何、狐パパって名前だと思ってたの？
そんなバカボンのパパみたいなのヤダよ」

そこのなのはさんは何故お腹を抑えながらうずくまって震えているのですか。

「てか散々俺の名前を教え込んだだろうが、記憶を呼び起こせ。
俺の苗字はあれだよ、あれ。
しの……りゅ……
俺は苗字を必要としない一匹狼の狐なのさ」

「言葉としては間違っていないのに間違ってる気がする。
後、狐パパ何かを思い出そうとしたよね今。
断念したけど」

「……ぷっ。
あはは、そういやお稲荷さんって人間の時の名前があったよね。
出会ってから1日でお稲荷さんになったから、私も覚えてないや」

稲荷で定着しすぎて。
俺の名前はあったけどなんだっけか。
昔の名前と稲荷。
デスノートに書いたら、どっちが本名か分かるにちまいない。

「もうその内、高町稲荷になりそう。
……ん？
俺は何ナチュラルになのはさんの苗字貰ってるんだ」

「高町……稲荷……
私はいいと思うな、お稲荷さん！」

「ぇー
だってそうなると俺、なのはさんと結婚しないとダメじゃないか。
歩く死亡フラグと結婚するとか、一寸先は闇」

「……なぁ、ヴィヴィオ。
ここしばらくの記憶が無いのだが何でだ？
一寸どころか視界が全てが闇に染まったのだが。
そしてここはどこだ」

「狐パパはもう少し喋る内容を考えたほうがいいと思うな。
なのはママ、あれから落ち込んで励ますの大変だったんだから。
後、ここは聖王教会の学校らしいよ」

何故俺の視界が闇に染まるとなのはさんが落ち込む。
てか俺はいつの間に車に乗せられたんだ。
謎が謎を呼ぶこの事件。
リアルバーローの代名詞であるアリシアを呼べ。

「これが学校とか嘘だろ。
どこのキリスト教会だよ。
で、そのなのはさんは？」

「あっち！」

ヴィヴィオが指差す方向には、外来者受付の窓口。
丁度話し終わったのか、なのはさんがこちらへ戻ってきている。

「あ、お稲荷さん起きた？
中に入っていいって！
邪魔にならないようになら、授業も見学していいらしいよ」

「狐パパー
邪魔になるから帰ろうよー」

「お前とことん堕落してるな。
さっきはいえーいとか言ってノッてたくせに。
一体誰に似たんだ？」

「何で分からないかな……」

なのはさん、君が何を言っているのか分からないよ。

○●○●○●

で、ここが初等部1年の教室らしい。
中では既に授業を行っているのか、教師の声だけが廊下に聞こえてきている。

「今更だが、ヴィヴィオお前何歳よ」

「女性に年齢を聞くなんて狐パパさいてー」

「……え、俺が悪いの？」

「ヴィヴィオって、正確な年齢は分からないんだ。
だから一応6歳って設定にしてあるの」

「設定……」

ニヤニヤしてたらヴィヴィオに脛を蹴られた。
アリサといい、幼女は俺の脛に何か恨みでもあるのだろうか。

「で、授業だったな。
俺って小心者だから、見学していいよって言われても部屋の外で声聞いて満足する派なんだ。
だから俺廊下で待ってる。
ヴィヴィオ、なのはさん、行ってらっしゃい」

「何言ってるの？
お稲荷さんもヴィヴィオの保護者になってるんだから一緒に見ないとだよ」

「俺にはアンパンマンみたいに愛と勇気が友達に居ないから。
……ん？
マテ、一体届出するときに俺となのはさんはどういう関係で提出したんだ」

「えっ……それは……」

ヴィヴィオー！
俺汚されちゃったー！
汚されちゃったよー！

「何を今更」

「その受け答え、絶対お前年齢詐称してるだろ」

「あの……あなた方の会話が中に筒抜けなのですが。
生徒達が笑ってしまうので中に入って頂けませんか？」

俺がヴィヴィオの謎について迫っていると、教室から女性教師が現れた。
オブラートに包んでいるが、どうやらうるさいと怒られているらしい。

「オブラート……結構直球に怒られてると思うんだけど……
あ、すみません！
ほらヴィヴィオ、お稲荷さん、中に入るよ！」

「ヴィヴィオのせいで怒られた」

「狐パパのせいだよ」

「実はお稲荷さんが年齢詐称してるんじゃないかな」

なんでさ。

「チビッ子達の視線が痛い。
何か変な所あるか？
今日は一応気合を入れて、尻尾も念入りにブラッシングしてきたのに」

「お稲荷さん、今目の前に狸の尻尾を生やした人が立ってたらどうする？」

「凝視する。
何でだ、八神でも居たか？」

「何でそこではやてちゃんが出るの？」

「以前週刊誌を立ち読みしたら書いてあった。
管理局の仔狸って。
なのはさんは管理局の白い悪魔だったかな……？
ネーミングセンスないよな」

「何それ……！！
最低だね！！」

「あぁ。
どう見てもなのはさんは白じゃなくてピンクの悪魔。

ちょ、何で俺の尻尾の付け根を握っていますかなのはさん。
そこ力入らなくなるから、ヤメッ」

「ふん！」

あぅん。

食後のヴィヴィオ（後書き）

エピローグ後日談にヴィヴィオの学校のシーンがあったと聞いて。
色々調べたけどヴィヴィオって今6歳でいいのだろうか。
サウンドステージが3年後でその時9歳だから多分いいんだろう。

聖王教会系列の学校の名前も分からない。
正式名称って無いのかもしかして。

後、バイト遅刻しそう。
ヤバス。

というわけで食後のヴィヴィオさん事情。
決してご飯を食べるヴィヴィオの物語ではありません。
ご了承ください。

続・食後のヴィヴィオ（前書き）

昼食物語。

続・食後のヴィヴィオ

「授業って受けると異様に眠くなるよね」

「何言ってるのお稲荷さん。
授業中は寝ちゃダメだよ？」

「なのはさんって絶対あれだろ。
先生が板書した字が間違ってたら指摘するタイプだろ」

「何で分かるの！？」

クソマジメだから。
俺達の会話が気になるのか、ヴィヴィオが自分の席からチラチラとこちらを見ている。
恥ずかしいのか、借りた教科書で顔を隠した。
因みに何故ヴィヴィオが席に着いているのかというと、空き机があるからと先生が気を効かせて座るよう勧めてくれたのだ。
俺も座れれば堂々と寝れたのに立ちっ放しとか。
忌々しい。

先生が黒板に多分問題を書く。
それを指しながら、この問題が分かる人はいるかな？　って聞いてる。
だが問題が難しいらしく、誰も手を上げない。
ヴィヴィオに至っては、既にナンテコッタイ状態。

「誰も分からないのかな？
じゃあ……今日は折角来てもらった、ヴィヴィオちゃんのお父さん！

答えをどうぞ！」

「文字が、読めん」

「……えっと。
お父さんはヴィヴィオちゃんと一緒に授業するのは早かったかな？」

「狐パパ！
恥ずかしいから今は真面目にやってよ！」

「お前、もう一度今のセリフを思い出せ。
この年齢で６歳児より下に見られてるんだぞ俺。
どう考えてもお前の１０倍は恥ずかしい。
そして切ない」

「何威張ってるのお稲荷さん……
あ、すみません。
この人出身世界が違うもので、文字がまだ読めないんです」

「あ、そうなんですか？
じゃあ仕方ないですね。
代わりにお母さん、お願いします」

淀みなく問題の答えと思われる言葉を紡ぐなのはさん。
答えのアームドデバイスって何ですか。
てか問題になんて書いてあったのかすら分からない。
俺でも問題さえ言ってくれれば『コロンビア』くらいなら答えられたのだが。
さて、そうこうしているうちに授業が再開。
生徒はまた聞き役に徹することになった。

キーンコーンと鐘の音が響く。
授業終了の合図なのだそうだ。
どこの世界でもこういう所は一緒なのだなと、えらく親近感を覚える。
因みに今のチャイム。
４限目終了を知らすものらしく、今から昼食タイムらしい。

「再び給食を食える日が来るとは。
あの半分食べると飽きた揚げパン。
たまにお前味見してないだろって言うような味を醸し出すおかずという名の化学兵器。
存在がよく分からない牛乳。
デザート予約合戦。
どれもこれも切ない記憶。
さぁ、者共。
胃袋の貯蔵は十分か」

「お稲荷さん、ここの昼食はお弁当だよ？」

なん……だと……？

「あの給食の洗礼を受けないとか、小学校生活の何を楽しめばいいと言うんだ」

「まぁまぁ……お弁当をみんなで食べるのも楽しいよ？
私の学校もそうだったし。
中庭にでも行って食べようよ」

「ヴィヴィオもなのはママのお弁当がいい！」

「ありがとうね、ヴィヴィオ。
あ、お稲荷さんのお弁当はこれね」

黄色い布に包まれた正方形の弁当箱を渡された。
……む。
この弁当箱の隙間から漂ってくる仄かな香り。
これは、まさか！？

「その、過去に戻ったときにお母さんに習ったんだ。
お稲荷さんの好きな揚げ尽くし。
……えっ！？」

なのはさんに、ハグする。
素晴らしい。
実に素晴らしい。
こう考えると弁当も悪くないものである。

「え、あ……その。
お、お稲荷さんがそこまで喜んでくれるなら、また作ってあげるね」

「なのはさん……！」

「お稲荷さん……！」

「……あれ、今日の主役ってヴィヴィオだよね。
何で主役放ったらかしで2人の空間を作ってるの？」

ヴィヴィオよりお揚げの方が優先順位高いのは世界の常識ではないか。
なのはさんから離れながら答える。
さて、お前の弁当はどんなんだ？

「……ヴィヴィオ。
ポテトサラダが入っているのはいい。
肉も冷めてもうまそうだ。
ミニトマトやデザートが弁当を可愛らしく仕上げている。
だがお前のご飯の上にある味付き海苔、てめぇはダメだ。
何でご飯の上で『（´・ω・、）』の顔してんだよ」

「頑張ったの！」

頑張るベクトルが違う。
見ろ、なのはさんの弁当を。
お前が黒いショボンを作ったせいで、余りの海苔を使ったなのはさんの弁当は白いショボンが出来上がってるじゃないか。
こんな感じに3人とも、それぞれの弁当に色々突っ込みを入れながら、昼食タイムを過ごしていった。
なるほど、これはこれでなかなかに楽しい物なのかもしれない。

○●○●○●

午後は時間が空いていた先生が学校を案内してくれた。
といっても地球の学校と設備はあまり変わらない。
音楽室とか、体育館とか。
時折何の部屋か分からない所は恐らく魔法関連の部屋だったのだろうと予想。
一通り回った後に、学校のパンフレットを貰って今日の見学は終了。
初めて知ったが、あの学校はＳｔ．ヒルデ魔法学校という名前だったらしい。

「やったなヴィヴィオ、魔法学校だって。
お前が入るクラスはグリフィンドールかスリザリンか。
てかお前魔法使えるのか？」

「うぃんがーでぃあむ・れびおーさ！」

「何で知ってる」

「なのはママが向こうの世界で見せてくれたー！」

なのはさん……

「だ、だって暇だったんだもん！」

「以前は朝の早くから夜まで訓練、そして夜中まで何かちまちまと残りの仕事をやっていたのにこの変わり様。
時の流れとは恐ろしいね。
まぁいいや。
で、ヴィヴィオはこの学校に入りたいか？」

「まだ分かんない。
というかなのはママの学校も行ってみたい」

やっぱりか。
まぁそこはまた後日、なのはさんちに滞在許可がおりたらだな。
因みになのはさん。
ヴィヴィオが地球の学校選んだらマジで一緒に住むの？

「そのつもり、かな。
少なくとも教導官はやめるかも。
外部協力者としてはやてちゃんとかの手伝いに行くことはあるかもしれないけど」

くいくいっと服を引っ張られる。
どうしたヴィヴィオ。
ん……何？
それをなのはさんに聞いてみてってか。

「なのはさん。
管理局なんて危ないところに行くのはもうやめて、翠屋継いで一緒に平穏に暮らそうって言ったら？」

「管理局やめる！」

「何がなのはさんをこんなに仕事嫌いにさせたんだろう」

「何が狐パパをこんなに鈍感にさせたんだろう。
まぁ……原因はなのはママなんだけど。
ヴィヴィオが来る前の狐パパの扱い、酷かったみたいだし」

何が言いたいのだ。

「何でもなーい。
なのはママ、一緒に頑張ろうね！」

「ヴィヴィオ……うん！」

何その含みのある言い方。
てかお前、やっぱり絶対６歳じゃないだろ。
リアルバーローと言っても通じるレベル。

「ヴィヴィオは６歳だもん！
ただ前世の記憶が少し残ってるから、他の人より頭が良いだけだもん！」

「前世……プッ。
お早い厨二病、おめでとう。
後、自分で頭が良いとか言ったら可哀想な人になるぞ」

分かった蹴るな蹴るな。
で、前世は何だったのよ？

「詳しくは覚えてなーい。
聖王様って呼ばれてたのは何となく覚えてるけど」

「え、ちょ、それって本当なのヴィヴィオ！？」

「本当だよー！
見て見て！　えいっ！

ほら、狐パパに教えてもらった魔力で作った弾幕っていうの！
虹色でしょ。
虹の魔力光って聖王の証らしいよ！」

「魔力で作るなんて言っていない、気合いで作ると言ったんだ。
てか王様で虹を使うとかお前絶対メリヒムだろ。
やめてよヴィヴィオにまで虹天剣っていう死亡フラグできるとか。
炎髪灼眼も涙目だから」

「やって欲しいの？」

「勘弁して下さい」

土下座。
恥も外聞も死亡フラグの前では意味を成さない。

「……ヴィヴィオ、お稲荷さん。
魔法学校に入れるのはちょっとマズイかも」

「どうしたいきなり」

「あそこは教会の系列だから。
分かりやすく言うと聖王教会って、聖王を崇拝してるの。
だから、聖王と同じ虹の魔力光を持つヴィヴィオを信仰の対象とするかもしれない」

また突拍子も無い話が出てきたな。
何、ヴィヴィオは神にでもなるのか。
この神はワシが育てた。
……いいかもしんね。

「てかなのはさんはそんな状況なのに何でニヤニヤしてるの？」

「あ、ぜ、全然地球の学校に行く可能性が高くなったから喜んでる訳じゃないんだよ！？
地球で暮らすいい口実になるとか思ってないよ！？」

「なのはママも黒くなっていくの。
私の周りに綺麗な人はいない」

お前も人の事言えんがな。

「じゃあお母さんに、泊まれるか聞いてみるね」

「どうやって」

「次元世界間で使える通信機を1つ家に置いてあるから、連絡はいつでも出来るんだ」

「へぇ……グローバル携帯みたいな感じか」

「狐パパの携帯は？」

「使えれば満足だからどんな機能があるかまでは調べてない」

「それは使えてるって言わないと思う」

「メールと電話が出来ればいいんだよ。
電話番号、なのはさんのしか知らないけど」

「あ、お稲荷さん！
お母さんいつ来てもいいって！」

「流石桃子さん、太っ腹」

「後、行くのは私の家族だから1部屋でいいって言ったら隣に居たお父さんがお稲荷さんとお話したいって言ってたよ」

なんてことをしてくれたんだ。

続・食後のヴィヴィオ（後書き）

他にも筆者の小学校の頃は、牛乳瓶の文字が濃いといい。
こんにゃくゼリーの容器の裏に書いてあるナンバーが1に近いといい。
なんてのもありました。
何がいいんだ、何が。

クラスに1人は居た、間違い指摘する人。
何故スルー出来ないのか聞いてみた。
間違いは正す、それが俺の使命とか言ってた。
多分あいつも厨二病だったにちまいない。

単発で終わる予定だったのが、続いてしまった食後のヴィヴィオ。
ノッているので地球編も書いてみたい。
海鳴出張編はいつ投下するのかと。
多分筆者はヴィヴィオを好きになったのかもしれない。

では、続・食後のヴィヴィオでした。
満腹顔のヴィヴィオは可愛かったですか？
もうしばらくヴィヴィオを一緒に眺めましょう。

あ、ロリコンじゃないですよ。
当たり前じゃないですか。
ハハハ。

続々・食後のヴィヴィオ（前書き）

風呂とフラグと奇行文。

続々・食後のヴィヴィオ

前回に引き続きヴィヴィオの学校探し。
今度は地球の学校に行ってみようということで、前日の夜にお泊りセットを準備することになった。
着替えよし。
ブラッシング用品よし。
貴重品よし。
枕よし。
おっと、これはなんだ？
あぁ、以前飲み会の時に撮ったなのはさんとのツーショット写真か。
あの人も死亡フラグじゃなきゃ全然可愛いんだけどなぁ……
ふむ、折角だし持っていくか。
そしてそれらを入れる袋……無し。

「あるよねこういうこと。
ここで諦めるのは普通の狐。
だが俺は訓練された狐。
すぐに名案が浮かぶ」

押入れをガサ入れ。
取り出す巨大なビニールの袋。
一般的にゴミ袋とも呼ばれているが、今の俺にとってはドラクエの道具袋並の重要性を持つ。
鼻歌混じりで荷物を袋に入れる。

「なのはママ、狐パパは何であんなに楽しそうにゴミを捨ててるの？」

「あるとよっぽど嫌な物なのかな？
あ、あれって私と一緒に撮った写真……
そっか……そうだったんだ……グスッ……ヒック……」

「狐パパァァァァアアア！！」

うお！？
いきなりどうしたヴィヴィオ。

「どうした、じゃない！
何をしてるの！！」

「何をしてると聞かれても。
明日の為の荷造りをしているんだが」

「へ？」

「だから荷造り。
それ以外にどう見えるんだ」

「どう見ても別れた恋人との思い出の品を処分してるようにしか見えないよ……」

なんのこっちゃ。

「なのはさんからのお小遣いしか収入がない俺が旅行鞄なんていうブルジョアな物持ってるハズがなかろう。
ゴミ袋はいいね。
ゴミ袋は何でも入る。
リリンが生み出した文化の極みだよ」

時になのはさん。
目が赤いがどうかしたかね。
ヴィヴィオ？

「……紛らわしいの！！」

久々にグーパンを頂いたものの、本気で訳が分からない。

「まぁ、今回は狐パパのせいじゃ無い、のかな？」

ですよね。
とりあえず怒っていたみたいだったので、寝る時になのはさんに尻尾を抱き枕にさせてみた。
怒ったままにすると、後でどんな惨劇が起こるか分からないから。
でも終始笑顔だったので、多分怒りは収まったのだろう。
流石尻尾、今日ほど感謝した日は余り無い。

○●○●○●

「で、今はなのはさんち前と。
ヴィヴィオ、もう帰ろう。
ここは来てはいけない場所だった。
家がよく分からないオーラを纏っている。
これはオヤシロ様も逃げ出すぞ」

「いやいや、折角来てくれたんだから上がっていきなよ」

後ろから声が聞こえた。
振り向く。
士郎さんが居た。
なるほど、あなたがオヤシロ様か。

「……てか俺の知ってる士郎さんじゃない……よね？
見た目が変わらないんだけど」

「む？
君と会うのは初めてだと思うのだが」

「だが俺は知っている、士郎さんの体に無数の傷跡があることを。
そして士郎さんの股間のマグナムは永遠のライバルということを」

「それは聞き捨てならないね。
よし、勝負しようか」

「銭湯準備は万全か？」

「もう、お稲荷さん！
出会って最初にする事がお風呂って色々と順序を飛ばしてるよ！」

なのはさんが言うと卑猥に聞こえるのは何故。
俺はノーマルです。

「ふむ、なかなかに面白い子だね。
本当は道場で話を聞かせてもらおうかと思ってたんだけど、その気が無くなってしまったよ」

「なのはさん。
さり気無く人をボコるつもりだったって言ってるこの人を何とかして」

「お父さん。
お稲荷さんは私の大事な人なんだから、いじめちゃダメ」

「おっと。
そこまで言われると道場で話を聞かせてもらいたくなるなぁ」

火に油を注いでどうする。

結局お話は行われる事無く家に上がる。
きっと俺の事を客観的に見れるヤツらが居たら『士郎さんにボコられるんですね分かります』とか言っていただろうが。
死亡フラグを少しでも回避できるようになるとか、俺も成長したもんだ。
そしてヴィヴィオが高町家のみんなにご挨拶。
桃子さんの、ヴィヴィオを見る視線が凄い。

「君がヴィヴィオちゃん？」

「はい！

高町ヴィヴィオ、6歳です！」

「あなた、ヴィヴィオちゃんが可愛すぎるわ。
むしろ私達が貰えないかしら」

「落ち着け桃子」

「だってぇ……
あ、君がなのはの言ってた稲荷くん？」

「はい！
苗字なしの稲荷、狐です！」

「ダウト」

何が。

「ヴィヴィオちゃんが高町って名乗ってるんだから、稲荷くんも高町の姓になさい。
ヴィヴィオちゃんが可哀想でしょう？」

「だが断る」

「ヴィヴィオちゃんが高町って名乗ってるんだから、稲荷くんも高町の姓になさい。
ヴィヴィオちゃんが可哀想でしょう？」

「拒否します」

「ヴィヴィオちゃんが高町って名乗ってるんだから、稲荷くんも高

町の姓になさい。
ヴィヴィオちゃんが可哀想でしょう？」

聞いてよ。
まさかここで無限ループに陥るとは思わなかった。
実は俺をこの姿にしたオッサンって、桃子さんだったりしないよな。

「まぁまぁ桃子、それも重要だが今回なのは達はヴィヴィオちゃんの学校を見る為に来たんだろう？
先にそっちの話を済ませようじゃないか」

「仕方ないわね……
なのは、私達も手伝うから頑張りなさい」

「うん！」

「ヴィヴィオ、過去でも似たような会話無かったか？」

「そろそろ気付いてね」

何に。

○●○●○●

今日はもう時間も遅いので、学校見学は明日にすることにした。
連絡は桃子さんが入れてくれたらしい。

流石桃子さん、素晴らしい。
そして夕飯前にお風呂に入ってこいとの事で、今は入浴タイム。
本当は士郎さんと勝負をしたかったのだが、なのはさんちのお風呂は一般家庭の物と変わらなかったため大人2人の入浴は無理っぽそうなので。
今回は見送ることになった次第。
また今度、温泉に行ったときに持ち越しらしい。

「狐パパ！
お風呂どう？」

「お、ヴィヴィオか？
丁度いいぞ。
表示はないけど恐らく４１度。
俺にとっては適温」

「ヴィヴィオも入っていい？」

「ん～……狭いぞ？」

「いいよ！　入るー！」

ゴソゴソとすりガラス越しに服を脱ぐ音が聞こえる。
入ってくるのは幼女確定なのに、この言い知れぬドキドキ感は一体何だろう。
やがて全部脱いだヴィヴィオが、浴室に入ってきた。

「じゃーん！」

「んなマッパを自慢されても嬉しくない。

ほら入れ入れ。
後の人の事は考えるな。
かけ湯なんてしないで豪快に来い」

「サイテーだね」

……あれ、思っていた反応と違う。

「先に体洗うね。
狐パパ、洗いっこしよ！
尻尾はヴィヴィオが洗う！」

「律儀だね。
丁度いい、いつも尻尾洗うの苦労してたんだ」

「いつも1人でどうやって洗ってたの？」

「気合いで腰を回してた。
何度我が骨子が捻れ狂ったか」

タオルにボディーソープを垂らして泡立てる。
ヴィヴィオの背中を優しくこする。
鼻歌を歌っているところを見ると、気持いいのだろう。
しかしいつも小生意気な事を言うのに、その割には小さな背中である。
ヴィヴィオの背中を洗い終えると、今度は俺の尻尾の番になった。
ボディーソープにヴィヴィオが手を伸ばす。

「マテ。
お前ボディーソープで頭洗ったこと無いのか。

カペカペになるんだぞ。
頼むからせめて頭髪用シャンプーを使ってくれ」

「狐パパは洗ったことあるの？」

「昔泊まったホテルに『頭も洗えるボディーソープ』って名前のシャンプーがあった。
むしろこれを作った人の頭がおかしいボディーソープ。
それ以降、泊まりに行くときはシャンプーだけは持参している」

「ふーん。
あ、狐パパの尻尾……細い。
いつもの半分もない。
……ぷふっ」

いつもフカフカですから。
てか我慢しても笑ったのもろ分かりだからな？

「さて、俺の尻尾は9式まであるから洗うのは大変だぜ？
ヴィヴィオ、シャンプーの貯蔵は十分か」

「洗うのはいいが、毛を毟ってしまっても構わんのだろう？」

「構うわどアホウ」

その後、3本目でヴィヴィオが疲れ始めたので俺も自分で洗いはじめたり。
泡だらけになった尻尾にヴィヴィオがダイヴしてきたり。
何とも賑やかな入浴タイムになったとです。

「あ、お稲荷さん上がった？
ヴィヴィオも一緒に入ってたんだ」

「うん！
狐パパの尻尾洗ったの！
楽しかった！」

「何ともいい湯加減だった。
なのはさんは今から？」

「うん。
……お稲荷さん、今度は私と一緒に入らない？」

「また俺のお稲荷さんを握りつぶすつもりか」

「ちょ、人聞きの悪いこと言うのやめてよ！」

一握必殺とか呟いてたヤツが何を言っている。
そう言うと、グーパンを残して去っていった。
顔が赤かったから多分照れ隠しなのだろうが、物理的攻撃は勘弁願いたいものである。

「しかしヴィヴィオ。
なのはさんは何故俺と風呂に入りたがったんだ？

もしかしてどこかでフラグ立てていたのか」

「おぉ！

狐パパ、今日は褒めてあげるー！」

「恐悦至極。

６歳児に褒められても全然嬉しくない。

さ、それはともかく俺は尻尾を乾かすぞ。

なのはさんが上がってくるまでに粗方乾かさないと、ブラッシングしてくれる前に寝てしまう可能性があるからな」

「ヴィヴィオがしようか？」

「拒否」

「ぶー。

じゃあドライヤーする！」

「任す」

嬉々としてドライヤー片手に俺の尻尾をいじりだすヴィヴィオ。

中々乾かないのは分かるけど、１点集中はやめてね。

熱いから。

「なのはさん、いつもブラッシングしてもらってすまんね。
特に今日は風呂上りなのに」

「全然いいよ。
私が好きでやってることでもあるし」

「それは重畳。
しかしヴィヴィオにはドライヤーの使い方も教えねばならんな。
いい顔で寝やがって。
尻尾が焦げるかと思ったぞ」

「あはは、仕方ないよそれは」

「ぬう。
あ、時になのはさん」

「何？」

「俺の事って好きか？
あ、嫌いでもいいから尻尾から手を離してね。
毛を引っ張らないでイタイイタイ」

「ななななな、何言ってるの！？」

「いや、普通男と一緒に風呂入ろうなんて言わないでしょ。
そうなのかなって思って。
だから毛を引っ張らないで」

「あぅ……その……
嫌いじゃ、ないよ？」

「可愛らしく言ってるけど今なのはさんが花占い的にプチプチしてるの尻尾の毛だから。
ヤメテ！
もう尻尾のライフは０よ！」

「お稲荷さんは、私の事、好き？」

「付け根握っちゃらめぇぇぇ！
ヴィヴィオー！
助けてー！」

「ヴィヴィオは今寝てるの。
だからなのはママともっと仲良くなってね。
後、これは寝言だから」

「嘘だ！！」

「ねぇ、お稲荷さん、どうかな？」

だから尻尾から手を離し……
アッ――――――――――！！

続々・食後のヴィヴィオ（後書き）

『おい、○○にひぐらしのスロットがあるってよ』
『ヒャッハー！　そいつはマジか！
ひぐらし好きな俺としては、スロットしたこと無くても行くしかない』

梨花ちゃんが５万円くらいくれました。
何でそれで惨劇回避なんだと突込みどころもありましたが。
だから今回のはそれの影響を受けたのでしょう。
終わる時に、東京へ帰れって言われました。
私の地元は福井です。

君は結構何でもできる。
でも恋愛に関しては不器用。
知人の評価です。
みんなは『俺のこと、好きだろ?』なんて本人に言っちゃいけません。
惨劇が起きます。

さて、学校編なのに学校が絡まないという。
お風呂大好き。
心も裸になる。
そして次回でヴィヴィオ編多分ラスト。
乞うご期待。
デデーン。

終・食後のヴィヴィオ（前書き）

優柔不断ストーリー。

終・食後のヴィヴィオ

なのはさんは俺の尻尾を無茶苦茶にするし。
騒ぎを聞きつけて桃子さんと士郎さんと眼鏡は来るし。
どさくさに紛れて士郎さんは真剣持ってきてたし。
阿鼻叫喚になって結局俺は道場で簀巻きにされて放置プレイ。
もう二度となのはさんにあんな事を聞くまいと固く心に誓った次第。

「ヴィヴィオ、まだこっちの学校見てないけど魔法学校の方にしない？
ここに居たら比喩表現抜きで死んでしまうかもしれん。
お前が例え崇拝されても、俺には影響ないから。
な、な？」

「ここまで真っ黒な人初めて見た。
狐パパ、私の目を見てもう一度言ってみて」

「死んだ魚の目をしている」

「それはヴィヴィオの目に映った狐パパの目だよ」

バカな。

「まぁそれは置いといて。
ヴィヴィオは何故道場に来たんだ。
というか俺と話す前に、この簀巻きをほどいてくれ。
俺の力でもちぎれないと思ったら、鎖が編み込まれていた。
士郎さんの俺に対する準備が万全過ぎて涙が出ちゃう」

「朝御飯だって。
それを伝えにきたよ。
ほどくのは拒否」

「何故。
そんな事実を伝えられても俺の腹は満たされない。
ほどいてーほどいてー」

「ニヤリ。
じゃあ狐パパ、バイバイ。
ゆでたまごは残しておいてあげる」

「ニヤリは口で言うセリフではない。
というか俺の分を食べる気か。
食べるんだな。
太るぞやめておけ」

「ゆでたまごも食べとくね」

やぶ蛇だった。
しかし最近のヴィヴィオはもう反抗期に入ったのだろうか。
何か冷たい。
朝食が食べれそうにないので腹の虫がギャースカ叫んでいるが、すまない。
俺にはどうすることも出来ないんだ。
結局3時間後になのはさんが道場に来るまで、俺は簀巻きのまま放置された。

○●○●○●

なのはさんがやってきた頃には、もう学校に向かわないといけない時間でして。
何とパンを持ってきてくれたので飢えることはなかったのだが、ほとんど間を置かずに家を出発した次第。
尻尾の手入れが出来なかったのが心残りである。

「しかし朝食が霞になるかと思った。
ありがとうなのはさん、ありがとう。
揚げはないけどパンを用意してくれていたことに俺の感激が有頂天。
でも何で都合よく準備できたの？」

「お稲荷さんならこうなるかなって思って」

なら先に助けてよ。

「しかしヴィヴィオも、仮にもオトンに対する仕打ちとは思えない。
待遇改善を要求する」

「狐パパも女性に太るなんて言っちゃダメだよ。
ついカッとしてやった。
反省はしていない」

「まぁまぁお稲荷さん。
ヴィヴィオも、もう許してあげて。
ほら、学校着いたよ？」

「ここか。
最寄りのバス停からバスに乗ってすぐとか楽でいいな。
そういや魔法学校の方は遠かったから車だったし。
ヴィヴィオ、どうよ？」

「気分は日本昔ばなしのエンディングテーマ」

「帰りたいんですね分かります。
てか懐かしすぎて涙が出そうだよ。
題名思い出せないし。
俺そんなの教えたっけ」

「なのはママと前に見たの！」

あの人、俺より堕落し始めているんではなかろうか。

「だが帰るのは却下。
行くぞヴィヴィオ。
なのはさん、手続きを」

「嫌でござるー！」

「分かった！」

嫌がるヴィヴィオを羽交い絞めにして校舎へと向かう。
ヴィヴィオを学校に入れるのはなかなかに重労働のようだ。

「私が子供の頃にいた先生が、丁度1年生を持ってるから授業見に来ていいって！」

「へぇ、それでここか。
1年は組。
嘘だと言ってバーニィ」

「あ、誰かのいたずらだね。
私の頃にもあったなぁ」

「俺には身に覚えがござらん。
この小学校だけのローカルな遊びのようだ」

しかしビックリした。
ここを開けたら山田先生か土井先生が居るとか勘弁願いたいものである。
いや、土井先生は少し居て欲しいけど。

今回は注意されること無く教室に入る。
どうやら授業の真っ最中。
壇上に立つ先生になのはさんが軽く会釈をする。
授業中に入ってきた人に興味津々なのか、子ども達の視線が凄い。
でもほとんどはヴィヴィオを見ていない気がする。
試しに俺だけ、教室の隅に寄ってみた。
全員の視線がついてきた。

「何故見る」

「むしろ何故分からないの？」

どういう事だなのはさん。

「はいはい、みんな！
珍しい生き物とは思うけど授業に集中しましょうね！」

「狐パパ、ヴィヴィオより目立ってるね」

珍獣扱いされても嬉しくない。
ざわめく生徒たちを先生が宥めて、授業が再開。
科目は社会のようで。
海鳴市の郷土を教えているようだった。
因みに今回も、事前に連絡を受けていた為ヴィヴィオは着席することができた。
羨ましい限りである。

授業の終わりには、折角だからとヴィヴィオの自己紹介タイムということに。
ヴィヴィオが壇上に上がる。
若干緊張しているようにも見えたが、すぐに大きな声を張り上げた。

「ミッド出身、高町ヴィヴィオ。
ただの人間には興味ありません。
この中に、宇宙人・未来人・異世界人・超能力者が居たら、私のところに来なさい。
以上！」

……これ、笑うとこ？

「お稲荷さん……」

「どうしたなのはさん。
俺は今、キョンさんの突っ込みが出来たことに感動しているのだが。
ほら見ろあそこ。
ヴィヴィオの隣のヤツの名前、谷口だぞ。
素晴らしい、俺もここに入っていいかな」

「お稲荷さんにはまだ早いよ」

……えっ？

「ヴィヴィオちゃん！
ミッドってなーに？」

「そういうのは聞かないのが大人のエチケットなんだよ」

「へー、そーなのかー」

「ヴィヴィオちゃんのお父さんって狐さん？」

「そうだよー！
狐パパ、変化してみて！」

合点。
ボフンと、煙に包まれる。

「アルフさんの姿をリスペクト。
本邦初公開。

稲荷子狐フォーム。
ただし尻尾は9本のまま」

「わぁ！　子狐さんになった！」

「すげー！　変身だ変身！」

「可愛い！」

「ハッハッハ。
落ち着きたまえ君たち。
おい誰だ尻尾引っ張ったやつ。
股を広げるなどう見ても俺は男だから。
わいせつ物陳列にしかならないから。
見た目子狐でも中の人はお兄さんだからね。
ちょ、耳は触らないで！
尻尾の付け根も触っちゃダメ！！
アッ――――――――！！！」

「ひでぇ」

「元気だしなよお稲荷さん」

「股を大開きにされた俺の姿を一番凝視していたのは誰だよ。

昼休みも体中弄られるし。
もうお婿に行けない。
ヴィヴィオ、大きくなったら俺を貰ってくれないか」

「いいよー！
ペットショップに売ったら5万円くらいになるかな」

親を売る子って今まで居ただろうか。

「あはは……
でも本当にあの姿可愛かったね。
今度私にも抱かせて？」

「今度な。
で、ヴィヴィオ。
肝心の学校はどうだったよ。
俺としては谷口もルーミアも居たここを勧めたい」

「狐パパの意見が朝と１８０度違う」

人の考えとは移ろいやすいものである。

「ん～……すぐに答え出さないとダメ？」

「すぐって訳じゃないけど、私も後数日したら仕事に戻らないとだから……
今週中には決めて欲しいかな」

「あなたは一体何日休みを貰ったんだ」

「１０日間」

なのはさんに休みを許可した方は、恐らく血涙を流したに違いない。
で、後３~４日は余裕があるからその間は実家に泊まるんだとか。
全ては計画通りと言うことか。
ともかく、学校を見て回るという行事は終わったので後はヴィヴィオの答えを待つばかり。
もう少しだけは、肉体的平穏な日々は続きそうである。

「狐パパ、そういや何でルーミアちゃんの名前知ってたの？」

「マジでルーミアって言うのか」

「うん。
本当は伸ばさないけど、あだ名らしいよ。
本名は門音　流美亜」

「苗字がくっつけたらどう見ても闇系。
昨今の名付け方は凄いの一言に尽きる。
『月』と書いて『ムーン』と呼ばせるご時世だからなぁ……
あ、それと谷口の名前が気になるのだが」

「谷　口さんだったよ」

「まさかの谷口で姓名兼ね備えていたのか。
どこの国の人だ谷口」

「お稲荷さん、ルーミアって？」

「東方Ｐｒｏｊｅｃｔをするか、ニコニコしてしまうコメントが流れる動画サイトの手書き劇場見れば分かるよ」

「見てみる」

「見終わったら弾幕ごっこしてみようぜ。
あれは格上の相手でも勝てるゲームらしいから、なのはさんに戦闘で一矢報いたい」

「戦闘なら負けられないね。
最近訓練もしてないし、お稲荷さんが負けたら私がみっちり教導してあげるね！」

……え。

「ヴィヴィオもするー！
頑張って虹天剣覚えるから！」

……え。

終・食後のヴィヴィオ（後書き）

週間ユニーク1位って何さ。
少し自重しよう、5位辺りで1位の方を眺めてるのがベストポジションだから。
でもありがとう、ありがとう。

子どもは何でも凄いで片付くのが凄い。
だから多分無邪気さも残酷になる。
バイト先でオッサンと呼ばれた。
まだお兄さんです。

最近の子どもの名前って本当に凄いと思う。
キララとクララって姉妹も居た。
大人になったらなんて呼ばれるんだろう。
ちょっと見てみたい気もする。

さて、食後のヴィヴィオ鑑賞会もこれにて閉幕。
結局行くところ決まっていないのは奇行文クォリティー。
そのうち決めます。
ヴィヴィオをねっとり見てくれてありがとうございました。

あ、バイト遅刻が濃厚なので感想返信は帰ってからします。
働きたくないでござる。

２０１１．９．１３
歌詞で運営にフルボッコされるのが怖くて修正。

はしご　1件目（前書き）

宿題物語。

はしご　1件目

ヴィヴィオの学校見学からまた数日。
昼食を食べにリビングに行くと、ナンテコッタイ状態のヴィヴィオと、仁王立ちしたなのはさんが居た。
何やってるんですか。

「あ、お稲荷さん。
聞いてよ、ヴィヴィオってば宿題しようとしないの」

「ヴィヴィオはまだ入学してない！」

「でもヴィヴィオもやってみなさいって先生がわざわざ用意してくれたんでしょ？
折角だからやってみようよ」

「嫌でござるー！」

半泣きのヴィヴィオ。
遂に床にうつ伏せに寝そべって手足をばたつかせ、駄々をこね始めた。
次に仰向けになってまた手足をバタバタ。
うつ伏せに戻り顔を手で隠して嗚咽。

「はいストップ。
次のステップは寝るのバレバレだから。
てかお前どこでそのＡＡ見たよ」

「狐パパァ……

だって……仮にやるにしても要求がルナティック超えてギャラクティカなんだもん」

「意味が分からん。
宿題ってこれか？」

ぼくたち・わたしたちのうみなりしのれきしをしらべてみよう！
１０年くらいまえのできごとをしらべて、そのないようと、じぶんのおもっていることをじゆうに２００００字くらいでかいてみよう！
おとうさんやおかあさんともいっしょに、がんばってね！

「小学１年生用にひらがなと少しの漢字で優しく表現されてはいるが内容は既に大学の卒論レベル。
手伝わされるお父さんとお母さんが涙目になる姿が容易に想像できる。
これ無理じゃね？」

「えー？
私が小学生の頃にもやったんだよ？」

「それはもう小学生じゃない。
よしんば小学生だとしても頭にターミネーターがつく」

「どういう意味かな？」

あ、なのはさんは目からビーム出ると怖いんでこっち向かないでください。

「狐パパァー手伝ってー
１０年前の出来事とか調べるのだけで何日もかかるよー」

「コピペの嵐で卒論を終えた俺に何を求めるか。
というか俺自身海鳴市の歴史に関しては知識がない」

「ウヴォア」

ヴィヴィオが壊れ始めた。
しかし、なのはさんは先ほどヴィヴィオが言っていたようにまだ入学してないのに、何故こんなものをやらせようと思ったので？

「こういう経験も、出来るうちからいっぱいしておいた方がいいんだよ！」

「なのはママが白い悪魔って言われるのが分かる気がする」

「なのはさんが白い悪魔って言われるのが分かる気がする」

「こーら、ヴィヴィオ？
そういう事は言っちゃいけません」

デコピンしながら注意するなのはさん。
何故俺にはアイアンクローなのか聞かせてください。

「まぁ、俺のコピペ技術でいいなら後で手伝ってやるから今は昼飯だ。
おあつらえ向きにテーブルにはコロッケがある。
だがお揚げが無いとは許せないナリ」

「その技術、ヴィヴィオに教えたら1ヶ月お揚げ抜きだからね」

「残念、ヴィヴィオの助けは無くなってしまった。
……どうしたヴィヴィオ、黙りこんで」

しばらく俯きながら何かを考えていたヴィヴィオ。
コロッケ……ナリ……とかブツブツ呟いた後、ハッとした表情になった。
視線を俺に向ける。
立ち上がって俺の背後に回った。
尻尾にダイヴしてきて何かゴソゴソしている。

「ヴィヴィオさん。
出来れば断りを入れてからモフモフして頂きたいのですが」

「フッフッフ、狐パパ。
以前教えてくれた、マリー・ナントカネットはこう言ってたよね。
パンが無ければお菓子を食べればいいじゃないって」

「マントワネットだ。
何だそのナントカネットって。
それだけで人の名前じゃないか。
ちゃんと覚えろ」

「アントワネットだよ、お稲荷さん」

何が違う。

「そして、かのキテレツも言った。
歴史が分からなければ見てくればいいじゃないって」

「言ったっけ、そんな事。

……いや言ってねーよ」

「ヴィヴィオ……まさか！？」

「狐パパの尻尾にあったジュエルシード！
ヴィヴィオを１０年前の海鳴市でネタになりそうな所に連れてって！
あ、狐パパとなのはママもお手伝いで一緒にお願い」

そう言いながらテーブルの上に立って掲げてるのは間違いなく俺の尻尾にあった３つのうちの１つのドラゴンボール。
何をしてるかあなたは。
すぐに光を放ち始めるドラゴンボール。

「お稲荷さん！！」

「大丈夫さぁ」

飲み込まれた。

○●○●○●

光がおさまる。
だがそこにあるのは先程と変わらぬ風景。
つまりリビングである。
これは痛い。
光が発生しなかったら、ヴィヴィオを厨二認定出来るレベル。

顔を赤くしながら、テーブルから降りるヴィヴィオ。

「ワロタ」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！？
もぅ、ヴィヴィオ？
ジュエルシードは、お稲荷さん以外が使うととっても危ないんだよ。
こんな事しちゃダメじゃない！」

「……ごめんなさい」

しゅん、としながら俺にドラゴンボールを返してくる。
結構ガチに怒っているので、今のなのはさんは恐ろしい。
ヴィヴィオを撫でて、癒しを味わうことにする。
しかしこのドラゴンボール、若干黒ずんでいる気がするのは気のせいだろうか。

「でも、本当に大丈夫だったね。
お稲荷さんのおかげで助かったよ。
もしかしたらあのままジュエルシードが暴走してたかもしれないしね。
ありがとうね、お稲荷さん」

「え？　あぁ、うん」

適当に大丈夫って言ったことは黙っておこう。
何かいい感じに俺の株が上がってるし。

「まぁいいや。
とりあえず飯を食うからソースをくれ。

俺はコロッケをレンジでティンしてくる」

「あらあら。
稲荷くん、折角温めようとしてるところ悪いんだけど今から晩ご飯の準備をするのよ？」

なのはさんでもヴィヴィオでもない声がリビングに響く。
入り口を見ると、なんとそこには桃子さん。
ヴィヴィオの宿題について話している内にそんな時間になってしまったのか。
そう思って時計を見るがまだ6時。
翠屋はどうしたんです？

「今日は暇だったから、先に上がらせてもらっちゃった。
もうちょっとしたら士郎さんも帰ってくるから、みんなで早めの晩ご飯にしましょう」

「昼飯を食いっぱぐれたので多めで。
昼食を食いっぱぐれたので、ヴィヴィオのせいで。
大事な事なので2回言った後に倒置法を使ってみた」

「ヴィヴィオのせいじゃないもん！」

あんな鬼畜論文の手伝いを求めるばかりかテーブルの上で厨二病を発病していたお前が何を言ってるか。

「まぁまぁ……
あ、お母さん、ご飯の準備私も手伝うね！
今日は何？」

「あら、じゃあよろしくね？
今日は肉じゃがよ」

「お・あ・げ！
お・あ・げ！」

「それはないわねぇ～」

どうしてそこで諦めるんだ！！
もっと熱くなれよ！！

「はっはっは！！
なるほど、ヴィヴィオちゃんも宿題を貰っちゃったか」

「入学前に宿題とかイミフの極み。
というかヴィヴィオはまだどの学校行くかすら決めてないー！」

飯の支度をしているなのはさんと桃子さんをヴィヴィオと2人で眺めていたら、翠屋から帰宅した士郎さんと遭遇。
一緒にソファーに座って、今日の出来事を話している。

「しかしあの宿題か……
なのはの時も、桃子と2人で頭を悩ませたものだ」

「１０年前に行ってネタを仕入れてきて、ただそれをグダグダ書き連ねるヴィヴィオの素晴らしい計画が狂ってしまった。
狐パパァ……」

「頑張ってなのはさんを説得しろ。
俺は別にどうでもいいが、あの人はやらせる気満々だからな。
てか卒論の苦しみをもう一度味わうのは勘弁願いたい」

「おや、稲荷くんは大学を出ているのかい？」

「なりは狐でも元人間ですから。
中卒とは違うのだよ中卒とは」

何やら台所から、うぐぁって呻き声が聞こえたけど何だろうか。

「まぁ、後数日頑張ればなのはさんの１０日間の休みも無くなるし。
何だかんだで有耶無耶になってやらなくて済むんじゃね？」

「流石狐パパ！
そこに痺れもしないし憧れもしないけどその案は最高だね！」

「ヴィヴィオちゃんが大人になったら、そのまま稲荷くんのようになりそうだね」

「びぇぇぇぇえ！！」

何故泣く。

「あー！
お稲荷さん、ヴィヴィオを泣かせたー！」

「士郎さんに、ヴィヴィオの将来が俺にソックリの性格になるとか言われたらこうなった。
俺を責めるのではなく、むしろ俺を慰めてください」

「あらあら。
何か楽しそうなことになってるけど、一旦中断してもらっていいかしら？
なのは、料理を並べてくれる？
あなた、恭也達を呼んできて」

なのはさんに責められていると、台所から桃子さんがひょっこり顔を出した。
どうやらもう出来たようで。
何とも手際のいい事である。
しかし、そう言えば昨日はお兄様って家に居なかった気がするのだが。
帰ってきたのだろうか。

士郎さんが了承の意を伝え、リビングを後にする。
残った俺達は、皿や茶碗なんかを並べる事にした。
2，3分もすると、続々と高町家が集結していく。
あぁ、眼鏡。
お前もそういや居たね。
昨日も、その場に居たけど一言も喋ってないから存在感が皆無。

「桃子さん桃子さん。
コロッケも温めていいですか。
揚げがないのは残念だけど、昼飯にこれを食べようとしてたから食べないと調子が狂っちゃう」

「いいわよー」

許可も頂いたので、早速レンジへ。
何分くらい温めればいいだろうか。
とりあえず適当な時間温めてみる。
焦げないように、中で回り続けるコロッケをじっと見つめる。

「あ、あ、あ、あ、あぁぁぁぁぁあ！！
な、何やってるの！？」

「コロッケをティンしてる以外何に見えるというのか。
てか今俺は、焦げる寸前を見極めているのだ。
少しの油断が命取り。
だから今は話しかけないでくれ。
む、異臭」

「み、見極めれてない……
というか、コロッケ……」

「表面がちょっと黒くなったが、削れば無問題」

量は少なくなるが、一口でも食べれればいいので。
そう言いながら視線をレンジから離す。
コロッケを皿に移し、みんなの待つ食卓へと戻ろうとした。

「……なぜここにいるし」

「その言葉、熨斗つけて返すの」

はしご　1件目（後書き）

やっと自宅に帰って来れました。
ヒッキーを目標としている私に3泊4日は拷問でしかない。
なのに週間アクセスが１４０００だと……？

前回の投稿話が、割り込み投稿したので気付かなかった人が多いようで。
ＳｔＳ時代のどっかその辺に紛れ込んでいます。
見つけ出せたらそちらも一緒によろしくです。

長い話は嫌われると全校集会での校長先生を見てると分かると思うので、挨拶はこの辺で。
今から何件かはしごしますが、みなさんもまだお時間がありましたらご一緒に。

え？　最後のセリフ？
君が何を言って（ｒｙ

はしご　2件目（前書き）

変態狐奇行文。

はしご　2件目

「どうしてこうなった」

「というか何で分からなかったの？」

「なのは、生命の神秘というか高町家の神秘というか。
１０年後も士郎さんと桃子さんはこの姿なんだ。
多分奴らは蓬莱人。
てかリビングの模様替えくらいしろよ」

「みんなは変わっていくけど、変わらない物もあるっていいと思わないかい？」

「よく分からないけど士郎さんのロマンチストぶりがキモイのは分かった。
てか会った時に教えてよ」

「いつ気付くかなとは思ったんだけどね。
まさかなのはに会うまで君達の時代の俺達と思っていたとは。
桃子、いつまでも若くいような」

「えぇ、あなた」

「どこまで人外になる気ですか」

「でも、そうするとヴィヴィオの願いは叶ったって事？
確かに１０年前の私の家に居れば闇の書事件に巻き込まれるし」

「何またなのはは事件に巻き込まれるの？
マジ勘弁してよ。
行く先々で殺人事件に巻き込まれるバーローと一緒に旅行してる気分」

「ネタキタ――――――――――！！」

「お前もう黙れ」

一言で言うと、カオス。
なのはさんも、なのはが登場したことで異変を感じたらしい。
よくよく考えたら、昼飯食べようとしてた時間からヴィヴィオの相手をしていたからといって、いきなり夕方に変わる訳無いじゃないか。
後、ヴィヴィオの壊れ具合が半端ない。
そんなに勉強が嫌なのだろうか。

「でも、何でヴィヴィオの願いが叶ったんだろう？」

「そんな事も分からないのか。
だからお前はいつまで経ってもなのはさんなんだ」

「どう、いう、意味、かな？」

あた、まが、われ、そう。

「全く……じゃあお稲荷さんは分かるって言うの？」

「当たり前じゃないか。
今スカさんに聞いてる。

あ、返信きた」

『ハッハッハッ

『おや、君はヴィヴィオくんかい？』

『何で分かるの！？』

『無限の欲望という名は伊達ではないのだよ』

しばらく硬直するヴィヴィオ。

たっぷり２０秒は固まった後に、携帯を放り出してなのはさんに抱きついた。

「なのはママぁ……

ヴィヴィオ狐パパに汚されちゃった……

汚されちゃったよぅ……」

「大丈夫、まだ取り返しはつくから。

だから、今後は私の言う事をちゃんと聞いてね？

お稲荷さんみたいにならないようにしよう？」

「うん……」

「だからまずはちゃんと学校に行って勉強しようね」

「嫌でござる」

あの、笑いながら俺を見るのやめてくれませんかねなのはさん。

目が笑っているのに笑っていないから。

夕飯後は、何故かそのままで放置されていた俺達の部屋にまた御厄介になることになった。
何だかんだで、お別れ飲み会の後なのはも寂しさから泣いてしまったらしく。
寂しさが癒えるまでは、この部屋をそのままで置いておこうとなったらしい。
なのはマジナイス。
という訳でその日は懐かしの布団で就寝。
あっちゅー間に次の日になった訳で。
ヴィヴィオと共にここに居た頃の恒例、早朝の散歩に出ております。

「で、ヴィヴィオ。
帰らんの？」

「なのはママが見逃がしてくれなかったの。
やっぱりここで何とかネタを仕入れてみる。
今帰ると、締切りが早まりそう」

「なるほどな。
所で、だ。
周りに居た人はどこへ行った？」

「え？」

さっきまで店先で客引きをしていた魚屋のおっちゃん。
犬の散歩に性を出していたおばちゃん。
朝練か何かでランニングしていた兄ちゃん。

その全員が、忽然と姿を消していた。

「おい」

静かな空間に、俺とヴィヴィオ以外の声が響いた。
2人揃って声の聞こえた方に視線を向ける。
そこには、見た目赤い服を着た幼女がいた。
服と同じ赤い帽子に付いているウサギの人形が、何ともいえないアクセントとなっている。
てか、ヴィータだった。

「ヴィータ……お前って……お前って……やっぱりエターナルロリータだったのか……
俺間違ってないじゃん、何で前そのハンマーで殴ったし」

「なっ!?
テメー、何であたしの名前を知ってやがる!?
いや、御託はいい。
何か腹立つ単語が聞こえたからとりあえずぶっ潰す」

「そういう事を簡単に決めつけない為に、話し合いって必要なんだと思う!」

「狐パパ、それなのはママのセリフだよね?」

いいじゃん、俺ヤバそうだし。
てかヴィータがなんか悪役みたい。

「テメーを潰したらそっちのチビから魔力を頂く!
殺しゃしねーから安心しな」

「ほう、つまり俺がやられなければ、ヴィヴィオに手出しはしない、と」

「なんだ、やる気か？
ハハ、いいぜ！
ベルカの騎士の名に誓って、テメーに負けたらそっちのチビには手を出さないでやるよ」

「大した自信だな。
ならヴィータ、俺がする技をお前に選ばせてやる。
土下座、ジャンピング土下座、スライディング土下座、アクロバティック土下座。
さぁ、どれがいい」

「せめて『ヴィヴィオは俺が守る！』くらい言って欲しい」

だってヴィータだぜ？
勝てる要素が見当たらない。
てかそもそも何故戦う方向にこの場の雰囲気が流れていっているのかが分からない。
話し合おうよ。

「ちっ、テメーなめてんのか！？
時間もあんまりねーんだ。
速攻片付けてやる！」

「狐パパ！
ヴィータさん、いい情報をくれた！
勝てなくても時間を稼げば負けないよ！」

「興味なし」

分かった分かったから蹴るな。
仕方無しにヴィヴィオを下がらせて、ヴィータに向きあう。
向こうは既に巨大ハンマーをスタンバっている。
あれに当たったら、そう、痛そうだ。
それだけは避けなければならない。
覚悟を、決めるか。

ゆっくりと右手を突き出し、掌を上に向ける。
ヴィータは俺の動作に警戒し、迂闊に踏み込めないようだ。
いい、それでいい。
計画通り。

「術式固定。
右腕、『ザムディン』掌握」

呟く。
同時に突き出していた右手を強く握りしめる。
辺りにはゴゴゴゴゴゴという音が響く。

「ザムディン、だと？
術式とか言っても、何もねーじゃねーか」

「さぁ、どうだろうな」

ニヤリとする。
確かに俺の右手は何も変化がない。
だが、その動作と俺の一言でヴィータは更に動けなくなった。

少し動けばやられる。
そう、経験で感じ取ったのだろう。
突き出された右手はそのままに、今度は左手を突き出す。
先程の右手と同じように、掌を上に。

「術式固定。
左腕、『ハルヒロ』掌握」

「クッ、左手もだと……！？」

左手も強く握り込む。

「狐パパ、大丈夫！？」

「あまり、大丈夫ではないな。
見るな、ヴィヴィオ。
仕上げを、かける」

ヴィータが息を飲んだ。
だが、そんな事を気にもとめず、俺はゆっくりとした動作で両腕を胸の前に持ってくる。
握り締めていた手は開き、そのまま、パンッと両手を合わせた。

「右腕『ザムディン』
左腕『ハルヒロ』
術式統合。
いくぜ、ヴィータ……
虚言『偽られた呪文』」

俺の言葉を最後に、その場を静寂が支配した。

ヴィータは何が起こっているのか理解が出来ず、動くこともできないようだ。
だが、俺もこの状態は長くは持たない。
しかしヴィヴィオの為にも、出来る限りここで時間を稼がねばならない。

たっぷり5分はそのまま対峙しただろうか。
ヴィータがいい加減、痺れを切らしてきた。

「なんだよ、何なんだよ!?
何をしたんだテメー!
『ザムディン』って……『ハルヒロ』って何だよ!?」

叫ぶ。
だが踏み込んで来ないのは、危険と判断しているためだろう。

「ふ……それ程までに自分が今置かれている情況に不安を感じるか。
なら教えてやるよ」

ゴクリ。
そんな音がヴィータの方から聞こえた気がした。

「『ザムディン』はな……
ザザの……じーさんの名前だ」

「……は?」

「そして『ハルヒロ』とは……
俺の……兄ちゃんの名前だ」

ヒュウっと冷たい風が、俺とヴィータの間に流れた気がした。

「ザザのじーさんと俺の兄ちゃんを統合しちゃったよ。
ゴメン、何か色々ゴメン」

「な、何だよそれ!?
でもザムディンを握り込んだ時、辺りがゴゴゴゴゴって……」

「後ろでウチのヴィヴィオが口で言ってました」

「……ハルヒロを握り込む時、大丈夫じゃないって言ったのは?」

「あんな絶賛厨二病な状態、俺にとっては毒でしか無い。
ヴィヴィオの為とは言え、１０分間はあの状態になってた俺。
うん。
欝だ、死のう」

「て、テメー!!
騙しやがったな!!」

だから最後に言ったじゃん。
虚言って。

「ぜってー、許さねぇ!!!」

「狐パパ、ヴィヴィオを守って!」

「何遠回しに死ねって言ってるか。
いいかヴィヴィオ、こういう時は相手を脅すんだ」

「サイテーだね」

「生き延びるのに必死と言ってくれ。
さっきから俺の脳内はフル稼働中。
という訳で富竹よろしく」

「……？

……あ！　分かったよー」

よろしい、では。
神速発動。
一瞬でヴィータとの距離を詰める。
スカートを捲る。
かぼちゃパンツ……？
まぁいいや、脱がす。
右手にパンツ。
左手はスカートを掴んで捲り上げたまま、ヴィータの背後に回る。
一旦神速解除。

「神技『取り払われた秘境』」

「富竹フラッシュ！！」

「……な……え！？
……っ！？」

神速再び発動。
ヴィヴィオの下に戻り、カメラを受け取る。

「さぁ、ヴィータ。

ここで俺達を見逃してくれないと、今撮ったこのお前の秘境大公開写真を一般公開しちゃうんだがなー
手始めにスカさんに送ろうかなー」

赤くなってプルプルしているヴィータ。
俯いて表情が見えないが、相当悔しいらしい。
と、ヴィヴィオに服をくいくい引っ張られる。
なんぞ？

「狐パパ、あれ……」

「ん？」

ヴィヴィオが指差す。
そこにはヴィータがいるだけなのだが……

「ヒック……えぐ……グス……ヒッ……」

ガチ泣きしていた。
どうしよう。

「お稲荷さん、大丈夫！？」

「ヴィータ、無事か！？」

何というタイミング。
なのはさんと、何故かシグナムさんが現れた。
まぁ、ヴィータが居たのだからシグナムさんが居てもおかしくない、のか？
因みになのはさんは俺達の後方から。

シグナムさんはヴィータの後方から。
なのはさんは、突然街中に結界が出来てその中に俺が居たから。
発信機で見付け出したらしい。
忘れてたねこの首輪の存在。
そしてシグナムさんは、ヴィータが中々帰ってこないから探しに来た感じである。

「助かった。
なのはさん、俺ヴィータに殺されそうだった。
ヴィヴィオが魔力を抜かれるとか言ってたから戦った。
壮絶な戦いだった。
俺頑張った。
という訳でヘルプ」

「お稲荷さん……」

なのはさんが俺を見る目が、冷たい。
何故だろうと周りを見てみる。
目の前には、泣いているヴィータ。
俺の右手には、ヴィータのパンツ。
左手には、カメラ。
あぁ、なるほどぉ！

「これは罠だ！
ヴィータが俺を陥れるために仕組ん」

ピンクの光にジュっとされた。

「ヴィヴィオが襲われそうだから俺頑張ったのに……
俺もハンマーで叩かれそうだから超頑張ったのに……
厨二病まで再発させてさ……」

「ヴィヴィオも魔力取られるって聞いてこれでも実は怖かったのに
……
なのはママが来てくれて、本当に助かったって思ってたのに……」

「ヴィヴィオは何されたよ？」

「お尻百叩きだった。
でも手が魔力で強化されてた」

「まだいい方じゃないか。
俺はまずは説教だったぜ。
終わったら夜だったが。
途中から私よりもヴィータちゃんがいいの！？　とか言い出してどうしようかと。
幼女に欲情はできん。
てか説教が朝から夜、間の時間はどこへ行った」

「説教だけだったの？」

「まさか。

4回は冥界を垣間見たよ。
みょんと幽々子さん本当に居たよ。
てか後日八神家に謝りに行くことになった」

「うわぁ……」

「でも簀巻きとかはやられたことあるが、庭に首だけ出されて埋められる経験は初めてだなぁ」

「ヴィヴィオはお仕置き自体初めて」

「ようこそこちらの世界へ」

「嬉しくなーい」

「……風が冷たいな」

「……うん」

はしご　2件目（後書き）

Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｔｈａｎｋｓ！！
ハルヒロさん。　本人了承済み。　リアル兄貴。
ザムディンさん。　本人魔方陣グルグル。　役に立たない。

研修の自己紹介が書けない。
Ａ４用紙１枚にビッチリとか鬼畜。
卒論よりも高いハードルを感じています。
お稲荷様奇行文を書いてますと言ってみようか。
……あだ名が稲荷になりそうだからやめておこう。

久々に先輩に会いました。
『相変わらずお前はどこか着眼点がズレてるな』と言われました。
私的にはヒットしているはずなのですが、謎です。

という訳で１件目のはしご先も閉店したので２件目に。
え、何、ここももう閉まるんですか？
じゃあ次イキマスカー！

はしご　3件目（前書き）

八神家の怪談。

はしご　3件目

ヴィヴィオと一晩、親子水入らずで土の中に埋まった翌日。
なのはさんに連行されてヴィータに謝罪に行くことに。
時間稼ぎで勝てると聞いて、時間稼ぎして勝ったのに謝るとか世界の中心で理不尽だと叫びたい。
で、リビングに集合して準備中。

「じゃあヴィヴィオ、ヴィータちゃんに会ったらまずなんて言うか分かる？」

「俺は悪くない、俺は悪くない！
悪いのはヴァン先生なんだ！」

「はいはい、真面目に答えようね」

「そもそも襲ってきた向こうが悪いと思うのは俺だけか」

「お稲荷さん。
どんな理由があろうと、女の子にあんな事をしたら無条件で悪いのは男になるんだよ」

解せぬ。

「ともかく謝りに行くよ。
この時期のはやてちゃんって、足が動かなくて学校に行っていないはずだから。
本当はなのはちゃんも仲良くなれそうだから、連れて行きたかったんだけどなぁ」

「行けばいいじゃないか」

「お稲荷さんみたいなニートと違って、学校があるんだよ？」

憧れてはいるけど、いざ言われると心苦しいこのジレンマ。

「狐パパ、ニートなの……？」

「何コイツ、だっさーい的な視線を向けているがヴィヴィオ。
お前も同類だということを忘れないで貰いたい。
てか俺は自分のお揚げ代だけ稼げればそれでいいんだよ。
本格的な生活費はなのはさんが稼いでくれるから」

「お稲荷さん、それヒモって言うんだよ？」

俺はなのはさんの使い魔という事実が忘れられている気がしてならない。
使い魔って主人が世話してくれるものじゃないのだろうか。

「さて。
じゃあヴィヴィオ、さっき渡したお菓子持った？」

「美味しかったー！」

「何で食べるの！？
あれは謝りに行く時持ってくお菓子って言ったじゃない！？」

最近、お稲荷さんがもう1人増えたみたいな気がするよと呟くなのはさん。

あんまし騒ぐと疲れてハゲるよと注意してみる。

「誰のせいだと思ってるのかな」

気のせいじゃないかな。
ドヤ顔。
ため息をつかれた。
なんでさ。

○●○●○●

結局翠屋に立ち寄り、シュークリームを新たに仕入れてから俺達は八神家に向かうことになった。
しかし桃子さんもちゃっかりしているもので、後日シュークリーム分の労働は最低するようにとの事。
食べたのはヴィヴィオなのに何故俺持ちなのだろうか。
シュークリーム6個分とか、半日労働に値する。

「とりあえず俺を巻き込んだヴィヴィオは後で折檻するとして」

「え」

「ここが八神家か。
なるほど、なのはさんちがゆりかごならここはスカさんの研究所に当たるわけですね」

「当たらないよ。
ほら、早くインターホン押して」

合点。
だが普通に押すのでは面白くない。
ここは敢えて、３・３・７拍子で押してみる。
押すとピーン。
離すとポーン。
それを利用して計１３回。
最後の７拍子は押した状態で終わってしまった。

「なるほど、これが孔明の罠か」

「普通に狐パパが足し算間違えただけだと思う。
奇数回鳴らしたらそうなるのは当たり前だよ」

「というかお稲荷さんも普通に押してよ……
ほら、インターホンから早く手を離す！」

「何を言う。
今離したらポーンが響き渡って３・３・７が崩れるじゃないか」

「こだわり過ぎなの」

『あの、もうええですか？』

インターホンから聞こえる声。
それはまさしく俺が聞いた八神の物と一致した。

『えと、どちら様でしょうか？』

「昨日ウチのヴィヴィオがヴィータと喧嘩したらしく。
謝罪をさせに来ました。
因みに俺は止めたので罪がないことをここに宣言しておく」

『ダウト』

お前は何を知っている。

『ともかく、立ち話もなんです。
ウチの中に入ってください。
シャマルー！
お客さんを案内したげてー！』

はーい、と小さくインターホンから聞こえた。
しばらくすると、玄関から見知った金髪が。

「リツコさんもいるとか。
なるほど、さっきの八神の言葉から察するにリツコさんが俺にシャマルする訳だな」

「察せてない上に何ですかシャマルするって！？」

「はいはい、お稲荷さんは黙って中に入ろうね」

「だから待て。
今指をインターホンから離すとだな……
あっ」

ポーン。

なるほど、広い。
子供の頃からこんな家に住んでいるとか何とも忌々しいものである。
先導するリツコさんに案内されたのはリビング。
そこには、車椅子に座って待っている八神の姿が。

「ヴィータから色々聞いとるよ。
初めまして、変態さん。
八神はやて言います」

「何で会った瞬間に変態扱いされてる訳？」

「パンツ脱がせて写真撮ったらそら変態以外の何者でもないですやん。
で、今日は何のご予定で？」

「写真を撮ったのは俺じゃない。
そして事の発端であるヴィヴィオに謝罪させに来た。
お前が魔力を持っているのが悪い」

「今度狐パパに、なのはママと一緒に作った虹天剣を特等席で見せてあげる」

やだよ。

絶対それ虹の光が俺に向かって飛んで来るだろ。
特等席と書いてばくしんちとルビが振ってあるに違いない。

「しかしヴィータにリツコさんに、さっきからヤンデレ風味に後ろの扉の隙間から覗いてきているシグナムさん。
怖くて振り向けないのでスルーするけど。
副隊長とよく分からないのが勢揃いじゃないか。
後はザフィーラさんが居たら前に紹介してくれた八神ファミリーが完成する」

「狐パパ、リインさんを忘れてるよ」

「誰それ」

「あの、ちょっとええですか。
私、あなたに家族を紹介した覚えないんですけど……
何でザフィーラまで知ってるんです？」

お前が覚えていなくても、俺は死ぬまで覚えている。
なのはさんの訓練という名の拷問から解放されてようやく家に帰れると思った時に。
残業の休憩に入っていたお前に捕まり、ヴィータがどれだけ可愛いかとか。
巨乳がどれほど素晴らしいかとか。
ザフィーラさんが暇を持て余しているようで時々殺意が芽生えるとか。
気晴らしかは知らんが軽く数時間語ってきて俺の怒りも有頂天だったからな。

「しかもそれを3回はループするんだぜ。

思わず携帯で映像付き録音をしてしまった俺は悪くない」

「普通に撮影したって言えばいいと思う。
狐パパ、それ聞きたい！」

「私としては聞きとうない。
てかそんな愚痴をあなたにした覚えもない」

「当たり前だ。
１０年後の八神が話していたのにお前が知っている訳なかろう」

信じないはやてに携帯で映像を見せてみる。
するとはやてやヴィヴィオだけでなく、横に居たリツコさんまで覗き込んできた。
画面には、俺が撮影している事にも気づかず巨乳がどれほど良いものかを、身振り手振りで大仰に語っている八神の姿が。
しばらく聞き入っていた３人だが、区切りのいいところで顔を上げた。

「うん、うん。
これは間違いなく私やな。
言っとることが素晴らしすぎる。
というか立っとる……私の足って治るん？」

「知らん。
そもそもはやての足が悪い理由すら知らん。
八神は気持ち悪いくらいに歩いていたが」

「もしかしてこれがなのはママの言っていた闇の書事件？」

……え、何。
じゃあ俺って自ら死亡フラグと厨二フラグに足を突っ込んでいる訳？
もしかして俺が歩く事件フラグなバーローだったのか。

「そっかぁ……
治るんや、私の足……」

知らんと言っているだろうダラズ。
そして何か映像見ながら感極まったのか涙を流すはやて。
どうでもいいからせめて映像は消してくれ。
巨乳談義の映像見ながら涙流すのとか。
ふむ、なかなかにシュールだからこれも撮っておこう。
ヴィヴィオ撮影よろしく、帰ったら八神に見せる。
後、話を戻すけど当初の目的であるヴィータが居ないんだがどこだ。

「ヴィータなら昨日の出来事がショックで、しばらく散歩してくるって３０分程前に出て行ったわ」

マジか。
どうするなのはさん。
……なのはさん？

「お稲荷さん、どうしてそんなに普通で居られるの？
後ろからのプレッシャーが凄くて緊張しっぱなしなんだけど」

振り向いてみる。
扉から顔を半分出して、かつ添えられた手によって扉がガタガタ揺れてて。
目が死んでいて髪の毛が数本口に入っている。
シグナムさんってあんなキャラだっけ。

「ヴィータから昨日話を聞いて、犯人見つけたら叩っ斬るって言っとったんや。
謝罪に来たって言ってたから、待ったをかけたらああなった」

「ヴィヴィオでいいならいくらでも斬ってください」

ガタッ……

「ヴィヴィオより俺がいいと申すか」

ガタガタガタガタガタガタガタッ！！

「今の俺は前原圭一の気分がよく分かる」

「どんだけホラーなんや」

「知っているのか」

「鬼隠し編を夜に1人で見て泣きかけたわ」

うむ、分かるぞ。
俺も夜トイレに行くのが怖くなったからな。
時に、シグナムさんの居る位置は玄関に続く道でして。
あんな門番が居ると帰るときに通るに通れないのですが。

「狐パパは犠牲になったのだ」

何言ってるかなこの子は。

「で、なのはさん。
結局はやての足の悪いのって原因は何？」

「ヴィヴィオが言ってたでしょ？
闇の書が原因だよ」

「なるほど、つまりはやても厨二病ということか。
こらこらはやて、尻尾を引っ張るな」

「なのはさん。
私の足が動かない原因が闇の書ってどういうことなんです？」

「だからあれだろ。
はやての足に何かが封じられてて、解かれたときに動くようになるけど封印されてた者との死闘を繰り広げなければならない設定。
シャブラニグドゥのようだ」

「あんたは黙っとき」

「えっと、闇の書にバグがあって、はやてちゃんから魔力を過剰に

吸い上げてるのが原因だったかな……
当時は私も9歳だし、あんまり理解出来なかったんだけど……」

「良かったらスカさんに診てもらうか？
闇の書を見てみたいとも言ってたし、頼んだら即飛んでくると思われる。
無限の欲望なる二つ名があるから何も分からん事はないでしょ」

「何やそのエロイ二つ名」

「その突っ込みは俺が未来で過去にしました」

「な、何か私達に関する物凄い重大な話をしているのに話に入れない……」

「シャマルさん。
未来ではやてさんはこう言ったんだよ。
『大体は狐パパのせい』」

「会って十数分ですけど、よく分かる気がします」

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ。

はしご　3件目（後書き）

まず最初に、生きてます。
少し、大変な人もいるのにこんなの書いて上げていいのかなぁと思いましたが。
きっと見知らぬ被災者が、気晴らしに読んで笑ってくれる事を祈って。
はしご3件目に突入してみました。

なんてカッコつけつつ今回は難産だった罠。
ホラーに挑戦してみたかったんです。
その結果がこれだよ。

さて、原作をまた数話見ていたので遅くなったのも1つの理由。
あの家、1階が駐車場になってはいないだろうか。

そんなこんなで3件目も回ってしまいましたねー
4件目はどこでやろうか。

あ、感想はまた帰ってから書かせていただきます。
時間なくてすみません。

はしご　4件目（前書き）

呪怨ハザード奇行文。

と

ヴィータェ

はしご　4件目

さて。
シグナムさんが扉から離れないので俺達もなかなか帰ることが出来ず。
気が付いたら窓から見える空はもう陽がほぼ沈み、段々と暗くなってきている訳で。
どうしたものかと対策を練っている次第。

「私ちょっとお手洗いに行ってくるわ。
シャマル、ちょっと手伝ってくれんか？」

「待て待て待て。
はやて、お前のその行為は俺達という餌が居るこの部屋の中に野獣を解き放とうとしているのと同じだぞ。
俺はまだ死にたくないので考え直すべき。
じゃなければ俺がはやての小便に付き合う」

はやてに無言で殴られた。
まぁ、今のは俺が悪かった。

「まぁまぁはやてちゃん。
シグナムに出ていく時に釘をさせばいいじゃない。
お客様に乱暴したらダメですよって」

「ここで話しているのも聞こえているはずなのにシグナムさんの手には今も抜身の剣が握られていることから恐らく聞く耳はないと思われる。
……む？」

視線を扉に移してシグナムさんの病み具合を眺めていたところで着信が。
今回はこの携帯を持って初めての電話である。
失礼、と断りワクテカしながら画面を見てみる。
そこには、なのはの文字が。
確かに連絡先交換はしたが、まさか電話の第一号がヤツとは思わなかった。
通話ボタンをプッシュ。

「いいところに。
助けを求む。
シグナムさんが病んでいて帰れない」

『むしろ私を助けてー！！
学校から帰ってる途中で赤い服と帽子被った女の子に襲われたの！』

「事件は会議室じゃなく現場で起きていると言っても、そんなにあちこちで起きてたら室井さんも対処できないぞ。
てか赤い服だって？　……あぁ、分かった。
多分そいつは妖怪ヴィータだ。
ムラサキババアの孫に当たる。
ザムディン、と呪文を唱えれば逃げ出すはずだ」

誰がムラサキババアやー！！
と後ろから怒声が聞こえるがスルー。

『わ、分かった！
……ザムディン、ザムディン、ザムディン！！
にゃ――――――！？

状況が悪化したの――――――！！』

手に取るようにあちらの様子が妄想できるのは俺だけではあるまい。

『何か、あの狐野郎の知り合いかって言ってるんだけど！？』

「うーん、ハルヒロって言っといて。
多分それで通じるから」

『うん！
……ちょ、ハンマー振り回さないで！
何でそのハンマー、ロケット噴射してるの！？
稲荷さんどういう事！？』

「なのはをいじめたくなったんじゃね？
俺も反応が可愛い時のなのはさんならいじめたくなる時がある。
反応が鬼の時は即握られるが」

何がって？
ナニが。

「にゃ！？」

何故なのはさんが反応するし。

「なーなー、何喋ってるん？」

「ヴィータがなのはに喧嘩売ってるらしい。
ちょっと待ってな、スピーカー機能をオンにしてみるから」

ポチっと。
これで先程まで俺の耳にしか届かなかった携帯からの声が、辺りにも聞こえるようになる。

『昨日は狐野郎のせいで、あの金髪チビの魔力を蒐集出来なかったんだ！
テメーの魔力はぜってー奪ってやる！！
ラケーテン……ハンマァァァアア！！！』

『にゃぁぁぁあ！？
痛い痛い、やめてよぅ！』

『痛いで済むかぁぁぁぁぁあ！！
何だよアイゼンの全力の一撃を脳天に食らってたんこぶだけって！！』

『そ、それは……
壮絶な訓練の日々があったんだよ……』

『……チッ。
だが多少でもダメージを与えられるんならこっちのもんだ。
シャマル、こっちにこい！
でけぇ魔力持ったヤツ見つけたから、ぶっこ抜くぞ！
これで闇の書のページも大量に埋まるぜ』

電話の向こう側は何か楽しそう。
でもこっちはシグナムさんに加え、はやての目もヤンデレ化。
例えるなら向こうはバイオハザード。
こっちは呪怨。
激しい動きが無い分、恐ろしいとです。

「……シャマル？」

「は、はひ！？」

「蒐集は、せんようにって、言ったやんなぁ？」

「……はい」

「シグナムも、知っとったんか？」

ガタッ。

「……家族会議や。
ヴィータを今すぐ呼び戻しぃ。
シグナム、行ってきてな。
もちろんなのはちゃんも連れてくるんやで？
ちゃんと謝らなあかん」

「しかし、主」

「そっかぁ……
シグナムは1ヶ月間、シャマルの手料理が食べたいんやぁ……」

「可及的速やかにヴィータを連行して参ります」

その言葉を最後に、窓を開け放ちシグナムさんが文字通り飛んでいった。
シャマルの手料理ってなんだろうか。
シグナムさんが顔を青くするものには違いないが。

てか玄関から出ろよ。
廊下からこの部屋横切って窓から出るより、廊下と隣接してる玄関の方が近いだろうが。

「やはりシャマルが絡むと状況が分からない。
ヴィヴィオ、どういう事だ？」

「ヴィータさんの吊るし上げ祭りが開催されるみたい」

「把握。
スレ立てとく」

「お稲荷さん」

「なんぞ？」

「私って可愛いかな？」

……なんぞ？

「ヴィータ、そこに座り！」

「……はい」

「怪我までさせてしまい申し訳ない。
ヴォルケンリッターの将として、謝罪させて頂きたい」

「本当に、ごめんなさいね。
ヴィータちゃんも悪気があったわけじゃ無いんだけど……」

「にゃあ、そんな、全然気にしないで下さい！」

「なのはさんは可愛いと思うよー
黙っていて、かつ俺に危害を加えなければ」

「えへへー！
ねぇねぇお稲荷さん、もう1回可愛いって言ってー！」

「……うん、カオスだね！」

お叱りの空間。
謝罪の空間。
そして俺が居る空間。
3種類の空間が1つの部屋に渦巻いている。
ヴィヴィオの言う通り、この部屋を一言で表すならカオスだろう。
今俺がアッパーカットしたら飛竜昇天破だってできそうな気もする。
てか、なのはさんが腰にしがみついて離れないので怖い。

「ヘルプ」

「役得って言うんだよ、狐パパ」

「前はそれでキュッとしてドカーンされかけたのを忘れたか」

「そう言いながら両手はなのはママをしっかりホールドしてるよ？」

男の性が憎い。

だってなのはさんがやわっこくていー匂いがするんだもん。

「まぁ……でも準備は万端だからな。

俺が家に帰れなくなったら、俺の枕の中を調べてくれ。

俺が死んだ後の、揚げの相続について書き記した遺書がある」

「食べてもいいの？」

「アホか。

俺の墓前に添えろ。

じゃないとアリシアみたいに化けて出る」

理不尽過ぎるー！　と騒ぐヴィヴィオは放置して。

周りを見てみる。

どうやらはやての方も、なのはの方も一段落したようだ。

今ははやてとヴィータも加わり、なのはに謝罪している。

なのはも、気にしないで！　と、ちょっと困り気味で答えていた。

なのはへの謝罪が終わると、今度はこちらに向かって歩いて来る八神家一行。

ヴィータを先頭に、頭を下げた。

それに続いて、ごめんという言葉が耳に届く。

ヴィータの表情が優れないのと、声が若干震えているのは、はやてのお叱りが相当堪えたからに違いない。

「でも、その……あ、あたしの写真を撮ったのは、嫌、だった」

「人間命の危機に瀕したら結構何でもやってみようと思うものなんです。
あ、俺ってまだ人間にカテゴライズされるのかな。
まぁいいや。
てか空飛ぶのにスカート履いてる格上の対処法ってあれ以外に思い浮かばない。
でもやり過ぎたかもしれない、反省してます」

「そう言えば私の時にもやったよね。
お願いだから、今後は私以外には絶対にやらないでね、お稲荷さん」

うい。
……ん？
なんだって？

「ともかくや！
私の足が治るにせよ治らんにせよ、人様に迷惑かけたらあかん！
二度目や、ちゃんと覚えてやみんな」

「は、はい！」

「了解しました！」

「お、おう！」

はやての凄みに、他のメンバーが頷く。
でも、と続けるのはヴィータ。
聞けば、黙って蒐集していたのは足の件もあるが、はやての命がかかっているのだとか。
このままだと、1年もしないうちに足の麻痺が全身に広まってしま

うんだそうだ。
それを救う手立てが闇の書を完成させることだったらしく、今回の騒動に発展したらしい。
ここまで理解できた俺を誰か褒めてくれ。

「そういや、誰かに見せてみるー言うてなかったっけ？」

「あぁ、スカさん？
あの人なら何か出来るんじゃね。
今なら特典でプレシアさんもついてくるー」

「よぅ分からんけど、物騒な事にならんのやったら一度お願いしてみてもええかな？
スカさんもプレシアさんも誰なんか知らんけど」

「いいよ、じゃあ連絡しとく。
また日時決まったら連絡するから、アドレス教えてくれ」

「了解や」

携帯の赤外線をお互い向かい合わせ、送受信。
稲荷って名前なんや、と呟くはやて。
そういや、自己紹介をしていなかった気がする。
だからあんたとか代名詞で呼ばれていたのか。

「俺の名を知った今なら俺をなんて呼ぶか分かるだろう？
さぁ、ｐｌｅａｓｅ　ｃａｌｌ　ｍｙ　ｎａｍｅ」

「だがあんたはダメや」

未来と立場が逆転した。

「とりあえずシグナムさんのフラグが無くなったので今日は一旦帰ります。
ほら、なのは帰るぞ」

「はーい！
はやてちゃん、また来るね！」

「いつでも来てや！」

「ほらなのはさんも。
腰から離れて。
帰りますぞ」

「じゃあお稲荷さん。
手を繋いで帰ろうよ！」

「なんでさ」

「繋ぎたいから！」

「お前なのはさんじゃねーだろ。
あの人はそんな可愛いキャラじゃない」

「泣くよ？」

「ヴィヴィオもー！」

「はいはい分かったから引っ張るな」

「……あれ、なのはは邪魔な子？」

「そういやはやて。
ザフィーラさんは？」

「さっき庭でフェレットの人形くわえて遊んどったで。
よくできとるなーあの人形」

「ふーん。
この世界じゃなのはさんが惚れてるユーノは生き残れないかもしれないな」

「え？　私が好きなのはユーノくんじゃないよ？」

「さらばーユーノくーん
旅だーつ人はー
宇宙ー戦艦ー
なーのーはー」

「何それ」

「俺の知ってる別れの歌」

「違うと思う」

「マジでか」

はしご　4件目（後書き）

時空の彼方、ミッドチルダへ
フェイトを背負い、今旅立つ

後は思いつかなかったとです。
夜に書いていると、人恋しくなる時があります。
そんな時は奇行文に反映される気がします。

花粉が飛び交っています。
鼻水が止まらず。
涙とかゆみが止まらず。
かつ常に眠い。
春先の悪夢です。
今鼻をかんだら、鼻血でました。
かみすぎたみたいです。

はしご4件目制覇。
え、何？
次の店どこか決めてない？
探せ、稲荷の全てをそこに置いてきた。

はしご　5件目（前書き）

狐物語。

はしご　5件目

翌日。
ヴィヴィオのシュークリーム代と称され、翌屋で1日ただ働きをしてきた次第。
でもなのはさんと一緒に早めに上がらせてもらえたので、夕方には家に帰れたけど。
今はリビングでなのはさんとグデーっとしている。
しかしあれだ。
解せぬ。
子どもの尻拭いをする親とはこういう気分なのだろうか。
などと考えていたら突然鳴り出すインターホン。

「ヴィヴィオー、客だ。
よろしくー」

「はーい！」

とてとてという音と共に、部屋からヴィヴィオが出て行く。
俺となのはさんは無言のまま、それを見送った。
このなんとも言えぬまったり空間。
何故か隣でなのはさんがニヤニヤしているのが気持ち悪いです。

「こういうの、いいなぁ」

「何を突然言い出しますか」

「狐パパー！
ちっちゃいフェイトさんだったー！」

「む、客はフェイトか。
俺は未来に帰ったから居ないって言っといてー」

「はーい！」

しかし、前の呼称はちっちゃいフェイトママじゃなかったっけ？

「あ、本格的に姓を高町にするから、フェイトちゃんはママって呼ばないようにするらしいよ」

「マジか。
あの人もヴィヴィオにママって呼ばれるの嬉しく思ってなかったっけ。
未来に戻ってヴィヴィオに『あなたはママじゃない！』って言われたら発狂するやもしれんな」

「お稲荷さんもどう？」

名前って、どう？　って言われて簡単に変えるものだっけ。
その場で考えた名前が定着している俺が言える立場じゃないのかもしれないが。

「なのはママー！
狐パパ居ないなら、なのはママは居ないかって言ってるよ！」

「今お稲荷さんとまったりするのに忙しいから居ないって言っといてー！」

「あの、前も言いましたがそういうのは出来ればこっそりして欲し

いです……」

フェイトの呟きが聞こえた。
どうやら居留守がバレたらしい。
ガッデム。
仕方無しに顔を出す。
その光景は以前と同じ。
フェイトが困った顔をしてヴィヴィオの対応をしていた。

「お、フェイト。
その上下白い制服は……」

「あ、はい！
今日、なのはの学校に転入してきたんです！」

「へー。
ヴィヴィオも」

「イヤでござる」

この子の将来が心配である。

「ところで、なのはは？」

「えと、サプライズするから家で待っててって言われました」

「絶対なのは、サプライズの意味合い分かってないだろ。
宣言してどうする」

まぁ、家で待っててと言われたのなら立ち話もなんだ。

俺がさっきまで居たリビングにフェイトを通す。
なのはさんがフェイトを見て、楽しげに話し出した。
フェイトの表情が微妙なのは、さっきの居留守がバレたからに違いない。
とりあえずソファーに座らせる。

「飲み物はっと……
六甲のおいしい水……いろはす……森の水だより……
やっぱり高町家のおいしい水道水でいいか」

「それって家の水道水って事だよね？
流石にフェイトちゃんにそれは可哀想だよ。
いろはすにしよ？」

「絶対フェイトが飲み終わった後のペットボトルが目的だろ。
やだよ、なのはさん何故か知らないが捻り潰すじゃんあれを。
凄いニヤニヤしてるし、一体何に見立てて捻ってるのか分からないから見てる方が怖いんだぞ」

「あ、あの。
そんなに気を使って頂かなくても……」

水はお気に召さないと申すか。
でも冷蔵庫には水しかない。
というか水しか無い冷蔵庫って何ぞ。
昨日の夕飯ではお茶がちゃんと出てきたのに。
不審に思いながら扉を閉める。
そこに張ってある、開けるときには気付かなかったメモが不意に目に入った。
『恭也専用棚・水の都』

お兄様も最近、何か心に病を持っているのだろうか。

そうこうしているうちになのはが帰宅。
手には多分ケーキが入っているであろう箱が握られている。
フェイトの近くにまで歩み寄り、箱をフェイトに見せながら、ジャーン！　と言う。

「フェイトちゃんの入学祝いなの！
後、一度サプライズってやつをやってみたかったんだ！
どう、驚いた？」

「えと、うん。
わー、凄く驚いた。
ありがとう、なのは」

フェイトの空気を読む対応に心打たれそうです。
若干棒読みなのが哀愁を誘う。

「時になのは。
さっきから気になっていたんだが、その胸のふくらみは何だ？
その年からそんな事するなんてお兄さん関心しないな」

「ふん！」

脛を蹴られた。

「翠屋から帰る途中に道路の脇に居たの。
その……ほんのちょっとだけ、なのはさんと稲荷さんの関係が羨ましくて」

そう言いながら制服の胸の部分を少し開く。
うむ、絶壁である。
なのはではなく、なのはさんに後頭部をグーパンされた。
あべしである。

「あ！　狐さんだー！
狐パパ以外の狐さん、初めて見たー！」

「何？
誰だ俺のアイデンティティを奪おうとするヤツは」

「お稲荷さんのアイデンティティは狐であることじゃないと思う」

何が言いたい。
腑に落ちない所はあるが、それは置いといて。
なのはの胸元を改めて見てみる。
そこには、俺が子狐フォームに変化した時と似たような姿の狐が居た。
パッと見で分かる違いと言えば、尻尾の数だろうか。

「そう言えば子狐なのに尻尾が9本あることにあの時の小坊共は突っ込んでこなかったな。
して、俺となのはさんの関係が羨ましいということはこいつを使い魔にするのか。
お前さん、名前は何だい」

「……くおん」

「それは鳴き声か名前かどっちだ」

「……名前」

「へー」

会話が続かない。
無口属性な子のようだ。
そして何か引っかかるこの違和感は何だろう。
見ると、なのはもなのはさんも驚いた表情をしている。

「お稲荷さん、狐さんが喋ったのに何でそんなに自然に会話できるの？」

「……なるほど、感じた違和感はそれか」

「違和感なんてレベルじゃないよ……」

犬が喋り、人形が喋り、ドラゴンボールがあって、魔法があった。
今更何に驚けと。
次に俺が驚くのは山にある修行場で斉天大聖孫悟空と格ゲーをやる時だ。

「す、凄い凄い！
くおんちゃん、私の使い魔になってよ！
フェイトちゃん、アルフさん居るんだから使い魔にする方法って知ってるんでしょ！？」

「え、うん。」

「じゃあさ、じゃあさ！
エサとかも毎日あげるから！

私の使い魔になってよーくおんちゃん！」

未だ胸の中にいるくおんに、必死に話しかけるなのは。
使い魔にするかどうかは当人同士の問題だから別にいいとして。

「なのは、ユーノはいいのか」

「え？
ユーノくんは使い魔じゃなくて友達だよ。
それに、はやてちゃんの所に遊びに行ったっきり帰ってこないの！
ユーノくんなんて知らない！」

遊びに、ね。
確かに犬形態のザフィーラさんにくわえられてブンブン振り回されてたら、楽しそうかもな。
見てる分には。
近々ユーノの墓が必要かもしれん。

「とにかく、くおんちゃんは私の部屋で話そっ！
フェイトちゃんも来て！
私に使い魔を作る方法を教えて欲しいの！
じゃ、稲荷さん、なのはさん、ヴィヴィオちゃん、またご飯の時に！」

「……怖い」

「え、あ、うん」

「大丈夫かな……」

「ういうい」

「またねー」

元気に走り去るなのはと、それに引っ張られていくフェイト。
くおんは胸の中から結局出なかったので、逃げ道はない。
狐にとって、なのはシリーズは天敵なのではないかと思った瞬間である。
嵐の様な時間が過ぎ、リビングに残った俺達3人はまたぐでーっとし始める。

「あの狐さん、何なんだろう。
お稲荷さんの兄弟？」

「俺、元は人間だからね。
ちゃんと兄弟も人間で居るからね」

「そうなの？
一度帰らなくて大丈夫？」

「以前生存報告と状況報告のメールしたら、兄ちゃんとオカンからリア充乙って返ってきたから別にいい」

「あ、連絡は取ってたんだ」

突込みどころはそこじゃない。
後、あの狐だっけ？
大方またどこかにローブのおっさんが現れたんじゃね。

「ヴィヴィオもケーキ食べたかったなー」

「少しだけでいいから……何のために、今日1日ただ働きをしてきたのか……思い出して下さい……」

「なんだっけ、それ。
狐パパに教えてもらったけど忘れちゃった」

「最後の物語10作目のラストシーンな。
これも忘れるとは勉強不足な。
もう一度叩き込むか」

「バッチコイ！」

お前ネタに関しては努力を惜しまないよな。

あ、そういや連絡忘れてた。

『スカさん、スカさん。
闇の書ってヤツをいじってみたくないですか』

「あぁ、君がそういう面白いメールをくれるのを心待ちにしていたよ」

「メール着信と同時に現れるのやめてくれませんかね。
てかどこにいた」

「時には電信柱の影から。
時には草むらから。
稲荷くんが居れば必ず愉快な事が起こると予測できたからね。
常に監視させてもらったよ。
抜かりはないさ。
クックック」

抜かって下さい。

「まぁまて、プレシアさんにも聞いてみないと。
……む、着信。
噂をすれば何とやら、プレシアさんじゃないか」

メールを開く。

『是非』

「ど、どこだ!?
どこで見てやがる!?」

「私のここ数日の宿だったからね、彼女の家は。
大方、稲荷くんが帰ってきていると聞いてサーチャーでも飛ばしたんじゃないかね」

「そんな無限の剣製ができそうな名前のものをポンポン飛ばさないで下さい。
てかここに来てもらって悪いが、はやての予定を聞かぬといかんからまだ数日待ってくれ」

「アーチャーではないのだがね。
しかしこんな素晴らしい研究材料を目の前にお預けとは。
こういう気持ちを、なんと言うんだったかな？」

ちゃくしん。

『ｗｋｔｋ』

「そう、それだ。
実に、実にワクテカするよ。
ハッハッハッハッハ！」

「スカさん以上に2チャン用語が似合わない人は居ないと思う。
てか何故アーチャーを知っている」

「アリシア・テスタロッサが色々とゲームをやっていてね。
妹の名前と同じゲームだと言ってやり始めたのを、見せてもらったのだよ」

「純真なスカさんになんて事を。
アリシアに抗議してやる」

『（、皿、＃）』

そーしん。
ちゃくしん。

『（´・ω・`）』

はしご　5件目（後書き）

風邪引きました。
ＰＣとか、光る画面系を見ると恐ろしく気持ち悪くなる現象で数日唸ってました。
問題は、車に乗るとナビが目に入ってしまい気持ち悪くなること。
陰謀を感じました。

気温の変化が凄いです。
雪が降って、晴れて、雪が降って、今日晴れました。
雪の日には半袖しかなく、晴れの日には長袖しか乾かなかった私はきっと特別な存在なのです。
そんな私が孫にあげるのはタンクトップ。
何故なら、彼もまた特別な存在だからです。

稲荷の全てを置いてきた店が潰れていたので、別の店で5件目としました。
どこ行ったんだろう。

はしご　6件目（前書き）

USB物語

はしご　6件目

スカさんとプレシアさんをとりあえずさっさと家に帰して、その日の夜。
未だに監視されている気分ではあるが、分からないものを気にしていても仕方がないので放置する。
因みにプレシアさんとフェイトを一緒に帰そうかと思ったが、フェイトはなのはに捕まったまま部屋から出てこなかったので。
フェイトも晩飯を高町家で食べていくという話になった。
8時だよ、リビングに全員集合！

「で、なのは。
お前は何故そんなに落ち込んでいる」

部屋から出てきたなのはが、テーブルについてもずっと暗い感じだったので聞いてみる。
因みに俺となのはさん、ヴィヴィオはテーブルじゃなく、俺が造り出した即席ちゃぶ台での食卓。
俺頑張った。

「フェイトちゃんに使い魔にする方法を聞いたら、死んじゃった動物さんから……こう……魔力でわーってするんだって。
私には、くおんちゃんを殺せなかったの」

「そこはかとなく不穏な発言であった気がするがスルーさせて頂く」

「そういえば、私とお稲荷さんも魔力的な繋がりはないよね」

そもそも俺に魔力なんてものが無い。

と思う。
使ったことがないから分からない。
キュッとしてドカーン事件に関しては、魔力的な繋がりと言えなくはないが。
爆弾と無線型起爆装置という関係な気がする。

「あ、でもね！
くおんちゃんとお友達にはなれたの！
くおんちゃんって、ひさしいって字と永遠の遠って書いてくおんって読むんだって！
稲荷さん、ひさしいってどういう字？」

「カタカナのクに毛が1本生えた感じ」

「ブッ」

なのはさんの吹き出したお茶が目に染みる。

「わ、狐パパのご飯がお茶漬けになった……」

「口に含んだお茶を俺にかけるくらいなら、口移しで飲ませてくれよ。
タオルを要求する。
そしてこのなのはさん印のお茶漬け……どうしろと」

「ケホッ……あ、ゴメン。
やって欲しいの？　口移し」

異物も一緒に飲まされそうなのでやっぱいいです。

「で、その久遠はどこに行った」

「疲れちゃったみたいで、今部屋で寝てる。
後でご飯持って行くね。
稲荷さんの油揚げ、貰えないかな？」

「え？　うーん……」

「悩みすぎなの」

だって、ね。
今買い置きしてあるのは、明日に俺が揚げの開きを作ろうととっておいた分だから。
でもまぁ、同じ狐のよしみ。
何もあげないのも可哀想なので許可する。
後ついでに、俺も久遠とちょっと話せないかと聞いてみる。
なのはの首が縦に動いた。
なのはさんの首が横に動いた。
なんでさ。

「お稲荷さん。
さっきなのはちゃんに聞いたんだけど、久遠ちゃんは女の子なんだよ？」

「へー」

「……女の子なんだよ？」

「……え、そこが問題だったの？」

「お稲荷さんを雌狐にあげるわけにはいかないの」

意味が分かりません。
お茶漬けサバサバしながら言ってみる。
何食べてるの!?　って怒られたが。
普段から時たま同じコップとかで飲み物飲んだりしてるから大丈夫、食べれる答えといた。
スカさんなら遠慮するけど、なのはさんだしね。
グーパンされた。
更に意味が分からない。
まぁいいや。
久遠の事も後で。
とりあえずは、さ。
タオル、まだ？

○●○●○●

晩飯も終わり寝る前最後のだらけタイム。
俺となのはさんもソファーでグダっております。

「あ、そう言えばなのはさん、お聞きしたいことがあったんです」

晩飯後もテーブルでなのはとワイワイしていたフェイトが、突然話を振ってきた。
どうしたの？　と、なのはさんが応える。

けれどソファーからは動こうとはしないのは、いろんな意味で末期だと思う。

「なのはが襲われた……ヴィータ？　のデバイスを見てたんですけど……

私達のデバイスと、少し違いますよね」

「あー。

みんなのはミッド式で、ヴィータちゃんのはベルカ式って言うんだ。

ベルカ式って言うのは、どちらかというと1対1を目的としたデバイスの事。

ミッド式にはない、カートリッジシステムっていうのを使って魔力を爆発的に高める事が出来るんだ」

「カートリッジシステム……

なのはさんのレイジングハートも、あるんですか？」

「あるよー。

私のレイジングハートにはカートリッジシステムに加えて、ブラスターシステムっていうのもあるんだ。

使ったことはないけど、これはカートリッジシステム以上に魔力を高めることが出来る。

でも、その分体にかかる負担はカートリッジシステムの比じゃないけどね」

話を聞いていたなのはも、自分の未来像が明確に目の前に居ることに段々と目がキラキラしてきた。

「じゃあ、じゃあ、なのはさんの本気のスターライトブレイカーだったらどのくらい威力がでるの？」

「あはは、なのはちゃんも興味出てきた？
そうだねー、六課解散後にリミッター取れたとき、シャマルさんに測ってもらったんだけど……
ブラスターモードも駆使したスターライトブレイカーで、確か関東大震災が起きてお釣りが来るって言ってたかな」

歩く大災害がここにいた。
見事になのはも笑いながら顔がひきつっている。
フェイトはまだ歴史に疎いのか、何を言っているのか分からないようだが。

「なのはさん。
俺、これからなのはさんの言う事に逆らわないから。
それ、俺に撃たないでね」

「じゃあ、付き合って？」

「なのはさんの行くところに付き合うと、そこが戦地になるのは眼に見えているだろう常考。
出来れば日常生活に置いての話にしてください」

意味合いが違うよう、と顔を赤くしてプチプチしてくる。
そしてあなたが今プチプチと引っこ抜いている毛は俺の尻尾の毛だ。
やめてもらおうか。

「そういえば、稲荷さんのデバイスはどんなの？
前になのはさんと一緒に訓練してる時に、太いレーザーみたいなのを右手から出してたけど」

「俺が使えるデバイスはＵＳＢくらいしかない。
あの技は『適当に右パンチ』といってな。
何か出ろーと思いながら右パンチをするとあああなる」

「え、えと。
じゃあデバイス無しであんな事やってたの？
幻影とか瞬間移動は？」

「幻影は妖術な類な気がする。
チート小説で、神様から気とか魔力とか妖力貰ってるヤツが、瞬時にこれは『気』、これは『魔力』とか判別してるが。
俺はそんなサイヤ人じゃないので使ったことのないものは分からん。
適当にやったら出来た産物。
瞬間移動は、士郎さんに神速ってなーに？　って聞いてみ」

「うーん……納得は出来ないけど、分かったの。
じゃあ最後に、あのご飯の時の机は？」

「俺超頑張った」

「お稲荷さんって、凄いことしてるのに凄くないようにしちゃうから。
そしてその事に突っ込みすぎると、割を食うのは私達なんだよ。
だから、スルーが一番」

失礼な。
俺はいつだって本気でやってます。

「んでフェイトとなのはは、そのカートリッジシステムって言うのが欲しいのか？」

「あ、はい。
もし今度あんな事になったら、なのはを守ってあげたいから」

なるほど。
百合、か。

「？」

「私も、フェイトちゃんが私と同じことになっていたら助けてあげたいから！」

「なのは……」

「フェイトちゃん……」

「お風呂から上がってみたら何この空間。
いつもなら狐パパとなのはママが作り出してる筈なのに」

ヴィヴィオ出現。
てかなのはさん印のお茶まみれな俺より先に風呂に入っておいて何を言い出しますか。

「まぁともかく。
プレシアさんに頼めばやってくれるんじゃない？
丁度スカさん居るし」

「あ、そうだね。
帰ったら聞いてみる」

それが良かろう。
そう言うとフェイトは、新作ゲームを買って家路につく子どものような顔で去っていった。
俺も昔はあんな純真だった筈なのに。
何をどう間違ったのだろうか。

「私も部屋に戻るね！
稲荷さん、油揚げ頂いていきます」

「ういうい」

部屋に久遠が待っているからか。
なのはも楽しそうに部屋に戻っていった。

「……自分が現れると、今まで楽しそうに話していた人達がバラバラになる。
そんな時、疎外感を受けるとヴィヴィオは思うの」

「あぁ、俺もそれ経験あるわ。
だが今回は宴もたけなわな時に来たお前が悪い。
諦めれ。
後、宿題のネタってどうなってるよ」

「闇夜に紛れて迫る影。
現れたのは真紅の服を身にまとった女の子。
狙うは私の魔力。
全ては、闇の書が関係していた。
……学校に提出できると思う？」

「二次創作小説投稿サイトにぶち込んでも厨二乙と言われるレベル

だな。
学校だと優しい目をされながら指導室行きか」

「ジュエルシードェ……」

大変そうなのは伝わったが、よく発音出来たな。

「んじゃ、俺も風呂行ってくるわ。
中も外もなのはさんまみれになってるからな」

「もう！　ゴメンって謝ったじゃない！」

謝るよりもタオルが欲しかった。

「あ、そうだ。
お母さんがさっき面白い水買ってきたから、お風呂から上がったら飲んでみて」

はい、と言いながらペットボトルを俺に投げてくる。

「美味しい、じゃなく面白いとはどういうこっちゃ。
何々、『なのはす』……？」

……。
成分はなんぞ。
天然肌水。
製作者なのはさんか桃子さんじゃないだろうな。

「ヴィヴィオ、飲んでみるか……？」

「あ、ヴィヴィオに飲ませちゃだめ！
まだヴィヴィオには早いから」

「お前は一体何を俺に飲まそうとしている。
これを飲んだらムラムラしてなのはさんを襲うとか言わないよな」

「お稲荷さんが何を言っているのか分からないよ」

せめてそこは否定して欲しかった。

『という事があったのさ』

『私の腹が捻れ切れる。
えぇなぁ、家にも稲荷さんが1人欲しいわ』

『そんな掃除機みたいに一家に一匹という訳にはね。
というか稲荷さんって、お兄さんはジーンと来たぞ。
そういや、なのはとフェイトがＵＳＢの強化を申請してたから近々
ヴィータとかに模擬戦申込むかもな』

『まぁ、折角教えてもろたんやからな。
フェイトっちゅう新キャラは誰か知らんけど。

後、喧嘩や蒐集やないなら構わへんけど……
ＵＳＢでどうやって戦うんや？』

『カートリッジシステムを搭載して、爆発的にＵＳＢの魔力を高めるんだとか。
どう考えてもそのＵＳＢをＰＣに挿したらあぼんな気がするが』

『相手に挿し込むとか』

『ＵＳＢポートがある人体なんて聞いたことがない。
大方フラッシュメモリみたいなヤツを武器に戦うんじゃね？』

『ヴィータはハンマーで、シグナムは剣やで？』

『それに対抗出来るＵＳＢならまぁ、データが吹っ飛ぶことはないだろうが。
まぁＵＳＢ談義はこの辺りにしといてだ。
スカさんとプレシアさんに聞いたら弄ってくれるらしいぞ。
いつが空いてる？』

『あー、医者行ったり、すずかちゃんとの約束で図書館に行ったりせなあかんから週末でもええか？』

『すずか……あぁ、紫の一族か。
ん、週末了解。
また詳しい時間は連絡してくれ』

『了解や。
てかすずかちゃん知っとるん？』

『みんな髪が紫だからなかなか判別が難しいが、すずかなら何とか。
ファリンとタイネーブはよく分からん。
……あれ、ノエルとチサトだっけ』

『ファリンさんと、ノエルさんやな。
稲荷さんのはどっちも星の海の話や』

『知っているのか雷電。
因みに2の最強武器って何か知ってるか？』

『……ちょっとシグナムに、剣を見せてもらってくる』

『何故に』

『剣の名前が、レヴァンティン』

『俺も今度行ったら触らせてくれ』

『把握』

今から週末が楽しみである。

はしご　6件目（後書き）

先日、1ヶ月前から企画していた飲み会を行いました。
卒業した先輩も来るとの事で、店とか参加者を募りました。
飲み会が始まり、驚愕の事実を聞きました。
何と、アメフラシの卒業記念という事で飲み会を開いてくれたんだとか。
感激しました。
でも何でアメフラシの卒業記念なのに、アメフラシが主催してるんでしょうか。
サミシンボじゃないですか、これじゃ。
二日酔いです。

やりたくなったスターオーシャン。
一番好きなのがセカンドストーリー。
ただ、連続攻撃を行う技を使うと、みすった時に敵を背後に踊り続けるのが玉に瑕。

今日見たアニメで、やっとヴォルケンリッターの出現シーンが発覚しました。
みんなタンクトップだった。
ヴィータ、真平らだった。
ザッフィー黒くてカッコイイよ。
でも何で黒いのか。

ごめん、気持ち悪いから俺ここで脱落していい？
え、これあげるから頑張れって？
これ、油揚げじゃん。
せめて醤油頂戴よ。

生で食べても味がにぃ。
え、ちょ、まって。
7件目行くって？　引っ張るなあぁぁぁぁぁ・・・・・

はしご　7件目（前書き）

散歩奇行文。

はしご　7件目

翠屋は今日シフト入れられてないし、週末まではまだ時間がある。
なのはは学校に行っているためおらず。
ヴィヴィオとなのはさんと、家でゴロゴロしてるとです。
最近、休日がなのはさんと被ることが多い気がする。
因みにシフトは、入っているのではなく入れられている。
ここ重要、テストで２０点配点はある。

「しかし雲１つ無い快晴。
これで家の中でグダっているとか世の中の働いている人達に申し訳がない。
という訳で俺は散歩に出てくる」

「それも働いている人にとってはイライラの対象にしかならないと思うけど。
お稲荷さん、ただゴロゴロするのに飽きたんでしょ」

なぜ分かる。

「あ、ヴィヴィオも行くー！」

「折角だし私も行こうかな」

「結局の所君達も暇なんね。
そういや久遠はどうした」

「なのはちゃんの部屋に居るんじゃないかな」

ふむ。
折角だから久遠も声をかけるだけかけてみるか。
後で仲間はずれにされたとかでなのはに泣きつかれても困るし。
２人は出かける準備をするとの事で、部屋に戻っていった。
その間、なのはの部屋に久遠を呼びに行く。
ノック３回。
扉を開ける。

「久遠、今からみんなで散歩行くんだけど一緒にいく……か……
…」

「ホント？　行く」

「誰だオメェ」

「……？　久遠」

久遠は子狐であって、決してお前のような幼女ではない。
しかも巫女服に金髪とか誰得。
あ、でも頭から狐耳が。

「人化する狐か。
それなんて我が家のお稲荷さま。
人化してるのがデフォルトな俺とは格が違った」

「……？
お散歩、行く？」

「行くけど……まぁいいか。
みんな着替えてるから玄関で待ってよーな」

久遠を引き連れ、玄関へと向かう。
どうやら久遠は巫女服のまま散歩にいくようで。
歩きにくくないのかね。
そんな疑問を抱いていると、右手に感触が。
見ると久遠が抱きついている。
なんぞ。

「尻尾……9本……
霊格、凄く高い。
名前、何？」

「稲荷と申す。
霊格ってなんぞ」

「稲荷、稲荷。
久遠、つがいにして」

「狐の嫁入りさせろってか。
色々聞きたいがまず、なんでさ」

「霊格高い。
稲荷、強い。
久遠、強い人と、一緒になる」

久遠に辞書を買ってやろうと思った瞬間である。
俺が強かったらなのはさんは何よ。
もはや創造神レベルの強さ。
ランクで言うならＥＸ。

玄関についても同じ問答がしばらく続く。
具体的にはなのはさんとヴィヴィオが来るまで。
稲荷、つがいにして。
あるある……ねーよ。
同じことばっかり言って疲れてきました。
なのはさん、ヘルプ。

「その前に、その子は誰」

「せめてクエスチョンマークがつきそうな言い方で聞いて。
超怖いから。
因みに久遠らしい。
何故幼女フォームなのかは分からない」

「ふーん。
つがいにしてっていうのは？」

「俺の尻尾が９本。
つまり霊格が高い。
霊格高いなら強いんだろお前。
私の中の本能が、強い人を求めている！
要約するとこんな感じらしい」

あ、そうだ。

「久遠。
この人はなのはさん。
今はまだだけど、俺この人と結婚するんだ。
だから久遠とはつがいになれない」

「えっ！？」

「……そう、なの？」

「うっ。

俺がなのはさんに振られれば話は別だけどね」

久遠の上目遣いが心に響きます。

嘘ついてゴメン。

でもここで回避しないと俺の明日は無い気がして。

「お稲荷さん……ホント？

嬉しい……！

式の予約はどこでしよっか！」

「今のを本気にしてる時点で式の予約より精神科に予約入れんとまずいだろ」

「狐パパって、女心を容赦なく粉砕するよね」

悪い、とは、思った、が、俺の、明日の、為、なんだ……！

「なのはママに喉を握りつぶされそうになってる時点で明日は望み薄だと思う」

意識が、飛び、そう。

「じゃあ、稲荷、なのはさんから、奪う」

「だ、ダメ！

お稲荷さんは私のだもん！」

「きゅーん……
分かった」

「あ、あれ、素直だね」

「なのはさん、もっと強い。
強い人の言う事、絶対」

「あ、あはは……」

「そろそろなのはママは手を離さないと、狐パパの命がマッハ」

唇に柔らかい感触。
何かを送り込まれる感じ。
何事かと目をあけてみる。
視界一杯に、なのはさんのドアップ。
ビックリし過ぎて、恐らく人工呼吸していたのだろうなのはさんに息を逆流させてしまった。
ケホ、ケホッと咳き込むなのはさん。
でも、俺が起き上がるのを見るとすぐに抱きついてきた。

「お稲荷さん！

大丈夫だった！？
よかったぁ……ホントに……よかったぁ……」

「死んだらどうする」

「そうだよ久遠ちゃん！」

あーただよあーた。

「最近なのはママも黒い」

「間にいるお前は闇よりもなお深き者と知れ。
ともかく離れてくれなのはさん。
もういいから。
俺としては早く死亡フラグ満載の家から離れて、優雅に散歩を楽しみたいから」

死亡フラグは家というより人物でもあるが、そこについては深く突っ込まないでおく。
危ないから。

で、復活後。
予想外のゴタゴタがあったものの、予定通り散歩と相成った訳でして。
どこに行こうか。
とりあえず商店街をぶらついてみよう。
そういう事になった。

「どこか行きたい店ってあるか？」

「私はどこでもいいよ」

「ヴィヴィオもー！」

「ついてく」

「じゃあ豆腐屋で揚げを買うか」

「あ、私そこの本屋で時間潰すね」

「ヴィヴィオもー！」

「ついてく」

……アルェー。

どこでもいいって言ったのに。

一瞬で俺の周りには人がいなくなった。

本屋に入っていく3人が、妙に楽しそうに見える。

いいもん、俺も豆腐屋のおいちゃんと仲良くやるから。

数軒離れた豆腐屋に走りこむ。

「おいちゃん、揚げを頂戴！」

「お、狐の兄ちゃんか！

いつもありがとな。

今日は可愛いの2匹引き連れて買い物か」

可愛いの2匹？

誰のことを言っている。

振り向く。

2，3歩離れた位置に、ネコが2匹。
並んで座って、こちらをじっと見つめていた。

「はて、さっきまではこんなぬこ達は居なかった気がするが……」

「なー」

「にー」

「よしよし。
ヴィヴィオより可愛げがあるな。
こっちおいでー」

「ふざ」

「けろ」

今ほど綺麗にｏｒｚを体現できた時はない。

「ハッハッハ！
狐の兄ちゃん、ネコちゃん達に嫌われたな！」

「折角喋るぬこを見つけたんだから式神にして橙と名付けたかった。
リアル八雲家したかった。
でも口が悪かった」

でもよく考えたら式神にする方法が分からない。
久遠に聞いてみようかしら。
狐の先輩として、何か知っているやもしれん。
因みに勘違いされやすいのだが、俺はまだ狐歴は1年も経っていな

いのであしからず。

ともかく。
いつまでも地面に手をついて落ち込んでいてはおいちゃんの邪魔になる。
目的の揚げも貰えたし、礼を言ってさっさとこの場を去ろう。
そう思い、視線を上げた。
おいちゃんが消えた。

「よく見たらいっぱい居たはずの客も居ない。
まさかの裏世界に迷いこんでしまったのか俺は。
脱出方法が闇王討伐だったら、俺はこの裏世界でひっそり幕を閉じる事になる」

てかマジ何が起こったのよ。
段々とこう、お化け屋敷に入った時のような感じになってきたのですが。
つまり、足がガクブル。

「こいつぁ俺自身も知覚できないスピードで全力疾走して、海にダイヴするしかないな。
クラウチングスタート、セット」

「待て」

「ホラー映画ではここで振り向いて失敗する。
そう、振り向かなければ恐怖を知ることはない。
故に俺は待たずに走りだす」

「させん」

灰色のような藍色のような、よく分からない色の輪が俺を幾十にも縛り付けた。
は、離せショッカー！！

「貴様は結界に閉じ込められている。
何をしようと無駄だ。
この中には、魔力を持ったものか、我らが結界内に取り込むよう念じた者しか入れぬ」

体を縛られているのではなく、体を空間に縫い付けられている感じ。
故に、走りだすことができないでござる。
こうなったのなら仕方がない。
覚悟を決めて、顔だけ後ろを振り向くことにする。

そこには、仮面で顔をほとんど覆った男が2人。
地面から少し浮かんで、俺を見つめている。
多分。
だって仮面の目の部分もガラスが埋め込まれた感じになってるから、視線がどこを向いているのか分からないんだもの。

「闇の書は、完成させなければならない」

「その為には、貴様のようなイレギュラーには消えてもらわねばならん」

ぬ、ぬ～ん。
意味が……分からん……。

「守護騎士達には、蒐集をしてもらわねばならんのでな」

「悪いが始末させてもらう」

蒐集……どこかで聞いたことがあるようなないような。
でもとりあえず、こいつらが俺に何かしようとしているのは分かる。
始末とか言ってるし。

「よく分からんが不穏な空気を感じるので、逃げるでござる」

「ふはは！
その格好で何が出来るというのだ！」

「叫ぶ。
魔力持ちはこの中に居ると聞いたので。
なのはさーん！　助けてー！！」

ドガーン。
文字に表すならそんな感じだろうか。
先程みんなが入っていった本屋が、爆発した。
飛来する本。
縛られて逃げれない俺。
今まさに、向かってきているのは広辞苑。
ヤバス。

「あぅん」

目から火が出るという言葉がよく分かった。
なるほど、これは痛い。
頭にたんこぶが出来ているのではなかろうか。
そして、本屋からもうもうと立ち込める煙。

その中から出てきたのは、我らがなのはさんである。

「お稲荷さん、大丈夫？
っ！　……誰、お稲荷さんに傷を負わせたのは」

「……広辞苑が」

「そっか、あいつらの仕業だね」

「いや、だから広辞苑が……」

「ちょっと、おはなししてくる」

聞いてよ。
広辞苑がね、降ってきたの。
聞いてくれないなのはさん。
俺を放置して仮面の男2人の下へと、文字通り飛んでいった。
冤罪で砲撃される2人組、乙である。

「狐パパー！」

「おぅ。
どうした」

「その言葉、熨斗つけて返すね。
どういう状況なの？」

「分からん。
広辞苑が原因でなのはさんがあいつらをボコる気でいるのは分かるが。

相も変わらず傷を負うのは仲間からの攻撃な罠」

「むしろその説明が分かんない。
そして何で狐パパが縛られてるのかも分かんない」

ふむ。
確かにずっと縛られているのも疲れるので。
ふんっ、と力いっぱい腕を広げてみた。
大した抵抗もなく、俺を縛っていた輪っかは引きちぎられる。
素晴らしきストロングボディー。
初めて役に立った気がする。

「な、バインドが！？」

「引きちぎられた！？」

なのはさんに追われながらも驚きの表情を向ける仮面の2人。
いや、表情分かんないけどさ。
声で何となく。

「どうしよっか。
てか久遠はどうした」

「魔力持ってないから結界に弾かれたみたい」

そういや結界がどうのこうの言ってたな、あいつら。
じゃあ、あいつらを倒せば結界が無くなるということか。
クックック、腕がなるぜ。

「狐パパ、倒せるの？」

「常識的に考えて無理に決まっているだろう。
腕がなるのはなのはさんだ。
というか見てみろ。
この商店街、一本道だったのに十字路が至る所に出来ているのは何故だと思う」

「なのはママ超頑張った」

「頑張りすぎだ」

見上げれば、空には2人の片割れがピンクの輪に縛られていて。
遙か彼方から、凄まじいスピードで迫る男の3倍はありそうな大きさの光の奔流があって。
あ、飲み込まれた。

「一体、広辞苑の何がなのはママをあそこまで怒らせたのか」

その重さが怒らせたんじゃね。
嘘は言っていないと思う。
軽かったら、たんこぶ出来なかったからね。

「なぁヴィヴィオ」
「なーに？」
「俺達がなのはさんを怒らせても、こうなる可能性があるって事だよな」
「夫婦喧嘩と親子喧嘩だね」
「あの人を相手にしたら喧嘩というよりもはや処刑」
「そんな装備で大丈夫か？」
「大丈夫じゃない、問題だ」
「なのはママは怒らせないようにしようね」
「あぁ。
仮に結婚したら尻に敷かれないと明日は無い感じだな」
「え、結婚したいの？」
「したくなくはない。
元々の夢が美人の嫁さん貰って退廃的な生活を送ることだし。
でもなのはさんは、退廃的な生活というよりも死亡フラグ満載な生活が送れそうなので今のところイーブン。
いつになったらアルフさんみたいな生活が送れるのだろう」
「無理だと思う」

「諦めたらそこで試合終了ですよ」

「むしろ狐パパは諦めるべきじゃないかな」

「おみゃーに言われたくない。
ヴィヴィオの将来の夢は？」

「カッコイイ婿さんの所行って、退廃的な生活を送りたい」

「まんま俺じゃないか。
てかヴィヴィオを嫁にはやらん」

「じゃあ婿を貰う」

「ならよし」

言ってみたかっただけだったりする。

はしご　7件目（後書き）

ＰＶが１００万突破してました。
週間アクセスが１８０００超えでした。
投稿ペース落ちているのに何故。
でも、ありがとうございます。

明日をもって、アメフラシは大学を卒業します。
色んなことを勉強しました。
この教科はカンペで。
この教科は教科書持ち込みで。
この教科はコピペで。
え、経済学？　何それ美味しいの？
今では手つきの速さ、周囲への警戒は入学前に比べて格段によくなっています。
これが将来何の役に立つのかは分かりませんが。

だから言ったじゃん、気持ち悪いって。
ムリムリ、もう無理。
え、８件目には稲荷寿司がある？
なら……ちょっと行こうかな……

はしご　8件目（前書き）

迷探偵奇行文。

はしご　8件目

あれだけ壊れていた商店街も、結界を解けばあら不思議。
綺麗に元通り、人通りも元通りになりました。
やっぱりどうみても封絶。
きっと俺達の知らないところでは今頃、アリサがユージと共にラブコメってるにちまいない。

そして俺を襲っていた2人組の末路だが。
縛り上げて、人のいない近くの高台へと引っ張ってきました。
一般ピーポーが、2人を引きずっている俺の姿を見ても通報しなかったのは、きっとこいつらにも猫耳と尻尾があったから。
お仲間だと思われたかね。

しかし、あまりになのはさんの砲撃の威力が強すぎたのか。
髪の色が2人とも、青っぽいのから茶髪に。
髪の長さが肩ぐらいまでと、腰より少し上くらいまでに。
性別が男から女に。
な、何を言っているか分からねぇと思うが、俺もよく分からなかった。
ともかく、俺があのなのはさんの怒りがこもった砲撃を受ければ、リアル藍様になれるということである。
受けてみたいが受けてみたくない。
このジレンマをどうしてくれる。
……とりあえず今はこいつらから色々聞き出す必要がある。

「見たかお前ら。
あれが俺の力だ」

「私の力だよ。
で、何でお稲荷さんを襲ったの？」

俺のセリフが取られた。

「はん！　何であんたにそんな事答えないといけないんだいっ」

髪の短いほうが言い放った。
加害者なのに態度でかいとはイケナイ子だ。
ちょっとお仕置きをすることにする。
実体のある幻を、気合を入れて創り出す。
動く分身や炎のクリスタル花を複製できた俺に隙はない。
手には、しっかりフィットする持ち手に、ギザギザの先端。
スイッチを入れると、ヴィィィィィィっと動き出した。
うむ、うむ。

「あれれー？
ヴィヴィオ、これなんだろー？」

「……！
なんだ、そんな事も知らねぇのか。
こいつぁバリカンって言って、坊主にしたい時に使うどう……ぐ……
そ、そうか！　犯人はこれを使うつもりだったんだ！」

そうそう、その通り。
なのはさんも気付いたのか、話にノッてくる

「どういう事かね、ヴィヴィオくん」

「いいですかなのは警部。

犯人は、動機をどうしても喋らない被害者に苛立ち、このバリカンを手に取ったんです。
そして脅した。
動機を喋らないと、坊主にするぞってね」

そう言いながらバリカンのスイッチを入れて、ヴィヴィオは2人に近づく。
自分達の末路が分かっているからか、2人は顔を真っ青にして震え上がっている。

「しゃ、喋るもんか！」

「そ、そうよ、どんな事をされても私達は……！」

「そう、犯行当時もこのような事を言われたのでしょう。
だから犯人は、先により長い髪を持つ方を標的にした。
長い髪を持っているということは、それだけ髪が大事だと言うこと。
今回はその部分を逆手に取ったのです」

「わ、私！？
いや、待って！
髪はロッテより長いけど、より大事にしてるのはロッテだから！」

「ちょ、妹を売らないでよ！
アリアの方がいつもシャンプーとかに時間かけてるじゃない！」

言い争いを始める2人。
髪は女の命と言うが、まさにその通りなのだろう。
焦り具合が半端じゃない。
そして擦り付け合いも。

「そ、そうか！
大事にしている髪をバッサリやられたのでは、たまったものではないからな」

「その通りです警部。
論より証拠、実践してみましょう。
これで私の言っていることが、間違いでないことが証明されます」

髪が長い方ににじり寄るヴィヴィオ。
短い方は自分じゃないと知り、幾分か落ち着いてはいるが。
にじり寄られる方としては、髪を全部切られるの決定と言われたようなものなので。
既に半泣き。

「分かった、言うから、言うから！
闇の書の完成が目的なのに、この狐がその主の周辺をうろうろし始めてから蒐集がされなくなったから、原因はこいつだと思ったんだ！
だから、こいつが居なくなればまた蒐集すると思って……」

「凄いやおじさん、迷推理だね！」

「娘に向かっておじさんとは何だ狐小僧」

「誰が狐小僧だフォルァ」

今度はヴィヴィオをお仕置きせねばなるまい。

「ネタ振りに応えたのにこの仕打ち。
なのはママー助けてー」

「こーら、パパを小僧なんて言っちゃダメでしょ？」

「絶望した。
狐パパがヴィヴィオをおじさんと呼んだ事実をスルーした事に絶望した」

うむ、うむ。
で、肝心のこいつらだが。
何で完成させないとダメなんだ？

「闇の書は、完成させると暴走してその世界を滅ぼすんだ。
しかも、闇の書自体は仮に暴走した主を倒したとしても、転生プログラムによってまた新しい主の所に行くだけ。
だから、完成させた時を狙って永久凍結魔法を使って封印しようと……」

「エターナルフォースブリザード……だと？
ダメだヴィヴィオ、厨二を卒業した俺には聞くに耐えない内容だった」

「世界を滅ぼす、暴走、転生、永久凍結。
凄いね！　精神がガスガス削られていくよ」

お前はまだ厨二病卒業してないだろ。
え、発症すらしてないって？
まぁ、６歳児だしな、お前。

「あ、そういえばそんな事もあったかなー……」

「実は当時者だったなのはさんもよく分かってなかったとか言わないよな」

「だって、子供の頃って分からないことがあってもとりあえず元気に返事しなかった？
お稲荷さんの場合、尻尾と耳を見れば大体何を思っているのかは分かるけど」

なのはさんの中で俺がどんな子供時代を送っている設定になっているか分からんけど、俺は昔は普通の人間だったからね。
後、尻尾と耳を見れば大体分かるって何よ。
何でその裏情報隠してたの。

「ともかく！
今度お稲荷さんを襲ったら、ブラスターモードでスターライトブレイカーをするからね！
分かった!?」

「は、はい！」

「りょ、了解です！」

2人を縛っていたピンクの輪っかが消え去る。
それから少し遅れて、2人組も消えた。
転移魔法だったかね。
やっぱり便利だねぇ……
前も言ったけど、何で六課では移動がヘリだったんだろ。

「まぁいいや。
そういや、なのはさんの時は闇の書って暴走したの？」

「ん～……したよ。
フェイトちゃんとはやてちゃんと力を合わせて、何とか倒すことは出来たんだけど……
リインフォースさんを、助けることは出来なかったんだ」

「誰だって？」

「闇の書の管制人格。
お稲荷さんも見たことある、お人形みたいなリインのお姉さん見たいな感じかな」

想像できん。

「で、何で助けられなかったのか」

「端的に言うと、リインさんを放置しておくとまた暴走する危険があったから。
私達が、リインさんを闇の書から開放したんだ……」

「つまり殺したと。
ヴィヴィオ、お前のママは殺人者だったぞ。
これから後ろ指をさされて生きる覚悟はあるか」

「狐パパが居る時点でさされるのは決定だから無問題」

「どういう意味かね」

「あの、せめて歯に衣を着せてもらえないかな？」

だが断る。

「時になのはさん、バーローは好きなんですか」

「うっ……実は劇場版全部制覇してたり」

「さようか」

さて、何でこんな事態になったんだっけ。
あぁ、そうだ。
散歩してたんだ。
そして豆腐屋で揚げを買ったら襲われたと。
……ん？

「久遠は、どうした」

「あ……」

○●○●○●

「稲荷くん、1日見ないだけで随分たくましくなったね。
ただ晩飯の時くらいは血生臭い状態なのは勘弁して欲しいが」

「士郎さん、バカにしてはります？」

「いやいや……しかし、体中にひっかき傷とは」

「放置された事が悲しかったのと、忘れ去られていた事に怒り心頭だったらしい。
おかげで俺の油揚げも取られた。
悲しみでご飯が喉を通らない」

「揚げ……美味しい」

憎しみで狐が殺せたら。

「まぁまぁ……今回は私達が悪かったんだし、ね？」

「なのはさん……
ってどう考えても俺達じゃなくてあのキャッツもどき共だろうが。
今度会ったら絶対バリカンする」

しかし体中が切り傷だらけで水を触るだけで染みるんですが。
なのはさん、今日尻尾を洗ってくれませぬか。
体はタオルで拭いとく。

「いいよー。
体も拭いてあげようか？」

「握られるからやだ。
というかそこまで要介護者じゃないから大丈夫。
尻尾を1人で洗うと、どうしてもシャワー使わないとだからそれをクリアできれば」

「握らないよ！　もう！
お稲荷さんのエッチ！」

「どこを、とは言っていないのだが。
なのはさんは俺のお稲荷さんに興味があると申すか」

分かった。
俺が悪かった。
だからその杖をしまおうか。

「Ｍａｓｔｅｒ．　Ｓｈｏｏｔ　ｉｔ　？」

「杖が喋った」

「レイジングハート、後でね」

「何が」

「興味は、あるよ」

「何に」

「狐パパがいい感じにテンパッてる」

誰かこの状況がわかる奴が居たらここに来い。
そして俺に説明しろ。

「稲荷さんの、お稲荷さん？」

「お、なのはは興味あるのか」

「えっと、稲荷さんの子どもですか？」

「息子であるには違いない。
見たいか？」

「はい！」

「よーしよーし。
と言いたいところだがすまんな。
なのはの死角になっている位置から杖と刀を突きつけられているからまた今度だ」

高町なのは、９歳。
まだコウノトリを信じる年頃である。
そういやヴィヴィオは知っているのだろうか。
赤ちゃんはどこからくるのか。

「培養液」

そういやあなたはそこ出身でしたね。

「じゃあ尻尾洗うから、ある程度服脱いでね」

「ういうい」

「わ、背中もひっかき傷だらけ」

「あいつ、子狐フォームで服の中を暴れまわったからな。
上半身で無事な所はない」

「へぇ……
でも引き締まってる体に傷って何かイイね」

「シャンプーついた手で傷を触るのやめてもらおうか。
ぬぁぁぁぁあ、染みるぅぅぅぅぅう」

「何でヴィヴィオは狐パパにがっちりホールドされているのか」

「お前を解き放ったら絶対傷をペタペタするだろ。
シャンプーつけて」

「何故バレたし」

「全てまるっとお見通しだ」

「いいなぁヴィヴィオ……
あ、お稲荷さん。
私も傷をペタペタしちゃいそうだからホールドしてくれないかな？」

「イミフ」

「むー。

じゃあ、寝るとき抱きついていい？」

「残念、今日はヴィヴィオが狐パパにギュってしてもらうんだ！」

「フフフ、娘と言ってもそれは譲れないなぁ。
ちょっとおはなししようか」

「何でもいいから早く洗ってよ。
上半身マッパだし。
……へっくし！」

はしご　8件目（後書き）

アメフラシです。
バーローのあれれー？　が毎回不自然過ぎると思うとです。

アメフラシです。
アリアとロッテがどっちか分からなかったとです。

アメフラシです。
書いてて思い出したけど、ヴィヴィオって6歳児だったとです。

アメフラシです。
ユーノェ……

アメフラシです、アメフラシです、アメフラシです。

まだ雪が降っています。
もうそろそろ4月なのに。
そして一瞬晴れます。
その時の花粉は鬼のようです。
目が、目がぁぁぁぁぁあ！！

卒業式。
部室でゲロピー祭りが開催されました。
後日。
バイト先に行ったら、同日にゲロピー祭りがこちらでも開催されていたとか。
わっほい。

稲荷寿司、うまし。
揚げ尽くしも食べてみたい。
え、もう次の店？
まって、まだ揚げ炊きごはん食べてな、あ、アッ――――――――！
！

はしご　9件目（前書き）

布団の中の奇行文。

はしご　9件目

週末。
それは、人に様々なドラマをもたらす。
仕事が休みになったからと、家族サービスに精を出したり。
逆に今日から2日間は客が増えて仕事が忙しくなるのかと脱力したり。
そして、俺の目の前にいる人達も、そんな週末の空気に当てられたようだ。
まぁ、ぶっちゃけスカさんとプレシアさんなのだが。
呼び鈴を毎秒5連打するドアホウは誰かと思って扉を開けたらそこに居た次第。

「今日という日をどれだけ心待ちにしたことか。
あぁ、この言いようもない高揚感をどう表現したらいいのだろう」

「それは分かるけど落ち着きなさい。
心は熱く、頭は冷静にが鉄則よ」

「そしてそんな面白いイベントをこのアリシアが逃すはずもなかった」

1人増えてる。

「確かに週末にお願いとは言ったがまだ4時だ。
闇の書やはやてどころか俺さえまだ寝てたんだぞ。
見ろ、起こされたヴィヴィオのこの死んだ瞳を」

ヴィヴィオの脇に手を入れて持ち上げる。

そのまま、テンションの高い3人に突き出した。

「死ねばいいのに」

「俺はこんなヴィヴィオ初めて見たぞ」

未だブツブツ言ってるヴィヴィオを尻尾にしまう。
十数秒後には何も聞こえなくなったのでモフモフに飲まれたのだろう。
多少落ち着いた3人には5時間後、つまり9時に再び来ることを命じる。
流石に4時起きは辛いので寝直したい。
というか、まだ暗いのか明るいのかよく分からんこんな時間に起こされて怒らなかった俺を誰か褒めてくれ。

渋々とだが3人は帰っていった。
全く迷惑な話である。
修学旅行当日の小学生かと。
さて、後5時間寝てよう。
部屋に戻り、布団に入る。
冷め切っていた。
あの暖かい布団の中でまどろむのが好きなのに。
暖かい場所はないかと探していると、布団の右側がそうではないか。
もぞもぞと移動する。
途中で人型の暖かい何かに当たった。
何だろうこれと思いつつも、今は考えるのが面倒なくらい眠い。
とりあえず暖かいし大きさもちょうどいいので、側に寄って寝ることにする。
おやすみ。

「グェェェェ……」

「お稲荷さん……」

呼ばれてる気がして目が覚めた。
目の前には、熟睡しているなのはさんがドアップ。
何事。
はっ、殺気！

「お稲荷さん……好き……大好き……」

「そう言いながら俺の股間に手を伸ばすのはやめてもらおうか」

なのはさんの左手が、俺の首に回され。
なのはさんの右手が、俺のお稲荷さんに触れている。
瞬時に右手をつかみ、お稲荷さんから離す。

「やぁあ……握るから、握るからぁ……」

「夢の中でどういう脅しをされているのかは知らないが、握られる俺の身にもなれ」

「人が狐パパの尻尾に窒息させられそうになってる所で何いちゃついてるか」

「色々と言いたいことはあるが、とりあえず……
ごめん、ヴィヴィオを収納してたの忘れてた」

そういやさっき、仰向け気味に寝てたかもしれん。
ヴィヴィオには悪いことをした。

「で、なのはママは何してるの？」

「布団の中で見えんだろうが、右手は俺の将来をかけた争いが勃発している。
俺のお稲荷さんが好きらしい」

「へ、へぇ……
狐パパ、ティッシュ置いとくね」

「お前絶対赤ちゃんがどこから来るのか知ってただろ。
後、想像しているようなストロベリーな展開ではない事を明言しておく。
どちらかと言えばトマトがグシャっとなる展開」

「頑張って！」

助けろ。
仕方がない。
そっとなのはさんの耳元に口をもっていく。
これこそ俺の操夢術。
夢符『狐の囁き』
今命名。

「俺の負けだ。
なのはさんの言うことは何でも聞く」

「ん……えへへ……」

「手が緩まった。
これをチャンスと稲荷はなのはさんの破壊の手から逃れます。
さて、まだ予定まで後2時間はあるじゃないか。
何でなのはさんの布団にいたのか知らんが、今度は自分の布団で寝直す」

「なのはママ、どんな夢見てるんだろう?」

俺に言う事を聞かせてる夢じゃない?
流石サディスティック星から来た魔王だ。
とにかく今は寝直したいのでまた後で。
2度目のおやすみ。

○●○●○●

洗顔OK。
ブラッシングOK。
貴重品所持。
出かける準備は万全なり。

「で、なのはさんは何してるの?

もうすぐ時間なのだが」

「ん～……さっきお稲荷さんと一緒に書いた届出がないの。
どこの引き出しに入れたっけ……
お稲荷さん、覚えてない？」

覚えているか否かを問われる前に、身に覚えがない。

「え、だってついさっきだよ？
時計確認したから間違いないもん。
7時くらいだった」

「俺とヴィヴィオは、なのはさんの寝相の被害でその時間に起きてはいたが……なのはさん爆睡してたじゃないか」

「……え？」

徐々になのはさんの顔に絶望が広がっていく。
あれだね。
夢の中でいいことがあると、現実を受け入れ難いっていう。
俺にも経験がある。

「え、夢だったの……？
そんな……やっと、やっとゴールインできたと思ったのに……」

「よく分からんが、そのゴールインをするのに必要な条件が俺のお稲荷さんを握りつぶす事だったのかと小一時間問い詰めたい」

まださくらんぼなので。
潰される前に1度くらい使ってみたいんです。

そんなこんなをしているうちに、なのはも出現した。
何でもプレシアさんからフェイト経由で、今日はやての家に行くことがなのはにも伝わったとか。
いつものユーノの定位置だった肩に久遠を乗せて、あちらも外出準備万全のようである。
うむ、うむ。
そういや居たねェ、ユーノって奴。
自分で言ってて思い出した。
さて。
まだなのはさんは床に手をついて項垂れているが、とりあえず玄関を開け放つ。
既にプレシアさん、スカさん、アリシア、フェイトがそこにはいた。

「やっと出てきた。
ほら、早く行くわよ！」

「クックック。
修学旅行前の子どもという表現があるらしいが、なかなかどうして。
1時間前から待っていても全く苦にはならなかったよ」

「お母さん、スカさん、私の分も残しておいてね」

「あ、なのは。
久遠にヴィヴィオ、なのはさんも、おはようございます！」

「スカさんは1時間前からここでクックックックを繰り返していたと……？
そしてフェイトの挨拶に俺の固有名詞が存在していない件。
さては、お前フェイトさんに何か吹きこまれたな」

「なのは、早くはやての家に行こう！」

「あ、フェイトちゃん待ってよー」

聞いてよー。

ぞろぞろと連れ立ってはやての家に到着。

家の前に捨ててある物体Xが何か非情に興味をそそるが、しかしあえて無視してインターホンに手を伸ばす。

ピンポーン。

『合言葉を言え』

「合言葉」

『よし』

何が。

玄関の鍵が開いた。

扉を開けると、そこにはシャマルに車椅子をホールドされたはやてが。

やっと最近、シャマルを覚えました。

すげーだろ。

「詰まること無くあの合言葉を答えるとは思わなかったわ」

「俺って素直なんです」

「そういう問題やないよ……

あ、皆さんお揃いで。

この度は私の為にわざわざ来ていただいて、ホンマにありがとう」

「ご丁寧な闇の書な挨拶ありがとう。

今回は闇の書なはやてさんの闇の書で足を治すで闇の書」

プレシアさんはもうちょっと本音を隠してください。

「何、私達の知的探究心を満たす延長線上に、はやてくんの足を治療するという結果が存在するだけのこと。

君が気に病む必要はないよ」

「ありがとうございます。

すぐに案内しますね。

あ、せやせや。

稲荷さんから聞いたんやけど、なのはちゃんとフェイトちゃんがデバイスにＵＳＢを加えたってホントか？」

「何でそうなるの！？」

「ＵＳＢ？」

フェイトはまだこっちの機械製品には疎いようで。

「ＵＳＢじゃなくてカートリッジシステム！
スカさんとプレシアさんがつけてくれたんだー！
あのね、あのね、凄いんだよ！
カートリッジを使うと、フェイトちゃんとプレシアさんの攻撃を同時に受けても耐えられるようになったの！」

「単語単語の意味は分からんが、多分強化されとるのに攻撃を受けることが前提になっている事に全私が泣いた」

これもひとえになのはさんの特訓の賜物。

「じゃあなのはさんのスターライトなブレイカーも大丈夫か？」

「あれは別物なの。
バインドされて魔力が収束されてる光景を見るとね。
何もする気が起きず、ただ脳内にはオワタの３文字が走馬灯と一緒に駆け巡るの」

「私を何だと思ってるのかな」

「人ではない事は確か」

「なのはちゃん。
私達は同じなんだからなのはちゃんも頑張ればスターライトブレイカー撃てるようになるよ。
久々に一緒に特訓しようか。
お稲荷さんも、拒否権無しの強制参加ね」

「稲荷さん！　余計なこと言ってくれたの！」

「俺オワタ」

「シグナムさんこれを見てくれ。
過去に俺が開発して作ったカッコイイ妖術。
変化『狐の尻尾太刀』」

「おぉ……
ふむ、いい刀だ。
折角だから私が直々に指南してやろう。
とりあえずは……届く距離まで近づいて、斬れ」

「それは指南とは言わん。
助けてエターナルフォースロリータ」

「ギ・ガ・ン・トォ！」

「エターナルとフォースで死亡フラグだったのか。
まてまて、それが耐えれるのはスバルレベル」

「誰だスバルって。

あたしの魔法に対抗するとかなかなかやるじゃねーか」

「ハンマーぶん回すだけの攻撃をあくまで魔法と言い張りますか。そうなるとスマブラ登場キャラは全員魔法使い」

「んなこと言ったらシグナムなんて、剣術とか言っておきながら途中でムチみたいになったりするぜ？」

「シュランゲフォルム、だな」

「あまりにも卑怯過ぎるでしょう？」

「勝てば官軍と言う言葉がある」

「俺、シグナムさんと戦うことになったらスカートの中身を撮ってばらまく」

「なっ、卑怯だぞ！」

「撮れば官軍という言葉が」

「無いよ？　お稲荷さん」

「何故居るし。

……チロルチョコあげるから許して」

「ダーメ。

後でキュッとしてドカーンね」

イエア〝ァァァ。

はしご　9件目（後書き）

お久しぶりです。
社会人になったアメフラシです。
余裕なくて5行書いたら寝て書いたら寝ての繰り返しの日々。
段々何を書いたのか忘れて前話を読んでいたらまた眠くなる悲劇。
週間アクセスがあんまり衰えていない事に驚きを隠せない。

車を売ってます。
でも売れません。
先輩から聞かれました。
「69万のこの車、アメフラシならどう売る？」
「どうですかお客さん、この車シックスナインですよ」
「俺、お前のこと好きになりそうやわ」
マジすか。

兎にも角にも生きています。
執筆速度落ちてますが生きてます。
大学時代には午前4時まで起きていたのに、今では0時には眠くなる体たらく。
感想返せてなくてすみません。
でもちゃんと読ませて頂いています。
返す気力は、充電中。

10件目ってどこ？
ナビで出せって？
『お稲荷様奇行文　10件目』
……海の中が目的地なんですが。

はしご　１０件目（前書き）

カレーパン奇行文。

はしご　10件目

「なぁはやてよ」

「なんや？」

「あの窓に張り付いているぬこ2匹はお知り合いか？」

「へ？

……ぬぉ！」

闇の書の対処はマイフレンズ＋リアルバーロー組にしか出来ないので、終わるまでリビングで八神家組と未来組で呆けていた訳なのですが。

出されたお茶を口に含み、ふと外を眺めたらまるで夏の日の蜘蛛のようにぬこが2匹、泣きながら張り付いていた次第。

思わず吹き出してしまったじゃないか。

「狐パパ、ヴィヴィオに何か言う事ない？」

「何でそんなにカテキンまみれになってるんだ」

「正面に居たからだとヴィヴィオは答えます。

なのはママに頼んで、今日の訓練はヴィヴィオの虹天剣も追加されます」

勘弁してつかぁさい。

「で、あのぬこは知り合いか」

「流石に窓に張り付きながら泣く猫に知り合いはおらんなぁ。
黒ずんだフェレットやったら最近玄関でよく見かけるんやけど」

「バッカモーン！　そいつがユーノだ！！
……で、その黒いフェレットは何してる？」

「ザフィーラが相手してるみたいやわ。
おる時とおらん時とあるで、多分野良なんやろなぁ」

そーなのかー。
まぁ、ユーノにもぬこにも興味は無いから別にいいか。
先程ヴィータと庭に行ったなのはが、にゃぁぁぁぁあ！！　ユーノくん！！　って騒いでいるがまぁ問題はないだろう。

「さって。
対処組が篭ってから1時間は経ったかね。
ちょっくら覗いてくるわ」

「私はなのはちゃん達と遊んでくるな。
ヴィヴィオちゃんも一緒に行く？」

「うん！」

なのはさんはどうするよ。

「私は窓に居る猫さん達にちょっとお話してくるね。
先に行ってて、後から行くから」

猫さん達『に』とはどういう意味だろうか。

まぁ深くは聞くまい。
そうですかと相槌をうって、リビングを後にする。
闇の書ははやての部屋にあるとの事。
はやての部屋の場所は分からんが、この廊下まで聞こえる不気味な笑い声を辿れば着くだろう。
どこのホラー映画かと。

しかし、現実とは厳しい。
あとちょっとで呪われた部屋に辿り着けそうだったのに、直前で腹が痛くなった。
朝食に高町家に置いてあったカレーパンを食べたのがきっと原因。
朝にカレーパンを食べて、無事だったことが1度もない。
高校の時なんて、試験の日にそれをして唸ってた事があるからな。
なら何で食べたかってか。
そこにあったからだよ。

「なんてふざけてる場合じゃないな。
今、尻から出てきそうなのが屁なのかアウトな物なのかが判別がつかぬ。
という訳で目的地を目前にして無念だが俺はトイレに向かう。
……そうだ、行けないなら聞けばいいじゃない。
という訳でカモン幻影」

妖力で作る分身。
これもまた久々である。
もう使わないと決めた上に、腹に力が入らない状態で出したので何か弱々しいが。
まぁ戦闘じゃないし大丈夫でしょ。

「中の状況見に行って、後で教えて。

俺はトイレで大乱闘してくる」

「見に行くのはいいが、別に倒してしまってもいいのだろう？」

「なにをだ。
ええからはよ行け。
俺は限界なんだ」

そう言うと同時にトイレへダッシュ。
間に合った事だけ明記しておく。

「至福」

腹痛が治る瞬間ってどうしてこうも素晴らしい気持ちになれるのだろうか。
この気持ちを、声を大にして叫びたいものだ。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

……俺じゃねーぞ。
多分なのはさんの声が聞こえた。
近所迷惑も甚だしい。

「お稲荷さん、お稲荷さん！　大丈夫！？」

「大丈夫だよー。
もう腹痛は治ったし、後は拭くだけ……拭く……
な、紙が、無い……だと……」

ちょ、待てよ。
ペーパーが無いとか俺に未来はにぃ。
目の前が真っ暗になりそうだ。

「しっかり、しっかりしてお稲荷さん！！」

「いやいや無理だって。
いくらしっかりしても無いものは無い。
というか励ますくらいなら紙をくれ」

「ダメェェェェエエエ！！！」

なんでさ。
はっ、今素晴らしい案が閃いた。
無いなら作ればいいじゃない。
持っててよかった妖力。

炎のクリスタル花を造り出した時のように。
しっかりと想像。
イメージイメージ。
肌触りしっとり、ふんわり。
そんなペーパー。
これはいわゆる鼻セレブならぬ尻セレブ。
最高のペーパーが創り出せた。

「こういうのを無駄に精錬された無駄のない無駄な技術というのだろうか。
あ、気持ちいい」

さて。
用も足し終わったし。
当初の目的地であるはやての部屋へ向かうことにする。
因みに尻セレブはちゃんとセットしてきた。
あのペーパーに骨抜きになるがいい。

そんな事を思いながら歩いていると、はやての部屋の前に人だかり。
どうやら先程の悲鳴で全員集合していたらしく。
何があったのか分からないので、後で分身に聞こうと思う。
ともかく、今はさり気無く紛れ込んで話を合わせておこう。

「あ……あ……そんな……何でや……」

一番俺の近くにいたのが、チビッ子シリーズのはやて。
よし、ここからさり気無く入り込んで、状況を聞き出そう。
さり気無く、さり気無く。

「嫌な、事件だったね……」

「……へ？
な、何で稲荷さんがここにおるんや！？」

一瞬でバレた。
全員がこっちを見る。
なんぞ悪いことしたかね。

「中を見てみぃ」

言われて覗く。
そこには対処組と、号泣してるなのはさん。
全員が呆然として、俺を見ている。
うん、分からん。
泣いていたなのはさんが、口を開いた。

「お、お稲荷さん……何で、無事なの？」

「いや、俺もオワタと思ったけどさ。
トイレットペーパーを創造できる自分の才能に気付いてね」

「でも……お腹が……」

「何で知ってる。
確かにやばかったが、出すもの出したらスッキリしたぞ」

「会話が噛み合っていない気がするのは私だけかね」

そうなのかスカえもん。
というか状況を教えてくれ。
何でか幻影居ないし。
そして語られる真実。

○●○●○●

「要点を整理しよう。
1．闇の書を調べていたら暴走。
2．魔法で腹を貫かれた俺。
3．それが原因で俺が消え、なのはさんは一部始終を目撃。
今北産業的に、大体こんな感じか」

「ざっくり纏めたね。
で、稲荷くんは何故無事なんだい？」

「無事も何も、俺はずっとトイレで唸ってた。
ある意味カレーパンのせいで無事じゃない。
てか進行状況は幻影に行かせて、後で聞けばいいと思っていた。
反省はしていない」

「してよ！
お稲荷さんが死んだと思って、私……私……！！」

でも生理現象には敵わない。

「まぁ腹を貫かれたら消えるわな。
幻だもん。
てかさっきトイレで聞こえたセリフは全て消えそうな俺の幻影に向けられたものだったのか。
律儀に答えてた俺バカみたいじゃん。
で、何で暴走したんだ？」

「いや、どうも防衛プログラムがいい感じに歪んでいてね」

「不正にアクセスを試みる私達を、敵と認識したみたいなのよ」

「だから攻撃されちゃったんだ」

「だが、防衛プログラムを切り離すこと自体はさほど難しい事ではない」

「問題は、切り離した後の処理なんだけど……」

「多分、結構な戦力を持ってこないと消滅させるのは無理だと思うんだ」

ふむ、よく分からんが、分かった。
つまりその防衛プログラムがラスボスだと。
で、何で対処組のあんたらは1人1人、区切って喋ってるんだ。

「全員で調べたのに、誰か1人が解説するとなると不公平だろう？」

「そうよ、分かったことを解説するのがまたいいんじゃない」

「……そういうもんなのか、アリシア」

「そういうもんだよ」

マッドは分からん。
で、結局どうするのよ。

「ふむ……
結論を言うのなら、決戦、かね。
稲荷くん、戦力を強化する案は何かあるかい？」

「チビッ子シリーズと八神家、なのはさんがいてまだ足りないと申すか。
ドラゴンボールに頼んで六課の連中でも召喚するか。
下手すると国を1つ落とせるレベルの戦力になるけど」

名付けて『狂符「六課神将の宴」』
戦力はこっちの八神家とチビッ子シリーズ＋六課の隊長陣とチビッ子シリーズ。
……うん、自分で言っておいて何だが、こんな奴らが現れたらここ海鳴市はリアルジュラシックパークになるのではなかろうか。
即ち俺の命がマッハ。

「やっぱ今の無しで」

「お稲荷さん、それ採用！」

無しだと言っているだろうダラズ。
俺のあの理不尽な仕打ちは絶対六課が原因だもん。
折角解散したのに招集したら味方の攻撃で俺が死にはぐる。

「これも主はやての為だ、稲荷」

俺が拒否っていたら、喉元に剣が突きつけられ。

「よく分からねーが、話を聞く限りはやてを助ける確率をあげるならそれをしたほうがいいんだろう？
なら聞くまでもねー」

どデカイハンマーが振り上げられ。

「はやてちゃんの為なんです、稲荷さんお願いします！」
何も無い空間から生えてきた手にアイアンクローされ。
「主を守るのが、我らの使命だからな」
地面から出てきた光の何かに拘束されてます。
「これはお願いなのだろうか。
脅されてる気がする。
み、皆さん聞いてください。
そこにいるヴィヴィオも実はドラゴンボール使えるんです！」
「何娘を売ろうとしてるか」
保身に走らせてください。
「そうと決まれば話は早い。
早速作戦を立てようじゃないか。
稲荷くんは、皆からの洗礼が終わったら六課のメンバーを招集してくれないかね」
「それは別に構わないが。
スカさんが中心に立つのか。
残念だな、なのはさん。
いつぞやの魔法少女リリカルなのはじゃなくなったっぽいぞ」
「まだ言う！？
忘れてってば！！」

「この頃のなのはママって、エースって呼ばれたりもしてたらしいから。
むしろ魔法少女リリカルなのはＡ，Ｓじゃないかな」
お前ネーミングセンスパネェな。
「恐悦至極」

「ん～……」
「どうしたなのはさん」
「いや……本当なら管理局が絡んで、リンディさんやクロノくんもこの事件に関わってくるんだけどなーって思って」
「管理局なら十分絡んでくるじゃないか。
主に六課が」
「あー……まー……そーだねー……」

「願わくば俺に何の被害も来ない事を。
ヴィヴィオは今までのネタで宿題の論文を2回分は書けるだろ」

「できるか――――――――――！！！」

頑張れ。
でも俺は手伝わない。
決して、変なことに巻き込まれた仕返しではない事を明記しておく。

～～　あの頃のなのはさん　～～

「スカさん、プレシアさん、アリシア。
闇の書の調子はどうだ？」

「やぁ、稲荷くん。
どうにもこうにもなかなかに歪んでいて面白いよ。
ん？　拒絶反応……？
っ！　稲荷くん、危ない！！」

「なっ！？」

「お稲荷さん、様子はどうだっ……
きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「ゲフッ……

油断した……クソッ……」

「お稲荷さん、お稲荷さん！　大丈夫！？」

「わりぃ、なのはさん、ダメっぽい。
目が霞んできやがった……」

「しっかり、しっかりしてお稲荷さん！！」

「ごめん……俺はもう無理そうだわ。
死んだら消える存在だしな……
ヴィヴィオの事、よろしく頼むぜ……」

「ダメ……お稲荷さん、死んじゃダメ……
ダメェェェェェエエエ！！！」

「なのはくん……」

「お稲荷さん……お稲荷さん……ヒック……」

「嫌な、事件だったね……」

「えっ……」

はしご　１０件目（後書き）

感想返せてなくてすみません。
しっかりしっかり読ませて頂いてによによしてます。
主に仕事中に。
何故だ。何故８時間と昼寝して夜眠い。
え？　何で昼寝ができるのかって？
いやぁ、ハッハッハ。

このまま物語が進行すると、登場人物が２０人近くになるんじゃね。
ルナティック過ぎる。
乏しい文才でどこまでの人を空気に出来るかが試されるのですね分かります。
というかあれだ。
闇の書、お前が哀れだ、タヒチへ行こう。

「Ｎさん、やばいっす」
「どうしたアメフラシ」
「今日のプライスダウンでシックスナイン車が５台を超えました」
「マジで。どんだけ卑猥な展示場なんだここは」
今日も仕事場は平和でした。

眠気が天元突破。
主に休みの日に集中して書いているため、次話が来たらアメフラシの休みの日と思ってください。
え、興味なし？
ですよねー。

ではまた、はしご１１件目の世界でお会いしましょう。

※5月10日、誤字修正

はしご　11件目（前書き）

ぬこと狐の奇行文。

はしご　11件目

よろしい、ならば決戦だ。
そんな感じになった日の夜。
流石に戦闘が決定して即実行、という訳にもいかないので。
今晩は一度各々の家に帰り、準備の時間に当てて明日決行するらしい。
即ち、俺の寿命が後数時間。
これはまずいとスニーキングミッションを開始した私こと稲荷。
何とかこの天神小学校ばりの家から逃げ出さなければ。

「お稲荷さーん！
あれ、どこいったんだろ……ん？」

ミッションスタート1分でビッグボスとエンカウント。
ここで慌てるのは普通の狐。
だが俺は訓練された狐。

「あ、お兄ちゃん！
お稲荷さん見なかった？」

「悪いが、そんなイケメン見てないな」

なのはさんのお兄様に化けた俺に隙は無かった。

「……ん～～～～？
お稲荷さん？」

「違います」

「そうですか。
尻尾素敵ですね」

「それほどでもない」

謙虚な俺に隙は無かった。

「どうしてこうなった」

謙虚な俺に隙は無いはずだったのに。

「謙虚な人が何で自分の事をイケメンとか言わないよ」

純然たる事実じゃないか。
な、ヴィヴィオ。

「ちょっと待ってね。
今イケメンの意味をグーグル先生に質問してるから」

どういうことですか。
ともかくビッグボスことなのはさんに見つかった俺。
リビングに連行されてソファーに座らされた次第。
横にはヴィヴィオがいるし。

俺の目の前にはぬこが2匹、座ってるし。
てかいつの間に現れた、ぬこ。

「そこの2人が、お稲荷さんにお話があるんだって」

「なのはさん……まさかそこまでとは。
いかん涙が出てきた。
いいよ、いいよ、俺が優しく教えてあげる。
猫の数え方はな、『匹』なんだよ？」

グーパンが炸裂。
なして。

「どんだけ国語力無いと思ってるのかな？
そうじゃなくて、この2人は管理局の提督、グレアムさんの使い魔なんだよ」

「ふ～ん。
ヴィヴィオ、誰か知ってるか？」

「神の眼を持ち去った人――！」

「なるほど。
そいつの使い魔が来たということは、俺達も運命という名のＲＰＧが始まるということか」

今のうちに、尻尾太刀に狐火を纏わせてディムロォォォォオス！！って叫ぶ練習しとくか。

「で、そのグレバムの使い魔が何だって？」

「えっと……その……グレバムじゃなくてグレアムで……」

「闇の書の件なんですけどね……？」

何かに怯える様子で語り出すぬこ達。
何でも、闇の書が完成した時にグレバムがエターナルフォースブリザードをするんだとか。
相手は死ぬ。
その邪魔をしていた俺が憎い。
ならば倒しちゃおう。
そういう事になっていたらしい。
どこかで聞いたような話だ。
デジャヴ？

でも、俺にちょっかいかけるとなのはさんにお話される。
かと言って人外魔境の八神家に突入するほど勇者でもない。
どうしようかと思っていたらスカさんとプレシアさんとバーローのおかげで解決できそう。
事の成り行きを網戸に張り付いて見ていたら、なのはさんからお話。

「あの時、私達は思ったんだ。
どないしろと」

窓に張り付いていたらそりゃ目立つだろ常考。
で、結局闇の書が何だって？

「あ、これを……」

差し出されるは1枚のカード。

絵には杖。
上部には『氷結の杖デュランダル』と書かれている。
なるほど、遊戯王ですね。

「これを使って闇の書の暴走体を凍らせようとしたんです」

「でも問題も解決しそうだし、あの人怖いし。
あなたが持っていて下さい」

「よく分からんが、安心しろ。
こんな物に頼る前に、俺がエクゾディアでエクゾードフレイム」

「残念だったね狐パパ。
人物カード『海馬瀬人』でエクゾディアを撃破」

おま、それ旧バージョンの裏技っ……
てか何故知ってるし。

「なのはママの部屋からいっぱい出てきたー！」

「ヴィヴィオ、今度なのはさんの部屋をガサ入れな。
何やら懐かしいものが色々出てくるやもしれん」

「なのはママのパンツが出てきたら？」

俺のトランクスと交換しとく。

そして俺にカードを渡したら、スタコラサッサと帰っていくぬこ達。
このカード、アタックもディフェンスも書いていないんだが。
魔法カードなのだろうか。

最近の遊戯王は進化しすぎてて分からん。

「ところであいつらは何猫なんだ？」

「えっと、お姉さんの方がリーゼアリアさんで、妹さんの方がリーゼロッテさん」

「いや、名前言われても2匹とも同じぬこにしか見えなかったから。てかぬこを外見だけで姉さんか妹さんか判別できるのはなのはさんかサイヤ人だけ。きもっ」

「そう言いながらなのはママの手の形に頭が陥没していく狐パパもきもっ」

脳汁がほとばしる。

○●○●○●

なのはさんのアイアンクローに撃沈させられた俺。

どうやら気絶してしまっていたようで。

俺の命のタイムリミットである貴重な数時間の中の2時間程をロストしてしまった。

何とかしてここを脱出しなければ。

辺りを見渡せばここは寝室。

どうやらなのはさんに見つかるとスタート地点からやり直しらしい。
まるでホラーゲーム。
それはつまり、小さな変化を見落とせば即死亡フラグということ。
寝かされていた布団から起き上がり、注意深く辺りを見渡す。
ヴィヴィオなら誤魔化せたかもしれないが、ホラーゲームをやりこんだ俺を騙すのは無理だったようだな。
最初に出たときと違う場所。
それはお前だ、タンス。

「先程までは全て収まっていた棚が、1段だけ解き放たれている。
つまりここを調べると、次のステップに進めると。
ふ、軽い軽い」

そして俺は、問題の棚を覗き込んだ。
視界に広がるは、パンツの群れ。
手にとってみる。
大きさ的に、ヴィヴィオのではない。
てことはまさかなのはさんの……？

はっ。
俺はとんでもない思い違いをしていたのではないか。
あからさまな変化は、ホラーゲームでは調べると逆に死亡フラグと成り得る。
まさか今回のこれも……。

物音。
横を見てみる。
ヴィヴィオが扉を開けて、こちらを見ていた。
俺は今、なのはさんのパンツを手にとって広げ、しげしげと眺めていたところ。

つまり。

「……明日の準備だ」

「ヴィヴィオの目を見て言おうね。なのはママー！！」

ちょ、おまっ。

場所は変わってまたまたリビング。

床に正座している俺の前にいるのは、これまた正座しているなのはさん。

２人の間には、パンツ。

「これは何ですか」

「パンツです」

「これは何ですか」

「……なのはさんのパンツです」

「何故持っていたのですか」

「死亡フラグ回避の為です」
「何故持っていたのですか」
「……気になったからです」
「私のパンツが気になったのですか」
「そうです」
「私のパンツが気になったのですね」
「はい」

ひたすら英語直訳調の会話を続ける俺となのはさん。
正座した膝の上で拳を握り締めながらただじっと。
死にたい死にたい死にたいと念じ続ける俺。
だが今回のこれは、夢ではない。
てかヴィヴィオ、お前何爆笑してるし。
後で鼻フックデストロイヤーの刑な。

「お稲荷さん、聞いていますか」
もう許して欲しいです。
「ということで、お稲荷さんのトランクスを後で要求します」
はい。
……ん、なんだって？

「お稲荷さんが私のパンツを手にとって眺めた。
私も同じことをしないと不公平でしょう。
何か間違っていますか？」

「間違いしかないと思う。
ヴィヴィオ、ヘルプ」

「その変態トークに加わると、ヴィヴィオの将来が危ぶまれるので拒否します」

「ねーお稲荷さんー！
トランクスーー！！」

何というカオス。
きっと今これがゲームの出来事なら、画面にはこうでてるな。
ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ

『という事があったのさ』

『私の将来がかかってる最終決戦前夜に何をやっているかあんたらは』

『ハッハッハ！
愉快、愉快だよ稲荷くん！
で、結局どうなったんだい？』

『俺の尻に穴の開いているトランクスをあげたら報酬にパンツくれた。
明日の武器にする』

『やめてんか』

『でも、あの子も随分あなたにお熱ねぇ……
ウチのフェイトは未来ではそういう話、無かったのかしら？』

『仕事が恋人。
模擬戦は愛人。
しかし、なのはさんもどこをどう間違ったらこんな阿呆にうっかり惚れるのだろうか』

『おや、色々と自覚はあったのだね』

『あそこまでされて気づかないのは、二次創作のオリ主だけ』

『ある意味これも二次創作になりそうやけどな。

なのはさんの頭の中には原作っちゅーか、記憶がある訳やし』

『そうなると主人公はまさか、この俺ちゃまですか。
題名は何だ』

『ふむ。
稲荷くんの事を「お稲荷さん」と呼んでいるからね。
加えて奇行の数々。
「お稲荷様奇行文」というのはどうかね』

『ネーミングセンスの無さに全俺が泣いた』

『そうか？
私はピッタリやと思うんやけど』

『私も、妙にしっくりくるわ』

『（、・ω・、）』

『で、何でくっつかんのや？
告れば一発ちゃう？』

『美人の嫁さんが欲しいと言ったら少し待てと言われたから。
後は退廃的な生活を望む』

『御世辞にもいい男って言えんのが何とも。
何でなのさはん、こんなんに惚れてんたんやろ』

『モテる狐はつらい』

『黙れ人外』

『（、・ω・、）』

「お稲荷さん、パソコン使って何やってるの？」

「チャット」

「ふ～ん……
ね、明日もあるし早く寝よ？」

「いいが、今日は俺の尻尾はヴィヴィオが予約済み」

「いいよ、私は前からで」

マジでか。

はしご　１１件目（後書き）

難産だ　嗚呼難産だ　難産だ
アメフラシ心の俳句。

お久しぶりです、たまに感想ルームに出現していたアメフラシです。
何故難産だったか。
それは山より深く海より高い理由があるんです。

５行も書いたら爆睡な日々。
６行目には」」」」」」」」」」とか@@@@@@@@@@の文字。
次に書くとき読み返して、何を書こうとしてたのか読み解けるのはＬレベル。
毎日毎日、はしご１１件目が新築されていました。

さて。
ＧＷに更新できれば良かったのですが、あの時は友人と集まってどうやればモテるのかについてウン時間議論していました。
こんな話をしてる間はモテナイという結論が出たときは時既に時間切れ。
アメフラシは裏世界でひっそり幕を閉じることに（ｒｙ

仕事も、上司（最高権力者）によく怒られます。

Ｔａｋｅ　１

「アメフラシ、〇〇さんはどんな感じだった？」
買ってくれそうな感じでした。

「それはお前の主観やろ。勝手なこと言うな！」
マジでか。

Ｔａｋｅ２

「アメフラシ、〇〇さんはどんな感じやった？」
凄い楽しく話してくれて、いい感じの人でした。

「何言ってるんだお前は？そんな事聞いてもどうにもならんやろ？考えて物を言え！」
あなたの求める答えが俺には分からない。

そろそろ夜が明ける。
後１件か２件回って今日のはしごは終わろっか？

はしご　12件目（前書き）

桃色ガブリエル奇行文。

はしご　１２件目

「いよいよ最終決戦……お稲荷さん、力を貸してね！」

「稲荷さんとは誰ですか？
私のことは竜崎とお呼びください。
あぁそれと、私はなのはくんがキラではないかと疑っています。
それでも構いませんか？」

「構うよ。
というか残念ながら知り合いにリュークは居ません。
ほら、バカやってないではやてちゃんの家に行く！」

「ふむ、仕方ありませんね。
松田、稲荷さんを呼んできて下さい」

「誰が松田だ狐パパ」

俺の最後の足掻きも功を奏さず。
俺達３人の寝室で行われていた喜劇にも幕が降りた。
昨日はよくしらないお兄様ですぐバレたから、今日はよく知っているＬにしたのに。
何がダメだったのだろうか。

さて、そんなこんなで八神家に拉致られる俺。
お稲荷さんは私が敵から絶対守るから。
安心してと道中俺を落ち着けるなのはさん。
敵からよりむしろ味方から守ってほしいとです。

「しかもヴィヴィオは守らなくていいのか」

俺の何気ない一言にピクッと反応するヴィヴィオ。

「なのはママ……ヴィヴィオは……ヒック……守って……くれないの……？グスッ……」

「ヴィヴィオ……ちゃんと、ちゃんとあなたのことも守るから。だから、目薬で涙目作るのやめようね？」

「何故バレたし。
てか目から垂れたのが口に入ってテラニガス」

台無しである。

「時に、俺達だけで飛び出してきたけどなのははどうした」

「久遠ちゃんを引き連れて、もっと早くにはやてちゃんの家に行ったらしいよ」

「ユーノの定位置にもう久遠が完全に入り込んでいる件。
まぁいいや、なら俺達も行こうか」

「わーい、お祭りだー！」

願わくばその祭りの内容が、俺の吊るし上げでありませんように。

○●○●○●

はやての家に着いたものの、インターホンを鳴らしても誰も出てこず。
何ぞ？　と思っていたら携帯にメール着信。
開くと送信者はなのは。

『集合場所が変更になったの！
大きな戦いになるから、臨海公園に集合してだって！
はやてちゃんの家にはもう誰も居ないから、直接来ていいよ！』

『既に八神家前に居る俺達は勝ち組。
後で俺からはなのはの髪を五分刈り。
なのはさんからはスターライトなブレイカー。
ヴィヴィオからは虹天剣がプレゼントされます』

『私オワタ』

さて。
場所が変更になったのなら仕方がない。
なのはさんに変更先の場所を伝え、俺は八神家でお留守番することにする。

「はいはい、そういうのはもういいから。
早く臨海公園に行くよ！」

「どう考えても死地ジャマイカ。
何か、何かご褒美を下さいご主人。
やる気が上がれば自然に足が向くかもしれん」

「じゃあ、無事に終わったら付き合ってあげる」

何に。

「人生に」

……ん？

気付いたら臨海公園に居た。

なるほど、これがキング・クリムゾンか。

「何か重要なことを言われた気がしたがどこもおかしくは無かった」

「十分おかしいよ。

何であの返答でその答えに行き着くかな。

物凄い勇気を出して言ったのに……」

過程がキング・クリムゾンで飛んだからだと言ってみる。

さぁ、もう既に皆さん集合しているようで。

俺達が到着すると全員の視線がこちらに向く。

見世物じゃねーぞフォルァ！

「やぁ、稲荷くん遅かったね」

「出来ることならもっと遅くしたかった。
スカさん、俺が死んだら、俺の秘蔵の揚げ達をよろしく頼む」

「あぁ、任せておきたまえ。
しっかりと、君の墓前に供えさせてもらうよ」

素晴らしい、スカさん……！
俺が求めていた答えを言ってくれる……！
ちらっ。

「なんでそこで狐パパはヴィヴィオを見るかな」

「この辺の気配りが出来ないヴィヴィオはまだまだお子ちゃまだなーと思ってさ」

「出来ても狐パパにはしたくないー！」

なんでさ。

まぁ、おふざけも過ぎると毒なようで。
サイエンティスト組とヴィヴィオ以外の武器が全て俺を向いている為、そろそろ真面目に取り組もうかと思う。
だがどう真面目に取り組もうとも、俺は既に味方に葬られる未来が見えている罠。
君の力は、俺がしっかりと引き継いだよレミリア。
できればこんな運命、見たくなかったけど。

「稲荷さん、今日はよろしゅう頼みます」

仕方なし。
尻尾からゴソゴソと、ドラゴンボールを取り出す。
どうやらこちらに来たときに色が黒ずんだドラゴンボールは、エネルギー切れのサインらしく。
でも俺にはまだ予備が2個ある。
ふはは、輝けドラゴンボール！
我と共に歩むは冷厳なる勇者！！
いでよ、六課！！

唱えると同時に、俺から半径数mが光に包まれた。

「稲荷さんが厨二病なの」

「稲荷さん……母さんの幻作った時も思ったけど、厨二病だったんだね」

「厨二病やな、思いっきり」

「お稲荷さんは年柄年中厨二病だよ」

「狐パパ、ちゅうにー！」

「クックック……その厨二病な所、いい、凄くいいよ稲荷くん！」

「どうでもいいけどその厨二病、娘達にうつさないでね」

「私も中身はもう大人だから厨二病はちょっとなー」

「はっ！　あたしを負かしたと言っても所詮は厨二じゃねーか！」

「ヴィータ、やめないか。　確かに烈火の将と言われた私から見ても痛いが」

「流石に風の癒し手と言われても、厨二病は治せないわねぇ……」

「ワン」

12Hit over kill.

「あぁ、桃色ガブリエル。
もう桜の花は散って緑色ガブリエルになってしまったか。
待っててくれ。
今から俺も、身長を伸ばすから……」

妖力で造り出した縄を木に引っ掛け、先端を輪っかに。
さようなら、この世。

「ちょ、お稲荷さん!?
ダメ、死んじゃダメ!!」

俺の心はもう砕け散ったんだよ。
ブロークンファンタズムなんだよ。
ごめんねーレナスの真似して。
完全攻略してないのにネタにしてごめんなさいねー。

「だから首に縄かけちゃダメー!!」

稲荷、いっきまーす。

「……ティア、ここどこ?」

「……私だって知らないわよ。
あの、これはどういう状況なのでしょうか、フェイト隊長」

「私も、ティアナ達と同じで突然飛ばされたから何とも……
あ、ヴィヴィオ」

「ん？……あ、フェイトさん！」

「良かった、ヴィヴィオも居たんだ。
ねぇ、今これってどういう状況なのかな……どうも周りは海鳴っぽいけど。
ん？　フェイトさん？
いつものフェイトママは？」

「フェイトさんはもうママじゃないのー！
だからフェイトさん！」

はっはっは。
なのはさん、そんなに止めても俺のこのマイナス方向に熱いパトスは止められないんだぜ。
ん、誰ですか、横入りしないで下さいよ俺の心中予定地に。
あ、フェイトさんじゃないか。
どしたの。

「稲荷、私にも縄頂戴」
はい。
「ありがとう。
じゃあ一緒に逝こうか……」
「エ、エリオくん！！
フェイトさんが！？」
「キャロ、とにかく急いであの縄を切るんだ！！」
「ちょ、ヴィヴィオ、今このタイミングで言う！？
くっ、はやて部隊長！　応援を要請します！！」
「却下や、なのは隊長。
というか何事や。
説明しぃ」
「あ、私が立っとる……」
「おや、どちら様やこの超絶美少女はやては。
てかシグナム、状況分かるか……うおっ！？　シグナムが2人おる！？
きしょっ」
「自分ならいいのですが、私もヴィータ達に関しましては制服を着ていないと判別がつきません。
後、今自分で正解を口に出していませんでしたか？」

うーん、カオス。
お前らちょっとは落ち着けよ、大人気ない。
「ほとんどあんたのせいやろがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
んなバカな。

○●○●○●

「子どもの私が車椅子に乗っとるから、状況はまぁ……納得したる」
なら正座を解除していいですか。
「あかん」
理不尽だ。
「で、今から何をするんや」
「闇の書の何かをみっくみくにするのに六課を召喚しようということに。
俺は嫌だって言ったんだけど、なのはさんがどうしてもって」
「やからって……１０人も呼ぶか普通。
どんな介入物の二次創作でも大体は多くて３人か４人やろ」

好きなのか、二次創作。

「隊のトップやっとると色々と鬱憤が貯まるんや。
えぇやろ、少しくらい。
オリ主最強もん読んで、気分を晴らしたいんや」

知らんがな。

あのカオスから十数分。
六課のチビッ子達は、またなのは達に会えたことに喜び。
なのはさんは、久々の教え子と友人に会えたことに喜び。
スカさん達は、興味深い出来事が起こったことに喜び。
ヴィータは、変わらぬ未来の自分の姿に涙した。

そして全員が集結。
目的がなのはさんから説明される。
闇の書から暴走体を分離させ、全員でフルボッコ。
後はスカさん達サイエンティスト班が何かするらしい。
因みに今回、魔法初心者のはやても参戦。
後で闇の書の使い方を教わるとか。
なのはさんの記憶でも普通にぶっぱなしてたし、いけるでしょとの事。
簡単に言うと、こんな感じ。

「特にお稲荷さん、分かった？」

「あれだろ、つまりエボン＝ジュが出てくるからボコればいいんだろ」

「え、あ、うん。
まぁ、そんな感じかな？」

そうかそうか。

「ヴィヴィオ、各種聖印と七曜の武器をここに」

「なのはママ達はダメージ限界突破はデフォルトだから要らないと思う」

確かに。

「問題は作戦をどうするかなんだけど……
お稲荷さん、何かいい案ない？」

「俺は考えるのが苦手故に。
ボス戦前にはいつもリミットゲージやオーバードライブを味方全員貯めて、戦闘開始と同時にぶっ放す力技。
作戦など無い」

「じゃあその作戦でいこっか」

ナンデスト。

「私となのはちゃんのスターライトブレイカー×２
フェイト隊長とフェイトちゃんのプラズマザンバーブレイカー×２
はやて部隊長とはやてちゃんのラグナロク×２
後はシグナム副隊長とシグナムさん、とヴィータ副隊長とヴィータちゃん。
それぞれが対角線上で、暴走体の出現位置を囲むように並ぶ。

で、呪文詠唱開始。
全員が撃てるようになったら、スカさん達に暴走体を出してもらう。
現れた瞬間に一斉射撃。
どうかな？」

聞いてるだけで涙が止まらない。
そこまでされるほど闇の書って悪いことをしたのだろうか。

「あの、私達は？」

「シャマルさん達とザフィーラさん達は、結界の強化をお願いします。
スターズ・ライトニング隊もそれの補助ね」

「はい！」

「心得た」

「了解です！」

異口同音、いやある意味、同口同音で返事をするシャマルとザフィーラさんに、元気なチビッ子４人組。
はてさて。
俺は？

「余った。　寝てて」

「ヴィヴィオはー？」

「ヴィヴィオは撮影班でお願いね！

はい、カメラ」

「分かったー！」

……あの、俺は？

「余った。　寝てて」

「寝てていいなら俺、理解する意味無かったんじゃね？
特にお稲荷さんと強調されて言われてたけど、重要性皆無な罠」

「狐パパ、一緒に撮影する？」

「娘の優しさに俺の心が包まれた。
ぎゅってしていい？」

「いいよー！」

「……そういや、こうやって抱きしめたことってあんまり無いよな。尻尾にはよく潜り込むが」

「実はちょっと嬉しかったりして」

「だってお前、どう考えても日常会話が小学生としてるものとは思えない。
こういう触れ合いは無用そうに見える」

「その種をまいたのは狐パパ」

「反省も後悔もしていない」

「むー！」

「ハハハ。
お詫びに頭も撫でてやろう」

「んー。
ねぇ、狐パパ。
もうちょっと、このままでもいーい？」

「おぅ、いいぞ」

「いいなぁ……ヴィヴィオ……いいなぁ……」

「ティ、ティア……あのなのはさんが、指くわえて稲荷さんを見てる」

「ギャップが凄いわね……」

「私も、もうちょっとママでいたかった……」

「まぁまぁフェイトちゃん。
あのほのぼのした光景見れたら、それでええやん。
絵はあいつなのに、なんや癒されるわ～」

「……いやだから、何で私の将来がかかった最終決戦直前がこんなにほのぼのしとるんや」

はしご　１２件目（後書き）

もはや会話の練習作。
人がゴミのようだ。
アメフラシが一番分からなかったのが、１２Ｈｉｔの最後のセリフを言った奴。
くっ、誰なんだあのセリフを言った奴は……！

大抵、アメフラシはＲＰＧでストーリーを見たいがために低レベルで暴走。
ボス倒せなくて怒りが有頂天。
全ての必殺技ゲージをＭＡＸにして再戦。
開始３０秒でフルボッコするタイプです。

あ、因みにオカンはスライムでレベル９９にするタイプ。
真の強者だと思うとです。

あ、もう次の店に行くの？
ういうい。
元気無いぞって？
眠いっす。

はしご　13件目（前書き）

波動砲奇行文。

はしご　１３件目

全員の戦闘準備が整った。
なのはさん達は杖を構え。
シグナムさん達は剣を構え。
ヴィヴィオはカメラを構えた。

「うむ、うむ。
なのはさん達はともかく、シグナムさん達は同じ顔だから意気込んでいても存在自体がある種のホラー。
で、おめぇ誰だ」

「リインフォースだ」

「どっから沸いて出た」

「本からだ」

なにそれこわい。
しかしリインフォースとはどこかで聞いたような名前である。

「何だったっけ、ヴィヴィオ」

「八神家最後の住人じゃないかな」

……あぁ、あの人形か。
そういやリインとかいう名前だったような気がする。
姿も、あの人形を大きくしたらこんな感じになりそうだ。
しかし名前にフォースが入っているとか、なんて死亡フラグ満載な

奴。
エターナルな何かを使ったらもう朝日は拝めない。

「てか成長して人形サイズまで縮むのか。
リイン、お前実はもうお婆ちゃんだったりするのか？」

「主はやて。
この狐、敵意ありと判断して攻撃に移りたいのですがよろしいですか？」

「ええで」

よくねぇよ車椅子の仔狸が。
ほら、余計なこと言うからリインさんがオーラを纏ってるじゃないか。
ちょ、それで殴ると痛いからやめてね。

「じゃあ準備も出来たみたいだし、みんな配置に着こうか！
……お稲荷さん、どうしたのその頭」

「狐パパ、無駄に頑丈だから。
攻撃がなかなか効かないからってこうなった」

一撃でいいじゃん。

何で連撃するかな。
てか何かデジャヴだし。
どうやら俺は大仏頭と縁があるらしい。
実にいらない縁である。

「そ、そうなの？
まぁともかく、これからが最終決戦だよ！
お稲荷さんとヴィヴィオも、気を引き締めていくよ！」

「カメラマンに何期待してるのこの人。
まぁ俺に被害が来ないならそれに越したことはない。
ヴィヴィオ、しっかり写真に収めて宿題のネタにしろ」

「そういう趣旨でここにいることを忘れていたヴィヴィオであった。
狐パパのバカー！
やなこと思い出させないでよ！」

いいじゃん、もう。
ありのままを書いて提出すれば。
コピペで卒論が通るんだぜ。
小学生用の論文なら余裕で通るさ。
廊下には立たされるかもだが。

そんな事をしているうちに、なのはさんも戦闘配置についた。
はやても車椅子ごと空中に浮いている。
空を飛ぶなら車椅子は要らないんじゃないかと思った次第である。
というか、いつの間に魔法行使のやり方を教わったのだろうか。

「スターズ・ライトニングは結界維持の補助に全力を注いでね！
私達は魔力充填、発射可能になったら宣言して！」

なのはさんが叫ぶ。
地上のチビッ子達は、よく分からんシールドを幾重か張った。
あれがきっとＡＴフィールド。
チビッ子達の心の壁は厚いようである。

なのはズ、はやてズ、フェイトズの所にはヒカリが集まる。
次元の狭間でバッツ達がオメガと戦うときの心境はこんな感じなのだろうか。
言うなれば、波動砲発射５秒前。

ヴィータズはハンマーをでかくした。
両側からあれで叩かれたら、ボガンじゃなくてプチッだろう。

シグナムさんズは剣を弓にしている。
番えている矢にはほとばしるオーラ。
さながら、屠龍を放つチェスターのようである。

「狐パパ。
ゲームでやってる状況をリアルで見た感想は？」

「かっとしてやっていたが、リアルに見るとボスが可哀想に思えてきた。
今度からはもう少し自重する」

その光景を次々と富竹フラッシュしていくヴィヴィオ。
たくましい子に育ったようだ。

「スカさん！
お願いします！」

「任せたまえ」

なのはさんの声に応えるスカさん。
全員に囲まれていた闇の書から、黒いナニカが現れた。
なるほど、あれがエボン＝ジュか。

「富竹フラッシュ！　富竹フラッシュ！」

ヴィヴィオ、お前は少し落ち着け。
ほら、波動砲発射の瞬間だぞ。

「ブラスタービットでのドーピングは出来ないけど。
これが本当の私達の！」

「全力全開なの！」

『貫け閃光・スターライトブレイカー』

「状況が飲み込めないんだけど……撃てばいいの？」

「はやてを助けるんだ……！！」

『雷光一閃・プラズマザンバーブレイカー』

「大体あいつのせいなのは分かるんやけど、なんやしっくりこん」

「力を貸して！　リィンフォース！」

『終焉の笛・ラグナロクブレイカー』

「あたしだって成長してるんだ！」

「嘘だ！！」

『轟天爆砕・ギガントシュラーク』

「まさかもう一度戦う事になろうとはな」

「そうか、既に通ってきた道か。
迷惑をかけるな」

『翔けよ隼・シュツルムファルケン』

「ティア」

「なに？」

「ぶっちゃけ結界維持、無理じゃない？」

「何言ってるのよ。
私は作戦を聞いた当初から諦めてたわ」

『はぁ……』

「エリオくん……」

「大丈夫だよ、キャロ。
こういう状況になったとき、切り抜ける呪文を稲荷さんから聞いたんだ」

「うん……！」

「キャロの手は、絶対に離さないから。
一緒に唱えよう」

『バルス』

「お前、盾の守護獣だろう？」

「私は過去のお前だ」

「いかに未来の私であっても、無理な事はある」

「お前に出来ないことが私に出来るわけがなかろう」

『キャイン』

「みんな、諦めちゃダメ！」

「そうよ！
結界の１つや２つ！」

「過去の私と、クラールヴィントが軽くやってくれるわ！」

「未来の私とクラールヴィントが居るんだから防げて当然よ！」

『……えっ』

結界組がカオスである。
分からんでもないが。
さて、エボン＝ジュはというと、出現と同時にヒカリに包まれて既

に見えないわけで。
俺達はというと。

「キングダムハーツは、どんな闇の書でも消し去ることの出来る心。光なんだ！！」

「狐パパ！
ヴィヴィオはいつでもそばにいるよ！
これからも、ずっと！
必ず、絶対帰るから！」

「約束だぞ！」

光が凄すぎて写真を撮っても真っ白なので、撮影を諦めて遊んでおります。
なんかこう、周りが騒がしい時って無駄にテンション上がるよね。
てか光に包まれる闇から連想した、突然のネタ振りに応えてくれたヴィヴィオには拍手を送りたい。

●○●○●○

しばらくして視界が元に戻る。
それに少し遅れて、結界も解かれたようだ。
空に浮いていた人達は、今は全員公園の地に足を付けている。
余韻。
先程までの大騒ぎが嘘のように、静寂が辺りを包んでいる。

やがて、ポツリポツリと言葉がこぼれ始める。

「私らな、死ぬ思いしてめっちゃ頑張ったんよ」

「それでも結局私達だけじゃ倒せなかったから、宇宙空間に転送してアルカンシェルで消滅させたんだよね」

「あの時ははやてちゃんが闇に飲まれちゃうし、大変だったよねー」

へぇ。

「アニメにしたら、2~3話は続くんやないかって思うくらいの決戦やったのに」

「今回の戦いは、ワードのA4用紙2~3枚で書き終わるくらい簡単に終わったね」

「作戦採用したのは私だけど……何か納得できないの」

やはりラスボスには、攻撃させる暇を与えずに総攻撃で沈させるのが一番だからな。

むしろ相手の攻撃ターンになると、裏世界の闇王の如く一瞬で地獄絵図と化す。

で、スカさん。

そっちはどうなった？

「あぁ、暴走体も処理できたし問題は無いよ。

この本は、普通のデバイスになった」

「本の形のＵＳＢと申すか。
ここまででかいと、テラレベルで保存できそう。
良かったな、はやて」

「あんな？
闇の書とか魔法とか色々聞いて分かったんやけど。
デバイスの意味合いがちゃうで」

マジでか。

「因みにデバイスとは私だ」

「おめぇ誰だ」

「リインフォースだ」

「どっから沸いて出た」

「本からだ」

なにそれこわい。

全てが片付いた頃には、六課組の皆さんはいつぞやのスカさん達のように体が透けてきまして。

多分、この戦闘の為だけに呼んだのがドラゴンボールにバレた。
去り際に全員から、戻ったら覚えていなさいコールを貰ったのでこの世界に永住したい稲荷です。

「なのはさん、もう未来に帰らずにここで暮らそう。
翠屋継いで、戦闘もせず平和に暮らそう。
未来に戻ったらフルボッコフラグ。
俺、なのはさんと結婚して幸せな生活を送るんだ……」

「え、あ……うん。いいよ！
式はどこであげよっか？」

「よくないわドアホウ共。
狐パパはいつもの事として、なのはママまで乗せられてどうする」

「だってヴィヴィオ……
ようやく、ようやくお稲荷さんが私にプロポーズしてくれたんだよ？
是が非でもこのフラグを回収しないと……！！」

「落ち着いて、なのはママ。
落ち着いてもう一度、狐パパのセリフを思い返してみて。
フラグはフラグでも、死亡フラグだから。
回収したら死ぬから。
狐パパが」

……てか、よくよく考えたら、向こうに戻っても奴らに関わりを持たなければそれでいいんじゃないか？
即ち、地球に居れば安全が無事になる。
ヴィヴィオ、お前は聖小に入学決定だ。
魔法世界に行くと、いつかち合うか分かったものじゃないからな。

「そうきたか。
だが勉強したくないでござる」

魔法学校に行くと、そのただでさえ嫌な勉強に加えて戦闘が追加されるぞ。

「ちょ、待ってよ。
なのはママも狐パパも居ない状態でヴィヴィオが出来るせんとうなんて、お湯に浸かるくらいなんだけど」

ウホッ、いい銭湯。
てかお前まだ自分で髪も洗えないのか。
仕方ないから今度シャンプーハット買ってやる。

「わーい！
アヒルさんも買ってくれるとテラウレシス」

ＤＡＳＨ村のアヒル村長でもいいかね。

「いいよ！
じゃあ早く買いに行こー！」

「あ、待ってよ！
私も行くから！
というかお稲荷さん、私もヴィヴィオの好感度上げたいな」

口に出した時点で無理だと思われる。
てか何でこんな話になったんだっけか。

「狐パパ、なのはママ、はやくー！！」

まぁ、忘れるくらいだから別に大した話だった訳でもあるまい。
さて、どこに行けばアヒル村長は売ってるかね。

「……稲荷さん達、行っちゃったの」

「あの人ら、完全に私らの事忘れ去ってるな……
私の将来をかけた決戦してたって自覚あるんかいな」

「まぁまぁ落ち着いて、なのは、はやて。
実際私も全然戦った感じしないもの。
ただ全力でプラズマザンバーブレイカーを撃っただけ」

「私としては、闇の書なんていうレアな物を触らせてくれただけで満足しているよ。
あぁ、本当に稲荷くんがいると面白い」

「えぇ、そうね。
でもまぁ、あの空気を壊すのも可哀想だし今日は帰りましょうか。
ジェイル、あなたウチでご飯食べてく？」

「いいのかい？
ではご相伴に預かるとするか」

「……私はここで空気を読んで、八神さんちか高町さんちで晩ご飯を食べるべきなんだろうか。
それとも子供らしく、２人の間に……？
憎い。
精神年齢大人な自分が憎い」

「ならアリシアちゃんは今日ウチにきぃや。
てかスカさんとプレシアさんって、もしかするともしかするんか？」

「ありがとう。
そして多分とだけ答えておくわ」

「そか。
また難儀やな。
なら、今日は私の回復と、リィンフォースという家族も増えたっちゅーことでパーティーや！
なのはちゃんとフェイトちゃんも参加してや！」

「ほんと！？
いくいく、いくの！
お母さんには連絡入れとく！」

「あ、私もいいの？
じゃあ母さん、今日ははやての家に行ってきます」

「分かったわ。
はやてちゃん、フェイトとアリシアとよろしくね？」

「任せてください！」

「よかったなリインフォース。
今日は主はやてがパーティーをするらしいぞ」

「あぁ、楽しみだ」

「はやての料理はギガウマだからな！
あたしも楽しみだぜ！」

「そうなのか」

「私もお料理のお手伝いしようかしら」

「この期に及んでまだ命を取ろうとするのか。
シャマルの名の間に奪った命を入れて、今後はお前のことをシャメイマルと呼ぶぞ？」

「シグナム……あなたも中々言うわね。
私の名前で遊ぶのなんて稲荷さんくらいかと思ってたけど」

「てかザフィーラは何が食いたいんだ？
あたしは食後にアイスがでれば、何でもいいけど」

「……ペディグリーチャム。
ざく切りビーフ＆野菜で頼む」

はしご　１３件目（後書き）

お久しぶりです。
ようやっとまとまった休みが訪れました。
でもワードＡ４サイズ１ページくらい書いたら眠くなる日々。

車に興味がないのに車販売という苦痛。
１０円ハゲが出来る日も遠くない気がします。
防衛策として、怒られてもノルマなんぞ気にせずテキトーにやり始めてるアメフラシ。

でもティーダやティアナ、スバルとかには興味あります。
そんな中、通勤途中で前方を走るフリードを発見しました。
お前も車だったのかと勝手にテンション上がってたら、リアモニターでなのはが上映中。
何か色々納得しました。

人数が増えても結局喋るのは主要キャラ。
書き終わって読み返して。
湧き上がる疑問。
久遠はどこ行った。

最近なのはさんよりヴィヴィオが好きなアメフラシ。
聞けば後輩の両親は、１５歳離れているのだとか。
つまり２１歳で結婚したら、奥様は小学生。
アメフラシにもまだ希望は残っていそうです。

長々と書くと、後書きが本編のタグが付くのでこの辺りで。
未来人との絡みを期待していた方、すんまそん。
力量不足でした。
やっぱ２０人近くを動かすのは至難の業。
要精進、なのです。

８月６日。
にじファンを覗いたら、歌詞転載に関するガイドラインなるものがアメフラシのユーザーページに赤く燦然と輝いていました。
ゆっくり、冷静に、頭に思うことは１つ。

ヤバス。

という訳で一部修正。
後、ＳｔＳ時のレールガンも修正しないといかんのかも。
新作だーと思った方、誠にすみませんでした。
チキンなアメフラシを許してください。

後、感想もすみません。
読んでます。
でも返せてません。
どこから返せるかわかりませんが、気長にお待ちください。
きっと返します。

そして、本編書いてる片手間になのはさん視点の駄文を書いたのが

少し貯まったのだけどどうしよう。
突拍子も無い内容になっているので、捨ててしまってもいいやもしれん。
投下すべきかスルーか。
誰か教えてえろいひと！

一日酔い。（前書き）

ヴィヴィオが足掻く奇行文。

一日酔い。

シャンプーハットをレジに出した所で、はやての事を思い出した俺達3人組。
やっちゃったね、テヘペロを3人同時にした後、先程の公園に少し早足で戻ることにした。
しかし、俺やヴィヴィオはともかくなのはさんまで忘れるとか。
戦闘にもろに参加してたのに。

「狐パパはいつもの事として。
ヴィヴィオはともかくとはどういう意味か」

「お稲荷さんが絡むとハッピーエンドだから、別にいいかなって。
リインフォースさんも生き残れたし」

ふむ。
じゃあまず聞くがヴィヴィオよ。
お前は忘れていなかったのか。

「今のヴィヴィオはシャンプーハットにしか興味がない。
あ、後アヒル村長。
ありがとー！　狐パパ！
今日のお風呂が楽しみで仕方ない」

「ヴィヴィオが俺と同類に。
気にするな、それで頭が洗えるか今日試験するぞ」

で、なのはさんの先程のセリフに聞き逃せない重要なワードがあった気がするのだが。

生き残れたとはどういう事かね。

「私の時は、リインフォースさんがいるとあの暴走体が何度も産まれる可能性があるとか無いとか。
だから、私とフェイトちゃんが、その、あの」

ヴィヴィオさん、事件です。
なのはさんが殺人犯だった。

「なのはママ……いつかやると思ってたんだ」

「どういう事!?」

○●○●○●

そんな雑談をしているといつの間にやら公園に到達。
だが、当然ながらもうその場には戦闘に参加していたメンバーは誰も居なかった。
居るのは、砂場とかで遊ぶ子どもたち。
そしてそれを見守るおばちゃん達。
散歩する老人。
ランニングする青年。

後付け加えるなら、遠くに見えるベンチにどこかの民族衣装を着た少年と、肩からトゲが生えた服を着ている少年も並んで座っている。
なんかこう、世界はこんなハズじゃないことばかりだと言わんばか

りの哀愁を背負っている。
ベンチの両サイドには、小さい狐と額に宝石らしき何かをつけた犬が。
何かあったのだろうか。
だがまぁ、俺には関係ないのでスルーする。
なのはさんもヴィヴィオも気づいていないし、関わると面倒そうだし。

「んで、はやて達を追うか、このまま帰宅か。
……む、着信。
なのはからだ」

「え、なんて？」

「狐パパ、見せて見せて！」

お前ら、おちけつ。
内容はっと。

『カオス』

……。

「よし、帰るか」

「そうだね」

「早く帰ってお風呂入りたい！」

「よろしい、ならば試験だ。

シャンプーハットを使いこなしてみせろ」

「ついでにヴィヴィオのアヒル村長も火を噴く」

どんなジェット機能ついてんだよ。

さて、はやてを追わないならここに長居は無用。

さっさと家に帰るべく、踵を返す俺ら。

深い意味はない。

ないったら、ない。

「あ～あ。

それにしても、遂に闇の書事件も終わっちゃったなぁ……

この生活、結構好きだったのにまた未来に帰らないとだね」

道中、歩きながら頭の後ろで手を組んで呟くなのはさん。

「あ、そういや帰ったらヴィヴィオの学校決めないとだね！」

なのはさんのその発言にムンクの叫び状態のヴィヴィオ。

「え、あ、う……っ！

そ、そうだ！

狐パパはこっちの学校がいいって言ってるけど、ヴィヴィオが魔法学校に入ったら本当によからぬ目にあっているのか、未来をちょっと見てみない！？

ほら、ドラゴンボールあるし！」

人はそれを問題の先送りと言うんだぜ。

まぁ、まだ全然元気なドラゴンボールが2つあるから行けるっちゃ行けるが。

「こら、ヴィヴィオ？
そんなにホイホイ過去とか未来とか行っちゃいけません！」

「なのはさん、ご近所に迷惑だからダメみたいな感じで言ってますけど普通そんな簡単に行けんと思います。
……ホイホイ？」

「なのはママ。
狐パパとうまくいったかどうか見れるよ」

「お稲荷さん、やっぱりヴィヴィオの将来を決める大事な一歩だから。
ここは慎重に、色んな情報を仕入れるのがベストだと思うんだ」

ヴィヴィオにうまく乗せられすぎだろ。
行きたいのか？
てかチビッ子達へのお別れはしなくていいのか。

「みんなへのお別れは、ドラゴンボールあるから未来を見終わったら、日付的に明日にでも帰ってくればいいと思うんだ。
だから狐パパ！
ハリー！ハリー！ハリー！」

「ごーごー！！」

何やら焦った感じに両手を動かして熱弁するヴィヴィオ。
それにノリノリなのはさん。
別にいいけどさ。
尻尾からドラゴンボールを取り出し、ヴィヴィオに手渡す。

例によって未来に行きたいと願うヴィヴィオ。
横で期待に満ち溢れてる表情のなのはさん。
光るドラゴンボール。
どうでもいいけどさ。

「未来に行っても、また体験入学とか言って学校行くハメになるんじゃね？」

「……あ」

俺達3人は、光に包まれた。

○●○●○●

「もういっそ狐パパ、なのはママにプロポーズしてよ。
そうすれば多分、なのはママ舞い上がってヴィヴィオの学校編入を忘れると思うから」

「どんだけ自分を見失ってるんだ。
お前もう真っ黒だぞ気付いてくれ。
そして突込みどころは色々あるが。
余計に母親らしくなってむしろ学校勧められるんじゃね？
てかなのはさん、服の裾掴みながら期待に満ちた上目遣いをやめてもらえませんかね。
理性的な意味で危ないから。
そしてここはどこだ」

「その発想は無かった」
その発想しか無かった。

「あの……お話中すみません、どちら様でしょうか？
というか、そちらの子は……」

おっと、気付かなかったが目の前には金髪オッドアイの少女がいるではありませんか。
うちの金髪オッドアイの幼女と比べて素直そうな子である。

「出たな未来のヴィヴィオ。
ＪＳ事件から１ヶ月も経っていない時系列のヴィヴィオが今ここに参上した」

間違ってはいないが、過去に行った分カウントしてないだろそれ。
あ、ども。
稲荷です。

「わっ、狐さん……
えっと、わたしは高町ヴィヴィオです。
あ、なのはママ。
こちらの方はお客様？」

「ヴィヴィオのなのはママを寝取るとはふてぇやつだ」

お前ちょっと黙ってれ。
どうやらこのヴィヴィっ子、なのはさんを自分の時代のなのはさんと勘違いしてるらしく。

流石になのはさんも返答に困っている。
まぁ俺には関係ないので、その間に現状確認。
さっきはいきなりだったので分からなかったが、どうやら結構立派な家のようで。
見た感じここはリビング。
奥にキッチン的な何かが見えるからきっとそう。
後、アパートの造りじゃない。
どうやら一戸建てに住んでいるようである。

「なるほど、つまりなのはさんと結婚すると逆玉という訳か。
これは行くしかない。
なのはさん」

「何？」

「あなたの事が、好きだから～！」

「私もだよ！
はい、これ！」

手渡される紙。
なんぞ？
……婚姻届……だと……？
しかもなのはさんの欄は、記名捺印済み。
俺の欄は、記名済みで後は捺印を待つばかり。
俺が書いた記憶は、無い。

「あ、後これ！」

手渡される印鑑。

なんぞ？
……『稲荷』……だと……？
しかも何か凝った作りの印鑑。
決して３００円とか、そんな値段では作ってくれない感じの印鑑。
俺が作った記憶は、無い。

「ネタがガチになる瞬間である。
体の震えが止まらねぇ」

「おぉ、なのはママが珍しく優勢！
カメラカメラ……
はっ……手に持ってるのシャンプーハットとアヒル村長しかない」

「な、なのはママ、どうしたの！？
いきなり結婚って……え、えぇ！？」

「ささ、お稲荷さん！
ポポポポーンと押しちゃって！」

「そんな軽いものだっけ。
何で俺の証人の欄が士郎さんなのさ。
いいのかそれで。
よく見たら俺の欄の書体がどう見てもなのはさんのお兄様。
あぁ、桃子さんはなのはさんの証人で書いてるから書体がバレるってか。
しかしこの所々字が力の入れすぎみたいに歪んでいるのは何故だろう。
てかこれ公文書偽造だよね、犯罪だよね。
そして根本的に、稲荷なんて戸籍ないよね」

「気にしちゃ負けなの！」

ヴィヴィオー！
お前のママが真っ黒になっていくよ！

「なのはママ……いつか2度目をやると思ってたんだ」

「なのはママ、管理局員が犯罪しちゃダメ――――！！」

「私がどうしたの、ヴィヴィオ？
誰か来てるの？
……え、ヴィヴィオが2人……
……え、私がいる……
……え、尻尾……」

このカオスな空間に未来的なのはさん、リビングに襲来。
どうやら家に居たようである。
てかせめて固有名詞で呼んでくれませんかね。
部分的な名前じゃなくて。

「えっと、ヴィヴィオ。
これはどういう事？」

「ヴィヴィオ超頑張った」

「……？」

ヴィヴィオの返答に、未来のなのはさんは首を傾げる。

「なのはママ、わたしがなのはママのヴィヴィオだから。

ほら、あっちのヴィヴィオちゃんはちょっと小さいでしょ？」

「チビと申したか。
ヴィヴィオの怒りが有頂天」

「何かよく分からない事言うし」

「そ、そうなんだ……」

向こうは何か楽しそうだなぁ。
混ぜてくれないかなぁ。

「お稲荷さん、はやくはやく！」

こっちには目をキラキラさせて婚姻届をさし出してくるなのはさん。
誰か助けてくれないかなぁ。

○●○●○●

なのはさんを落ち着かせ。
高町さんも落ち着かせ。
ヴィヴィオもようやく黙らせて現状説明と相成った。

つまり。

『1．あ、ヴィヴィオの学校が……
2．イヤでござるー！！

3．計画は未来を見てから↑今ここ』
こんな感じ。

事情を聞いた高町さんとヴィヴィっ子は、どうも納得できないようだった。
特に高町さん。
何で苗字かって？
年上だから。
しかもどうもこの世界。
俺が居なかった場合の未来となっているらしい。
だから当然ヴィヴィオにはパパは居ないし、高町さんも俺の事なんて知らない。

「なるほど。
ではこちらの世界の高町さんは、ユーノにぞっこんという訳ですね」

「え、ユーノくんは友達だよ？
ね、なのは……さん？」

「私はお稲荷さんにしか興味がない。
ねぇ、お稲荷さん……
やっぱダメ、かな？」

「なのはさんって、成功を目前に控えると焦りすぎて失敗するタイプでしょ。
ご主人様から嫁さんってどんだけ過程飛ばしてるんだ。
この婚姻届、まさか材料がゲイボルグじゃなかろうな」

「やったー！
狐パパが本物の狐パパになるー！」

今までの俺は偽者だったと申すか。

「しかしこれほど恐ろしい紙切れを見たのは、無勉の期末テスト以来だな。
これ一枚で俺の外堀がどれだけ埋められているのかがよくわかる」

あ、でも仮にこの婚姻届を提出したら、なのはさんじゃなくて高町さんと俺が夫婦になってしまうのではなかろうか。

「ん？
ふふふ、大丈夫だよ！
ちょっと待っててね、お稲荷さん。
今この邪魔者を消すから……」

「え、ちょ、私！？
状況が飲み込めないの！？」

「じゃあなのはさん達が話してる間に、風呂に行こうかヴィヴィオ」

「うまく逃げたね」

逃げれたのか、あれ。
なのはさんが自分で稲荷印のハンコを押したら全てが終わるんだが。
まぁいいや。
ヴィヴィオ、俺にもアヒル村長貸してくれ。

「だが断る」

しかし答えは聞いていない。

さぁヴィヴィっ子、風呂場はどこだ。
あれならお前も一緒に入るかね。

「えと……えと……
お風呂はこっちです。
それと入りません。
変なことしたら容赦しませんよ？
私これでも、ストライクアーツで鍛えてるんですから」

「ヴィヴィオ、ヴィヴィっ子はどうやら強いらしいぞ。
ストライクアーツって何だ」

「打撃技術」

誰が直訳しろと。
さて、このヴィヴィっ子にお前は勝てるか？

「メイン盾がいれば勝つる」

「俺に的になれと申すか。
お前だけだったらどうだ？」

「弾幕で足止めして虹天剣で撃ち抜く。
因みにシールド貫通仕様」

確かに弾幕ゲーは防御なんて出来ないが、どこでそんな技を覚えた。
……てかヴィヴィオって実はチートキャラだったりする？

「狐パパがよくやる『気合い』って便利だよね。
あと、幸運がＥＸくらいならあるかも」

「気合いでシールド抜くとか全魔導師が泣いた。
てかその幸運を3分の1でいいので分けてください」

「独り身の人から見たら狐パパも十分幸運だよ？」

それは平穏な生活があってこそのものなんだ。

「狐パパ！
シャンプーハットって凄いね！
目に水が入らなかった！」

「俺としてはシャンプーハットを髪も上げずに装着して、その長い髪の3分の2は洗えていなかったことに脱帽。
結局俺が洗ってやったんじゃないか」

「うっ」

「要練習だな」

「あ、お稲荷さん。

お風呂から上がったの？」

「おぅ。
尻尾乾かしてもらえませぬか。
てか話し合いは終わったので？」

「いいよー。
後この世界の私とは、書いてもらった後に元の世界に戻って提出すればいいって結論に至ったから問題ないよ」

「大ありだ、ど阿呆。
それだと俺がなのはさんと結婚するの確定事項ジャマイカ」

「嫌かな？
ヴィヴィオもお稲荷さんが本当のパパになると嬉しいよね！」

「うん、とっても！
だからなのはママ、死角でヴィヴィオの背中にレイジングハート突きつけるのやめてね」

「ふむ。
嫌ではない。
しかしバトルな日々より退廃的な生活が……
あれ、なのはさんの実家生活は結構そんな感じだったのか？
あとレイジングハートってなんだっけ」

「まぁ、この世界じゃ焦っても仕方ないし。
元の世界に戻ったらお稲荷さんの答えを聞かせて欲しいかな。
あ、尻尾乾かすね」

「うい、頼んます。
で、レイジングハートって？」

「後、戻ってヴィヴィオの学校も決めないとだからね！」

「勉強やでござる――――！！」

「聞いてよ」

「ダメだよ？
こっちのヴィヴィオも頑張ってるんだから」

「頑張ってるヴィヴィオなんてヴィヴィオじゃない」

「我儘言わないのー！」

「わーん！
狐パパー！！」

「お前らスルースキルもＥＸだろ。
全く……ほれ、ヴィヴィオの髪は俺が乾かしてやるから。
座れ座れ」

「わーい！」

「なのはママ。

何かこう、稲荷さん達を見てると羨ましく感じるヴィヴィオがいるのです」

「う～ん。
私も羨ましいなぁ。
もう２３だし、そろそろ彼氏居ないとやっぱりマズイよね……」

「……ねぇ、なのはママ。
今日一緒にお風呂入らない？」

「……そうだね、入ろうか。
難しく考えるのは、明日からにしよう。
あ、因みにヴィヴィオは学校嫌い？」

「全然！
むしろ凄く楽しいよ！！」

「どうして同じヴィヴィオでここまで変わるかな……
まぁ、大体稲荷さんのせいってのは見てれば分かるんだけど」

「でも、なのはママも結構影響受けてない？
あれも稲荷さんのせいかな」

「多分、そうじゃないかな」

「というか、あの尻尾は一体何なのでしょう」

「一番の謎だね」

一日酔い。（後書き）

どうしてこうなった。

こんばんは、アメフラシです。
感想返せてなくてすみません。
ちゃんと読んでます。
時間見つけて返してます。
2通返事を書くと2通感想が来るので、嬉しいですがエンドレス。

ヴィヴィオとヴィヴィっ子。
もはや別人。
というか精神年齢がヴィヴィオの方が高そうな気がする今日この頃。

たまにアニメで見かけるんです。
長い髪を上げずにシャンプーハットで頭を洗うシーン。
頭皮は洗えるけど、髪の8割は洗えていない気がしてならないんです。

引っ掻き回してあと放置。
これぞ奇行文クォリティー。
許してあげてください。
彼は何を引っ掻き回したのか分からないんです。

で、はしごをしてたハズなのに。
多分途中で寝たのだろうか、1件分記憶がないとです。
というか、気持ち悪い。
これが俗に言う二日酔いか。
まだ1日目だから、一日酔いか。

明日には治るといいなー。
ん？　お勘定？
君が何を言って（ｒｙ

二日酔い。（前書き）

ストロベリーサスペンス奇行文。

二日酔い。

『育ちゆくのは、新たな世代。
これはかつての空のエース、高町なのはの一人娘にしてＳｔヒルデ魔法学院初等科４年生。
高町ヴィヴィオ（ヴィヴィッド）の鮮烈な物語』

「ヴィヴィオ、何読んでるんだ？」

「あ、狐パパおはよう。
こっちのヴィヴィオの部屋に侵入して、机の上にあったノートを拝借したんだけど。
妄想ノートだった」

朝から何をやっているのかとか。
そんなノートを何でリビングで熟読してるのかとか。
言いたいことは色々あるけど。
ちょい見せてみ。

「……わーお。
鮮烈にヴィヴィッドってルビふってあるぞ。
アイタタタタ」

「しかもこのノートのタイトル見て」

ん？
魔法少女リリカルなのはＶｉｖｉｄ。

「これより異端審問会を執り行う」

「え、ちょ、私なんで縛られてるの!?
い、稲荷さん!?」

俺とヴィヴィオで高町さんを拉致。
十字架に張り付けてリビングに立てる。
騒動でなのはさんとヴィヴィっ子も現れた。
俺とヴィヴィオは目の部分にだけ穴の開いた、頭の尖った黒い布をかぶり。
裁判官が鳴らす木槌っぽいのをカンカンと2度叩く。

「稲荷さん!!
なのはママに何をするんですか!!」

「そうだよお稲荷さん。
何があったか分からないけどちょっとやり過ぎじゃない?」

「毎度の事ながら何で俺だけ責められてるのだろうか。
ヴィヴィオも忘れないであげてください」

それはともかくだ。
罪人、高町なのは。

「私が何をしたって言うの!?」

「このノートを見るがいい」

このヴィヴィっ子の力作ノートを。

「……え、あ、ちょ……それ、待ってくださ！？」

「さて、ヴィヴィっ子が慌てだした所で改めて異端審問会を執り行う。

罪人、魔法『少女』高町なのは。

罪状、２３歳」

判決、死刑。

「そ……そんな……」

「待ってください！

そのノートは違うんです！

それは私が……私の……」

「……私の、何かな？」

「私の……私の……！！

……てへ？」

拷問してから、死刑。

「因みにこのノートは証拠品として、ヴィヴィオが回収させて頂きます」

「あ、ダメ――――――！！」

「鮮烈なヴィヴィッド」

「やめて――――――！！」

「ヴィヴィオ、お前エグいな」

「何が悲しくて自分の厨二病な姿を見ないといけないのかと」

まぁ、確かに。
後なのはさん。
私はまだ少女で通じるよね、とか呟いてますが。
あなたもう２０歳じゃなかろうか。

「実は過去とか未来とか、あっちこっち行きすぎて誕生日が来たのかどうか分からないんだよね」

「なるほど、心はいつまで経っても１９歳って訳か。
ゆかりんに謝れ。
む、部屋の隅のリボンから殺気。
てか誕生日が来てたのなら、何かプレゼントくらいあげようと思ったのに」

幻視。
ヴィヴィオの耳がダンボになる姿が見えた。

「狐パパ。
実はヴィヴィオ、今日誕生日なんだ。
プレゼント欲しいです」

「驚愕の新事実すぎて何も用意出来てない。
仕方ないからヴィヴィオには俺のディープなキスをあげよう」

「ヴィヴィオは永遠の6歳児です」

うむ、正直が一番である。
だが永遠の6歳児なんてそんな夢のような生活、パパは許しません。
むしろ俺がそんな生活を送りたい。
なんて思っていると、肩に手を置かれる。
振り向く。
いい笑顔のなのはさんが居た。

「わ、私も今日誕生日なんだ！
それで……その……プレゼント間に合わなかったのなら、仕方ないからお稲荷さんのキスで我慢してあげる！」

「こちらも驚愕の新事実。
誕生日プレゼントなのに我慢させる訳にはいかないから、後で何か考える」

「え、あ……そ、そうじゃなくて！
じゃなくて、お稲荷さん手持ちほとんど無いでしょ？
だから、その、物じゃなくても……」

両手の人差し指をツンツンしながら、赤くなってうつむくなのはさん。
ちらりとヴィヴィオを見る。
凄い睨んでいる。
だがすぐに視線を外し、窓から空を眺め始めた。

そして呟く。

「いい天気だね……
でもこういう日に空気読めない何かがあったら、虹天剣を撃ちたくなっちゃうなぁ……
そんなものがあったら、１０回くらい連続で撃って、全てを虹で染め上げようかなぁ……」

ヤツの虹に非殺傷なんてものはない。
すぐなのはさんに向き直る。
未だにうつむいているなのはさん。
近づき、左手をなのはさんの腰に回し、右手をなのはさんの後頭部へ。
突然の行動に驚き顔を上げたその時を見計らい、唇を重ねる。

「……んっ！？」

一瞬硬直するが、すぐになのはさんも手を俺の頭と腰に回す。
口の中に何かが侵入してきた。
なのはさんの舌である。
トラウマが蘇りそうになったが、妙な物を飲まされる気配はないので心の底から安堵する。

数秒だったのか、数十秒だったのか、数分だったのか。
時間間隔は良く分からなかったが、ある程度したら俺達の唇が離れた。
なのはさんの唇も舌もやわっこくて気持ちよかったぜちくせう。

「あぁ、よかった。
今日は空気を読めない何かは無かったみたい。

ヴィヴィオの虹を出す必要が無くて良かった」

お前もう最低だ。

「あ……お、お稲荷、さん……」

俺の服を親指と人差し指で掴みながら、顔を真っ赤にして見つめてくるなのはさん。

脳内は既にレッドアラートである。

いろんな意味で。

「その……もう1回……して……？」

バッとヴィヴィオが居る方を見る。

未だに窓の外を眺めたままのヴィヴィオがそこにはいた。

「あぁ、でもまた空気読めない何かが出てきそうだなぁ……」

クッソ！

お前、何か！

とってもクッソ！！

「うわぁ……あっちのなのはママが、凄い可愛い……そして顔が蕩けそうなくらい幸せそう……

わっ、また始めた！

あ、あれが大人のキスかぁ……」

「ヴィヴィオ！　見ちゃダメ！

教育上よろしくないから！！

というかこの十字架から降ろしてくれないかな……？」

「あ、うん、ゴメンナサイ。
……なのはママ、あの姿見てどう思う？」

「え？
……実は少し羨ましいよぅ。
私も彼氏欲しい……
ちょっと世界が違うだけでこんなに違うものなんだね。
もうユーノくん狙ってみようかなぁ……」

「そっかぁ。
わたしは、あのヴィヴィオちゃん見てても羨ましくも何ともないかなー」

2人揃って窓際のヴィヴィオに視線を向ける。
何か黒い笑みを浮かべていた。
それを見ると同時に、俺達に向けられていた、というか俺に対する2人の視線が若干優しくなった気がする。
誰か、ヘルプ。

○●○●○●

なのはさんとのチッスを堪能した後。
高町さんとヴィヴィっ子は、慌ただしく部屋へと戻っていった。
何でも、朝から騒がしかったから気付かなかったけどもう遅刻寸前なんだとか。

てか今日の騒ぎの原因は、大体ヴィヴィオのせいだと思うのは俺だけか。
誕生日の話をしていただけなのに、どうしてああなった。

「ＤＶＳと申したか」

「自覚あるんじゃねーか」

「なのはママの為、多少の犠牲は仕方なかった」

そのなのはママは、今ソファーに座って顔を赤くしながら虚空を見つめていますが。
触らぬ神に祟りなしともいうので、今は放置に限る。

「……ねぇ、狐パパ」

「ん？」

「厨二病を患ったヴィヴィオの未来を、見に行こうよ！」

お前さっきまで、厨二病な自分は見たくないって言ってなかったか。

「あの後考えてたんだ。
そして気付いた。
普通に厨二病を患ったのか、それとも周りが厨二病だったから感染拡大の被害にあったのか。
そこを見極めないと、最悪学校に行かされることになってもヴィヴィオには学校を選ぶことなんて出来ない事に……！！」

「なるほどなるほど。

そいつぁ大事な問題だ。
まぁ俺から言えることは1つ。
んなこと考える前に助けんかい」

「帰ったら確実に婚姻届だね」

「やっぱりか。
もう道は、翠屋継ぐならいいよって言う事しかないな」

で、話を戻すとヴィヴィっ子の学校だっけ。
何、つまり魔法学校に行けばいいのか。

「ヴィヴィオの将来があならないためにも、ヴィヴィオは未来のヴィヴィオをしっかりと見定める必要があるのです」

そうか。
なら行く準備をしてこい。
俺は今なのはさんというナビが使えないから、学校への道のりを探してみる。

「合点！」

俺の言葉に応え、意気揚々と部屋に戻っていくヴィヴィオ。
どうでもいいが、あいつならどこででもたくましく生きていけそうな気がするのは俺だけだろうか。

で、やってきました魔法学校。
俺達は今、門のようなアーチの真下で佇んでいる。
意外に高町さん家は学校に近かったらしく、難なく来ることができた。

「しかし挨拶で『ごきげんよう』ってヤバイな。
ライオンが提供のテレビ番組でしか聞いたことなかったぜ。
てか普通におはようでイイじゃん。
何でお嬢様風味に言うかな」

「道行く人の半数はその挨拶だね。
後、道行く人全部、狐パパの尻尾見て驚いてるけど」

照れるぜ。

「あら、ごきげんようヴィヴィオ」

「おはよー」

「ヤバス。
おはよう！」

どうやらヴィヴィっ子の友達らしき人とエンカウント。
ツインテールの子と、頭にリボンを巻いた子である。
しかしまさかのエンカウントに、ヴィヴィオも余程焦ったのだろう。
口から余計な単語が漏れていることに気づいていない。
まぁ、向こうも気づいていないぽいが。

「もうクラス分け見た？
……あれ、ヴィヴィオなんか小さくなってない……？」

「チビと申したか。
じゃなくて。
えっと、ダイエット中なんだー！」

ツインテールの問い掛けにネタで即答するヴィヴィオ。
むしろ何故ばれないのかが謎でしょうがない。
続けてリボンちゃんが喋りだす。

「……？
って、背も縮んじゃうダイエットなんてしちゃダメだよ！！
体に悪いでしょ？」

「サーセン」

「もう……
あ、それとクラス分け見たよ！
みんな一緒のクラスだったね！」

「本当に！？
じゃあそれまでに身長戻しておくね！」

「うん！
……ん？ちょっと待って。
身長って、そんなに簡単に伸び縮みするものだっけ……？」

「簡単に縮んだんだから簡単に伸びるでしょ」

ヴィヴィオ、そのくらいにしとけ。
リボンちゃんの脳内がそろそろクラッシュするから。
というか、後に対応するヴィヴィっ子が少々不憫である。

「ところで、そこのおじさんは誰？
ヴィヴィオの知り合い？」

「誰がおじさんだツインテール」

「狐パパは黙っててね。
この人は狐パパって言って、なのはママの近い将来の夫なんだー！
今日の朝も早くから、あっつ～いキスを何度も……」

その影にお前がいたという事実を忘れないで下さい。
ほら、そこの2人ももう脳内処理が追いついていないじゃないか。

「え……っと……
狐パパさんでしたっけ」

「リボンちゃん。
だからやめてよそのバーバパパみたいなの。
稲荷ですから。
名前、稲荷ですから」

「あ、私はリオって言います」

「コロナです！」

リボンちゃんに続き、ツインテールの自己紹介。
このツインテール、ツンデレではないようだ。

珍しい。

「というかヴィヴィオにパパがいたって話、初耳なんだけど!?」

「良かったね。
ヴィヴィオの秘密をまた1つ知れたよ!」

ヴィヴィオがコロナにいい笑顔でサムズアップする。

「リオ、コロナ。
どうでもいいが、もうそろそろ授業じゃなかろうか。
俺の事は気にせずに、ヴィヴィオを連れていっていいぞ」

「マジデカ。
狐パパはここに来てヴィヴィオを見捨てると言うのか」

刹那。
一陣の風が、俺達とリオとコロナの間を通り抜けた。

それは言うなら、金色の風。
風は、俺とヴィヴィオを巻き込み連れ去る。
そしてそのまま近くの木の影に、風は流れた。

「何を、やって、いるん、ですか！？」

「ょぅヴィヴィっ子。
よく俺ら2人を担いで、あのスピードで動けたな」

「魔力での身体強化です！」

すげーな魔力。

「それはともかく！
私の友達まで巻き込まないで下さい！！」

「ヴィヴィオ、お前魔力で身体強化って出来るか？」

「魔力でも気でも、両方も」

ほう、経験が生きたな。
……ん？
まて、両方ってよもや……

「無視しないで下さい！！」

「そうだ、これは無視できない事態だ。
お前、さてはネギま！を読んだな」

「ネギマは食べ物で読む物じゃありません！！
適当なこと言って誤魔化さないで下さい！！」

ヴィヴィっ子。
それはネギま違いだ。
そして涙目で怒鳴ってる所悪いが、向こうでリオとコロナが困ってるぞ。
行ってやらなくていいのか。

「……あ！
もう、帰ったらしっかりお話させて貰いますからね！！」

そう言い残して、ヴィヴィっ子は2人の下へと走っていった。
これから先ほどのヴィヴィオの爆弾発言の数々を対処しなければならないと思うと少し不憫ではあるが。
今はそれどころではない。

「さぁヴィヴィオ。
キリキリ吐いてもらおうか。
お前まさか豪殺無音拳を使えるんじゃなかろうな」

「まさかの咸卦法がうまくいった時にポッケから手を抜いたら出来た。
反省はしていない」

「お前本当に6歳児か。
てかそれは、気も魔力もろくに使えない俺に対する当て付けと受け取った」

「それ以上の威力のパンチをノータイムで撃ち出す狐パパが何を言う」

「てか気とか魔力使えるなら、瞬動術も使えるんだろ。

いーなーうらやましーなー」

「それ以上のスピードで自由に動ける神速を使える狐パパが何を言う」

で、ヴィヴィオ。
言い残すことはあるか。

「ネギま！面白かった。
でもハマり過ぎると厨二病への片道切符」

その技の練習をしていたお前は既に半分アウトだから。

「……あ。
ナンテコッタイ」

『スカさんスカさん。
ヴィヴィオがヤバス。
あいつはきっとチート』

『独房にいる私に連絡を取れる君も随分とチートな気がするがね。
誰だい君は？

この端末のアドレスを知っているとなると、娘達の誰かに聞いたのかい？』

『娘って誰ディスカ。
俺はスカさん本人しか連絡先は知らん』

『ふむ……？
娘を知らず、私からアドレスを聞いた。
しかし私は教えた覚えはない。
……なるほど、異世界……いや、平行世界からの来訪者か』

『どこに行ってもスカさんの頭は香ばしいな』

『それは褒め言葉かい？
なかなかに面白い言い回しをするね、君は。
なるほど。
平行世界の私が君に興味を持った理由も、何となく分かるよ』

『同じような事を過去とその過去のスカさんに言われました。
俺は珍獣かと。
尻尾９本と狐耳はあるけど』

『珍獣と言わずして何というのかね』

『その切り返しは想定外』

『……クックック。
あぁ、君は本当に面白い。
名を尋ねてもいいかね』

『稲荷と申す』

『なるほど、稲荷くんか。
ならば教えてあげよう。
聖王の器がいかなるものかを』

『その言い回しは長くなりそうだから拒否』

「狐パパー！
何してるの？」

「スカさんとメール。
さてヴィヴィオ。
授業に潜入するか」

「拒否。
未来ヴィヴィオの交友関係と厨二病の蔓延具合を見たいのであって、
授業を受けたい訳では決して無い」

「まぁそう言うな。
学校は勉強も多少はするが、それ以上に友達作ってワイワイ騒ぐ場
所だぞ？
ほら、ヴィヴィオのちゃんとした友達ってなのはとかフェイトだけ
だろ？
しかも住む時代が違うときたもんだ。
絶対に別れは来るしな。

お前、前に1回経験した別れが辛くて、こうやって何だかんだ理由をつけてあいつらと別れるのを先延ばしにしてるんだろ」

「……」

「そして新しい友達を作っても、またあの別れる辛さをいつか味わうかと思うとなかなか踏み出せない自分がいる。どうだ？」

「……なんで分かるの？」

「曲がりなりにもお前のパパさんやってんだ。分からいでか。てか拒否の仕方が露骨過ぎる」

「……凄いね」

「まーな。そしてこればっかりは経験だわ。中にはずっと友達のままでいれるやつもいるが、大半はそうならないしな」

「……うん」

「ま、落ち込んだら俺がいくらでも慰めてやるさ。……さて、ちょっとダークな話もしてしまったし。ここでちょっくら一寝入りするか？木漏れ日がいい感じに眠気を誘う」

「あ、いいね！

狐パパ、尻尾貸してー！」

「返せよ？」

「んー、もふもふ。

……なのはママが狐パパの事を好きになった理由、何となく分かったかも」

「何かいったかー？」

「何もー！」

二日酔い。（後書き）

感想返しきっていないのに投稿すみません。
月刊小説みたいになってすみません。
皆さんのアイドル、アメフラシです。
この夏、海に行かれた際には私を探してみてください。
危険を察したら紫汁を出します。

書いてて思った。
なんだこの砂糖空間。
前半部分を書いていた時、きっとアメフラシは飢えていたんだと思います。
そしてエアーフォックス。
子どもの会話に大人が、というか狐が口出しするものじゃありません。

休日ないよー。
執筆進まないよー。
弱音を吐いてて書き終えたら過去最高の１７ページ。
普段が１０～１２ページ。
何やってんだろう俺。

さて、そろそろ奇行文のまったり空間に嫌気が刺してくる人がいるのでは無いだろうか。
そう思っていたのに、週間アクセス１位だと……？
ご愛読ありがとうございます。
どんどんグダグダ具合に磨きがかかります。
こんなノリの奇行文でよければ、まだ暫しのお付き合いをよろしくお願いします。

さて、本格的な二日酔い。
何かいいものは無いものか。
……ウコンの力？
なってから飲んでどうする。

※ヴィヴィオは６歳。
※ヴィヴィっ子は小４だから……多分１０歳？
※４年後だから、高町さん２３歳？
※（´ω`）ぬ～ん
※年齢は奇行文クォリティー。

お稲荷さん観察記（前書き）

1冊目のＰ３２～Ｐ４０を抜粋。

お稲荷さん観察記

×月×日。

ＰＴ事件の後、未来に戻った私はスバルの救助隊の活動を手伝うことになった。
お稲荷さんとヴィヴィオは、私も居ないし家にいても暇と言うことで海に遊びに行っている。
お稲荷さんが朝早くから、楽しそうにシャチ型の浮き輪を膨らましてたっけ。
いいなぁ……私も行きたかった。
お稲荷さんと海……楽しいだろうなぁ。
でも管理局で働いている手前、嫌ですとは言えない。
翠屋を継ぐ事、本気で考えようかな。

今回の任務は、嵐にあって沈みかけた船に取り残された姉弟の救出。
時間はもうあまり残されていないらしい。
急いで現場に向かう。

「うっひょー！
見ろヴィヴィオ、リアルタイタニックだぜ！！
突入せざるをえない！！」

「ワクテカ！
ワクテカが止まらないよ狐パパ！！
嵐に負けずに沖に出たかいがあるね！！」

……何か聞こえた。

数分後。
沈んでいく船から、シャチに掴まった姉弟と、シャチにまたがったヴィヴィオが脱出してきた。
そして船が沈むことにより発生した渦に、脱出が遅れてプカプカ浮いていた黄色い何かがグルングルン回りながら飲み込まれていく。
状況は分かったの。
あ、スバル駄目だよ。
救出はいいけど、人工呼吸は私の仕事だから。

×月×日。

エリオとキャロが辺境自然保護隊に入ったと言うことで、お稲荷さんがその仕事を見学しに行こうと言い出した。
今日は特にすることもないし、２つ返事でＯＫする。

ちょっと多めのお弁当も持って、目的地へ。
緑溢れる土地。
空には幾つかの島が浮いている。

「わー……
狐パパ、あの島はなんだろ」

「オスティア」

そんな会話をしていたら、エリオとキャロが出迎えに来てくれた。
２人とも、相変わらず元気いっぱいだね。
こーら、お稲荷さん！
その藁人形どっから出したの！

え、彼女いる奴には制裁を？
だ、だったら私が……つ、付き合ってあげるよ！！
どこに？　じゃないよぅ……

楽しくお話して、みんなでご飯を食べて。
さぁ帰ろうってなった時、お稲荷さんが居ないのに気づいた。
慌てて近くの職員に聞いた所、９本の尻尾を生やした狐なんて見たこと無いし、恐らく絶滅危惧種だから向こうの建物に保護しているんだとか。
迎えに行ったら、首輪を鎖で繋がれたお稲荷さんが檻の中で体操座りしていた。
私とヴィヴィオも、その光景には流石にちょっと泣いちゃった。

×月×日。

お稲荷さんは私に興味が無いのだろうか。
ちょっと……いや、かなり不安になった。
ほんと、いつからなんだろう。
こんなにお稲荷さんのことが好きになったのは。
だからこそ、お稲荷さんの気持ちを知りたい。

私は、お稲荷さんが起きてくる少し前に、居間の床に私のパンツを広げて置いてみた。
ヴィヴィオには事情を説明して、一緒に隠れてもらっている。
途中ヴィヴィオが呆れた表情をしたのは何故なんだろ？

お稲荷さんが起きてきた。
当然、床にあるパンツに気付く。

お稲荷さんはじっとそれを見つめる。
たっぷり１０分は見つめ続けただろうか。
やがてゆっくりと腰を下ろし。
パンツの前あぐらをかいて、やっぱり凝視し続ける。
それから更に３０分。
始めの頃と比べ、お稲荷さんの目は純血し、息は荒くなり、手はワキワキしている。

良かった。
全く興味が無い訳じゃないんだね！
でも何だろう。
微妙に求めてるものとは違う気がする。
何、ヴィヴィオ？

「当たり前やがな」

×月×日。

また過去に戻った。
今度はヴィヴィオが原因だった。
だからあれほど、お稲荷さんの背中ばっか見てちゃダメだよって言ったのに……。

そう言えばヴィヴィオも、お稲荷さんから色々聞いて魔法を使えるようになってるみたい。
どうやって教えたのか気になったのでお稲荷さんに聞いてみた。

「ん？　気合い」

お稲荷さん魔法使えないもんね……。
でもヴィヴィオが魔法を使えるなら、デバイスあげたほうが良くないかな？

「魔法が使えるとデバイスが必要になるのか？
よく分からんが、用意しとく」

いまいち理解していないみたいだったけど、用意する伝手はあるみたい。
あれ？　でも地球にデバイスって用意できる場所あったっけ。

その日の夜。
お稲荷さんが、デバイスをヴィヴィオに渡したって言ってたから見せてもらう事に。
ヴィヴィオ。
お稲荷さんからデバイスもらった？

「うん！」

どんなの？

「これ！
８ギガのやつ」

……へぇ、棒状なんだ。
８ギガって何の事かよく分からないけど、良かったね。
それで魔法の練習も、ちゃんとしてね？

「え、あ、うん……

え、ＵＳＢを杖にして魔法使うの？
それなんて羞恥プレイ」

×月×日。

お稲荷さんが庭でヴィヴィオと一緒に何かやっていた。
聞けば、何でも気合いで出来たからスキマが開けないか試してるとの事。
スキマって何だろ？
ヴィヴィオは分かってるみたい。
うぅ、私もお稲荷さんの話についていけるように、もっと勉強しないとダメかな……

何かとっても真剣だったから、あまり邪魔する訳にもいかず。
庭への出入口部分に腰掛けて、その様子をぼーっと眺めていた。

「あらあら。
精が出るわねぇ」

突然隣から聞こえた声に驚きながら視線を向ける。
そこには、頭にナイトキャップ？みたいなのを被った金髪の女性が私と同じように腰掛けていた。
手には閉じた日傘が。
服装も……中々独創的なドレス？だ。
何で陰陽模様がついているのだろう。

「あ……貴女は？」

「あら、申し訳ございません。
無視していた訳ではありませんのよ？
そうですね、貴女の狐さんの知り合い、でいいかしら。
お互い会ったことはありませんけれど」

よくないと思います。

「まぁ、彼にはこう言っておいて貰えれば分かると思います。
『幻想郷は、貴方達をいつでも受け入れます』と。
藍も気になっているみたいですしね。
では、私はこれで失礼します。
勝手に上がってしまってごめんなさいね？
では、ごきげんよう」

そういった次の瞬間。
私の瞬きと同時に、その女性は消えてしまった。
夢……じゃないよね？
ともかく、お稲荷さん達が一段落したら、今起こったことを話してみよう。

その後、お稲荷さんは数日間は片時も私の傍を離れようとしなかった。
幻想郷って何？
あの女の人は誰？
謎は深まるけど、怖がってるお稲荷さんを引き連れて一緒にお風呂に入れたのは嬉しい誤算だった。
あ、因みにヴィヴィオはお稲荷さんの尻尾から一歩も外に出ませんでした。

×月×日。

ヴィヴィオが魔法をどのくらい使えるのか見るために、模擬戦をすることになった。

舞台はいつも私が魔法の練習をしていた高台。

結界を張って、準備は万端。

お稲荷さんがお母さんに掴まって今日は来れなかったことは残念だけど。

私が先にセットアップをする。

バリアジャケットを身に纏い、杖となったレイジングハートを手にする。

ヴィヴィオを見ると、右手と左手を胸の前でパンっと合わせた。

同時に、威圧感というか、ヴィヴィオを中心に風が吹いているような錯覚に陥った。

構える。

ヴィヴィオはポッケに手を入れたまま、自然体で立っている。

ふざけているのかな。

お仕置きも兼ねて、魔力弾を2個程形成。

シュート。

ヒット。

無傷のヴィヴィオがそこにいた。

なんで？

更に5回は色んな角度から撃ってみたけど、ヴィヴィオには全く届いていないみたい。

痺れを切らした私は、少し距離を置いてディバインバスターを放つ。

これならいくら何でも通るだろう。

ドォン！！！！

そんな音が聞こえ、ディバインバスターは私とヴィヴィオの丁度真ん中辺りで消え去った。

意味が分からない。

もう一発撃ってみる。

ディバインバスターが私とヴィヴィオの真ん中に到達した瞬間。

ヴィヴィオの手が一瞬ブレ、またあの音と共に消滅した。

「なに、したの？」

「豪殺居合い拳」

……教えたのお稲荷さんだろうか。

ともかくディバインバスターは通用しない。

ならばと、辺りに漂う魔力を収束。

私の必殺技。

スターライトブレイカーだ。

十分魔力も集まった所で、ヴィヴィオも動いた。

だけど、私のほうが早い！

「スターライト……ブレイカー――――！！！」

先ほどのディバインバスターとは比較にならない太さの砲撃がヴィヴィオに迫る。

その迫り来る光を見ながら、ヴィヴィオは懐よりカードを1枚取り出した。

なんだろ、あれ。

「虹符『虹天剣』」

前面に突き出したカードからほとばしる虹色の光。
それは私が放ったスターライトブレイカーをいとも容易く消し去った。

「なに……したの？」

「ボム」

意味が分からない。

お稲荷さん観察記（後書き）

アメフラシがたまたま発見したなのはさんの日記である。
稲荷と相談した結果、ネットに配信してみようと言うことになったので掲載する。

ここで注意してもらいたいのは、配信者は稲荷という事だ。
決して、決してアメフラシが配信したのではないという事。
それだけはどうか、分かってもらいたい。

特に、もし偶然この日記が配信されているのを見つけてしまったN・Tさんや、その取り巻きのF・T・HさんやH・Yさん。
そのご家族の方々には十分に理解してもらいたいところである。

最後に大事なことなので2回言わせてもらう。
配信者は稲荷だ。

送信っと。
いい仕事をした。
ん、どうしたヴィヴィオ。
後ろ？

……罠だ！
これは稲荷が俺ことアメフラシを陥れるために仕組んだ

ジュッ

三日酔い。（前書き）

おっきくなっちゃう奇行文。

三日酔い。

「じゃあ弁解を聞きます」

「ヴィヴィオは悪くない、ヴィヴィオは悪くない！
悪いのは狐パパなんだ！」

「んだとフォルァ。
しかもそれは二度ネタだ」

「2人とも同罪です！！」

「弁解から判決が早すぎだろ」

夕方。
ヴィヴィっ子が家に帰ってきた後。
居間で正座させられる俺とヴィヴィオ。
何でも、友達の誤解……誤解？を解くのが大変だったんだとか。
敢えて言おう。
俺、悪くないよな。

「喋ってたのはヴィヴィオだけだった気がするのだが」

「何で止めなかったんですか？」

なるほど、俺が悪かった。

「狐パパ。
ヴィヴィオ、そろそろ足がオーバードライブしそう」

「この時代のヴィヴィっ子。
流石に六課時代の高町さんを見て育ってきたことはある。
訓練の時の厳しさを思い出すぜ」

「よく耐えられたね」

「まぁ……後から思い返せば自業自得だしね。
悔やまれるのは、その当時はベストな解決策と思い込んでいるところにある」

で、ヴィヴィっ子さん。
いつまで正座してればいいんでしょうか。

「みんなが帰ってくるまで。
玄関に向かって正座して、みんなを出迎えてくださいね」

いい笑顔で言っているが、それだと後どんだけ待たないといけないのか。
言い終わると、ヴィヴィっ子は奥の部屋へと歩いていった。
誰かヘルプ。

「ただいま～。
……あれ、ヴィヴィオ？
何で正座してるの？
それと、その尻尾は誰？」

願いが届いたのか。
よくぞ1分も経たずに帰ってきてくれた。
高町さんではなく、フェイトさんだったが。

もう固有名詞じゃない事はどうでもいいくらい嬉しさが有頂天。

「おかえりー！　フェイトさん！」

「あ、うん、ただいまヴィヴィオ。
……フェイトさん？」

「フェイトさんはもうママじゃないの！
だからフェイトさん！」

崩れ去るフェイトさん。
床に広がる涙の水溜り。

「そんなぁ……
せっかくヴィヴィオの専用デバイス、もらってきたのに……
私、何かやっちゃったのかな……
明日の午後までお休みだから、ヴィヴィオのお祝いしようと思ったのに……」

「ヴィヴィオは専用デバイス持ってるよ！
前に狐パパからもらったんだ！
ほら、これ」

ポッケから黒い棒状の物体を取り出すヴィヴィオ。

「何、これ？」

「デバイス」

「……性能は？」

「８ギガ」

「……何で？」

「そういや、何で？」

籠売りで安かったから。

「狐パパって、誰？」

「ヴィヴィオの隣で一緒に正座してる狐さん」

「……そう」

お願いですからその光り輝く大剣をもってこっち寄らないで下さい。

「くっそ！

ヴィヴィっ子絶対これを見越して正座を長時間させたんだな！

俺を逃さないために！」

「違うと思う」

「初めて会った時の模擬戦といい、今回の件といい。
どうしてフェイトさんはそんなに俺の尻を狙いたがるんだ」

「非殺傷でも、苦しいでしょ？」

……あれ、非殺傷って相手を苦しめるためのものだっけ。

足がしびれて動けない所に、フェイトさんがアッ――――！！
そしたら大分落ち着いたらしく。
事情説明と相成っている。
先ほどの会話を見る限りでは、フェイトさんがまだ危ない人だが。

居間には、俺達3人組とヴィヴィっ子、帰宅なされた高町さん、そしてフェイトさん。
なのはさんと高町さんを見た時のフェイトさんの表情。
ヴィヴィオ、撮影は？
……そうか。
流石我が娘なり。

「この映像は過去に戻ったら試写会を行うとして。
そういえばフェイトさん、ヴィヴィっ子にデバイスあげるとか言ってなかった？」

「え！？
ほ、本当！？　フェイトママ！！」

「あぁ、ヴィヴィオ……
もう1回、もう1回フェイトママって言ってくれる？」
台無しである。
「しかしデバイスがないと魔法が使えないとは、軟弱者め」
「いや、ヴィヴィオ。
気合いで魔法使うという意味の分からん事できるのはお前だけだと思うぞ」
「気合いだけで魔法以上の事が出来るお稲荷さんはもっと意味が分からないと思うの……」
生きるのに必死なだけです。
そうこうしているうちに、フェイトさんからヴィヴィっ子へ手渡される箱。
中には、未来リインくらいの大きさのウサギの人形が入っていた。
あのウサギの人形が、デバイスらしい。
ＵＳＢもデバイス。
ウサギの人形もデバイス。
そういや、プレシアさんがくれた小さい鉄板もデバイスだった気がする。
ん、どしたなのはさん。
その赤い宝石もデバイスだって？
関連性が見えん。
デバイスって何だ。
「因みに私のデバイスは、レイジングハートって言うの！」

「そっか。
不屈の心、か。
なのはさん……」

厨二病だったんだね。

「何その視線、なんかヤダな。
あ、あっちはヴィヴィっ子ちゃんがデバイスをセットアップしてるよ！」

そう言われ視線を向けると、いつの間にか庭に出ていたヴィヴィっ子に、それを見守る高町さんとフェイトさん。
ヴィヴィっ子の傍には、先程箱に入っていたウサギの人形がフワフワ浮いている。
呪いの人形じゃねーか。
後でお札貼っておこう。

「マスター認証。
高町ヴィヴィオ。
術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド。
私の愛機（デバイス）に個体名称を登録。
愛称（マスコットネーム）はクリス。
正式名称『セイクリッド・ハート』
いくよ、クリス」

魔方陣がヴィヴィっ子を中心に広がる。
放つ光が最高潮になった所で、締めに入った。

「セイクリッド・ハート！

セ――ット、ア――――ップ！」

瞬時にヴィヴィっ子が光に包まれ、マッパに。
なんでさ。
同時にヴィヴィオがうめき声を上げ、のた打ち回る。
なんでさ。

「未来のヴィヴィオはどこまで傾く気かぁ――――――！！」

「……お稲荷さん、ヴィヴィオは何を言ってるの？」

「自分の厨二病姿が見るに耐えんらしい」

そんなヴィヴィオは放っておき。
問題のヴィヴィっ子であるが。
おっきくなっちゃった。

「なのはさん。
人って頑張れば肉体年齢を変えれるんだね」

「みたいだね。
私も頑張って若くなって、魔法少女リリカルなのはをもう一度……！」

「頑張らんでいいから。
今のなのはさんより若くなった状態で俺が手を出したらロリコンに……」

何でもネッス。
今の発言は忘れて下さい。

「え、私に手を出すって……」

その満面の笑みでこっちに視線を向けるのはやめてくりゃれ。

さて、フェイトさんも何でヴィヴィっ子が大きくなったのか分かってないみたいだし。

説明を求めてもよろしいかね。

「だがそのけしからん胸。

てめぇはダメだ。

ヴィヴィオの胸のくせに……」

ヴィヴィオ、お前は黙ってなさい。

ピッ。

ピッ。

ピッ。

……プルルルルル。

ガチャッ。

「俺だよ俺！

俺だよスカさん！」

『残念ながら振り込むお金はないよ。
しかしどうした稲荷くん。
電話なんて珍しいじゃないか。
ヴィヴィオくんが大人モードにでもなったのかい？
しかも番号がいつもと違うとは』

「過去でもそうだったがどこで見てやがる。
因みに番号が違うのは、高町さんちの固定電話だから」

しかし予想で言ってるのだったらもはや変態の域。
因みに今回の電話はスピーカーモード。

「ス、スカリエッティ！？
まさか稲荷さん、あいつの仲間だったの！？
ヴィヴィオと私のそっくりさんは……まさかプロジェクトF……」

「プロジェクトはXしか知らんと何度言ったら分かるんだ。
あ、東方もか」

「スカリエッティ。
あなたは独房に居る筈です。
勿論、私物の持ち込みは出来ないよう厳重に検査されているはず。
何故通信に出れる」

『フェイト・テスタロッサかね。
何、連絡先なんて娘たちくらいしか知らなかった端末を持っていただけだよ。
しかも娘たちはみんな端末をいつも研究室に置きっぱなしだったからね。
もう誰とも連絡の取れない鉄の塊と化した筈だったんだ。

管理局員もチェックしていたが、誰とも連絡がつかないと分かると可哀想な人を見る目をして端末を返してくれたよ』

スカさんの言葉を聞き、俺となのはさんとヴィヴィオはそっと携帯を開く。

なのはさんは何かいっぱいアドレスが並んでいる。

でも仕事関連がほとんどらしく、プライベートで使うものはあまり無いとの事。

ヴィヴィオはなのはとフェイトとはやて。

今は使えぬ悲劇。

俺は今使えるのはスカさんとなのはさんとヴィヴィオとヴァイス。

俺達は目を合わせ。

そっと携帯を閉じた。

未来組3人娘は、可哀想な人を見る目で俺達を見ている。

「い、稲荷さん……

もしかして……」

「言うな、高町さん。

後知ってるアドレスなんてなのは・フェイト・はやての3人娘とプレシアさんくらいなんだよ」

「何で母さんのアドレス知ってるの？」

「アルハザードでスカさんと一緒に飲んだら教えてくれた」

フェイトさんの頭からクエスチョンマークが飛び出ているが、嘘は

言っていない。
で、スカさん。
ヴィヴィっ子が大人になったのはなんで？

『私がゆりかご制御時にレリックを埋め込んだのが原因かね。
詳しくは調べてみないと分からないが。
ヴィヴィオくんはどうだい？
セットアップ時に、大きくならないのかい？』

「レリックを埋めこまれた覚えがなーい！」

「そもそもヴィヴィオ。
お前ってセットアップできたっけ」

「パソコンにＯＳ入れるくらいなら」

十分だろ。
俺はできん。

『クックック。
セットアップの意味合いが違うのだがね。
魔法使いのセットアップとは、あれだよ。
変身して力を得る魔法少女、みたいなものだね。
ヴィヴィオくんは、何かできないのかい？』

「なるほど。
じゃあこれはヴィヴィオ流セットアップ！」

言うなり、ヴィヴィオは右手と左手を胸の前でパンっと合わせる。
ヴィヴィオを中心に風が巻き起こり、なんとも言えない威圧感まで

出し始めた。
そしてゆっくりとポッケに手を……

「バッカお前！
誰に撃つつもりだ誰に！」

「勿論、ヴィヴィオのくせにけしからん胸を持っているあいつ」

「ねぇねぇお稲荷さん。
ヴィヴィオのあれって何？
前、私と模擬戦したときもディバインバスターを動作なしで消し飛ばしたんだけど」

「ネギまのトリプルＴを参照。
しかしディバインバスターを消し飛ばしたか。
なのはさんのバスターを消し飛ばすヴィヴィオが凄いのか。
６歳児に容赦無い攻撃をするなのはさんが凄いのか。
……なのはさんが鬼畜でＦＡか」

「ヴィヴィオー！
今日は久々にお稲荷さんと訓練するよー！」

薮蛇であった。

「ね、ヴィヴィオ？」

「はい？」

――ディバイーン、バスター！！！

――適当に右パンチ！　うお、マジで相殺できた！　これでかつる！

「大人モードはヴィヴィオの魔法で、自分の魔法をどう使うかは自分で決めることなんだけど……いくつか約束してほしいんだ」

「……うん」

――バインド！

――まーじーでー。

「大人モードは、魔法と武術の練習や実践のためだけに使うこと。いたずらや遊びでは絶対に変身しないこと」

「うん、遊びで使ったりは絶対しません」

――ヴィヴィオー！！　遊びみたいに豪殺居合い拳使っちゃいけません！！

――大丈夫！　武術の練習だから！　せい！

――オウフ。

「天に誓って？」

「天と星に誓って！」

――天に輝く星を砕く！　スターライトブレイカー！！！

――ヤメテ！　いつぞやのぬこ達のように性転換しちゃうから！！

「それにヴィヴィオはまだまだ子供なんだから。普通に成長して、この姿になった時に恥ずかしくないように。自分の生まれと、なの

はママの娘だって、えへんと胸を張れるように」

「……ちょっと生意気！」

――ヴィヴィオは、狐パパの娘だって胸を張れるから！！

――ならこの仕打ち、やめてくれませんかね。

「にゃっ！」

――ギャー！！

三日酔い。（後書き）

お久しぶりです。
月刊奇行文。のお時間です。

このまま後書きと洒落込みたかったのですが。
バトンなるものをいただきましたのでそちらに答えたいと思います。
サトッチさん、ありがとうございます。

題材は、ぷよぷよの1~7連鎖のセリフを考えるというもの。

という訳だ。
お前ら知恵を貸してもらうぞ。

「それはいいが、高級寿司店の稲荷寿司食べ放題券の準備は万全か？」

なのはさんに渡しといた。

「ヴィヴィオの！　ヴィヴィオのは！？」

高級寿司店の卵寿司食べ放題券だよな。
なのはさんに渡しといた。
で、まずはセリフだが。
連鎖が繋がるほど大きくなると言うことは、今メモ紙に書いたこれで方向性はオーケーか。

「いいんじゃねーか？」

そうなると、1はヴィータで。

「6がフェイトさんか」

妥当だな。

僅差でシグナムさんが5かな。

「じゃあ4は、はやてさんかなー」

なのはさんは？

「なのはママは、実際はそんなに無い」

「マジデカ。

俺なのはさんくらいの結構好きなんだが」

触ったことをあるのかと問いたいが、まぁ置いとく。

てことは、3はなのはさんで。

「じゃあ残りで2はシャマルだな」

「今思うと、ヴィヴィオ達って結構サイテーな会話をしてると思う」

何を言う。

サトッチさんの依頼だぞ。

さて、最後の7連鎖目のセリフだが。

「特盛！」

流石稲荷、分かってる。
じゃあ纏めるぞ。

1：ヴィータ
2：シャマル
3：なのは
4：はやて
5：シグナム
6：フェイト
7：特盛！

ボイス担当：稲荷

完璧だ……

「完璧だな……」

「完璧だね……」

「あ、3人ともここに居たんだ？」

ヴィヴィオ！

1・2！！

「散！！」

「あ、ちょ、お前ら！？」

「わっ！？

どうしたんだろアメフラシさんとヴィヴィオ……あんなに急いで。

ん？　お稲荷さん、このメモ書きなーに？

えっと……」

『連鎖が繋がると攻撃力が増す？増す＝大きくなる？胸の大きさ』

「あ、悲鳴」

惜しいやつを亡くしたな。

四日酔い。（前書き）

ストリートファイト奇行文。

四日酔い。

恒例となった朝の散歩。
惨劇が起きた日の次の朝が清々しいのは何故だろう。
考えてみたが数秒で悲しくなってきたのでやめる。
高町さんちから、歩いて十数分のここはもう商店街。
地球の人達ほどではないが、ここの人達もいい人が多い。

「おう、兄ちゃん！
いい尻尾してるね！」

通りがかりのおっちゃんも。

「あら、狐さん新顔かしら？
安くするから是非買いに来てね」

店先のおばちゃんも。

「きつねさーん！
わーい！」

近所の子どもたちも。

「中々の実力者とお見受けします。
あなたの拳と私の拳。
どちらが強いか試させて下さい」

だが街灯の上に立つ少女よ、てめーはダメだ。

「というかその金属製のナックルつけてる時点で、俺の拳より硬いのは確定的に明らか」

「防護服と武装をお願いします」

街灯から地面に降り立ってそう言う少女。
全く話を聞いていない。
てか防護服なんてねっす。

「そうですか」

防護服ないって言ってるのに何構えてるんですかあなたは。

「まぁ待て。
それ以上踏み込んだら、お前は恐ろしい目にあうことになるぞ？」

グッと力を込めて、後数瞬でも俺の発言が遅れていたら恐らく殴りに来ていただろうその少女は、この一言で踏み留まる。
心の中でガッツポーズしているのは言うまでもない。
右腕を伸ばし、少女を指さす。

「そこから一歩でもこちらに踏み込んだら。
稲荷さん大好き！を語尾につけてしまう呪いをかけてやる」

「……稲荷とは誰の事ですか？」

俺の事です。

「なっ……！？
卑怯ですよ！！」

「フハハハ。
何とでも言うがいい。
俺は自分の危機回避の為なら、どんな事でも躊躇わずにできるのだよ」

さぁどうする、変態街灯少女よ。
先ほどの踏み留まった体勢でしばらく悩んでいたようだが、意を決したのか再び重心を落とし、足に力を入れて一歩を踏み出した。

「そんな呪いなんて聞いたことがありません。
はったりですね？」

「そう思うならそう思えばいい。
こっちに踏み込んだから呪いは発動させる。
そしてこれが……仕上げだ」

懐から携帯電話を取り出す。
アドレス帳を開き。
あ行で検索。
1人しかおらん。
通話をポチッとな。

『合言葉は？』

「エル・プサイ・コングルゥ」

『要件は？』

「“機関”が動き出した。

今、俺の元にエィジェントが送り込まれている。
緊急を要する。
ケルベロスを解き放て」

『なんだと!?
そうか、それもシュタインズ・ゲートの選択……か。
分かった。
通信をケルベロスへ繋げる』

「頼む……」

『健闘を祈る。
エル・プサイ・コングルゥ。
あ、なのはママー!!
狐パパから電話だよー』

『はいはーい。
お稲荷さんどうしたの?』

「なのはさん、へるぷ」

「……誰と電話をしているのか知りませんが、私を無視しないでもらえますか?
稲荷さん、大好き!!
……え?」

何言っちゃってるのこいつ。

『お稲荷さん、何か聞こえたんだけどどういうことかな?
ちょーっとお話聞かせてもらいたいかなー』

「変態街灯少女よ。
なんて事をしてくれたんだ」

「あなたのせいでしょうあなたの！
稲荷さん、大好き！！」

事態は悪化の一途を辿る。
幸いなのは、なのはさんに俺が今いる位置が知られていないということ。
ほとぼりが冷めるまで、家に帰るのはよそうと思うんだ。

『へぇー……お稲荷さん、商店街の近くにいるんだね。
今すぐ行くから待っててね？』

「何故分かる」

『お稲荷さん、まだ私のあげた首輪してくれてるんだね』

……お前のせいかぁぁあああ！！
存在感無さすぎだぞ首輪！！
てか発信機埋めこまれている設定を今の今まで忘れていた罠。
まぁあれだ。
首輪もつけ続ければネックレスをつけてる気分になるんだね。

通信を切る。
正面を見る。
視界に映る少女がセルフエコノミー。

「俺は……とんでもないものを世に解き放ってしまったのかもしれ

ん」

「何を言ってるのかわかりませんが……
謝りますから！
もう試合はいいですから！
この呪いを解いて下さい……
稲荷さん、大好き！」

「自分の事を大好きって言わせる呪いをかけて、涙目で解呪を頼まれるのも何か心に響く。
だがその前にもう1回だけ言ってもらおうか」

「うぅ……列強の王でもここまで酷くはありませんよ……
稲荷さん、大好き！」

「残念。
お稲荷さんは私のだから。
ポッと出のあなたになんか渡さない」

バカホワイトが、現れた。
この隙に逃げざるをえない。

「あ、待って下さい！
この呪いを解いて下さい！！
稲荷さん、大好き！」

「お稲荷さんが好きなのは私だけで十分なんだから！！」

このリア充展開。
夢にまで見たこの展開が目の前で起こっているのに全くワクワクし

てこないのは、きっとなのはさんの持ってる杖がガションガションブシューって言いながら変形してるから。
ＦＦのオメガでもあそこまで恐ろしくはあるまい。
あ、そうだ。

「去る前にお前の名前を聞いておこうか」

「だから帰る前にこれ解いて下さい！
……名前は、『覇王』と名乗らせてもらっています。
稲荷さん、大好き！」

あぁ、なるほど。
こいつも厨二病だったのか。

「それ以上お稲荷さんの名前を口にするなぁぁぁぁぁぁあああああ！！」

なのはさんは少し黙って下さい。

結界を張っていたから通常空間に支障は無いはず、なんだが。
あれだけ綺麗だった街並みは、世紀末覇者が闊歩しそうな風景に。
時の流れとは無常なものである。

さて、その原因となった核の炎だが。
未だにピンクの光となってあっちこっちを焼き尽くしている。

変態街灯少女は意識が朦朧としているようでフラフラで。
バカホワイトは涙目である。
敢えて言おう。
泣きたいのは俺である、と。

そもそも、あの変態街灯少女は拳がどうこう言っていたから、多分だが近接戦闘がしたかったのではなかろうか。
なのに、何か一言でも喋れば飛んでくるディバインバスター。
いつぞやの俺ＶＳフェイトさんのように、まるでＢ２９から爆撃されている歩兵のようである。
流石にアワレになってきた。

よくよく考えれば、この後お話されるのって俺じゃないのか。
さっき電話越しに、そう聞こえた気がする。
つまり、今の変態街灯少女は未来の俺の姿である、と。
落ち着け俺。
落ち着いて携帯を開いて、今度はアドレスのさ行。
ポチッとな。

「スカさん緊急事態だ。
俺はどうすればいい。
Ｄメールを送って、過去を改変すべきか。
それとも、なのはさんの追ってこない地の果てまで逃げるべきか」

『落ち着きたまえ。
君が歩んできた時間をなかった事にしてはならない。
というより何故そうなったんだい？
今北産業で頼むよ』

「ふむ。

・変態街灯少女に襲われる。
・稲荷さん大好きという呪いをかける
・世界は核の炎に包まれた
今ここ」

『なるほどなるほど。
中々に愉快な事をしているようじゃないか。
こうして拘留されていなければ、私も現場でその様子を観察したいものだよ』

見世物じゃねっす。
で、解決策は？

『実は前に、ヴィヴィオくんから面白い画像を貰っていてね。
稲荷くんにも送るから、それを彼女に見せれば収まると思うよ』

「よく分からんが、早急に頼む。
もう少しで変態街灯少女が沈む。
そうなったら俺に未来はにぃ」

『ハッハッハ。
分かったよ。
結果は後で教えて欲しいものだがね？』

そう言って電話が切れる。
しばらくして着信。
画像添付のメールが来た。
時間がないので、ダウンロードしながらなのはさんのもとへ走る。
画像を見る時間はないが仕方ない。
スカさんを信じよう。

「なのはさーん！」

振り向くなのはさん。
その眼前に、携帯の画面を持っていく。
何顔を赤くしてはるんですか。

「お稲荷さん、これ、何？」

「何って……
強いて言うなら俺の気持ち」

主に俺が惨劇を回避したいっていう。
どや？

「……うん、私も同じ気持だよ」

マジデカ。
なら別に俺がここまでしなくても、惨劇は回避出来たのね。

「良かった。
本当に、良かった」

「うん、私も嬉しい……！」

いや、喜ばれても。
あなたが惨劇を起こすつもりがなかったのなら、元々俺に何の被害もなかったんですがね。

「じゃ、じゃあお稲荷さん！

今日、２人で寝よう？
ヴィヴィオは、ヴィヴィっ子ちゃんに任せて。
ね？」

……何だろう。
何か凄まじく間違った方向へ進んでいる気がする。
思い出せ。
俺が何をしていたのかを。
思い出せ。
俺は何をしていないのかを。
あ。
そういや何の写真が送られて来たのかね。

携帯を裏返す。
そこには俺となのはさんの濃厚なキッスシーン。
そして先ほどのやりとり。
つまり。

「貞操の危機」

「大丈夫。
私も初めてだから」

何が大丈夫なんですか。

なのはさんの一声で、あそこまで荒廃していた大地が元の商店街に。
さながら世界線を移動しているような錯覚に陥る。
気がつけば、変態街灯少女も居らず。
居るのは右手に腕を絡ませているなのはさんだけ。
顔を赤くして、ほら、帰ろう？って言ってくる。

「このままだとギシアンモードに突入する」

「これからお稲荷さんとシちゃうんだぁ……
お父さん、お母さん、お兄ちゃん。
なのはは、女になります！」

「なのはさんのギシアンはギシギシアンアンかもしれんが、俺のギシアンは疑心暗鬼である事を知ってほしい。
というかそのセリフはかの煩悩霊能力高校生のじゃないか」

「そう言えば、お稲荷さんの子供ってやっぱり尻尾あるのかな？
ね、ね！
名前はどうしよっか？」

聞いて下さい。
そしてなのはさん。
まだ朝なんですが。

「大丈夫！
むしろ日中の方が、みんな家に居なくていいと思うから！」

大魔王からは逃れられないようである。
どうしてこうなった。

どう考えてもヴィヴィオとスカさんのせいじゃないか。
今回俺は悪くないハズ。

なんて考えていたらもう高町さんちに到着。
元々十数分の距離だったからだろうか。
全く時間稼ぎができませんでした。

家に入るとなのはさんはすぐに「待っててね」と言い残して、この時間帯なら高町さんが居るであろうリビングへと向かっていった。
それと入れ違いに笑顔のヴィヴィオがやってくる。

「ヴィヴィオは妹が欲しいなー」

「その幻想をぶち殺す」

「ぶー！」

ぶーじゃねーべさ。
お前のせいで俺の貞操がマッハ。
あ、後スカさんもか。

「これも全て、あの変態街灯少女のせい。
ヴィヴィオ。
お前に豪殺居合い拳の使用許可を出す。
安全確実に、標的を七条大槍で葬り去れ」

「標的が誰か分からない上に、街中でヴィヴィオに何をやらせようとするか」

「大事の前の小事だ」

「むしろ大事の前の大惨事」

こまけぇこたぁ気にすんな！
なんて言い合っていたら、リビングからガィィンって音。
そして聞こえてくる足音。
視線を向けると、そこには鬼の形相をしたなのはさん。

「なんぞ悪いことしたかね」

「なんぞじゃありません！
あなた達は朝っぱらから人の家で何をしようとしてるんですか！」

「むしろナニをしたがっていたのはなのはさんジャマイカ」

「私は！
高町なのはです！！」

いや知ってるけどさ。
そこまで自己アピールするのは如何なものかと。
グーパンが飛んできた。
あべしである。

「だから私は高町なのはです！！」

「だから知ってるって」

「にゃぁぁぁぁあああ！！！
何て言えばいいのこの状況！？」

何て解釈すればいいのこの状況。
なのはさんも頭が飽和状態なのか、言葉が少し昔に戻っている。
と、そこで服をクイッと引っ張られる。
なんだいヴィヴィオ。

「あの人はなのはママじゃないと思う」

と、言いますと？
あぁ。
まさかの高町さんか。
そうならそうと言ってくれ。
髪を下ろしたなのはさんと桃子さんよりたちが悪い。

「何度も言ってました！
いきなりなのはさんが来たと思ったら、その……えっと……アレをするから部屋貸してなんて言い出すんですよ！？
そもそもどんな日常を送っていたら朝からそんなセリフが出るんですか……」

どんな日常って。

「こけしが飛ぶだろ？」

「赤べこが舞うよね。
たまに狐パパも舞うけど」

「そんでシャケが落ちてくる」

そんな日常。

「全くわかりません……
まぁ、もういいです。
でもウチではしないで下さい……」

なのはさんに言って下さい。
そう言えば、そのなのはさんは？
……いや、やっぱいいです。
さっきから左手に持ってるフライパンと、その凹みで何となく想像できましたから。

「頭痛いよぅ……」

「なんでフライパンが凹むくらいの勢いで叩かれて、痛いで済むのかね」

「お稲荷さんだってそうじゃない……
ヴィータちゃんの魔法受けて、たんこぶだったよね……」

「あれは魔法じゃない」

「ねぇ、お稲荷さん。
頭どうなってる？」

「ネジが外れてるのはいつもの事だが。
う～ん……やっぱりたんこぶになってるな」

「うぅ……」

「今ヴィヴィオが氷持ってきてくれるから、我慢だな」

「うーあー……
ガンガンするよぅ……」

「しかし、フライパンってなかなか凹まないと思うんだが。
力あるんだね、なのはさん」

「今元気なら、お稲荷さんの顔を握りたい気分かな……」

「ごめんなさい」

「……お稲荷さん」

「ん？」

「……もうちょっと、自重するね」

「あー、うん。
でも、サンキュ」

「何が？」

「……いや、何でもない」

「フフ、変なお稲荷さん」

「少しだけでいいから……
氷を持ってきたヴィヴィオの事……
思い出してあげて下さい……」

四日酔い。（後書き）

お久しぶりですこんばんわ。
月刊奇行文。の時間です。

感想へのお返事し終わってから新話投稿と思っていたのですが。
アメフラシの中に封印されしヤツが動き出したので、意識を失う前に投稿。

世界中にいるみんな！
オラにちょっとだけ休日を分けてくれ！！
１人１日の有給でいいから。
６０億日は有給取れる。
つまり約４万５千年は遊んで暮らせる。

後、見て分かったと思うのですが。
シュタインズ・ゲートが面白かったです。
すぐ感化されるアメフラシ。
友人のチキンラーメンに見るよう勧めてみました。
そしたらチキンラーメン。
俺は時の流れに逆らう！
とか言い出して２４話から見始めました。
感想が『マリアが刺される事を岡部は知っている事を俺は知っている』でした。
マリアという人物が出てきた時点でお前は何も知らない。

さて、今回も酔いが冷めぬままに来てしまったわけですが。
気持ち悪さが４日目たぁどういう事ですか。
どうしたら良いこの気持ち。

１０件以上もはしごするんじゃなかったかも知れぬ。

五日酔い。（前書き）

年を気にする奇行文。

五日酔い。

今日も今日とて、ヴィヴィオとまったり昼の散歩を楽しんだ後帰宅する。
惜しいのは、稲荷寿司やお揚げを買い食いできないこと。
財布の中にお金は入っているんだけど、いかんせん野口さんや樋口さんしかいない。
福沢さん？
誰それ。
まぁ何が言いたいかと言うと。
多分ミッドなここと、地球とでは貨幣が違うということでして。
懐かしの無一文に逆戻り。

そんなこんなで買い物の類は全くせず、ただ観光がてらの散歩。
今日ものんびりとした1日だった。
高町家に到着し、玄関のドアを開け。
渇いた喉を潤すために、ヴィヴィオと共にリビングへと足を向ける。
するとそこには。

「グス……」

涙目の高町さんがテーブルに座って俯いていた。

「ヴィヴィオ。
あれに絡まれると厄介な気がする。
安全確実に、このエリアを脱出するぞ」

「ラジャ」

姿勢は前を向いたまま。
ゆっくりゆっくり後退する。

ギィィィィィイ。
しんっとしていた空間に、そんな甲高い音が響きわたった。

「安全確実にって言っただろう。
足音立てるとか何やってるんだヴィヴィオ」

「ヴィヴィオは1歩も動いてないから狐パパの足音だと思う。
痩せなさい」

子供って時に残酷よね。
あ、高町さんがこっち見てる。

「ヴィヴィオ、敵兵に見つかった。
こういう時、どうすればいいか分かるな？」

「何食わぬ顔で戻ればいいんだね！」

「マーベラス。
では早速」

クルッと後ろを振り向き、俺達の部屋へと向けて歩き出す。
尻尾を引っ張られる。
振り返ると、無表情で泣きながら俺の尻尾を掴んでいるなのはさん。
視線を前に戻すと、俺の目の前で十字を切って祈っているヴィヴィオ。

「なるほどなるほど。

ゆりかごの中で俺がなのはさんにした行為って、こういう精神的ダメージがあったのか。
高町さん、怖いんで無表情で泣かないで下さい。
そして尻尾をはなしテ！」

「……の……で」

高町さんは何かを呟いたようだが、声が小さかったのに加えて発声と同時に顔を俯かせたので何を言っているのか聞き取れなかった。

「……！
狐パパ、ダメ！！
その人の言葉に耳を傾けては！！」

「なんでさ」

「……ちの……いで」

尻尾をつかむ手の力が増していく。
やめてくれませんかね。
特に根元握るの。

「あなた達のせいでぇぇぇえええ！！」

「ぬぉぉぉぉぉぉぉぉお！？」

「うわぁ……」

尻尾の根元を両手で握られ、力の限りグッされた。

「で、今日ヴィヴィっ子の学校の友達と会ったら、高町さんの顔を見た瞬間に悲鳴を上げて泣き出した、と。
事情を聞こうと思って近づいたら、ゴメンナサイを連発した後、稲荷さんは別に好きじゃないと言っていたと。
俺、会ったこともない人に好きと言われても嬉しくないんだが」

というかそんな理由で尻尾を握られたのか。
冗談じゃない。

「冗談じゃないから！
本気で殺すから！」

「落ち着け高町さん。
今あなた、警察に捕まってもおかしくないレベルの発言してるから」

「狐パパが殺されそうになるのは割と日常茶飯事」

えっ。

「まぁそれは置いといて。
ガチで身に覚えがないんですが。
その子の名前は？」

「……アインハルト・ストラトスさん」

ストラトス……だと……？

「知ってるの？　狐パパ」

「あぁ、織斑っていう男が唯一操れる女性専用兵器だ」

「女性専用なのに男性が操れるとか。
狐パパ、矛盾って言葉知ってる？」

「ヴィヴィオこそ漢字で書いてみろよ」

むー！
と頬を膨らますヴィヴィオ。
はっはっは、まだまだ俺をおちょくるには経験値が足りぬわ。
それは置いといて。
名前を聞いてもやっぱりピンとこない。
俺を好きと言わせたあの呪いをかけたのは、ＩＳじゃなく覇王だから。
しかもヴィヴィオの学校の友達ということは、小学生辺りの年齢ということになる。
だが覇王さんは、どう幼く見ても高校生くらいだったと思う。

はっ。
俺はとんでもない思い違いをしていたのではないだろうか。
稲荷という俺がこの場に居ることは、この世界の人にはヴィヴィっ子と高町さんとフェイトさん、そしてヴィヴィっ子の友達２人組しかいないはず。
即ち、これは巧妙に仕組まれた罠。
高町さんの矛先を俺へと向けるための完全犯罪だったのだ。

そして、そんな腹黒い芸当をするのはただ1人。

「謎は全て解けた」

「うちのヴィヴィオが犯人とか言ったらスターライトブレイカーするからね」

どうやらこの事件は迷宮入りのようだ。

「まぁそれはともかく。
なんでその最終兵器彼女に会おうと思ったのさ」

「最終でもなければ兵器でもないからね？
アインハルトちゃんに会おうと思ったのは……ヴィヴィオと一緒にストライクアーツやってるって聞いたから。
今週末に企画してる、春の大自然旅行ツアー&ルーテシアもいっしょにみんなでオフトレーニングに誘おうと思って」

へー。

「ルーテシアってのは記憶の奥底に眠っている気がするんだけど、思い浮かぶのは何故かダンゴムシ。
というかそんな話、初耳なんですが」

「何言ってるの狐パパ。
ヴィヴィオもなのはママも、もうとっくに準備終えてるよ？」

なるほどなるほど。

「つまり、俺は危うく置き去りの刑に処せられる所だったと。

ヴィヴィオ、何故黙っていた。
あぁ、何も言わなくていい。
その後ろに隠したカメラで大体の思惑が分かった。
だがなのはさんは何故だ」

「狐パパが落ち込んだ時に、高町さんを悪役にして自分は慰める作戦で好感度アップとか言ってたよー」

「自重するって言ってたじゃないかあの人。
そんな事しなくても、なのはさんに対する好感度は結構いいレベルにあるんだがなー。
む、メール着信」

お。
噂をすればなんとやら。
なのはさんだ。
何々……？

『それ、本当？』

どこで見ている。

「『俺のログには何もないな』っと、送信」

「上げて落とすとか、狐パパサイテー」

「黙らっしゃい」

覗き魔に人権はない。
で、高町さん。

俺もその春の大自然旅行ツアーに参加してもいいのでせう？

「え、いいけど。
オフトレは？
最後には大規模な模擬戦も予定してるんだけど」

「流れ的に多対多対１になるのは目に見えている。
模擬戦と書いてリンチと読むんですね分かります。
てかどう頑張っても闇の書との最終決戦レベル」

「そんな酷い事は……
稲荷さん、闇の書との戦いに居たの！？」

俺だけじゃなくてヴィヴィオも居たぜ。
ほれ、証拠の映像。
鉄板型のビデオカメラを高町さんに渡す。
前になのはさんが再生した時も思ったんだが、どうやって再生してるんだろうか。
何度触っても、あの空中に出てくる画面が表示されないんだけど。

「……過去から来たっては聞いてたけど。
なんでフェイトちゃん達が各２人ずつ居るの……
なんでプレシアさんとスカリエッティが仲良さそうに高笑いしてるの……
そして稲荷さん、特に何もしてないの。
あ、暴走体が光に包まれた」

何度見てもいとアワレ。
光の中心が俺じゃなくて本当に良かった。
もう２度と、『狂符「六課神将の宴」』は使わないと心に決めた瞬

間である。

夕方。
フェイトさんが仕事から帰ってきて。
ヴィヴィっ子達が学校から帰ってきた。
何でも、今日はツアー前の試験の日だったらしく。
その結果を高町さんとフェイトさんに見せに来たのだとか。
何故『達』かというと、以前出会ってしまった……リオとコロナだったか。
彼女達も何でか知らないけどなのはさんに成績表を見せるんだそうだ。

で、今はその3人娘を対面に。
俺とヴィヴィオとなのはさん、高町さんとフェイトさんが座っている。
足りない分のソファーは気合で出してみた。

「よくやるねー。
ヴィヴィオなら絶対見せないけどなぁ。
特になのはママには。
後でどんな特訓が追加されるか分かったものじゃない」

「ヴィヴィオ。
後で算数のドリル買ってくるから、一緒にやろうね？

大丈夫、私がずっと見ててあげるから」

「ウヴォアー」

ふ、馬鹿かヴィヴィオ。
そういうのは言葉にはせず、黙って実行するものだ。
1度知られると、ずっと警戒されるからな。

で、3人娘の内の事情を知らない2人は俺達を見て大慌て。
ヴィヴィっ子が必死に説明をして、こちらを恨めしそうに見ている。
それも数分もすれば終わり、とりあえずは高町さんに成績表を公開することに。

「花丸評価いただきました！」

「3人そろって」

「優等生ですッ！」

アベレージ100の化け物も花丸評価で纏めるとは、さすが小学生。
わぁ、みんなすごいすごーい！　と高町さん。
これならもう堂々とお出掛けできるね！　と俺にアイアンクローするフェイトさん。
じゃあ一旦おうちに戻って準備しないとね、と再度高町さん。
え、もう出発するのでせうか？　と俺こと稲荷。

「準備ってお前。
荷物どころかパンツの替えさえ危ういのだが」

「狐パパ、前それでスカさんと一緒に独房に入ってたよねー」

「だがパンツに罪は……あるか」

さてどうしたものか。

「狐パパ」

「なんだヴィヴィオ」

「今ヴィヴィオ達が座っているソファーは、どこから出したの？」

何を今更。

お前散々見てきたじゃないか。

俺が妖力的な何かをこう……ワーッてやって作り上げ……。

「おぉ、ヴィヴィオ。

お前は天才か。

着替えも作ればコストも掛からないジャマイカ。

やはり勉強が出来るヴィヴィっ子より、頭のいいヴィヴィオだな」

「何言ってるのかな稲荷さん。

今の時代、やっぱり勉強もできないとダメだよ。

いい大学だって入れないし」

「そうだよ稲荷。

後々困るのはヴィヴィオなんだよ？

だから勉強も出来る私たちのヴィヴィオはやっぱり凄いんだ！」

ヤバス。

子供自慢に走るオカン達の群れに餌を投げ込んでしまったようだ。

助けてなのえもん！
……あれ？

「何か静かだと思ったらなのはさんが暗い。
こう、ダークを背負っているような」

「あー、ヴィヴィオが服を作ればいいって言っちゃったからだね。
ごめんなのはママ。
ホントは狐パパと服とか一緒に買いに行きたかったんだよね？」

「……うん」

ふふーん。
そんなに俺ちゃまとデートがしたかったのかね。

「うん」

「あ、狐パパ顔が赤いー！」

黙らっしゃい。
じゃあ今度、ゆっくり行こうや。
金無いけど。

「うん！」

満面の笑みで俺の腕に手を絡めてくるなのはさん。
うむ、うむ。
いいものである。
と、タイミングを見計らったかのように来客を知らせるチャイムが鳴り響いた。

「このタイミングとか絶対見てただろ。
汚い、流石忍者汚い。
ヴィヴィオー！
客だー！」

「はーい！」

とてとてと足音を立てながら玄関に向かうヴィヴィオ。
俺もなのはさんも高町さんもフェイトさんもにこにこしながら見送っていたが、ヴィヴィっ子は少ししてからハッとした表情をする。
慌ててヴィヴィオを追おうとするが、もう既にあいつは来客の相手をしているので手遅れ。
ナンテコッタイ状態のヴィヴィっ子がそこにいた。

「狐パパー！
ノーヴェさんとストラトスさんが来てるー！」

「ウチはＩＳ学園には入りませんって言っといてー！」

「はーい！」

そもそもＩＳを起動できる人がこの中に居るのだろうか。
リビングにいる人たちを一瞥する。
全員問題なく乗れそうである。

「狐パパー！
ヘルプ」

「前から思ってたんだけど、何かあるとヴィヴィオってまずお稲荷

さんを呼ぶよね。
ちょっと羨ましいなー」

「助けを求められても俺に対処出来ることは少ないことをそろそろ学んで欲しい。
何かあったかね」

リビングから玄関に顔を出す。
そこでは知らない女性と少女がヴィヴィオと話していた。

「ヴィヴィオ、私だって！
ノーヴェだよ！？
忘れちまったのか！？」

「ヴィヴィオのログには何も無い」

俺のネタがパクられた。

「ヴィヴィオの方もカオスだな。
そしてそちらの少女さんは微妙にいつぞやの覇王さんに似てるんだが。
妹さんか何かか？」

「え、あの……すみません。稲荷さんは好きじゃないです！」

何故俺は初対面の人にこんな事言われなきゃならんのだろうか。

「お稲荷さーん。
どうしたの？」

「あ、なのはさん。
初対面の人に嫌われて俺の心がブロークンファンタズム」

「なのはさん！！
ヴィヴィオが大変です！
あたしの事忘れちゃったみたいなんですよ！！」

「えーと……誰だっけ？」

「ノーヴェですよ！？」

「あぁ！
……誰だっけ？」

クッソォォォォォオオ！！
と頭を抱えながら床をゴロゴロ転がる自称ノーヴェ。
なのはさんの登場と同時に涙目になってごめんなさいを繰り返すＩＳ。
何がなんだかわからない様子のヴィヴィオとなのはさん。
やれやれだぜ、のポーズを取る俺。
ハッ、殺気！

後ろを振り向く。
高町さんが、天高くフライパンを掲げているのが見えた。
世界がスローになる。
神速を使ったわけじゃないから、そう感じているだけなのだが。
やがてフライパンは、高町さんの手により。
頂点から、一気に俺の頭目掛けて下降してきて。
この時俺は、頭を打った時に星が見えるという言葉の意味を知ったのだった。

「俺、悪いことしたっけ」

「多分ヴィヴィっ子ちゃんにお出迎えさせてあげるべきだったんじゃないかな？」

「分からんよそんなイベント……まだ頭がグァングァン言ってる」

「私の膝枕でも効果なし？」

「別の意味で効果あり。気持ちいーよー」

「じゃあ、もっと気持ちよくしてあげる」

「ん？……んっ！」

「ん……ちゅ。

……どうだった？」

「ヤバス。
主に息子が」

「ふふ、気持よかったでしょー！」

「ちくせう」

「狐パパとなのはママは今日も大胆でしたっと。
さて、こっちも収拾つけないと」

「な、なのはママ……？
フェイトママ……？
その藁人形どうしたの……？」

「あそこまで露骨に披露されるとね。
自分だから余計にかもしれないけど。
……グス。
私だって彼氏欲しいの、イチャイチャしたいのー！」

「私も同じ想いだよ、なのは。
というかそれ以上に、なのはを取られた感じがして自分を抑えられない。
大丈夫だよヴィヴィオ。
毛は入手してるから」

「大丈夫じゃありませーん！！」

「あ、フェイトちゃん私にも1本頂戴？
代わりにはい、五寸釘と金槌」

「流石なのは、準備がいいね」

「いくら狐パパやなのはママを呪っても、23歳という年には勝てない罠」

「うっ」

「はうっ」

「なのはママ！？
フェイトママー！？」

「ヴィヴィオの勝利」

五日酔い。（後書き）

お久しぶりです、アメフラシです。
危うく2ヶ月丸々空いてしまう所でした。
色々ありまして、9月一杯でジョブチェンジすることになりまして。
10月からオニューな海で漂う事になったアメフラシ。
波に乗るのに今までかかってしまいました。

加えて、今回は難産でした。
また息抜きに飲み会話を書くべきか。
あれは書いてて楽しい自分がいるので。
スッカサーン、出番ですよー！

そしてアメフラシ、今度は夏目友人帳にハマりました。
にゃんこ先生いいですね。
リスペクトしたいキャラナンバー1です。
マダラとにゃんこ先生、声優一緒なんだぜ……。

感想一杯、メールも何通も、送って書いていただいたのに反応できなくてすみません！
ちゃんと読ませて頂きました。
何か皆さん色々なネタをお持ちで。
脱帽です。
時にはリスペクトしたり、時にはアレンジしたり、時には突発的な思いつきで進んでいく奇行文。
まったりのんびり進行中なので、細長い目をしてお待ちくださいませ。

え、酔ってる時にはキャベツがいい？

それを飲み物にしたのがキャベジン？
よーし、おいちゃんキャベツ食べるぞー！
……別の意味で気持ちが悪いとです。

六日酔い。（前書き）

水切り奇行文。

六日酔い。

『今回のおもてなしは過去最高！
レイヤー建造物で組んだ訓練場は陸戦魔導師の練習に！
わたしとガリューの手作りアスレチックフィールドはみんなのフィジカルトレーニングに！
我が家の横に建築した宿泊ロッジも内外ともパワーアップ！
設計わたし！
掘ったら出てきた天然温泉も癒しの空間にノリノリで改造！
完璧！
もと六課のみなさんも、ヴィヴィオ達も！
我が家にどーんとおいでませー！！』

場所はリビング。
俺となのはさんとヴィヴィオ、３人揃ってルーテシアなる人に連絡を取っておこうということに。
まぁぶっちゃけ飛び入り参加な訳だからそれも仕方なし。
だが、高町さんの電話借りて、人数増えたのを先方に伝えようと思ったらこれか。
自分の家の屋根の上に立って叫ぶとか末期。
ヴィヴィオ、おいでませーだって。

「だが断る」

『え、あ、うぇぇぇぇえ！？
あの、あの、どちら様でしょう……？』

「ヴィヴィオと申す」

『それは知ってるから』

「高町なのはです」

『いやそれも知ってますから……』

「稲荷です。
俺達3人が春の大自然ツアーに追加で参加することになりました。
さっきの1人シャウトをみんなの前で再生されたくなかったら、大人しく認めるべき」

『いやどう見ても追加参加はあなた1人だけですよね!?
しかも脅迫されてる!?
ヴィヴィオ、彼は誰!?』

「狐パパなのだー」

『意味が……!
わからない……!
なのはさん、彼は一体!?』

「私のお稲荷さんだよ!」

『おかしい……!
もっと意味が分からない……!』

思わず笑ってしまった俺とヴィヴィオは悪く無いと思う。
で、俺の参加は認めてくれるのでせう?

『……さっきのちゃんと消してくださいね?』

交渉成立。

「あ、思い出した。
お前あれだろ。
道をロストしていた俺をダンゴムシで助けてくれた紫幼女。
まぁまぁすっかりライダーになっちゃって。
何、桜は今でも黒くなってんの？」

「初対面で言われている事が既に理解不能なんですが……
桜はいつでもピンクです」

「あ、あはは……
稲荷さんの言ってることを気にしてちゃ大変だよ？」

「そうそう。
という訳で、お世話になりまーすっ」

人数増加を伝えたら、すぐ現地に向かい始めて４時間くらいしたら
到着。
電話してた時から思っていたが、やっと思い出せた。
荷物をここまで乗ってきた車から下ろして、高町さんやフェイトさ
んがルーテシアなる人に挨拶する。

「若き日の私、参上」

「なんの、幼女時代のヴィヴィオが参上」

「ちょ、なのはさん！
私が2人居るとややこしくなるから、後から来て下さいって言ったじゃないですか！」

「プ。
なのはママ怒られてるー！」

「あなたもだよヴィヴィオちゃん！
ただでさえあなたが絡むと場が無茶苦茶になるんだからね！？」

「心外な」

そんなこんなでちょっと想定外の事もあったみたいだが、無事全員挨拶を終える。
因みに元六課のカラフルちびっ子達もいた。
俺に面識が無いのが何とも寂しかったとです。
そしてルーテシアのオカンなる人も出てきたが、そっちの対応もそつ無くこなした。
だが俺たちを説明する中で、時間移動云々言ったら不審な目を向けられた。
毎回その視線を向けられるのが俺だけなのが納得いかない。
なのはさんもヴィヴィオも結構理不尽な存在だと最近思うんです。

「さて、大人のみんなはトレーニングでしょ。
子供達はどこに遊びに行く？」

予定は既に高町さん達が伝えていたのか、ルーテシアのオカンがそう切り出す。
なるほどなるほど。
ここで大人組に混じったら俺の命はマッハ。
トレーニングとルビの振られた地獄のピクニックが始まる。
それに対し子供組は、川遊びに行くらしい。

「ヴィヴィオ。
アスレチック場で地獄のピクニックと、川辺で至福のピクニックらしいが」

「敷物とお菓子と水着の準備は万全だよ！」

「流石だ。
なのはさんは？
あぁ、その麦わら帽子と上着の下に着た水着で把握。
かわいいね。
似合ってるよ」

「えへへー！」

いつの間に用意したのか大きなバスケットを持つヴィヴィオ。
腕に絡み付いてくるなのはさん。
てか当たってるよ。

「当ててるんだよ？」

麦わら帽子の話だよ。
なのはさんの身長だと帽子のつばが俺を目潰しする罠。

大人組と別れ、水辺に着いた俺達一行。
トレーニング？
俺達は旅行に来たんです。
さて、子供達は川の中でキャッキャウフフ。
俺達は敷物を広げ、お菓子をモリモリ食べつつその光景を見ている。

「お稲荷さん、せっかく水着作ったのに泳がないの？」

「シャチ型浮き輪を忘れてしまった。
浅瀬でチャプチャプなら出来るが、深いところは尻尾という重心がズレるものが付いているせいでどうもうまく泳げない」

「あ、だから前、船と一緒に沈んでたんだ」

何故知ってるし。
てかなのはさんは泳がんの？

「お稲荷さんの隣が私の居場所だよー」

「さいで。
ヴィヴィオは？
子供組に混じってくるとか」

「うーん。
それよりあそこにいるＩＳさんと話してくるー」

ヴィヴィオはそう言って、ヴィヴィっ子達についていけず陸に上がって一休みしているＩＳさんに向かって走っていく。
流石にヴィヴィっ子とその仲間の中に入っていくのは勇気がいるか。

「そして俺らのヴィヴィオが地球の学校に行ったら、あいつらとも友達になることはない、か。
難しいね。
どっちがいいとも言えないし。
普通に子供を育てる上ではぶつかることのない悩みだ」

「そうだね。
普通の子育てに時間移動なんて要素は入らないから。
でもこうやって見ちゃうと、ミッドの学校もいいと思っちゃうなぁ。
私としては、地球でのんびり過ごしたいけど」

「まぁ、そこら辺に関してはヴィヴィオに決めてもらうしか無いわな。
誰に似たのか知らんが、年齢は小１なのに精神年齢は成熟してるし」

「ホント、誰に似たんだろうねー」

なのはさん、何でそこで俺を見るかな。
俺はそこまで図々しくありません。

「何言ってるんだか。
……あれ、お稲荷さん。

ヴィヴィっ子ちゃんとアインハルトちゃんが何かするみたいだよ？」

言われてなのはさんが見ている川へと視線を向ける。

そこでは、ヴィヴィっ子とＩＳさんが川の中で横に並び、他の人がそれを見守る形をとっていた。

２人が腰まで手を引く。

一呼吸。

そして、お前水の中でなんでそんな速く動けるの？と言いたくなるような正拳突きを繰り出す。

すると、ヴィヴィっ子の前にあった水が割れ。

ＩＳさんの周囲にあった水が吹っ飛んだ。

「おいおいマジかよ。

ヴィヴィっ子ってモーゼだったのか。

リアル旧約聖書がここにいた」

「アインハルトちゃんは、まだうまく割れないみたいだねー」

「川を割る変態は１人で十分。

……ん？」

どーだ、と言わんばかりの姿勢でヴィヴィっ子がヴィヴィオを指さして何か言っていた。

恐らくあの年代によくある自慢をしているんだろう。

そしてそのヴィヴィオは、やれやれだぜのポーズを取った後、着ていた上着を脱いで川に入る。

川を割ればいいんでしょ？　と言っているようだ。

川の中に入り。

ヴィヴィっ子とＩＳさんを横切り。

更に奥、川の真ん中にまで移動した。

真ん中は深かったのか、途中で歩きから泳ぎに変わったが。

何しているんだ？　と疑惑の目。
そんな視線をものともせず、ヴィヴィオは行っきまーす！　と手を上げた。
瞬間。
川の真ん中に居たはずのヴィヴィオは、先程ＩＳさんと話していた付近。
つまり陸の上にＪＯＪＯ立ちで立っていた。
少しの間を置いて、ヴィヴィオの背後の川が、さっきまで居た川の真ん中まで勢いよく割れる。

「マジかよ。
残像も残さずに川を割りやがった。
カッコイイじゃねーかヴィヴィオのヤツ。
ちと厨二くさいが」

「……あれ、何？」

「瞬動術で移動したんじゃね？
その勢いで、川を割ったと。
あ、今足場が無かったからもしかして虚空瞬動の水中バージョンか。
最後のＪＯＪＯ立ちが何とも香ばしい」

「香ばしすぎるよ……
瞬動術とか虚空瞬動とか、知らない単語が出てくるし」

六課に始めて来た頃の俺がそんな感じだったんだ。
俺の苦しみを味わうがいい。
勿論、あの時と今との知識の差はあまり無いが。

未だにデバイスって何か把握しきれてないし、聞くと皆の目が極限まで開かれるから聞くに聞けないのである。

さて、問題のヴィヴィオはというと。
ＪＯＪＯ立ちのまま、ヴィヴィっ子に視線を向けて不敵な笑みを浮かべる。
ヴィヴィっ子は悔しそうに表情を歪めるが、すぐにやり方が違うとか、どうやったらあんな動きが出来るんだとか騒いでいた。
ならば拳で割ればいいのかとヴィヴィオが問えば、そうだとヴィヴィっ子が頷く。
ヴィヴィオは何も言わず、川に入る前に近くに脱ぎ捨てた上着を羽織る。
胸の前で両手を１回合わせ、手をポケットに。

「なのはさん。
傘を作ってみた。
中に入るべし」

「夢にまで見た相合傘だー！
お邪魔しまーす」

ゴウッ！！
そんな音と共に、川が横にではなく縦に。
つまり、下流から上流に向けて大きく長く裂けた。
舞い上がった水は大雨の様に空から降り注ぐ。
傘を作っておいて正解である。

「毎回思うけど、ヴィヴィオのあれって反則だよねー」

「まぁ、物理的な攻撃であるのに加えて、ネギでさえ一瞬だけ１０

トンの衝撃を耐えれる障壁を駆使してやっと防いだくらいだからな」

因みにヴィヴィオのアレに非殺傷はない。

「へぇー。
最近のネギって障壁張れるんだね」

「いやいや。
今じゃ雷系最強呪文を内に取り込んで、光の速度で移動できるレベル」

「うわぁ。
凄いけど、農家の人が困りそうなネギだなー」

おまいは一体何の話をしている。

「狐パパー！」

「おぉ、ヴィヴィオ。
何か色々やってたみたいだな」

「まだみんな固まってるよ。
ノーヴェさんは、あたしの今までの努力は一体なんだったんだろうとかブツブツ言ってたし」

聞いちゃいけません。
お前は出鱈目が服着て歩いているようなもんなんだから。

「非常識が尻尾と狐耳生やして歩いてる狐パパに言われたくないー！」

俺のは自前じゃないの。
全部商店街の路地裏にいたオッサンのせいなの。

「で、あのモーゼは一体なんだ」

「水切りだって。
狐パパはできる？」

水切りか。
懐かしいな。
その辺に落ちている平べったく丸い石を手に取り。
できる限り水平になるように、そぉい！　と川に投げ込む。
跳ねる。
跳ねる跳ねる。
跳ねる跳ねる跳ねる。

「うーん、合計15段はできたかなー」

「流石、狐パパはいつでも無駄に精錬された無駄のない無駄な動きだね！
川を割るよりすごーい！」

それは褒めているのだろうか。

その後はなのはさんも一緒にヴィヴィオと水の中に入って遊び、昼時となった。
ヴィヴィっ子は涙目になり、ずっと正拳突きの練習。
ＩＳさんはそれに付き合う形で。
自称ノーヴェはヴィヴィオの豪殺居合拳を見て、思う所があったのか上流に向けて蹴りの練習をしていた。
そんな彼女らは疲労困憊。
昼飯もプルプルしながら食べていたとです。

昼食が終わった後は、なのはさんとヴィヴィオを連れてブラリその辺を散歩してみる。
子供組は解散したが、大人組はまたすぐにトレーニングらしい。
大変なこって。

「あ、お稲荷さん。
あれって大人組の訓練所なんじゃないかな？」

先ほどの川と逆方向へ歩いていたら、突如見えてきた大きな建物。
例えるなら高層ビル。
その外壁を、フェイトさんやティアナが縄を伝って登っていく。
更に上空では、何の嫌がらせか高町さんとキャロが弾幕の雨を降らせている。

「消防士のようだな。
高町さんとキャロの妨害工作が無ければ。
あいつらドＳか」

「管理局に居る以上、色んな場面に遭遇する可能性があるからね。
お稲荷さんも１度登ってみたら？」

「俺に何のメリットがある」

そう言うとなのはさんは手を後ろに回す。
出てきたのはタッパー。
中には出汁に浸った超絶美味そうなお揚げ。
くれるの？
と問うた所、いい笑顔でなのはさんはお揚げを建物の屋上に向けて投げた。

「なんて事を」

「あれ取れたら、中のお揚げもあげるよ」

「うっひはー！！」

そうと聞いたら一目散。
建物に向かって駆け出す。
俺にはもう、お揚げしか見えない。

「オ・ア・ゲ・オ・ア・ゲ・オ・ア・ゲ・オ・ア・ゲ」

「なのはママ。
狐パパが目をお揚げにして壁を走ってるんだけど」

「うーん。
縄を凄い勢いで登るのかと思ってたんだけど。
これはちょっと予想外かな。
わ、壁を走ってるのにジャンプした」

「重力仕事しろよ」

やがて屋上にたどり着く。
辺りを見回す。
丁度真ん中に、タッパー発見。
お揚げゲット。
ミッションコンプリート。

「そっかー。
縄で必死に登るより、壁を走ったほうが確実だし両手空くし安全だものねー。
頑張ってた私達、バカみたいよねー」

「……ティアナ。
私たちの訓練、無意味じゃないんだよ？
無意味じゃ、ないはずなんだ……」

「分かりますよ……フェイトさん。
分かって、います……
彼が、理不尽な存在って事くらい……」

何か屋上の縁に腰掛けて2人並んでいるフェイトさんとティアナが居たが、気にしないでおく。
お揚げを咥えつつ、ビルから降りてなのはさん達に合流。
もう一度屋上を見上げると、虚ろな目をして縁に腰掛けていたティアナをフェイトに声をかけている高町さんとキャロが見えた。

「うむ、うむ。
あんだけ訓練してれば何があっても大丈夫なんじゃね」

「狐パパって無自覚に場を引っ掻き回していくよねー」

「あ、ごめん。
でも今回は私のせいかもしれない」

「いや誰がどう見てもなのはママのせいでしょ」

というか、今更ながらによくあのタッパーを屋上まで届かせることができたね。
今度グーパンされたら頭がザクロになるんじゃなかろうか。
なんて事を話しつつ、まったりとした時間が過ぎていく。
春の大自然ツアー、中々にいいものである。

「んあ？」

「だから、ヴィヴィオがさっきお風呂に行ったら明日の模擬戦の話をしてたんだけど。
狐パパとなのはママとヴィヴィオも明日の訓練に組み込まれてた」

「お前、春の大自然ツアー1日目が後就寝で終わるという時に何言っちゃってるの？
参加しない方向でって高町さんに言ったじゃん」

「ヴィヴィオも参加者に数えられてるんだよ？
オワタ。
なのはママはリミッターついてないから無双出来るとして」

「……えっ、2人とも私が守らなくても大丈夫なんじゃないかな」

「なのはさんの中で戦闘における俺達の位置づけが知りたい。
てかヴィヴィオはともかく俺は無理」

「どういう意味か。
でも召喚も有りらしいよ。
最悪狐パパの六課神将スペカを」

「却下で。
お前、あいつらが捨て台詞残した内容思い出せ。
俺に対する呪詛や怨念が篭ってたから。
……あ、ならなのはを呼ぶか」

「ホント！？」

「おう、そうすりゃヴィヴィオも楽しいだろ？」

「うん！」

「なのはさんは俺を守ってくれ。

主に味方から」

「お稲荷さんをヴィヴィオとなのはちゃんから守るの？
おかしくないかな」

「俺は敵からダメージを貰ったことがほぼない」

「う～ん……しっくりこないけど、分かったよ」

「頼んます。
じゃあ寝るか。
すこぶるねみぃ」

「はーい」

「あ、お稲荷さん。
お休みのキスを……」

「夜はそのまま最後まで行ってしまいそうだから却下で」

「むー……」

「狐パパとなのはママって、下手なカップルよりラブラブだと思うのはヴィヴィオだけかな。
早く付き合っちゃえよ」

「はいはい、そのうちね」

「……え、お稲荷さん、いいの！？」

「はいはい、そのうちね」

「やった……やった！
ヴィヴィオ、寝よ！
今日はいい夢見れそうだー」

「言質は取った。
録音も完璧。
ニヤリ。
おやすみー」

「うん、おやすみヴィヴィオ。
お稲荷さんも、おやすみ」

「……あれ、適当に流してたら後戻りできない事になってるキガス」

六日酔い。（後書き）

スマートフォンを買ってみました。
説明書を読んで。
いろいろ触ってみました。
結果。
アメフラシはスマートフォンに振り回されている事がわかりました。

よく分からんので、後輩に聞いてみようと思い。
お前はスマートフォンか？　と聞いてみました。
ガラパゴスです、と返ってきました。
驚いてローソンでファミチキ頼んだアメフラシは悪くありません。

さて。
今回は早く上げれました。
月刊奇行文なら、次に上がるのは恐らくクリスマス……
なにそれ美味しいの？

という訳で六日酔いでした。
ここまで行くともうギネス乗るんじゃないだろうか。
そんな現実逃避をしないと酔いを回避できない今日この頃。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2657q/

お稲荷様奇行文

2011年11月22日02時40分発行